

NEO

**GREAT
MECHANICS**
機動戦士ガンダム
シリーズ



モビルスーツ
全集⑧
U.C.0083-U.C.0096
ネオ・ジオン製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0083-U.C.0096

ネオ・ジオン

製

モビルスーツBOOK

NEO

GREAT MECHANICS
グレートメカニクス
メカニクス



モビルスーツ
全集⑧
U.C.0083-U.C.0096
ネオ・ジオン製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0083-U.C.0096

ネオ・ジオン

製

モビルスーツBOOK

AMX-003ガザCから、MSN-06Sシナンジュまで、
ネオ・ジオン製のモビルスーツたちを徹底解説！

ネオ・ジオン製MSの専門書

一冊まるごと

ネオ・ジオンMS本

AMX-003 ガザC

AMX-004 キュベレイ

AMX-009 ドライセン

AMX-015 ゲーマルク

AMX-101 ガルスJ

AMX-107 バウ

MSN-03 ヤクト・ドーガ

MSN-04 サザビー

AMS-119 ギラ・ドーガ

NZ-333 α・アジール

AMS-129 ギラ・ズール

YAMS-132 ローゼン・ズール

NZ-666 クシャトリヤ

NZ-999 ネオ・ジオング

etc



NEO

**GREAT
MECHANICS**
グレートメカニクス
スペシャル



モビルスーツ
全集⑧
U.C.0083-U.C.0096
ネオ・ジオン製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0083-U.C.0096

ネオ・ジオン

製

モビルスーツBOOK



©創通・サンライズ

定価： 本体1400円 +税

雑誌63982-63
Printed in Japan © Futabasha 2014

ISBN978-4-575-46486-3
C9476 ¥1400E



9784575464863



1929476014009



© 製造・サンライズ

定価： **本体1400円** + 税

雑誌63982-63
Printed in Japan © Futabasha 2014

ISBN978-4-575-46486-3
C9476 ¥1400E



9784575464863

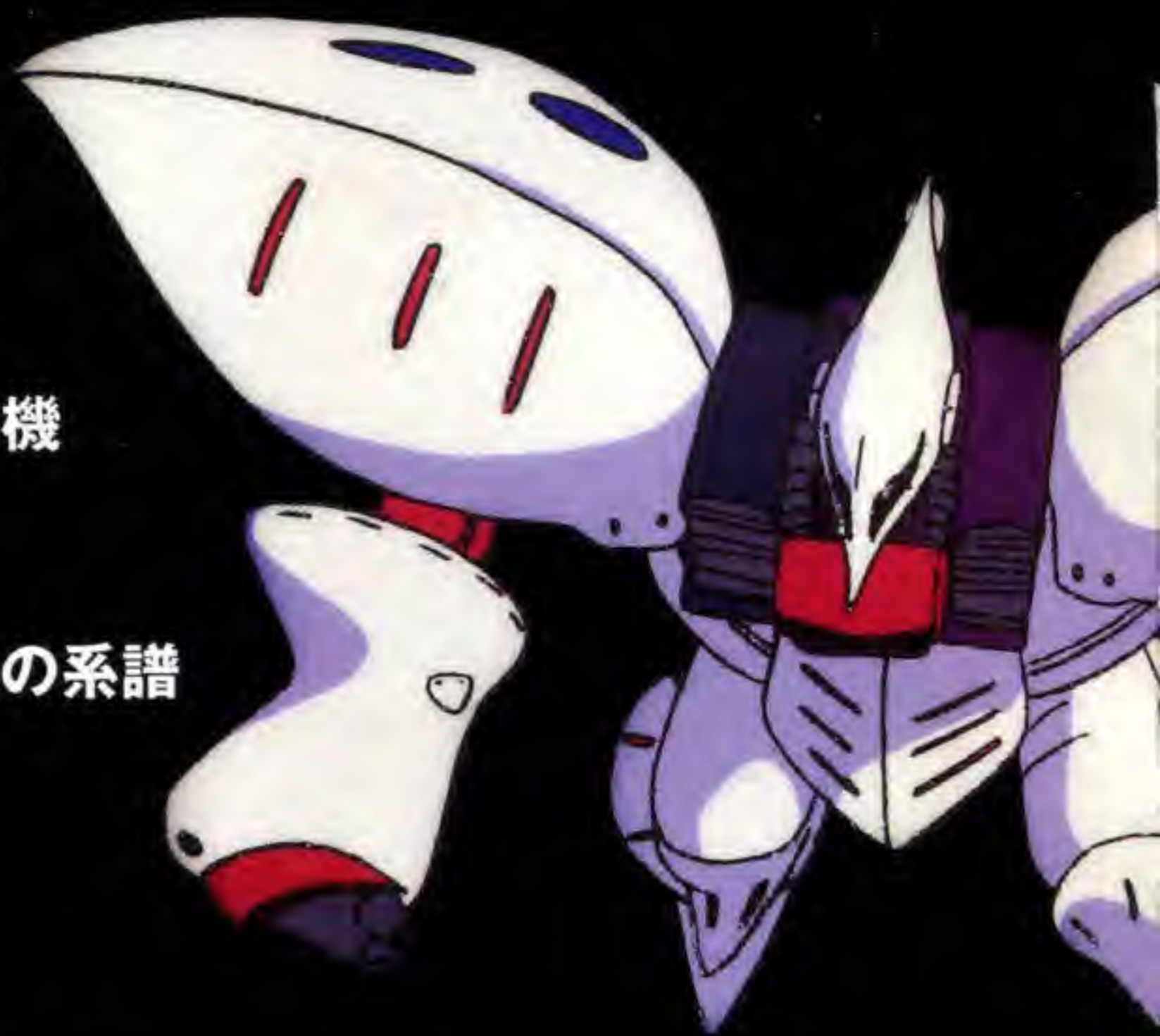


1929476014009

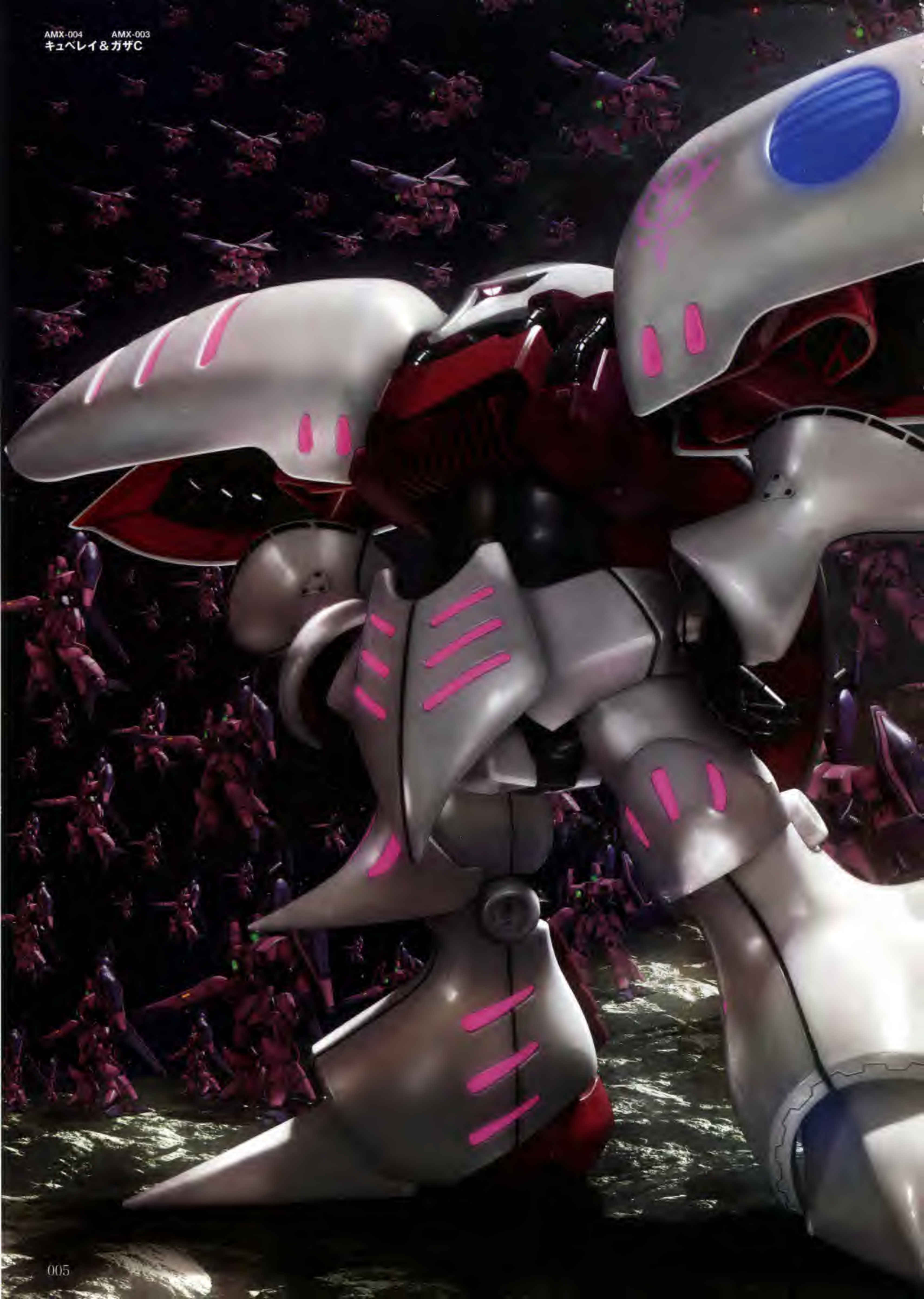


Contents

- 008 Introduction
- 012 カラー設定画&イラストラインアップ
- 014 戦後のモビルスーツ史に登場した「ジオンの亡霊」の系譜
- 018 ネオ・ジオン製MSが活躍した戦場
- 022 ベズン計画とネオ・ジオンのMS開発
- 024 **ネオ・ジオン系ガザシリーズと可変機**
- 026 各種機体解説
ガザC / ガザD / ガザE / ガ・ゾウム / バウ
- 034 **ネオ・ジオンのニュータイプ専用機の系譜**
- 036 各種機体解説
キュベレイ / キュベレイMk-II /
量産型キュベレイ / ゲーマルク /
クイン・マンサ / ヤクト・ドーガ / サザビー /
クシャトリヤ / ローゼン・ズール / シナンジュ
- 052 **アクシズ / ネオ・ジオンの通常MSの開発**
- 054 各種機体解説
ガルスJ / スサ / ハンマ・ハンマ / R・ジャジャ /
カプール / ドライセン / ザクⅢ / ザクⅢ改 /
ドーベン・ウルフ / ギラ・ドーガ / ギラ・ズール
- 068 ジオン系勢力のMS運用から見える傾向
- 070 **ネオ・ジオン系MA解析**
- 072 各種機体解説
ノイエ・ジール / ジャムル・フィン / α・アジール / ネオ・ジオング
- 078 ネオ・ジオン製MSの迷彩
- 082 宇宙世紀0087-0096年のネオ・ジオン系MSの武装
- 086 **THE対決**
ドーベン・ウルフvs ZZガンダム / サザビー vs ヤクト・ドーガ vs ザクⅢ /
クイン・マンサvsサイコ・ガンダムMk-II /
ガザCvsハイザックvsジムII / ギラ・ズールvsジェスタ
- 090 ネオ・ジオン ギラ・ドーガVS地球連邦軍 ジェガン
- 094 ネオ・ジオンのモビルスーツ戦術理論
- 098 徹底比較! U.C.0080 ~ 0090年代のMS技術と21世紀の兵器技術
- 102 MS設定資料
- 124 MSスペック一覧









MSN-04
サザビー



AMX-004
キューベレイ





亡国の技術遺産が生み出した バラエティに富むランナツプ

ジオン公国。

宇宙世紀の歴史において、宇宙世紀0080年に、事実上滅亡した国家だ。

といってもそれは「ジオン共和国」という、新たな外皮を手に入れたに過ぎなかった。また、ジオン共和国以外にも、アクシズ、デラーズ・フリート、あるいは地球に残ったゲリラなど、いわゆる旧ジオン公国残党といわれる様々な勢力が、地球圏の各地に密かに息づいていた……。

これが『機動戦士ガンダム』以後の地球圏における旧ジオン公国軍の基本的な姿である。『ガンダム』シリーズ

において、続く『機動戦士Zガンダム』

『機動戦士ガンダムZZ』『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』、そして最新作である『機動戦士ガンダムUC』に至るまで、アクシズ、ネオ・ジオン、『袖付き』などの名称で、ジオン系勢力が次々登場し、様々なジオンの系譜を継ぐモビルスーツが登場した。

宇宙世紀を一つの歴史として捉えた場合、これらに登場するジオン系機体は、あまりにそのバラエティに富み、とても兵器としての統一性がとれているように見えないことがある。

作品として『ガンダム』シリーズを考えると、それは当然だろう。なぜなら、それらの作品は、各作品ごとに対象となるターゲット（市場）やコンセプトが違うためだ。

製品コンセプトの中心に変形があった『Zガンダム』は『機動戦士ガンダム』とまったく違うラインを見せ、またデザインという意味でも70年代と80年代の違いがはっきりと見えていた。より明るい作風を目指した『ガンダムZZ』のモビルスーツは、そういっ



た作風らしく派手になり、大型化した。『逆襲のシャア』では、『機動戦士ガンダム』のシンプルなコンセプトを当時の今様に表現し、21世紀に製作された『UC』では、30年近い歴史を踏まえた上でのモビルスーツが描かれた。基本的にジオン系のモビルスーツは、作劇上は悪役という立場である。それゆえ作品ごとに、コンセプトに合った悪役像が求められる。結果的に主役であり、ある程度の幅でデザインしなければならぬ制約のあるガンダムとは対照的に、バラエティに富んだ形になった。一方で、ガンダムワールドにおける宇宙世紀を、歴史ロマンとして楽しんでいるファンたちにとっては、このバラエティの多様さが、問題とも言えた。現在の設定面では、そのバラエティの豊かさを「第一世代」「第二世代」などと区分することで、一応の整理がされている。

せ、ひとつの整合性のとれたものとするのは、ガンダムのようなSFエンターテインメント作品において、ファンたちの一つの楽しみである。現在のガンダムワールドは、35年以上に渡り、ファイルムの製作者たちだけでなく、ファンや出版メディアなども一緒になって、現在では当たり前となった設定を作り上げてきた結果でもあるのだ。

本書は、そんな一年戦争後からラプラス戦争までの15年あまりのジオン系の機体をまとめたものである。

それは、アクシズことハマーン・カインのネオ・ジオン、シャア・アズナブルのネオ・ジオン、そして『袖付き』のモビルスーツについて、一つの流れを作りつつ、紹介する試みでもある。そして、それらのバラエティに富んだ機体たちを宇宙世紀、そしてガンダムワールドという、一つの流れの中に置いてみると、時にうっすらと、時にはっきりとした一つの線が浮かび上がってくるのだ。

その航跡は、いうならば『ガンダム』でありながら新しい作品を作るという命題と同時に、『ガンダム』であることも重要な要素として製作するという、富野由悠季監督をはじめとする、時のガンダムに関わったクリエイターたちの、35年以上にわたる苦闘の航跡であるのかもしれない。

カラー設定画 & イラストラインアップ

ここでは『機動戦士Ζガンダム』から『機動戦士ガンダムUC』までの映像作品、MSVなどの関連企画に登場したネオ・ジオンならびに旧ジオン公国軍系統のモビルスーツ、モビルアーマーのカラー設定画とカラーイラストを掲載。本書で解説を行っている機体はアイコンを表示。並び順は映像作品を先に、それぞれ登場年代でまとめた。



AMX-006
ガザD
P.028



AMX-003(MMT-1)
ガザC
P.026



AMX-004(MMS-3)
キュベレイ
P.036



AMX-102
ズサ
P.056



AMX-102
ズサ
P.056



AMX-101
ガルスJ
P.054



AMX-008
ガ・ゾウム
P.030



AMX-011
ザクⅢ
P.061



AMX-009
ドライセン
P.060



AMX-109
カプール
P.059



AMX-107
パウ
P.032



AMX-104
R・ジャジャ
P.058



AMX-103
ハンマ・ハンマ
P.057



AMX-014
ドーベン・ウルフ
P.063



AMX-011S
ザクⅢ改
P.062



AMX-004-3
キュベレイMk-II ブルツォ専用機
P.037



AMX-004-2
キュベレイMk-II エルビー・ブル専用機
P.037



RMS-099B
シュツルム・ディアス



MS-14J
リゲルグ



AMX-117L
ガズエル



AMX-117R
ガズアル



AMX-015
ゲーマルク
P.039

NZ-000



NZ-000
クイン・マンサ
P.040

AMX-01X



AMX-01X
ジャムル・フィン
P.073

AMX-004G



AMX-004G
量産型キュベレイ
P.038

MS-06D



MS-06D
ディザート・ザク
(青の部隊用)

MS-06D



MS-06D
ディザート・ザク

MRX-010



MRX-010
サイコ・
ガンダムMk-II

AMS-119



AMS-119
ギラ・ドーガ
レズン・シュナイダー専用機
P.064

AMS-119



AMS-119
ギラ・ドーガ
P.064

MS-09H



MS-09H
ドワッジ改

MS-09G



MS-09G
ドワッジ

RMS-119



RMS-119
アイザック

RMS-192M



RMS-192M
ザク・マリナー

NZ-333



NZ-333
α・アジール
P.074



ホビー・
ハイザック



MSN-04
サザビー
P.044



MSN-03
ヤクト・ドーガ
チェスト・パラサ機
P.042



MSN-03
ヤクト・ドーガ
P.042



AMS-129
ギラ・ズール
親衛隊機
P.067



AMS-129
ギラ・ズール
ギルボア・サント機
P.066



AMS-129
ギラ・ズール
P.066



AMA-X2
ノイエ・ジール
P.072





ハマーン・カーンの
ネオ・ジオンから
フル・フロンタルの
『袖付き』まで
モビルスーツ開発の
複雑な情勢

戦後の モビルスーツ史に 登場した 「ジオンの亡霊」 の系譜

**終戦でジオン全兵力の50%が
姿を消す異常事態!?**

宇宙世紀0080年、一年戦争、つ
まりジオン独立戦争は、ジオン公国の
敗戦という形で幕を閉じた。

そもそもジオン公国は戦争の開戦以
前より、政治的には国家の「格」を持
っていた。つまり一年戦争は、正確に

めない勢力が多数出現したのだ。

ある者は地球上でゲリラ活動を行い、
ある者は密かに雌伏して時を待った。

中でも勢力が大きかったのは、木星と
火星の間にあるアステロイドベルトに、
かつてジオン公国が建設したアクシズ
を拠点とする一派だ。終戦を認めず抵
抗勢力として地下に潜ったジオン公国
軍兵士の数は、一説には残存兵力の50
%にも及んだとされるが、さすがにそ
れは多すぎるだろう。ジオン公国の終
戦時の国民人口は1億5千万人とも30
億人ともいわれるが、仮に1億5千万
人としても、その中の兵の割合が4%
として(第二次世界大戦の日本の終戦
時の残存兵力の人口比率を参考)、約6
00万人。その半数で300万人規模、
30億人ならば6000万人にも及ぶ。

一方、戦後の行政の混乱で、死者の
戸籍を旧ジオン残党勢が買い取り、地
球連邦政府国民となった例も多いとさ
れる。つまり50%という俗説は、ジオ
ン公国の軍籍及び国籍から密かに抜け
た総計と考えられる。無論、熱狂的な
ジオニストが徹底抗戦を目論んだ、と
いうことも背景にあるだろうが、本大
戦は民間人の犠牲が多めで、敗戦後の
軍事裁判の被告になることを恐れた
人々もまた少なくなかっただろう。

**アクシズの勢力は本当に
3万人しかいなかったのか!?**

このような背景がありながら、ジオ
ン公国の落人の中心地、アクシズに集
まった旧ジオン公国兵は一説には3万
人とされる。恐らくこれは、その実数
を悟られないために低く誇張された数
字だろう。実際の数は明らかではない
が、その生産力や軍事力から鑑みて、
少なくとも数十万人規模、もしくはそ
れ以上の可能性は高い。また、その政
治体制も、ザビ家の遺児、ミネバ・ザ
ビを中心に、さながら王朝のような、
極端な君主制(摂政政治)を敷いてい
たことから分かるように、過激なジ
オニストの集団と考えていい。

そして、地球連邦政府は、こうした
ジオン系の不穏分子が各地に広がった
ことを半ば知りながら放置していたフ
シがある。その理由としては、総人口
の半分を失ったとされる地球連邦政府
は、戦後処理が優先で、それほど力
を割けなかったこと。また、地球圏の
宇宙では、大戦で地球連邦シンパのス
ペースノイドの多くが駆逐された結果、
アクシズほど極端ではないが、何らか
の形でジオニズムの影響を受けたスベ
ースノイドは多いはずで、それらが生
き残るため旧ジオン勢力を積極的に匿
い、政府には正確な実態が把握できな
かったこともあるだろう。

終戦後、散発的なゲリラ戦が行われ
ていたものの、地球圏は時とともに落
ち着きを取り戻したように見えていた。



しかし、それはまったくの砂上の楼閣であることが露呈する。宇宙世紀0083年に起きた、デラース・フリートの武装蜂起、いわゆる「デラース紛争」だ。

デラース紛争で明らかになった アクシズの開発力

この紛争はジオン公国軍のエンジニア・デラース中將が、3年にわたり秘匿、維持していた自身の艦隊による大規模な作戦行動で、その目的はコロニーを再び地球に落とし、地球連邦軍に大打撃を与えることと、ジオンの反抗勢力の健在を誇示するものだった。

このデラース・フリートが3年間に及ぶ抵抗が可能だったのは、アナハイム・エレクトロニクス(AE)社など、月や宇宙の企業などの協力があつたからとされる。

この紛争では、アクシズの艦隊が地球圏外縁に姿を見せ、圧倒的な能力を持つAMX・X2ノイエ・ジールを供与している。この機体は、旧ジオン勢力の開発力がいまだ健在なことを証明し、アクシズ艦隊の規模も含め、地球連邦軍にとって、その仮想敵が意外に大きいことがあらためて浮き彫りとなる。このため地球連邦軍は、ティターンズという特殊部隊を創設して大きな権力を与え、モビルスーツも積極的に開発することで、これに対応しようとした。しかし、実際は地球連邦政府内

の権力闘争の火種になり、ティターンズの専横に反対するエウーゴの結成を促し、宇宙世紀0087年には内紛状態になっていく(グリプス戦役)。

アクシズによる モビルスーツ開発

一年戦争当時、アクシズは木星船団の中継地だったが、有事の際の避難場所としても想定され、モビルスーツの研究開発も行われていた。さらに戦後にジオン系のモビルスーツ開発技術者もまた数多く避難し、戦後は戦前以上とも言えるモビルスーツ開発が積極的に行われていた。

一方、終戦直後のアクシズには、既存のモビルスーツ配備数は絶対的に足りなかったはずである。地球圏から遠いアクシズの地で、MS・06ザクⅡやMS・14ゲルググなどの生産設備があつたとは考え難い。その数は、残存艦艇の艦載機プラスアルファ程度だったことだろう。それらは急激な人口増に際し、居住空間(モウサ)を建設するのに作業用としても使用されたという。また地球連邦軍がアクシズに遠征してきたことを考えると、モビルスーツの数を揃えることは急務であつた。

こうしてアクシズにおいて、最初のオリジナルのモビルスーツであるガザシリーズが開発されることになる。作業用機械から発展したこのガザシリ

ズが面白いのは、簡易型として開発されたものの、高火力の付加と機動性を重視する可変式が採用された結果、用途は限定されるものの、一定の評価ができる機体となったことだ。

結果的にガザシリーズは、本格的な軍用であるAMX・003ガザCから、ムーバブル・フレーム、ガンダリウム合金を採用した第二代機相当(可変機ゆえ第三代機?)の発展型であるAMX・006ガザD、用途限定だったガザシリーズに汎用性を与え、本格的な第三代機としたAMX・008ガ・ゾウムにまで進化を遂げる。ガザシリーズはアクシズの開発力の底力を見せた機体といえるだろう。

クロスオーバーする モビルスーツ開発技術

この時代のモビルスーツのテクノロジーの発達には、実に興味深い展開をみせている。およそそのモビルスーツ開発は、地球連邦軍の北米オーガスタ基地を中心にする、いわゆるオーガスタ系、旧ジオン公国のモビルスーツ開発メーカー、ジオニックス社などを吸収し、

ジオン公国と連邦の技術を持つAE社の系統、そしてアクシズの系統といった三派が存在した。

いわゆる第二代モビルスーツを形成する技術において、革新的装甲材のガンダリウム合金は、ルナ・チタニウム合金の性能をより安価に実現したもので、アクシズで開発され、クワトロ・バジーナことシャア・アズナブルの手により地球圏にもたらされた。

ムーバブル・フレームや全天周モニターといった地球発の技術は、いつの間にかアクシズサイドにも伝播している。これは技術開発の流れの中に、それぞれ他陣営の情報を得る手段があつたことの証明でもある。アクシズとAE社の技術交流は想像しやすい。さらにAE社とオーガスタ系も交流があつたはずで、背景には政治的な取引や、産業スパイの存在など様々な理由も考えられる。まさに混乱の時代らしい。そうした中、アクシズが地球圏の政治的混乱をみて、地球圏に移動を決意する。勢力が小さいアクシズにとって、その存在感を示すには主要戦力であるモビルスーツの優位性を見せることは必須で、そのために新たなモビルスーツを開発していたのだ。

ネオ・ジオンの モビルスーツ開発2大柱

アクシズ(後のネオ・ジオン)の開



↑デラース紛争時に登場したノイエ・ジールは、旧ジオン公国の開発技術を総動員したような性能を発揮した。

時代別にみる ネオ・ジオン系勢力の 推移と主力機の変遷

アクシズ(ネオ・ジオン)

U.C.0087-0088
グリプス戦役

ガザC

世代の能力で照らし合わせるとネモと同等。ビーム兵器の威力はZガンダムに匹敵する。可変機ゆえ第三代機相当といったところか。



ガ・ゾウム



ガルスJ



U.C.0088-0089
第一次ネオ・ジオン戦争

TOPIC 02

U.C.0088 8/29
ネオ・ジオン設立宣言

アクシズの地球進攻作戦により連邦政府首都、ダカール制圧。

TOPIC 01

U.C.0083 11/11
デラース紛争

アクシズ艦隊がデラース・フリートにノイエ・ジールを供与。戦闘には直接参加せず。



発方針は大きく分けて2つであった。ひとつは一年戦争のモビルスーツの延長線上にある、通常モビルスーツ。それは先に挙げた既存のガザシリーズの集大成であるAMX・008ガ・ゾウムや、前大戦のモビルスーツの発展型、AMX・101ガルスJ、AMX・009ドライセン、AMX・011ザクIII、AMX・104R・ジャジャなどが挙げられる。

これらは旧ジオン公国の系譜にありながら新たなコンセプトを付加されている機体も多く、数の少なさをカバーするために必要な戦力だった。

また、当時の地球側が積極的に開発していた第三代機にも挑戦している。先に挙げたガ・ゾウムのほか、変形合体機であるAMX・107パウなどがそれに相当するだろう。

一方で、連邦軍よりも技術的アドバンテージがある、サイコミュ系技術の研究・開発も積極的に行われた。大型の機器だったサイコミュ装置をモビルスーツに搭載できるほどに小型化したこと、また核融合炉を搭載する必要があった遠隔操作砲台のビットを、充電式のファンネルに改めたのは革新的だった。いわゆる第四世代機はアクシズ勢が一歩リードしていたのだ。

その代表格がAMX・004キューベレイであり、大型モビルアーマーに匹敵する性能のAMX・015ゲーマル

クや、巨人機のNZ・000クイン・マンサに発展する。一方でニュータイプ以外でも扱えるようにした準サイコミュ搭載型のAMX・103ハンマ・ハンマ、AMX・014ドーベン・ウルフなども開発されている。

しかし、少ない研究リソースで多くの機体を開発し過ぎたきらいもある。次世代機の多くが、AE社のMSZ・006Zガンダムに代表されるように、機体の軽量化を図って基本性能を押し上げようとしたのに対し、アクシズ勢の機体は、いかにも重厚すぎた。時代はシンプルで性能の高い機体に、追加装備として能力を付加する方向がトレンドで、時代遅れの観は否めない。

AE社に委託した シャアのネオ・ジオン

そして宇宙世紀0088年、ハマーン・カーンのネオ・ジオンは、エウロに敗北し瓦解。その5年後、ネオ・ジオンの残党、スペースノイドの反主流派、地球連邦内の反対勢力が結集し、シャア・アズナブルを総帥とする新生ネオ・ジオンが旗揚げされる。これはシャアを総帥に据えるが、旧ネオ・ジオンに比べ穏健な政治体制だった。その反面、行動は地球寒冷化作戦の実施など、かえって過激なものであった。このシャアのネオ・ジオンは、モビルスーツの開発と生産のほとんどを、

U.C.0096
ラプラス戦争

U.C.0092-0093
第二次ネオ・ジオン戦争

キラ・ズール



袖付き

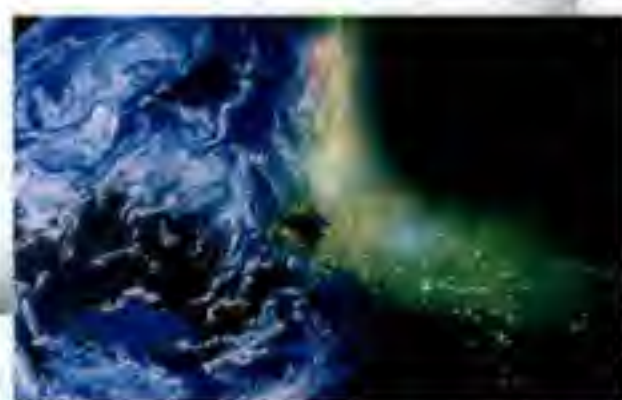
U.C.0093 3 / 12

第二次ネオ・ジオン戦争終結。地球寒冷化作戦は失敗に終わり、シャア総帥も行方不明に。組織も解体へ。

TOPIC 04

アクシズ・ショック発生

地球への降下軌道を進むアクシズは、謎の光に包まれ軌道を変えた。



新生ネオ・ジオン

U.C.0089 1 / 17

第一次ネオ・ジオン戦争終結。主宰のハマーン・カーン戦死で組織瓦解。一部残党はパラオへ逃亡か？

TOPIC 05

新生ネオ・ジオンの残党が『袖付き』を組織。ザビ家の遺児、ミネバ・ザビを頂点にパラオで再起を図る。



キラ・ドーガ



TOPIC 03

主力機の開発はアナハイム・エレクトロニクス社が担当。この流れは『袖付き』にも継承される。



AE社に委託していた。これは、かつてシャアが同社と関係が深かったこともあるが、当時、新技術により革新的な軽量機体を生み出しつつあった同社に開発・生産を委託することで、効率的にモビルスーツを入手して配備しようとしたということでもあるだろう。一方で旧ネオ・ジオンのモビルスーツ開発チームの行く末が問題となるが、おそらくシャアの斡旋によりAE社に迎えられたと考えるべきだろう。

国家にとって兵器の開発の主導権を握るのは、安全保障上重要である。それを地球連邦の一民間企業に委託することはリスクが高いが、一方で地球圏の平和を公言している体にもなる。たとえ戦争となっても生産が続行できるような、ある種の抜け道や密約も、当然、裏で交わされていたはずである。

こうして第二次ネオ・ジオン戦争では、両陣営がAE社製の機体で戦うという、奇妙な状況が生み出された。この戦争において、地球連邦軍のRGM-89ジェガンと、ネオ・ジオン軍のAMS-119キラ・ドーガの差異は、おそらく要求される用途による、機体仕様レベルの違いでしかないだろう。同社では双方のモビルスーツ生産などは事業部が違いうで、技術的な特徴の違いはある程度あった。特にサイコミュ関連の製造技術において、その差は顕著である。

『袖付き』にAE社が
加担した理由とは？

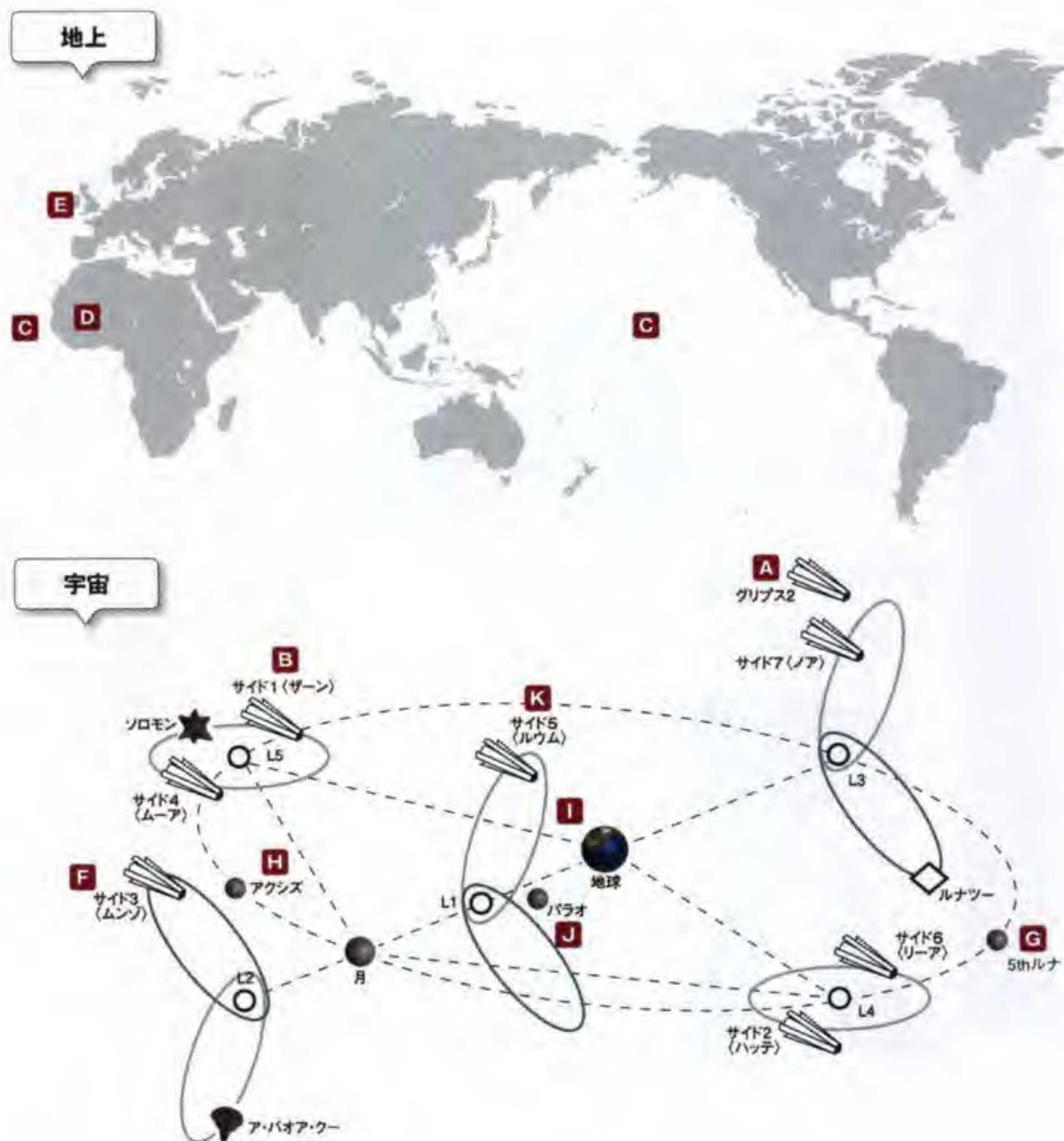
そしてAE社のネオ・ジオンのモビルスーツの開発・研究は、法的には非合法組織に成り下がった『袖付き』となった後も、それまでよりは、かなり小規模ながらも続けられている。しかもAMS-119キラ・ズールという新型機まで開発生産しているのは驚きである。こうした事態もAE社が死の商人であるから、と判断するのは簡単だ。だが、反ティターンズを掲げたエウゴの実質的オーナーで、スペースノイド左派のカラーを持つ企業は「隠れジオニスト」の温床だったであろうことも忘れてはならない。

確かに同社はグリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争において勝利者となり、地球連邦政府への影響力は高くなった。しかし政治への参画は地球派との妥協を含まざるを得ず、本来の支持層の求心力の維持も必要だったはず。

そういった意味ではシャアのネオ・ジオンや『袖付き』への非公式な協力継続は、会社やスペースノイドにとって必要なことだったのかもしれない。つまり、AE社は「隠れジオニスト」であるがゆえにジオン系思想を背景にした組織には協力し続け、その結果、ネオ・ジオンの技術を吸収する土壌にもなり得たのだろう。

ネオ・ジオン製MSが活躍した戦場

一口に「ネオ・ジオン」といっても、その実態は複数の異なる組織だ。それゆえ、様々なMSが様々な地で使われていた。また、姿を少しずつ変えつつ「ネオ・ジオン」を通して活躍していた機体もある。そんなネオ・ジオン製MSの戦いを振りかえる。



A グリプス2

ティターンズがコロニー・グリーン・ノア2を改造して造ったコロニー・レーザー。グリプス戦役ではその戦略的重要性ゆえに三つ巴の戦いの舞台となった。

B サイド1

サイド1のコロニーのひとつ、シャングリラはグリプス戦役直後のアーガマが補給のために寄港し、そのアーガマを追ってきたマシュー率いる部隊と戦闘が行われた。

C 太平洋&大西洋

宇宙を拠点とするネオ・ジオンだが、地球制圧や地球のシンパ支援のために水陸両用機を開発しており、第一次ネオ・ジオン戦争やラプラス戦争ではそれらが使用された。

D アフリカ

ハマーンが正式に「ネオ・ジオン」を名乗り、地球連邦政府の首都であるダカールを制圧するため降り立った地。また、ジオン公国残党軍の活躍する地でもあった。

E ダブリン

ハマーンによるダカール制圧後、連邦高官がダブリンの「ぶな屋敷」へ逃げ延びたが、それゆえハマーンによるコロニー落としの標的となり、壊滅的な打撃を受けた。

F サイド3

ハマーンは地球連邦政府との取引によりネオ・ジオンの領土となり、コア3には本拠が置かれた。また、24バンチ・タイガーバウムにおいても戦闘が行われたことがある。

G 5thルナ

資源衛星のひとつ。第二次ネオ・ジオン戦争においては地球寒冷化作戦の一環としてシャアにより地球への落下が企てられ、それを防ごうとするロンド・ベル隊と戦闘が行われた。

H アクシズ

元は資源衛星だが、一年戦争後に落ち延びたジオン公国残党の住まう地となった。第二次ネオ・ジオン戦争では彼らの象徴ともいえるこの小惑星の地球への落下が企てられた。

I 衛星軌道

U.C.0083年次においてはデラズ・フリートの星の屑作戦によってコロニー落としが行われた他、地球と宇宙を繋ぐ場として幾多の戦いが繰り広げられている。

J パラオ

第二次ネオ・ジオン戦争終結後、残存勢力が拠点としていた資源衛星。『袖付き』の本拠地でもある。ラプラス戦争において直接戦いの舞台となり、大きな打撃を受けた。

K 旧サイド5

コロニー・インダストリアル7において『袖付き』とロンド・ベル隊の戦闘により被害を受けたほか、メガランカに秘匿された「ラプラスの箱」を巡る激戦が行われた。



U.C.0088.03~ アーガマ追撃戦

グリブス2によってティターンズの艦隊が崩壊し、一応の決着を得たグリブス戦役直後、勢力を温存していたハマーンはマッシュマー・セロにエウーゴのアーガマ追撃を命じる。この追撃はアクシズが開発中だった様々なモビルスーツの実戦におけるテストも兼ねていたようで、マッシュマーのもとにはガルスJやハンマ・ハンマといった機体が次々と送られたほか、3機のカザD（当時の新鋭機である）で構成されたカザの嵐隊といった新しいMSの用兵を模索する試験までが行われていた。戦いの規模事態は小さいものだったので、新鋭機の実証試験にはちょうどよいと判断されたのかもしれない。



◆陸戦主体のガルスJ。後に少数が生産されたほか、ガルスKやシュツルム・ガルスといった派生機を産んだ。



◆ガルスJと共に運用される予定であったズサもシャングリラで実戦テストが行われた。

◆一般兵用のオールレンジ攻撃が可能なMSとして期待されたハンマ・ハンマ。



◆シャングリラを脱したアーガマを追撃する際には、R・ジャジャも投入されている。

U.C.0088.02 グリブス2攻防戦

ティターンズとエウーゴによる戦いの最中、アステロイド・ベルトから地球圏へ帰還したアクシズは、第三の勢力としてグリブス戦役に参加する。この時点では量産機はほぼカザCのみであったが、得意とした集団による砲撃によってティターンズのMS部隊を圧倒したこともある。

グリブス戦役末期には、宰相であるハマーン・カーンが専用機であるキュベレイでグリブス2を巡る戦いに参加。ハマーンのニュータイプとしての能力の高さもあり、エウーゴのZガンダムやティターンズのジ・Oといった当時としては優れたMSとニュータイプ同士の熾烈な戦いを繰り広げている。



◆密集し一斉射撃を行うカザC。ヤザン・ゲーブルのハンブラビ隊を撤退させるといった活躍をみせた。

◆白い塗装が施されたハマーン専用のカザCも存在する。スペック的には大差はないとみられる。

◆グリブス戦役末期にはすでに実用化されていたキュベレイ。クワトロの百式を終始圧倒した。



太平洋&大西洋

U.C.0089.09 アーガマ迎撃戦

U.C.0096 トリントン基地襲撃戦

第一次ネオ・ジオン戦争時には、ダカールへ向けて降下したハマーンの艦隊を追うアーガマのZZガンダムと、ネオ・ジオン製水陸両用MSカプールの戦闘を行った。カプールのスペックに優れるが「宇宙しか知らない」ネオ・ジオン製であるため現地ではあまり好評ではなかったようだ。また、ラプラス戦争においてはジオン公国残党軍によるトリントン基地襲撃の際に『袖付き』のゼー・ズールが援軍として参加している。MSだけが貸与されたカプールの異なりこちらはパイロットも『袖付き』所属だったが、基地の防衛にあたったパイラン・カスタムによって撃破されてしまった。



◆ジオン公国残党軍のズゴックとともに戦闘を行うゼー・ズール。最新鋭機と旧式機が並び立つという珍しい場面。

◆正規の訓練を受けていない少年兵でも操縦が行え、性能も高かったカプールの貸与先のジオン公国軍残党の信頼は得ることができなかった。



U.C.0089.01 サイド3攻防戦

地球連邦首脳部との取引によって、サイド3のうちコア3を割譲、新しい本拠地としたハマーンだったが、配下のグレミー・トトが反乱を起こし内紛となる。さらにネェル・アーガマのガンダムチームも加え、サイド3および周辺の宙域では奇しくもグリプス戦役末期を思わせる三つ巴の戦いが繰り広げられた。この局面においては強化人間やクローン生成されたニュータイプ、そしてそれらが搭乗するニュータイプ専用機が多数戦線に投入された。それらはやはり試作機やワンオフ機も多く、俗に「恐竜的進化の筋道をたどった」といわれるMSが、もっとも肥大していた時代かもしれない。



◀ハマーン陣営においてはイリア・バズムのリゲルグや強化人間となったマッシュマーの駆るザクⅢ改が活躍。



◀ファンネルに特化したゲーマルクと、その防護を務めるガズエル、ガズアルのコンビという編成も見られた。



◀一般兵用の量産MSとしては非常に高いスペックを誇るドーベン・ウルフ。グレミー陣営で運用されていた。
↓グレミー陣営の切り札クィン・マンサ。さらには量産型キューベレイによるニュータイプ部隊も擁していた。



↓ハマーンは自らキューベレイに搭乗し、ジュード・アーシタの乗るZZガンダムと一騎打ちを行っている。



U.C.0088.08~ 地球侵攻

地球連邦の首都があるダカールを制圧するため地球に降り立ったハマーンとアクシズの艦隊。重要な作戦だけに、量産化がなされたばかりのドライセンが配備されていたり、装備も最新鋭であった（その他、パウも投入されている）。しかし地球での戦闘は基本的にサブ・フライト・システムを用いての戦闘で、機体の能力が如実に現れる場面は少なかった。



◀ラカン・ダカランやオウギュスト・ギダンといったパイロットの手により、ドライセンも初の実戦を経験。



◀分離し飛行形態をとれるパウだが、地上ではサブ・フライト・システムを使用。普通のMSとして運用された。

ダブリン

U.C.0088.10 コロニー落下作戦

地球連邦高官が集う「ぶな屋敷」があるダブリンに、コロニー落としをかけるハマーン。コロニー落としの効果をもよほすため、市から脱出する市民を封鎖するという任務において、ザクⅢやサイコ・ガンダムMk-IIといった機体が投入された。



◀↓避難誘導にあたるアーガマ（ガンダムチーム）と交戦するサイコ・ガンダムMk-IIとザクⅢ。



地球衛星軌道

U.C.0083.11 星の屑作戦

デラーズ紛争において、アクシズはノイエ・ジールをデラーズ・フリードに供与。アナベル・ガトーの手により、コロニー落下を阻止しようとする連邦軍およびガンダム試作3号機と激闘を繰り広げた。



◀↓連邦艦隊に大きな被害を与えたノイエ・ジール。また、デラーズ・フリードのドラッツェは後に「袖付き」でも運用された。



U.C.0096 ラプラス戦争

世界に重大な影響を及ぼす秘密が隠されているという、「ラプラスの箱」。その鍵となるユニコーンガンダムの『袖付き』への譲渡交渉が行われたインダストリアル7。『袖付き』のガランシェール隊所属のMSと、その交渉を阻止せんとするネエル・アーガンマ隊のMSとの戦闘が行われ、大きな被害が出た。この事件に端を発するラプラス戦争は、「ラプラスの箱」が秘匿されているというメガラニカ（インダストリアル7の建造作業ユニット）周辺で行われた『袖付き』とネエル・アーガンマ隊の決戦によって幕を下ろした。この決戦時には常識を超えた能力を発揮するNZ-999ネオ・ジオングが投入されている。



➡「ラプラスの箱」の譲渡交渉の前にガランシェール隊のクシャトリヤが先遣隊のスターク・ジェガンと交戦。



➡ユニコーンガンダムを確保したネエル・アーガンマを『袖付き』首魁フル・フロントル搭乗のシナンジュが急襲。1機で敵艦を制圧する戦闘力を発揮する。



➡『袖付き』の親衛隊機のパラ・ズールと、可変機リゼルの戦闘も行われた。

➡ユニコーンガンダムの脅威に対抗するために、サイコミュを封じる「サイコ・ジャマー」を搭載したローゼン・ズール。



➡「搭乗者が望むものを具現化する」という前代未聞の能力をもつネオ・ジオング。そのサイズも圧倒的。



U.C.0093.03.04 フィフス・ルナ落下作戦

フィフス・ルナを地球に落下させる軌道および動力の核パルス機関を守るため、ギュネイ・ガスのヤクト・ドーガがロンド・ベル隊のリ・ガズィと交戦。さらに応援に駆けつけたシャア・アズナブルのサザビーの介入もあり、作戦は成功。



↑スペック的にはリ・ガズィより優位だったが、パイロットの力量差によりヤクト・ドーガは中破。

U.C.0093.03.12 アクシズ落下作戦

地球寒冷化作戦完遂のため、小惑星アクシズを落下させようとするシャアのサザビーは、宿敵アムロ・レイのνガンダムと激しい一騎打ちを行った。その他、移動するアクシズの防衛にはα・アジールも参加している。



↑あえて自陣営のサイコフレーム技術を流出させ、その結果作られたνガンダムに敗北。皮肉な結末である。

U.C.0096 バラオ防衛戦

バラオに囚われていた「ラプラスの箱」の鍵であるユニコーンガンダムとそのパイロット、バナー・リンクスの救出にあたったロンド・ベル&エコース隊の襲撃に対し、様々なMSで応戦にあたる。その中には第一次ネオ・ジオン戦争時代のMSも含まれていた。



↑グリーンにペイントされたガザDや、ドライセンといった、かつてのMSも『袖付き』では現役だった。

小惑星で開発されたMS群が 後のアクシズMSを支えた!?

一年戦争末期、劣勢によりMSの生産・開発拠点を失いつつあったジオン公国軍だったが、小惑星のペズン基地においては終戦までMSの研究開発がなされていた。戦争末期にはペズン計画と呼ばれる、新型MSの生産計画が立てられていたことが知られる。

ペズン計画においては、MSの新たな可能性を探るといふ目的もあり、様々な用途やコンセプトをもった機体を作られている。また、ペズン計画が極秘裏であったこと、ペズン基地自体がひとつの完結した研究環境であったことなどから、非常に独創性の高いMSが企画されていたという特徴がある。MS・12ギガンやMS・13ガッシャは、かなり使いどころの難しい、一種の迷機ともいえるが、ジオン公国軍においては当時主流ではなかったマグネツト・コーティング式の駆動系を持ち、高い性能を誇っていたMS・11アクト・ザクのような優れた機体も存在した。そしてそれら成果物は、ペズン基地が終戦時まで連邦軍の手に渡らなかつたこと（ちなみに本部はサイド3の本国にあったとされる）により、研究者とともにアクシズへ持ち込まれたものの、戦後、連邦軍により接收されたものの二通りに別れることになった。前述の

アクト・ザクは地球連邦軍がその性能に目をつけ、生産し配備している。また、同じくペズン計画によって開発されていたMS・17ガルバルディ（a）は、より数奇な運命を辿った。本機はMS・14ゲルグと主力機の座を争った機体、YMS・15ギガンベースに高性能化、さらに対MS戦に向けビーム・ライフルなどの装備が施されていた。これも地球連邦軍が独自に改修した後、量産モビルスーツとして採用した。それがRMS・117ガルバルディβである。登場時期はU.C. 0080年代後半のグリプス戦役の頃で一年戦争終結後（データ接收後）から、それなりに時間が経っているが、戦後の混乱が落ち着き、次世代MSについてのプランを整理する期間を経ての決定だったのだろう。

と、ここまでなら一年戦争時のジオン公国軍兵器を改修して使うことがMS運用のひとつの方針であった当時の連邦軍の事情話だが、その後、第一次ネオ・ジオン戦争にてAMX・117

ペズン計画と ネオ・ジオンの MS開発

ペズン計画で開発されたMS群

ペズン計画には「新たにMSの可能性を探る」というコンセプトも含まれていたため、多種多様なMSが考案されていた。その中にはガルバルディアやアクト・ザクといった優

れたものから、ギガンのような一種奇天烈なものも存在する。しかしこのギガンもあらゆるMSが貴重である『袖付き』では改造された上で運用されている。実に感慨深い。

L/Rガズエル、ガズアルが、ネオ・ジオンのMSとして投入された。この機体には、親衛隊用機として外装パーツに装飾が施されているが、外観はガルバルディβにそっくりである。当然、当時はアクシズと連邦軍で技術交流などないだろうし、なぜこのような現象が起きたのか疑問符がつく。

しかし、これも元を辿ればペズン計画における設計データを両陣営が用いたと考えれば、それほど不思議でもない。外観はほとんど同様ながらガルバ



MS-17
ガルバルディα



MS-13
ガッシャ



MS-12
ギガン



MS-11
アクト・ザク



MS-10
ペズン・ドワッジ

AMX-117R
ガズアル

キャラ・スーンの搭乗するゲーマルクに随伴（監視役として）する機体として運用された。機能に関わるものではないが、肩や装甲の端などに装飾が施される。中世の騎士をイメージさせる格闘戦用のヒート・ランスを装備。



AMX-117L
ガズエル

ガズアルとともに、ゲーマルクに随伴。肩のパーツが左右逆であること、カラーリング以外の性能的な面で大差はない。射撃用の火器類を携行していない独自性は、両機ともに親衛隊用のMSゆえの仕様。



さらにいえば、これに限らず、ネオ・ジオンのMS開発において、ベズン計画における設計データや携わったエンジニアの存在は、非常に重要位置を占めたのかもしれない。人員や資本が不足しがちな中でゼロから研究・開発を行うより、既存のデータを元にそれを発展させる方が効率は良いはずだ。アクシズのガザCは作業機器から発展し

たMSといわれるが、他陣営のMSとは大きく異なる外観や、独自性の高い変形機構など、どこことなくベズン計画で企画されたMSに近いものが感じられないだろうか。
加えてグリプス戦役末期の時点で、キュベレイのようなある程度の完成度を持ったニュータイプ専用機を保有できたのも、ベズン基地やフラナガン機関といった、元ジオン公国各研究開発の技術の果たした役割は大きいだろう。このように考えると、ガルバルディの例のように、目に見える部分はもちろん、表向きにはわからない部分においても、ベズン計画はネオ・ジオン製のMSの黎明と発展に貢献したのかもしれない。

連邦軍とアクシズ（ネオ・ジオン）によるベズン計画の受け止め方の違い

MS-117
ガルバルディβ

連邦軍はガルバルディβを軽量である点以外、標準的な性能の量産機とすべく設計しているのに対し、ガズエル、ガズアルは共に親衛隊用機として、護衛任務を主とするため高い要求性能に基づいて設計されている。また、後発ゆえ高性能化されている側面もある。

36.3t	本体重量	40.5t
56.9t	全備重量	70.8t
1,507kW	ジェネレーター出力	2,130kW
63,200kg	スラスター推力	76,400kg
9,200m	センサー有効半径	10,300m
チタン合金	装甲材質	チタニウム・コンポジット

AMX-117L
ガズエル



eries

ネオ・ジオン系
ガザ
シリーズと
可変機

開発・発展からみる
系統の流れ

型式番号からみる
系統の違い

作業機械を
MS化

AMX-003(MMT-1)
ガザC

> P26

アクシズで運用されていた主力MS。グリブス戦役中期、地球圏に帰還した際には主力機を務めていた。可変機構を持ち、第三世代機とも言える!?



ある程度の
技術は共有?

技術的
影響は?

ニュータイプ
専用機

AMX-004
(MMS-3)

キュベレイ

> P36

ナンバリングはガザCの直後であり、開発・投入時期も近い。サイコミュ関連以外、フレームなどにはガザCと共通の部分を持つ可能性もある。



AMX-0系

AMX-009 ドライセン > P60

AMX-011 ザクⅢ > P61

AMX-011S ザクⅢ改 > P62

AMX-014 ドーベン・ウルフ > P63

AMX-015 ゲーマルク > P39

AMX-1系

AMX-101 ガルスJ > P54

AMX-102 ズサ > P56

AMX-103 ハンマ・ハンマ > P57

AMX-104 R・ジャジャ > P58

AMX-107 パウ > P32

AMX-109 カブール > P59

AMX-117R ガズアル

AMX-117L ガズエル

直系の機体以外にも
想像以上に子孫は多い?

ガザシリーズは、火星アステロイドベルトに逃げ延びた後に、小惑星アクシズで活動を開始したアクシズ(後にネオ・ジオンに改名)が、最初に実用化したMSだ。元はアクシズ内の大規模な設備を建築するためなどに使われていた作業用機械だったが、来るべき地球圏帰還と再起の時のため、戦闘用として再設計の後に量産されたという経緯を持つ。「もたざる国」として、使えるものはなんでも使い、できる限り戦力を揃えたい、という組織の事情から生まれたMSといえる。

ガザシリーズはA型、B型を経て、

GAZA-S

創成期のアクシズを支えた量産MSのガザシリーズ。MSとしては当時の流行のラインからはずれた独特の（アクシズならではの）存在だが、その系譜はどのようなものなのか。

アクシズ製作機械（ガザA、ガザB）

アクシズ居住区（モウサ）の建設などに使用されていた作業機械がガザシリーズの原型とされる。ガザBにおいて若干の武装もされたが、それでもまだMSというより、作業ボットと呼ぶのが相応しい機体だったという。

AMX-008
ガ・ゾウム

> P30

フレームを刷新したガザCの改修機。そのため変形機構が異なるほか、MSとして特徴的な部分はガザCとはやや違う。砲撃に特化したバージョンも計画されていた。



ガザ
シリーズの
最終形態

技術を
フィードバック？

AMX-007
ガザE

> P29

ガザCの派生機。MA形態が主となっている。その他、サブ・フライト・システム的な運用が想定されていた。グリプス戦役において実戦投入されている。

MAとしての
機能性向上



AMX-006
ガザD

> P28

第一次ネオ・ジオン戦争初期において投入されたガザCの後継機。能力は全面的にガザCを上回っている。ガザCほど大規模ではないが、それなりに配備はされていた。



ガザCの
戦闘力を
強化

ガザCで実戦にも耐えうる完成度に至り、本格的な配備がされた。そのガザCは当時の量産機としては強力なジェネレーターとそれに直結させた高威力のビーム砲、ナックル・バスター、さらに可変機構を備えていた。その設計思想は第三世代MSを先んじているかのような機体であった。アクシズとしては「数×火力」を最大限に活かすMSをまず開発・配備し、その後に一般的なMSを開発する計画だったのかもしれない。

ガザCは単機での対MS戦は得意ではないが、その火力によってまずまずの活躍を見せ、後継機としてガザDの開発が行われる。このガザDはガザCのコンセプトはそのままに、あらゆる面において高性能化を図った機体であった。

ガ・ゾウムもガザCを改良した後継機だが、武装や機体のコンセプトはガザCやガザDとは異なる。当時のネオ・ジオンでは他にガルスJやズサなど多彩な量産機（候補）が盛んに開発されており、ガ・ゾウムもガザCをベースにしつつ、新しい量産MSの可能性を模索した機体といえよう。さらにいえばネオ・ジオンの（特にアクシズ時代の）MSは開発時期が重なっている機体が多く、構造であれ、コンセプトであれ、ガザCがなんらかの影響を与えたことも考えられる。まさにネオ・ジオンを築いたMSといえよう。



GAZA C
AMX-003 (MMT-1)

ガザC

Pilot

主なパイロット



ハマーン・カーン

火星圏から地球圏へ帰還した時期のハマーンはガザCを乗機としていた。しかし、その後ガザCでは本格的な戦闘は行っていない。最終局面ではキュベレイに乗り換えているため実力は未知数。



グレミー・トト

グレミーというバウというイメージだが、マッシュマーの部下であった新兵時代にはガザCに搭乗し初陣を飾っている。ルー・ルカの乗るZZガンダム（のコア・ファイター）と交戦した。

➡1 ナックル・バスターはジェネレーターとケーブルによって直結しているため、出力は高いが取り回しはよくないという特徴がある。

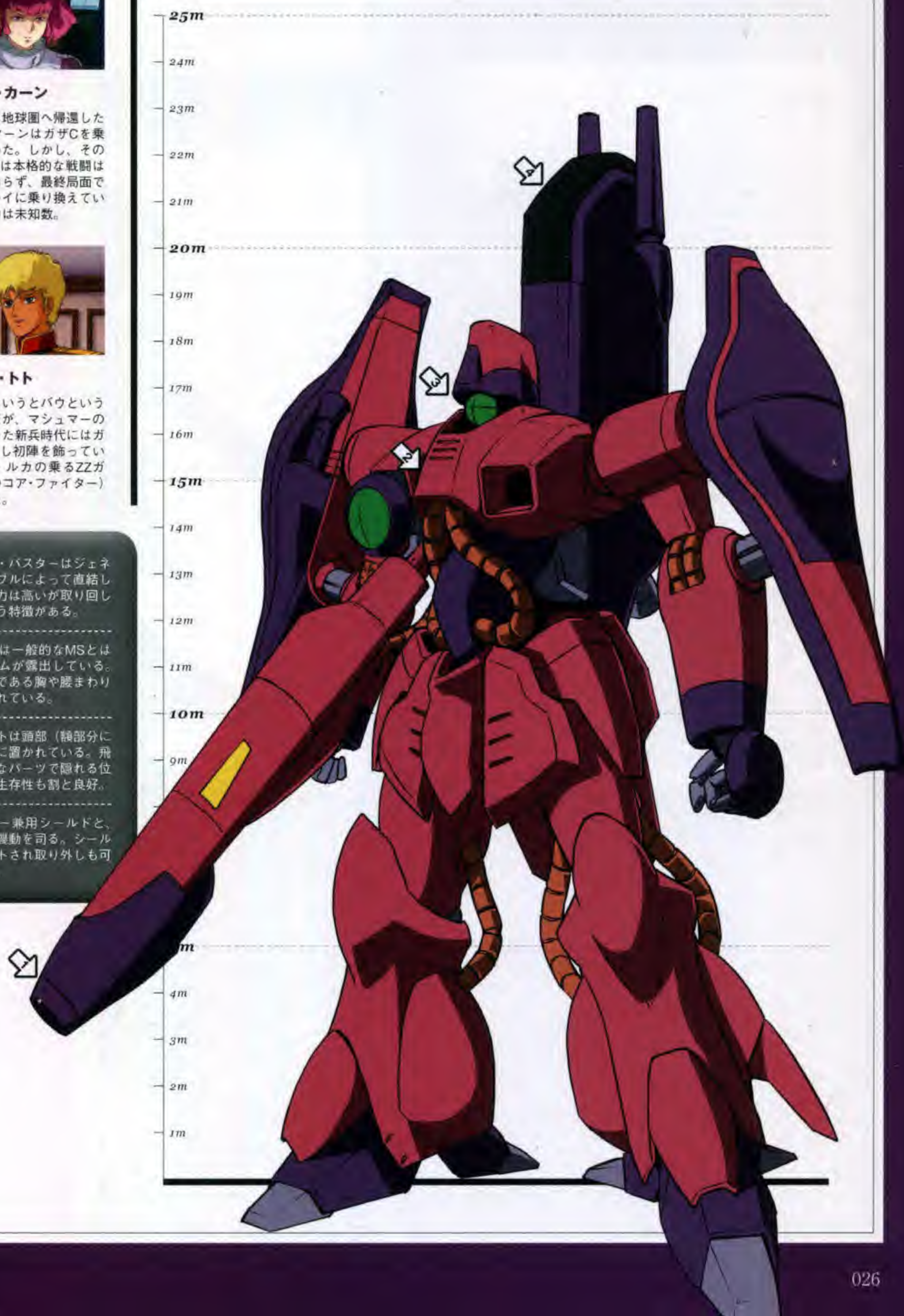
➡2 胴体部分は一般的なMSとは異なり、フレームが露出している。バイタルパートである胸や腰まわりには装甲がなされている。

➡3 コクピットは頭部（顔部分にハッチがある）に置かれている。飛行形態では様々なパーツで隠れる位置にあるため、生存性も割と良好。

➡4 バインダー兼用シールドと、背部ユニットが機動を司る。シールドは腕にマウントされ取り外しも可能となっている。

Spec

●頭頂高：18.3m ●本体重量：40.8t ●ジェネレーター出力：1,720kW ●スラスター総推力：79,200kg
●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル×2、ナックル・バスター、ビーム・ガン×2、シールド×2



低コスト高火力で敵艦船に大打撃を与える

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発した可変MS。一年戦争敗戦後に火星のアステロイド・ベルトへ逃げ延びたジオン公国残党が新天地開拓のために使用していた作業用機械がベースとなっている。そのため、多くのMSとは異なり、人型とはやや離れた非常に特徴的な機体形状をもつ。ジェネレーターとハーネスによって直結されたビーム

砲のナックル・バスターが主兵装であり、実質的には唯一といえる武装でもある。

作業用機械が基となっているという点や、兵装の種類が少ないといった点から、本機はMSとしての能力が劣っていると思われるが、ジェネレーター出力やスラスター推力といったスペックはグリプス戦役の標準的な主力MSと比べて特別劣っているわけではない。それどころか、ナックル・バスターの出力は6・7MWで、MSZ-

006Zガンダムのビーム・ライフル（5・7MW）やRX-110ガブスレイなどのフェダーライン・ライフル（6・6MW）を上回る。純粋な砲撃能力はそのコストに比すれば非常に高い。

このような点から、ガザCは作業用機械由来の低いコストで機体数を揃え、強力な火砲で敵艦船を撃破する攻撃機といった性格の機体といえる。変形によって推力を集中し速度を稼ぎ、前面投影面積を小さくして被弾を減らすというのも一撃離脱には好都合だ。少な

いリソース中で、母艦さえ沈めれば残った艦載機（MS）は自然と無力化するという戦術思想を持つ機体といえるだろう。

反面、単機での対MS戦は苦手だろうが、それは本機のコンセプトではないし、対MS戦も集団で戦うことを心がけ、火力を集中することで解決できるだろう。

本機は最小のコストで最大の効果を得るべく、「もたざる国」アクシズが考案した必勝の量産MSといえる。

Weapon

武器・装備



ナックル・バスター

ガザの主兵装。ジェネレーター直結の恩恵により、出力は当時の量産MSの武装としては非常に高い。



ビーム・サーベル

一般的なMSと同様にビーム・サーベルも備えるが、あくまでも万が一の際の装備、といったポジション。

Function

変形形態



ベースとなった作業機器の特性を活かした機構。アクシズが発展させたムーバブル・フレーム関連技術の礎ともいえるだろう。ただ、ガザCの時点では重力下での歩行はあまり考慮されていなかった。

Variation

バリエーション



AMX-003
ガザC
ハマーン・カーン専用機

ハマーンのパーソナルカラーでペイントされ外観は大きく異なるが、機体性能としてはガザCとほぼ同様。ハマーンほどの地位とパイロット能力を持つ人物があえてガザCを選ぶということは、この当時においてはアクシズが所有するMSの中では（一年戦争時代の機体に比しても）高性能だったということだろう。



AMX-003
ガザC
（『袖付き』仕様）

U.C.0096年次においても、『袖付き』ではガザCは現役MSとして活用されていた。しかし最前線に投入されるというよりは、予備戦力として拠点の防衛などに使用されていたようである。『袖付き』本拠地であるバラオでの、連邦軍との闘いにおいても、グリーン系にリペイントされた機体が戦闘に参加している。



GAZA D AMX-006 ガザD

Spec

●頭頂高：17.0m ●本体重量：28.7t ●ジェネレーター出力：2,140kW
●スラスター総推力：98,200kg ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル×2、
ハイパー・ナックル・バスター、ミサイル・ランチャー×4、ビーム砲×2

ガザCのあらゆる面を 大幅にパワーアップ

アクシズの主力MS、ガザCの発展型。機体の構成などはほぼガザCを踏襲する。しかし、スペック的にはガザCよりも大きく向上した部分が多い。ジェネレーター出力は2140kWに高められ、ハイパー・ナックル・バスター

の出力も8・5MWにアップした。さらに、特筆すべき点として本体重量が28・7トンとガザCの40・8トンに比べ大幅に軽量化されていること。これには専用設計になったことによる機体構造の洗練が大きな要因だろう。スラスター推力もガザC比で約20%アップし、特に推進剤が少ない状態での運動性は格段に高い。

このように、ガザDはガザCの対艦戦向けのMSというコンセプトはそのままに、ほぼすべての面において性能向上を果たしている。しかし、そのコンセプトが登場時の状況に合っているか、というのはまた別問題である。ガザCより優れていながらガザDの活躍があまり聞かれないのも、そうした部分に理由があるのかもしれない。

25m ガザの嵐隊

3機のガザDで編成された、ネオ・ジオンの特殊部隊。ドッグファイトで後ろをとっても発砲しない（卑怯とされる）など独特の意識をもつ。スモークで薔薇を描いたりと技量は高い。



ワーム



ピアン



バンバ・リダ



➡1 ハイパー・ナックル・バスターの出力はフェダーイン・ライフルやZガンダムのビーム・ライフルをしのぐ。量産機の兵装としては破格である。

➡2 バインダーは肩部へマウントする方式へと改められ、剛性が大きくアップした。

➡3 ジェネレーター出力もZガンダム以上。量産機としてはこれもあり高水準。



GAZA E AMX-007(MMT-3) ガザE

Spec

●頭頂高：16.3m ●本体重量：34.8t ●ジェネレーター出力：2,280kW
●スラスター総推力：59,300kg
●武装：ビーム・サーベル×2、バインダー武装ポッド×2、ビーム・カノン×2

サブ・フライト・システムの 能力をガザシリーズに付与

ガザCのバリエーションとして企画された機体。型式番号はガザDより後だが、グリプス戦役末期にはすでに配備がなされている。本機には、ガザシリーズの特徴といえる兵装ナックル・バスターは装備されていない。これは

本機がガザCやガザDのような直接的な（対艦）戦闘を行うためというよりは、MA形態を一種のサブ・フライト・システムとして運用することが考えられていたためとみられる。ガザCとは異なる機体形状をしているのも、MA形態での運用に重点を置いているためだ。アクシズ製MSでは、後のズサもバスター・ポッドによってサブ・フラ

イト・システムの運用ができるよう設計されており、この時期、MS（MA）とサブ・フライト・システムを融合させた機体の開発に力を注いでいたようである。特化した装備より、なるべく広く様々な用途に使用できる機体を戦場に投入する、という組織の台所事情が垣間見える機体である。



→1 頭部や胸部にはガザの面影が残る。「足」は単なる飛行ユニットの一部となり、さらにバインダーや背部ユニットを強化。MA形態での能力に重点を置いた。

→2 バインダーには大型のビーム砲を内蔵（ある程度の仰俯角もつけられる）。ナックル・バスターは持たないが、MA形態時の正面への火力は充分。



GA-ZOWMN

AMX-008

ガ・ゾウム

Pilot

主なパイロット



ゴットン・ゴー

エンドラ隊副官。彼が副官を務める巡洋艦エンドラにも配備され、元エンドラクルーで構成されたエンドラ隊においてゴットンやクレイユが運用。なお、グラナダの戦闘でこの機体は失われている。

→1 肩のバインダーは形を変え、ミサイルポッドとスラスターを兼ねたユニットとなった。

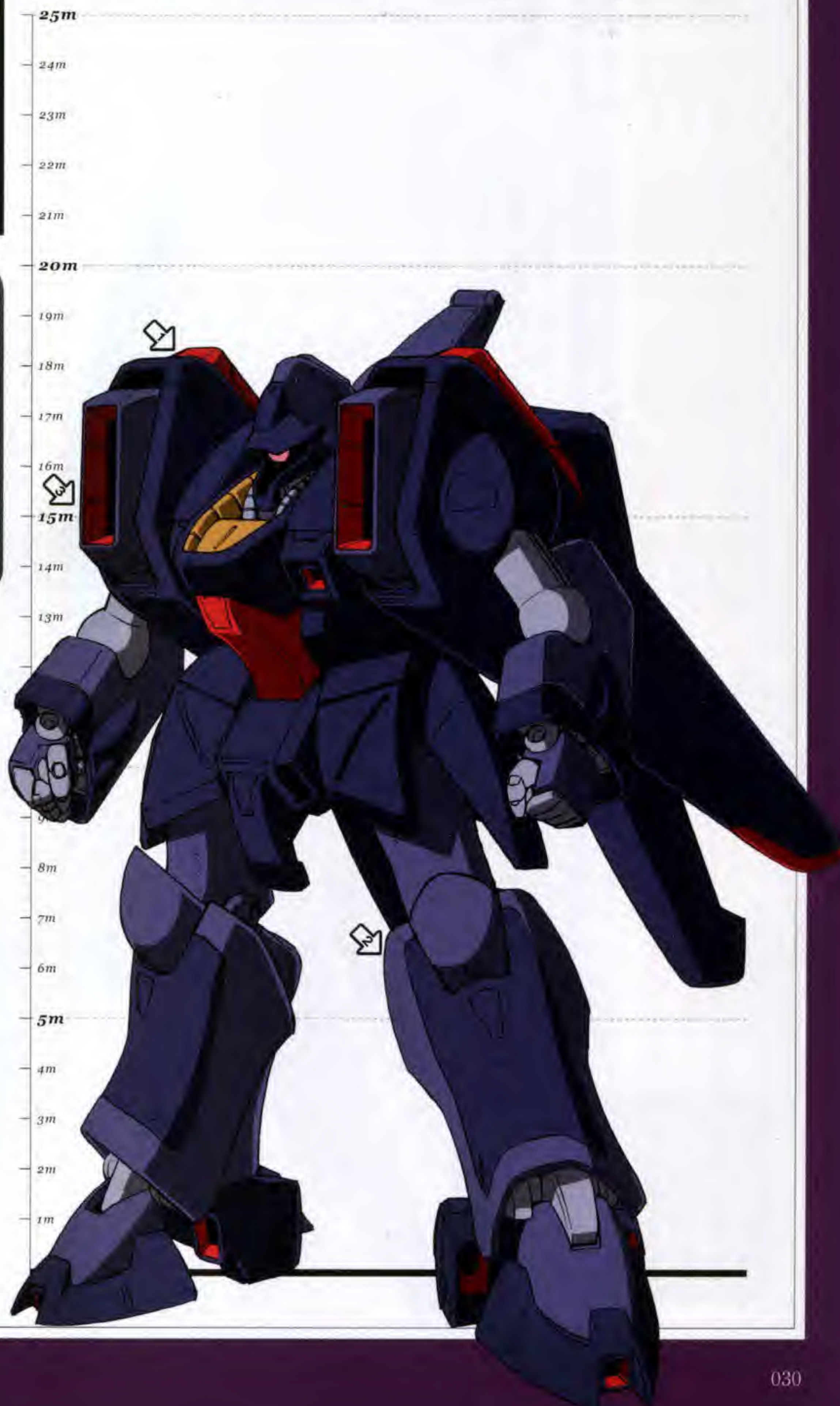
→2 MA形態では下肢部分が2つに割れるという、珍しい変形機構をもつ。

→3 機体形状はガザCのイメージを引き継ぎつつも一般的なMSに近いラインとなった。

→4 「ハイパー・ナックル・バスター」という名称ではあるが、出力はガザCより低い。

Spec

●頭頂高：18.0m ●本体重量：31.6t ●ジェネレーター出力：1,840kW ●スラスター総推力：92,280kg
●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・ガン兼用ビーム・サーベル×2、ハイパー・ナックル・バスター、9連装ミサイル・ランチャー×2



ガザCをベースに 対MS戦向けにリファイン

ネオ・ジオンが開発した可変MS。ガザC、ガザDの後継機として開発された。機体は他のガザシリーズ同様、MA形態への変形が可能だが、フレームから設計が改められており、その変形機構はガザC系統とは異なる。またスペックではスラスタ推力、ジェネレーター出力、さらには本体重量（ガザDの方が軽い）、ハイパー・ナックル

バスターの出力と、そのどれもがガ・ゾウムは後発であるにもかかわらず、ガザDの方が勝る。ではガ・ゾウムの意義とはどのようなものだろうか。そのキーはナックル・バスターの変化にある。ガ・ゾウムのハイパー・ナックル・バスターはジェネレーターとの直結をやめエネルギーパック方式を採用、出力も抑えられた。これらにより、取り回しの良さと連射性を獲得し、これまでのガザシリーズに比べ、より対MS戦に向い

ているのだ。ハイパー・ナックル・バスターの出力も、対MS戦ではガザDほどの火力は必要なく十分な値である。つまり対MS戦用にファインチューンがされたといえるのだ。また、ガ・ゾウムが他のガザシリーズよりスペック的に優れている点としてセンサー有効半径があるが、先に相手を見つけた側が圧倒的優位となるMS同士の戦闘においては、非常に重要なファクターだ。つまり、ガ・ゾウムはガザシリーズ

をより対MS戦に適したMSとして、リファインされた機体なのである。ガザCでは激しいドッグファイトを行うには機体の剛性・強度に不安があるという説もあり、コンセプト的にも1対1でのドッグファイトを重視していない。そこで、アクシズとしては従来のガザCを正統進化させたモデルIIガザDの他に、ガザを基礎としながらも対MS戦に長けたMSの開発を計画し、その結果誕生した機体がこのガ・ゾウムといえるのだ。

Weapon

武器・装備



ハイパー・ナックル・バスター

ガ・ゾウムの主兵装。エネルギーパック式を採用することで、一般的なビーム・ライフルと同様の兵装となった。



ミサイル・ポッド

両肩には大型のミサイルポッドが備わる。肩を軸にポッドが回転するので、MS時の射角の自由度が高い。

Function

変形形態



MA形態

フレーム構造が改められたため、変形機構はガザCとは大きく異なる。ミサイルを下方に発射するような構造だが、すれ違いざまに拠点や艦船にミサイルを発射する際には適している（正面の目標へはハイパー・ナックル・バスターを用いる）

Variation

バリエーション



AMX-008
ガ・ゾウム
（『袖付き』仕様）

U.C.0096年においても、テニスン艦隊に配備されていた。『袖付き』のMSの中では珍しく、ネオ・ジオン時代のカラーリングに近い状態で運用されている。テニスン艦隊はこの他ガザCやズサといった機体も使用していた。



BAWOO AMX-107 バウ

Spec

●頭頂高：18.5m ●本体重量：34.7t ●ジェネレーター出力：2,410kW ●スラスター総推力：75,040kg
●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、メガ粒子砲内蔵シールド、ミサイル×6

Pilot

主なパイロット



グレミー・トロト

試作型のバウに搭乗していたが、アフリカ大陸において百式に撃墜され機体は喪失。本機を気に入っていたのか、自身が起こした反乱において、グレーにペイントされた量産機を戦力としていた。



アリアス・モマ

ネオ・ジオンの士官で補給部隊の指揮を執る。ZZガンダムのミサイル斉射を空中で回避したり、雲を利用した戦法をとったりと技能は高い（ニュータイプの素養があったフシもある）。

➡1 「トサカ」が特徴的な頭部。センサー能力はドーベン・ウルフと同程度。

➡2 可変MSゆえ、開発時の参考にしたかは定かではないが、胸部などの形状はZガンダムにも似ている。

➡3 バインダーとバウ・アタッカーの主翼を兼ねるウイング。ミサイルを懸架可能。

➡4 背中のユニットには小型のプロペラントタンクを備える。

➡5 可変MSだが、地球圏では基本的にサブ・フライト・システムを用いる。



**ネオ・ジオンの実情を
反映させた分離合体機構!?**

ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンが開発した可変MS。グリップス戦役ではエウーゴ、ティターンズ双方が多くの可変MSを戦場に投入し、一定の成果を収めていた。アクシズ（ネオ・ジオン）は可変MSのガザシリーズを有していたが、ベースは作業用機器ゆえ、高度な能力を有する第三世代MSとは性質の異なるものであった。

ネオ・ジオンとしてはこの差を埋めるべく、新たに第三世代MSとしての機体を開発する。これがバウの産み出された背景とみられる。

しかし、バウは従来型の可変MSとは異なるパッケージングがなされていた。それは、可変に加え分離合体機構を有していた点だ。上半身をバウ・アタッカー、下半身をバウ・ナッターとし、それぞれが独立した機動兵器として運用でき、状況に応じて合体してMSとなる、というコンセプトが盛り込

まれていたのだ。そういった意味では本機は地球連邦軍のMSZ-010 ZZガンダムに近いものといえる。

しかし、分離時の運用や操作方法は、独特であり、下半身のバウ・ナッターは有人/無人双方の操作が可能のように、幅広い運用性を確保していた。あまつさえバウ・ナッターに核などを搭載し、弾道ミサイルのように使うことまで想定されていたという。

ネオ・ジオンがなぜこのような特殊性を本機にもたせた理由は、ひとえに

数が少なく、少しでも運用の幅をもたせようという意図によるものだろう。本機から約60年後、ザンスカル帝国や、対抗するゲリラ組織「リガ・ミリティア」において、分離合体というコンセプトのMSがさかんに開発されていることから、先進的な考え方ともいえるかもしれない。

一方で、変形・合体機能がない通常MSとしてもバウは十分優秀で、変形機構を廃した（もしくは使わない）機体も生産されることとなった。

Weapon

武器・装備



ビーム・ライフル

バウ・アタッカー時、機首にマウントする。『袖付き』の機体ではギラ・ドーガのビーム・マシンガンを装備していた。

メガ粒子砲 内蔵シールド

ハンマ・ハンマなどにも見られるメガ粒子砲内蔵型のシールド。『袖付き』仕様ではメガ粒子砲がオミットされている。



Fanction

変形形態

バウ・アタッカー

バウ・ナッター

グレミー機では上半身のバウ・アタッカーを有人、バウ・ナッターを遠隔操縦する無人方式が採用された。バウ・ナッターには大型のミサイルを搭載し、さらにはバウ・ナッター自体を一種の質量弾として敵にぶつけるような戦法も考案されている。

Variation

バリエーション



AMX-107
バウ
(量産型)

バウは少数ではあるが量産がなされ、それらの多くはグリーン系のカラーで塗装されていた。しかしグレミー以外のパイロットはほとんど分離合体機能を使わなかった。大気内ではサブ・フライト・システムを利用しており（これはグレミー機も共通）。実質的には変形機構を持たないMSとして扱われていたようである。



AMX-107
バウ
(複座型『袖付き』仕様)

バウ・ナッターが有人機となっているのが特徴。少しでも多くの戦力を必要とする『袖付き』では、様々な状況に対応できる有人仕様の方がメリットは高いと判断されたのだろう。実際、実戦においてバウ・アタッカーが撃破された後もバウ・ナッターが独自の判断でネェル・アーガンに特攻をしかけている。

ネオ・ジオンの ニュータイプ 専用機の 系譜



優れた技術をもとに 時代を勝ち抜いていく

一年戦争後、方々へ散り散りとなったジオン公国残党軍。各勢力は、それぞれ異なる特性を持っていた。たとえばデラーズ・フリートは、首魁であるエギーユ・デラーズの求心力ゆえか、古参の優れたパイロットを多く抱える実戦向けの勢力であったが、アクシズは若干傾向が異なっていた。のちにネオ・ジオンとなるアクシズの特徴を挙げるとすれば、優れた技術力を持つ勢力だったといえるのかもしれない。

ジオン公国の多くの技術工廠は戦後、アナハイム・エレクトロニクス（AE）社へと吸収されていったが、たとえばファンネルやガンダリウム合金など、グリプス戦役以降をリードするMS関連技術の数々は、アクシズ発端のものだ。これらの技術がアクシズから意図的に（あるいは共同開発）、AE社へ供与され、その後、同社製のMSへと採用されていった。

武力侵攻ではなく、いわば技術侵攻と呼べる姿勢にしても、アクシズの傾向をよく表しているのだろう。このあたりはデラーズ・フリートが一年戦争からわずか3年で行動を起こしたのに対し、アクシズは7年という歳月が経過しても、慎重に事を進めていたこと

からも明らかだ。その間にシャアを地球圏に派遣し、エウーゴの中核人物として活動させるなど、アクシズ単体ではなく、エウーゴと連携して活動しようという姿勢もうかがえる。

アクシズ発の中でも、特に時代をリードしていたのはサイコミュ技術であった。一年戦争時からジオン公国軍のブラックボックスの技術であった同システムは、この時代においてもジオン系であるアクシズがリードしていた。連邦側に至ってはMAクラスであるサイコ・ガンダムでようやく実現するなど、一年戦争時と同じ状況である。

またファンネルのように、複数のデバイスを制御する技術は確立するに至っておらず、ジオン系勢力以外でファンネル搭載を実現したのは、ガンダムなどわずかな機体に限られる。

それもファンネルが時代の流れから取り残される寸前の事であり、いかにファンネルシステムの再現が難しいかをうかがわせる。

勢力は失われても 技術は継承されていく

U.C. 0090年代になると、サイコミュはMS全体としての性能水準を底上げする方向性となり、対策も進んだファンネルは補助的兵装になっていく。こうした中でも、やはり旧アク

シズの系譜を受け継ぐ新生ネオ・ジオンからサイコミュの最新技術が発信される。その代表的な技術がサイコ・フレームだ。金属にサイコミュチップを鑄込み、機体との反応速度を高めるという試みは、考え方自体がサイコミュユニットをMSに搭載して機体とのマッチングを高めるパイオ・センサーなどに近いかもしれない。だが金属にサイコミュチップを鑄込む、というアプローチはジオン系ならではの技術で、AE社でも再現するには至らなかった。

この技術もネオ・ジオン側によって意図的にリークされ、ガンダムに採用されるに至った。その理由は、総帥であるシャア・アズナブルがアムロ・レイと対等の機体で決着をつけたいという極めて私的なもので、シャアの反乱の名の通り、この時代は戦争の性質事態が変わってきていることを印象付ける。その後、シャアを失ったことで、旧アクシズ系の勢力は大きく弱体化。その基盤は『袖付き』が受け継ぐが、MS技術をリードしていた同勢力の面影はすでになかった。

その一方で、AE社に供与されたサイコ・フレームの技術は研究が続けられ、『UC計画』の立ち上げに伴い、フル・サイコ・フレームの実験機であるシナンジュ、そしてユニコーンガンダムへと受け継がれていく。

NEWTY

Exclusive MS

ネオ・ジオンから発生したサイコミュ技術

サイコ・フレーム

サイコミュチップを金属粒子レベルで鑄込んだ構造部材。これまでのサイコミュシステムと異なり、システム搭載時の自由度が増し、MSサイズに搭載可能なシステムのダウンサイジング化を実現した。サイコ・フレームの目的としては、サイコミュシステムによるMS性能の底上げにあり、パイロットの周辺にあるコクピットフレームにサイコ・フレームを配置することで、優れたポテンシャルを発揮した。これにはファンネル自体の感度の向上も関連していると考えられ、劇中でもアムロの殺気を必要以上に感じ取ってしまったがゆえに、フィン・ファンネルが攻撃してしまうといった描写が見られている。

サイコ・フレームには技術的に未知数な部分が多く、第2次ネオ・ジオン戦争時には「アクシズ・ショック」を引き起こしている。それでも技術的な可能性は高く、U.C.0096前後にはフル・サイコ・フレーム搭載MSの試験が行われていた。これはMSの根幹となるムーバブル・フレームをサイコ・フレームで構成するというもので、シナンジュでの実験を経たあとに、ユニコーンガンダムで完成を見た。

ユニコーンガンダムは、同機に搭載されるNT-Dシステムとの併用によって、「UC計画」が目指した性能を発揮した。その一方で予測不可能な現象も引き起こし、最終的にはコロニー・レーザーすらも相殺するという恐るべき現象を引き起こしている。

サイコ・フレームを搭載するMS

ヤクト・ドーガ／サザビー／vガンダム／クシャトリヤ／シナンジュ／ユニコーンガンダム



ファンネル

サイコミュによって、遠隔操作ユニット「ファンネル」を制御し、オールレンジ攻撃を行う。一年戦争時から技術の確立は行われており、エルメスのビットから発展したもの。ビット／ファンネル搭載機で多数のMSと戦闘を展開することが可能であり、特に一年戦争後記、パイロットが不足が深刻化していたジオン公国においては、起死回生の技術となる可能性を秘めていた。

ビットからファンネルへの進化において、大きな変更点はジェネレータ搭載型から充電型にしたことだろう。ビットはジェネレータを搭載することによって長時間の稼働が可能であったが、ビット本体でも9m近くに及んでいる。一年戦争時にはガンダムにビット本体が撃墜されており、こうした点も踏まえて小型化が迫られたのかもしれない。

ファンネルはジェネレータ非搭載によって小型化が実現し、被弾率を抑えることが可能となるほか、MSへの搭載数も増加した。短時間で充電のために、MS本体に帰還しなければならないというデメリットはあるが、これは搭載数の増加で抑えられたのではないだろうか。

なおファンネルとは漏斗（Funnel）の意味であり、キュベレイに搭載されたファンネルの形状が、漏斗状に見えたことに由来する。以降もこの例にならい、形状が漏斗型ではないヤクト・ドーガやサザビーの遠隔操作ユニットも、ファンネルと呼ばれている。

ファンネルを搭載するMS

キュベレイ／キュベレイ Mk-II／量産型キュベレイ／クイン・マンサ／クシャトリヤ／ヤクト・ドーガ／サザビー



サイコミュ搭載MSの系譜





QUBELEY AMX-004 (MMS-3) キューベレイ

Pilot

主なパイロット



ハマーン・カーン

アクシズ／ネオ・ジオンの指導者。ティターンズの衰退後は、地球圏への進出を果たし、ネオ・ジオンを興した。自身も優れたNTパイロットで、カミーユやシロッコ、ジェドーに匹敵する存在であった。

Spec

●頭頂高：18.4m ●本体重量：35.2t ●ジェネレーター出力：1,820kW ●スラスター総推力：61,600kg
●装甲材質：ガンダリウム合金●武装：ビーム・サーベル×2（ビーム・ガンとしても使用可能）、ファンネル多数

25m

24m

23m

22m

21m

20m

➡1 ウイングバインダー／両肩に装備された推進器内蔵のバインダー。AMBACにも貢献し、優れた運動性を発揮する。

➡3 腕部／巡航時には、バインダー内部に腕を収納する。マニピュレーター形状は一般的なMSと異なっている。

➡2 頭部／ジオン伝統のモノアイ型カメラを搭載した頭部。後頭部は、スタビライザーのように長く伸びている。

➡4 コクピット／MSサイズ化によって、コクピット位置も標準的になった。胸部装甲前面がスライドして、コクピットが現れる。



性能以上の戦果を残した ファンネル実験機

キュベレイは、一年戦争に投入されたサイコミュ搭載型MAエルメスの系譜を受け継ぐ機体として誕生した。

もともと注目すべきなのは、MAからMSサイズへのダウンサイジングだ。一年戦争時にはサイコミュシステムはきわめて大型で、エルメスは全長80メートル以上の機体となった。しかし、小規模的組織のアクシズでは、MSと

共通設備での運用の実現が望ましい。そのためサイコミュ関連の小型化は大命題といえるものだった。

小型化だけでなくU.C.0080年代後半から0090年代前半にかけて、サイコミュ技術をけん引する発明はアクシズから発信されるものが多かった。ジェネレータ搭載型のビットから、充電式のファンネルへの小型化の実現などの技術革新は、他勢力でも採用されていた。

そしてジオン系サイコミュ技術の集

大成ともいえるキュベレイは、第一号機はアクシズの指導者であるハマーン・カーン搭乗により、グリプス戦役へ投入された。彼女の優れた資質もあり、同時代の名機と謳われ、各勢力のエースと渡り合った。

しかし実は本機をスペックだけで語るなら、サイコミュシステムこそ搭載するものの、その実MS本体の性能ではジ・OやZガンダムに劣っており、百式と同程度でしかない。決して圧倒的な存在というわけではなかったのだ。

いうなればMSサイズでのサイコミュシステム運用試験機を、なんとか実戦レベルに投入できるようになったというのが現実かもしれない。

グリプス戦役期は新技術の黎明期であり、Zガンダムのように本来は強襲型のMSがオールラウンダー的に使用されるケースも珍しくはなかった。ハマーン・カーンという優れたニュータイプと、サイコミュシステムとのマッチングにより、キュベレイは名機になりえたと言えるだろう。

Weapon

武器・装備



ビーム・サーベル

腕部に収納されたビーム兵器。ビーム・ガン兼用。キュベレイの固定兵装は、このビーム・サーベルのみである。



ファンネル／ファンネルコンテナ

機体後部のファンネル搭載用スペース。ファンネルの充電用ベッドとなっている。同時搭載数は10基となる。

Variation

バリエーション



AMX-004-2
キュベレイMk-II
エルピー・ブル
専用機



AMX-004-3
キュベレイMk-II
ブルツ
専用機

キュベレイのマイナーチェンジ型であり、少数の機体が生産され、第一次ネオ・ジオン戦争期にブル・シリーズへ与えられた。性能的にはオリジナルと同等で、ビーム・サーベルなどにマイナーチェンジが加えられている程度

である。グリプス戦役期の機体ではあるが、パイロット次第では最新型にも対抗できた。この時代のネオ・ジオンにおけるニュータイプ専用機は、キュベレイは実績もあり、強化人間には優先して与えられていたのだろう。



QUBELEY Mass-Production Model

AMX-004G

量産型キュベレイ

Spec

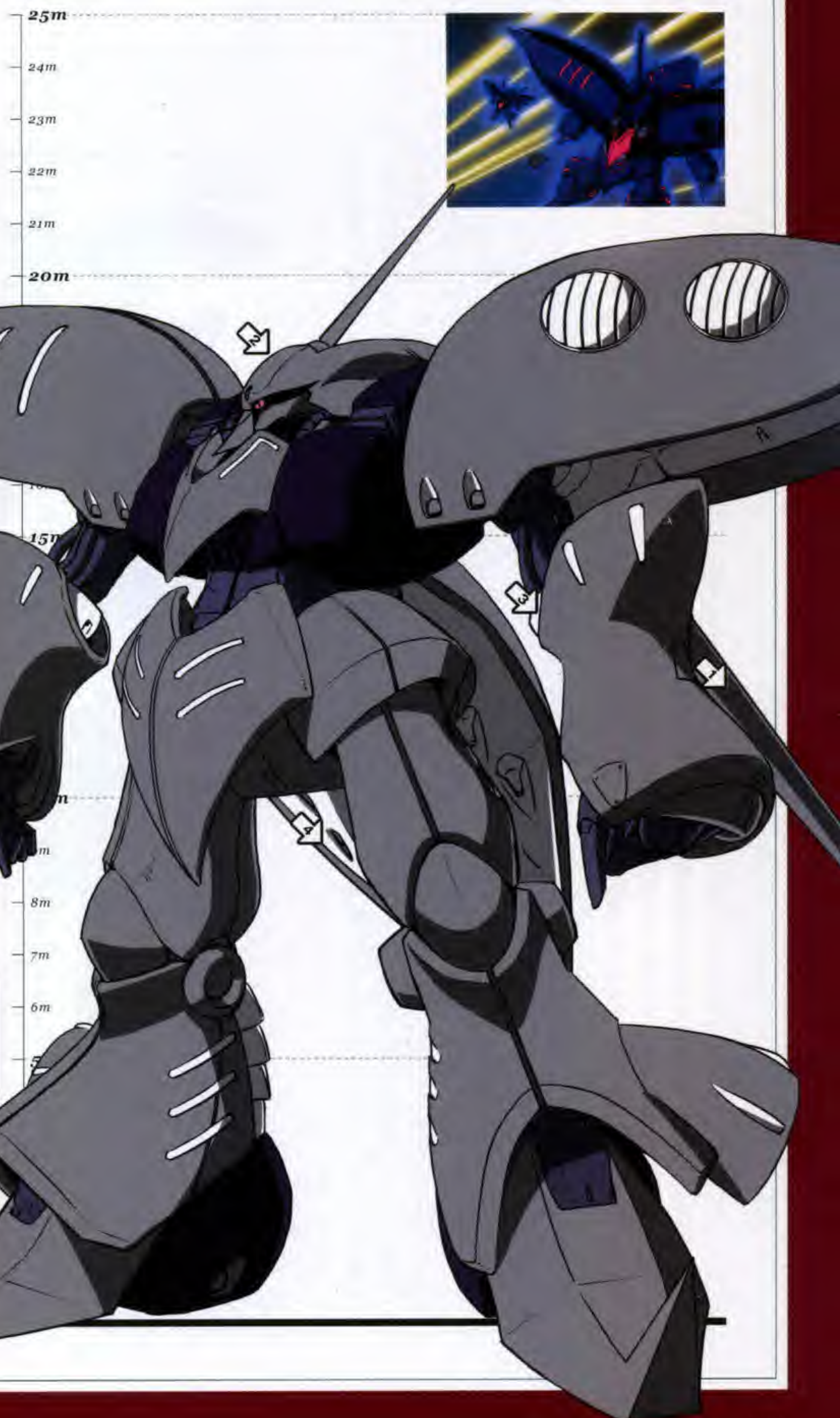
●頭頂高：18.4m ●本体重量：35.2t ●ジェネレーター出力：1,820kW
●スラスター総推力：61,600kg ●武装：ハンドランチャー兼用ビーム・サーベル×2、アクティブ・カノン×2、ファンネル×30

ファンネル活用する MSとしてのチョイス

キュベレイの量産型モデル。エルピ
ー・ブルのクローン計画において、彼
女たちの乗機として開発された。
開発にあたってはオリジナルのキュ
ベレイをベースとし、機体性能自体は
劣るものの、ファンネルの搭載数が大

幅に増加した。また、背面にはアクテ
イブ・カノンが装備されるなど、ファ
ンネルを除けばビーム・ガン兼用ビー
ム・サーベルの装備しかなかったキュ
ベレイと比べて火力の脆弱性をカバー
している。
キュベレイの量産化が行われた背景
には、MSとしての性能は決して高く
はないものの、ファンネル運用におけ

る実績が大きな理由と考えられる。実
際の戦闘においては強化人間部隊によ
る運用のため、ハマーン機のようなポ
テンシャルは望めない。可能性は高い
が、戦場の中核として、火力で圧倒す
るファンネル砲台的な役割が求められ
たのではないだろうか。想定通りの運
用が実現すれば、恐るべき火力の嵐が
吹き荒れたかもしれない。



➡1 アクティブ・カノン 背面に追加さ
れた武装。通常は後方へ収納される。

➡2 頭部 アンテナが追加されている。
これも部隊での連携を意識した装備だろうか。

➡3 腕部 オリジナル同様、腕部にはビ
ーム・ガン兼用ビーム・サーベルを装備。

➡4 ファンネルコンテナ ファンネル搭
載数が増加したため、コンテナも大型化さ
れた。



GEYMALK

AMX-015

ゲーマルク

Spec

●頭頂高：22.0m ●本体重量：46.3t ●ジェネレーター出力：8,320kW ●スラスター推力：92,400kg
●装甲材質：ガンダリウム ●武装：ビーム・サーベル、2連装ビーム・ランチャー×2、
ハイパー・メガ粒子砲、3連装メガ粒子砲×2、チルド・ファンネル×28、ほか

多数のファンネルを搭載 攻撃型ニュータイプMS

第二次ネオ・ジオン戦争末期、ネオ・ジオンでは多様なMSのトリアルが行われており、ゲーマルクもそうした試作機の1つとして誕生した。特徴は重火力。腕、脚、胸など全身に10門以上のビーム砲を装備し、全方位に向け

ての攻撃が可能である。さらに背面の2基のコンテナはマザー・ファンネルとして機能し、28基の小型チルド・ファンネルが搭載されている。本機の多数のファンネルによる飽和攻撃とオールレンジ攻撃は、ファンネル搭載型MSの新たな形といえるだろう。

MSファンネル砲台というべきコン

セプトは、量産型キュベレイにも通じるものがあり、もしネオ・ジオンに内紛が起これなかったら、両機は連動して作戦に従事していた可能性も考えられる。だが実際には両機は同士討ちの直接戦闘を展開することになり、キャラ・スーンが強化人間として限界を超えた力を発揮し、数に優る量産型キュベレイ部隊と相打ちとなった。

Pilot

主なパイロット



キャラ・スーン

ネオ・ジオン軍将校。当初、マシュマーのお目付け役であったが、その後強化人間となる。

➔1 マザー・ファンネル ファンネルの親機。チルド・ファンネルを28基格納。

➔2 ハイパー・メガ粒子砲 胸部の大型メガ粒子砲。搭載武器の中でも最高出力。

➔3 脚部 膝部にビーム・サーベルを収納。脛部分にもメガ粒子砲を搭載している。



Pilot

主なパイロット



ブル

ブル・シリーズとして造られたクローンNTパイロットの一人。ブルよりも好戦的な性格を持ち、NTとしての能力も優れる。当初は脅威として立ち上がるが、思念体となったブルの意思でジェドの元へ。



グレミー・トト

ネオ・ジオンの将校。のちに自らジオンの正統な後継者として、ハマーンに反旗を翻す。ブル・シリーズで構成されたNT部隊を率い、アクシズを占拠するも、最後は愛するルー・ルカに討たれた。

→1 / コクピットユニット 通常MSと異なり、コクピットは頭部へ。サイコガンダムの設計思想を参考としていることをうかがわせる構造だ。

→2 / バインダー / キュベレイを思わせる両層の大型バインダー。姿勢制御装置としてだけでなく、シールドとしても機能する。

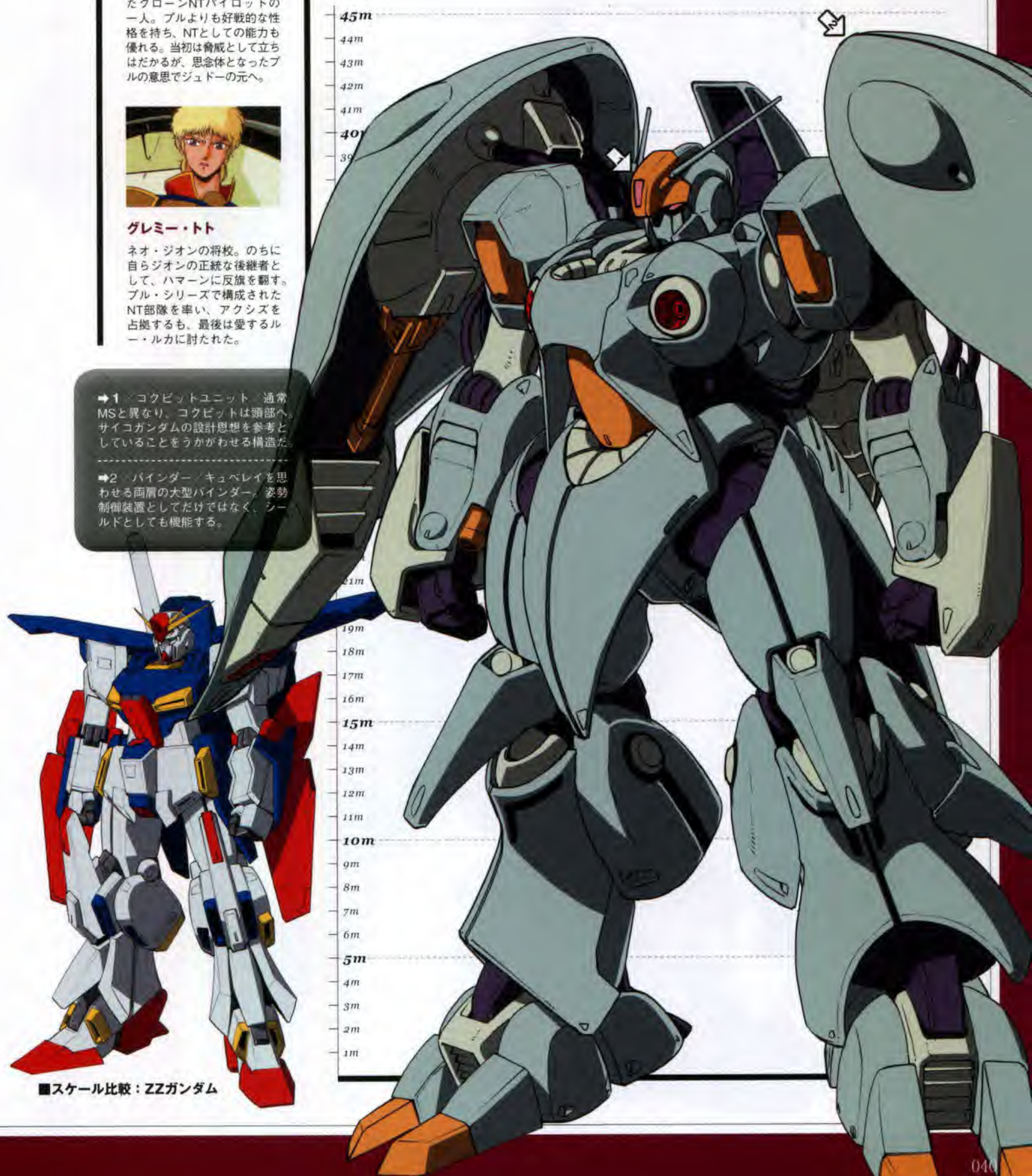
QUIN-MANTHA

NZ-000

クイン・マンサ

Spec

●頭頂高：39.2m ●本体重量：143.2t ●ジェネレーター出力：21,370kW ●スラスター総推力：287,100kg
●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル、メガ粒子砲×9、巨大ファンネル×30、ほか



■スケール比較：ZZガンダム



拡散メガ粒子砲

胸部に装備された大型メガ粒子砲。拡散・収束が可能で、敵機の接近を許さない。背面や腕部にも装備される。



ファンネル

キュベレイの基本搭載数は約10基から30基へと増加。これだけの数を制御するにはNTとしての能力も必要となる。

PICK UP!



クイン・マンサはそのままキュベレイをズームアップしたような構造である。ファンネルコンテナ、肩部バインダー、腕部ビーム兵器といった構造は、基本的共通である。これを理想的なスペックとするために、サイコ・ガンダムクラスの40mサイズとして実現したものがクイン・マンサであり、いわば究極のキュベレイといえるかもしれない。



純粋なMSとしてのスペックや機能など、クイン・マンサは単機でも、複数のMS部隊に匹敵するポテンシャルをもつ。劇中ではエウゴのドック艦ラビアン・ローズを単体で撃沈するなど、その恐るべき攻撃力を見せつけている。おそらくドック艦ではなく、戦艦クラスであっても、クイン・マンサに取りつかれれば逃れることはできない。

Column

クイン・マンサは、グレミー軍の中核をなす機体であった。ワンオフ機ではあるものの、ネオ・ジオン、ティターンズなどですでに培われた技術の集合体であり、ハードウェアとしては安定した運用を可能とした。だが、ブルツの心に生じた変化は結果としてグレミー軍敗北の要因となってしまう。

当初は冷徹に作戦をこなしていたブルツだが、ダブリンで自分と同じ姿のエルピー・ブルを葬り去ったこと、そしてジュドーとの接触によって、精神的に揺らぎつつあった。「利用されているだけだ。人形でいいのか!」というジュドーやブルの思念体の問いかけに撤退するなど、心の奥底にこれまでにない感情を持ち始めている。マシュマーの覇気に圧倒される場面もあるなど、完璧な戦闘用ニュータイプであろうとする一方で、どこかにはほろびが見られていた。

それはいくら優れた能力の持ち主であろうとも、少女であることには変わりはないという事実だっ

た。それはグレミーが読み違えていた最大のポイントであり、ニュータイプ部隊としての連携にもイレギュラーが生じる。あろうことが、ブルツは前線から撤退し、アクシズ内のグレミーの元へ戻ってしまうのだった。グレミーはその要因がジュドーにあると考え、ブルツとともに出撃。結果としてこれが命取りとなった。

ジュドーの思いと、ブルの呼びかけによって、最終的にブルツは、ジュドーの問いかけにグレミーの元を去ってしまう。結果的にクイン・マンサは当初想定した運用はならなかったが、もしグレミーの反乱が起こらなかったら、大きな脅威となったことは間違いない。



ネオ・ジオンのフラッグシップとして

第一期ネオ・ジオンを象徴すべきMSであり、第一次ネオ・ジオン戦争期における最高スペックのニュータイプ専用MS。ネオ・ジオンではエルメスの時代より、サイコミュ搭載機のダウンスライジングに取り組んでおり、キュベレイを生み出した。

だがキュベレイはMSサイズでのファンネル運用の実証機としての側面が

強く、決してMS自体の性能はフラッグシップ足り得るものではなかった。ファンネルとMS性能の両立、その妥協点として、クイン・マンサでは先祖帰りともいえる大型化が選択されたことも考えられる。

大型MS/MAの運用に関して、ネオ・ジオン側は連邦軍のサイコ・ガンダム Mk-II を入手しており、そのノウハウが投入されたとしても不思議ではない。40メートル級MSの運用に関しては、ネオ・ジオン側では経験がな

く、状況から見てもサイコ・ガンダム Mk-II が基本構造に影響を及ぼした可能性は高い。

そのうえでネオ・ジオン由来の技術も存分に搭載されており、機体後部にはファンネル30基を搭載するコンテナを備え、肩部にもキュベレイと同様のウイングバインダーを装備する。つまり、キュベレイのコンセプトを突き詰めた結果が、クイン・マンサといえるだろう。

一方で巨大な機体とサイコミュシス

テムを持つゆえに、パイロットへの負荷は相当なもので、ニュータイプ部隊の中でもブルツのみが適性を示している。

運用にあたっては、グレミー傘下のニュータイプ部隊(量産型キュベレイ)との連携が考慮されていたと考えられ、実戦においても当初はそのような状況が見られた。だがブルツの精神の乱れによって、同部隊は別行動となり、本来想定したであろう運用を行うことはできなかった。



JAGD DOGA

MSN-03

ヤクト・ドーガ

Spec

Pilot

主なパイロット



ギュネイ・ガス

ニュータイプ研究所にて強化が行われた強化人間。自信過剰や異常な執着など、過度な強化が行われたことが示唆されている一方、パイロットとしては優秀でアクシズへの核攻撃を封じている。



クェス・エア (バラヤ)

地球連邦政府の参謀次官アデナウアーの娘。優れたNTの資質を持つが、アムロの元にいられないと悟ってからは、シャアの元に身を寄せる。パイロットとして、ヤクト・ドーガ、α・アジールを駆る。

→1 頭部 ジオンらしいモノアイ形状のカメラを継承。ギュネイ機は頭部にブレードアンテナを装備。モノアイ上部の「目」はペイント。

→2 ファンネル・ポート・シールド 両肩に装備したサブスラスタは、機動性を向上させる装備の1つ。ファンネルのラックでもある。

→3 ミサイルランチャー ファンネル・ポート・シールドの先端に、左右それぞれ3基ずつのミサイルランチャーを搭載している。

→4 バックパック 機体内部はサイコミュシステムによって圧迫されているため、バックパックに大容量プロペラントタンクを装備する。



サザビーの土台を築いた 次世代ニュータイプMS

新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用試作MS。開発はアナハイム・エレクトロニクス社のグラナダ工場であり、同工場はネオ・ジオンとは密接な関係にあったとされる。

ベースとなったのはギラ・ドーガであり、ムーバブル・フレームなどの構造をベースにしつつ、ニュータイプ専用機にするという大改修が行われた。

それは大出力ジェネレーターへの換装、装甲材質のガンダリウム合金への変更など、ベース機の面影がない大改修となった。ここで問題となったのがサイコミュシステムである。この時代においても、一般的なMSサイズにサイコミュシステムを搭載するのは高いハードルであった。

そこで用いられた技術がサイコ・フレームである。サイコミュチップを金属に鑄込むというこの技術は、サイコミュシステムのさらなる小型化をなすためのアイデアであるだけでなく、従来のサイコミュシステムにはない機体のレスポンスや追従性の向上という副産物もあった。

一方でこの時代では、ファンネルの位置づけが若干異なっている。グリプス戦役期ではメイン武装として用いられていたが、第二次ネオ・ジオン戦争期になると、よりMS自体の性能向上に主眼が置かれていた。そのため、搭載されるファンネルも6基と少ない。これは、パイロットがMS操縦に集中

Weapon

武器・装備



ファンネル

キュベレイなどと比較すると大型化し、搭載基数も少なくなった。ファンネル主体の戦闘が変化しつつある。



ビーム・アサルト・ライフル

連射と単射が選択可能なビーム・ライフル。威力よりもフレキシブルな運用が重視された点に、時代を感じさせる。

Variation

バリエーション



クェス機は、基本的にギユネイ機と変化はないものの、頭部形状やカラーリングが異なっている。また武装としてはメガ・ガトリングガン装備して出撃した。ルナツーの攻防戦で右腕を被弾後、クェスはα・アジールに乗り換えたため、機体は修理も行われずにそのまま新生ネオ・ジオンの継承組織である「袖付き」が引き継いだ。その後、補修パーツはないために、ギラ・ドーガの腕部を応急処置的に取り付けて運用されている。

MSN-03
ヤクト・ドーガ
クェス・エア
(バラヤ)機

MSN-03
ヤクト・ドーガ
(['袖付き']仕様)



しあくまでサブウェポンとしての位置づけとなったということだろう。

MSの完成度としては、ギラ・ドーガベース、そして急造ゆえの限界もあり、目指したコンセプトはサザビーへと受け継がれた。生産されたうちの2

機は、強化人間のギユネイ・ガスと、クェス・エアの乗機となる。この内、右腕を破損したままの状態であったク

ェス機は、のちに『袖付き』が回収し、応急処置的な修理を施されて運用され

ている。



SAZABI MSN-04 サザビー

Pilot

主なパイロット

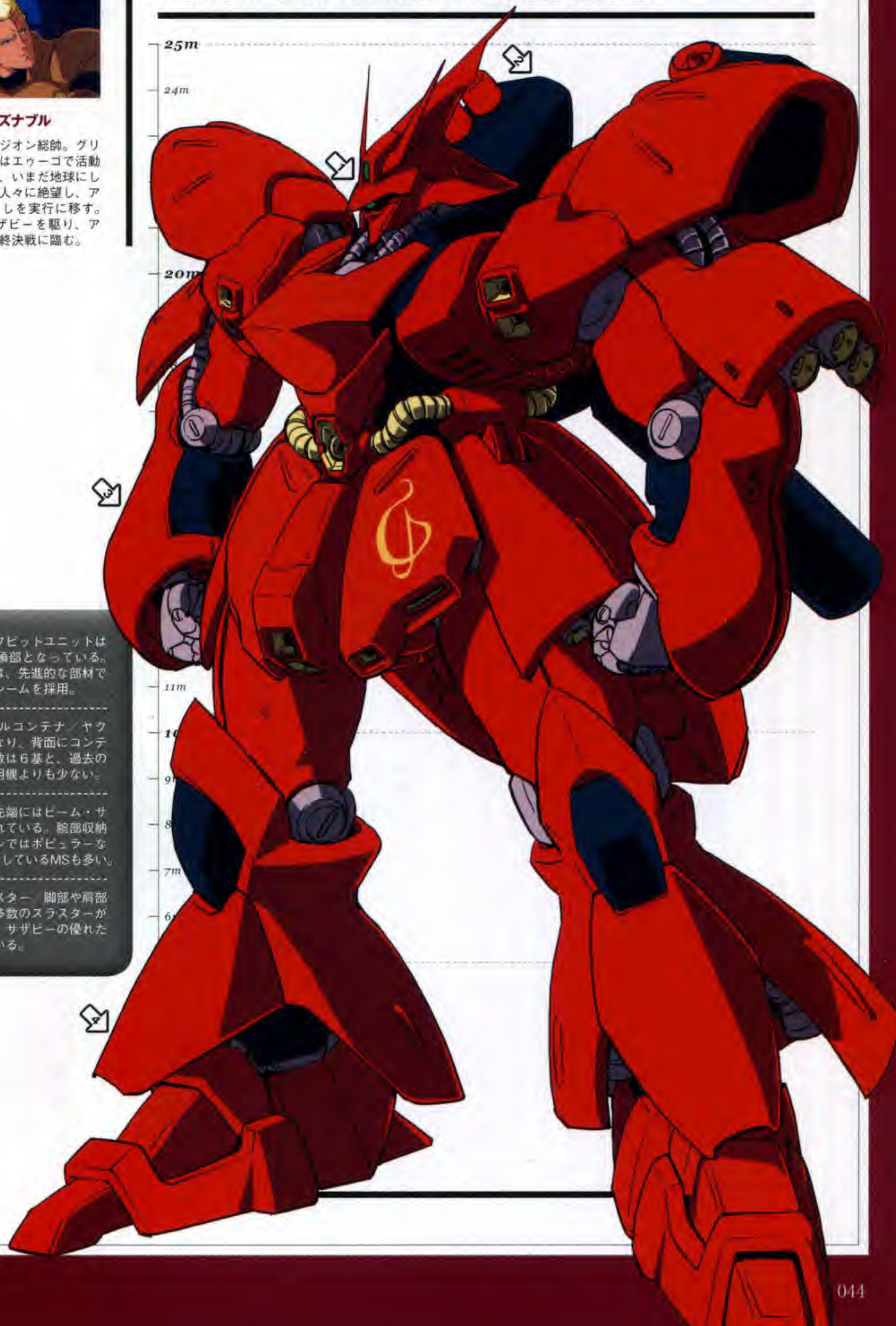


シャア・アズナブル

新生ネオ・ジオン総帥。グリブス戦役期はエウーゴで活動していたが、いまだ地球にしがみ続ける人々に絶望し、アクシズ落としを実行に移す。自らMSサザビーを駆り、アムロとの最終決戦に臨む。

Spec

●頭頂高：23.0m ●本体重量：30.5t ●ジェネレーター出力：3,960kW ●スラスター総推力：133,000kg (13,300×2、14,000×2、9,800×8) ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・トマホーク、ビーム・ショット・ライフル、ファンネル×6、ミサイル×3、拡散メガ粒子砲、他



➡1 頭部 コクピットユニットは胸部ではなく、頭部となっている。コクピット周囲は、先進的な部材であるサイコ・フレームを採用。

➡2 ファンネルコンテナ ヤウト・ドーガと異なり、背面にコンテナを装備。搭載数は6基と、過去のニュータイプ専用機よりも少ない。

➡3 腕部 腕先端にはビーム・サーベルが収納されている。腕部収納式はネオ・ジオンではポピュラーな構造であり、採用しているMSも多い。

➡4 各部スラスター 脚部や肩部など細部にまで多数のスラスターが設けられており、サザビーの優れた機動性を支えている。

「赤い彗星」にふさわしい 究極のジオン系MS

新生ネオ・ジオン総帥、シャア・アズナブル専用機として開発されたニュータイプ専用MS。開発はヤクト・ドーガと同様、アナハイム・エレクトロニクス社のグラナダ工場が中心となつて進められた。当初、シャア専用機としてはヤクト・ドーガがその役割を果たすはずであったが、シャアは満足しなかったため、ギラ・ドーガベースか



ファンネル

背面のファンネルコンテナに合計6基搭載された遠隔攻撃兵器。主にMS戦の補助的役割に使われる。



拡散メガ粒子砲

腹部に装備した大型ビーム兵器。攻撃目的だけではなく、攻撃範囲を利用し牽制目的のためにも使用される。

PICK UP!



シャアはもはや一兵士ではなく、新生ネオ・ジオンの総帥であるため、周囲は総帥自ら出撃することを諫めている。だがシャアにとっては、人類を地球から引き離すことと、アムロとの決着は同レベルで重要なことであったと考えられる。ナナイらの引き留めにも応じず、最終的にはアムロと決着をつけるべく、自ら前線へと赴いた。



フォン・ブラウン工場にサイコ・フレームの技術をリークし、Vガンダムをサザビーと同等の性能となるように差し向けた。一年戦争から続くアムロとの関係は、通じ合う部分はあったとしても、根底には決着をつけなければならぬとシャアは考えていたのだろう。そのうえで同等の機体で対峙しなければ、勝利には意味がないのである。

Column

かつてエウゴに属し、クワトロ・バジーナと名乗ってアムロたちとともに戦ったシャア・アズナブル。グリプス戦役後、その消息は不明だったが、U.C.0092年に突如として新生ネオ・ジオンの総帥として姿を現し、地球人類の肅清を決意する。はたしてシャアの考えは、グリプス戦役のころから変わってしまったのか。否、根底にあるのは地球を私物化しスペースノイドを弾圧するものへの怒りであり、シャアの考えは全く揺らいでいなかった。

グリプス戦役、ダカールでクワトロ・バジーナが行った演説で語られたのは、「地球を食いつぶそうとするティターンズ」への怒り。だが、実は腐敗していたのはティターンズではなく、地球に固執する人類すべてだった。利権と保身のために、ハマーンに譲歩した連邦政府高官たち、ネエル・アーガマへの支援を渋るエウゴの上層部……。第二次ネオ・ジオン戦争時においても人々は変わることは

なく、既得権益に固執し続けた。

シャアがとった手段は、すぐるべき地球からの強制排除。アムロはそれをエゴと叫んだが、シャアは人類の進化を待った。待ち続けた上で、人類が変わらないことを理解し、強硬策に出たのである。「今すぐ愚民ども全てに英知を授けてみせる!」と、アムロに言ったシャアの一言は待ち続けた者だけが持つイラだち。それは、一度人生をあきらめ、ある種大人となったアムロからは失われてしまったもの……理想への熱意であった。最期まで自らの理想に燃えて戦い続けたがゆえに、シャアは伝説として永遠に語り継がれる存在となったのである。



ら脱却し、完全新設計MSとして開発される。

要求されたのは現時点での最高スペックと、ファンネルの運用であり、グラナダ工場の総力をもって開発されたと考えられる。その要求を満たすうえで重要なものがサイコ・フレームであり、ヤクト・ドーガで実証されたデータをもとに、サザビーは「サイコ・フレームありき」のMSとして開発された。特にこの時代は、第一次ネオ・ジオン戦争期における恐竜的進化の反省から、

よりシンプルにMSのポテンシャルを引き出す方向性で開発が進められていたと考えられ、出力や装備、機能面を含め、サザビーは同時代を代表するハイスベック機として誕生した。といっても機体そのものは極めて大型であるので、恐竜的進化の行きついた最終形態、とも言えるかもしれない。

その一方でシャアは、サイコ・フレームの技術をフォン・ブラウン工場へ意図的にリーク。これは同工場で開発が進められていたVガンダムへ採用さ

せるためだった。終生のライバルであるアムロ・レイとの決着には、究極の性能を持つMSと、同じレベルのMSの対決がふさわしい。それはシャアの美学であったのだろうが、皮肉にもVガンダムとアムロ・レイはサザビー以上に、サイコ・フレームと優れたマッチングを示した。

結果的にサザビーはVガンダムと一騎打ちの末に敗北したが、ネオ・ジオン技術の集大成といえるMSであることは間違いない。



『袖付き』

KSHATRIYA

NZ-666

クシャトリヤ

Spec

●全高：22.3m ●本体重量：29.7t ●ジェネレーター出力：16,540kW
●スラスター総推力：197,800kg ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル×2、ファンネル6×4、胸部メガ粒子砲×4、バインダー部メガ粒子砲2×4。ほか

→1 全高 40mサイズのグイン・マンサから、22.3mと標準的なMSサイズの大きさに収まった。だがバインダーなどを含めると大ボリューム。

→2 バインダー 肩から延びる4枚のバインダーはファンネルコンテナ、フィールドジェネレーター、スラスター、サブ・アームを装備する。

→3 ビーム・サーベル 両手首の内側に装備されるビーム・サーベル。これはキュベレイやグイン・マンサなどネオ・ジオン系の伝統を継承。

→4 胸部武装 バインダー×8のメガ粒子砲に加え、胸部も4基のメガ粒子砲を装備し、広範囲をカバー。実弾兵器マシン・キャノンも装備。

Pilot

主なパイロット



マリーダ・クルス

『袖付き』のパイロット。ブルシリーズ12番目のクローンで、ブルトゥエルブと呼ばれていた。一度はバンシィのパイロットとなるが、その後ガランシェール隊に戻り、再びクシャトリヤに搭乗する。

クイン・マンサを ダウンサイジングする

第一次ネオ・ジオン戦争期に開発されたクイン・マンサは同時代を代表するハイスペック機であり、いわゆる恐竜的進化の象徴的なMSといえた。クシャトリヤは、圧倒的な性能をほぼ継承したまま、ダウンサイジングした機体といえる。

小型化に際して、もっとも影響を与えたのが、クイン・マンサ時代には存

在しなかったサイコ・フレームである。ヤクト・ドーガなどと同様、コクピット周辺にこの最先端部材を導入することにより、サイコミュシステムの小型化が実現、機体全体の小型化を意味し、より運用がしやすくなっている。

一方、機体後部の大型コンテナに搭載されていたファンネルは、4基のパインダー内に収納。それぞれ6基ずつ、合計24基のファンネル搭載が可能となった。このパインダーはファンネルの充電機能を持つほか、複数の機能が付

加され、AMBACユニット、フレキシブルスラスタ、Iフィールドジェネレーター、先端部にサブ・アーム、外面にはメガ粒子砲を備える。

新生ネオ・ジオンから組織を継承した「袖付き」の機体として運用され、強力な戦力となった。しかし同組織はすでにこうしたフルスペックのニュータイプ専用MSを万全な体制で運用できるほどの資材や設備はないに等しく、機体を破損したとしても完全な修理に対応できないという状況となっている。

特にクシャトリヤはワンオフ機であるため、補充パーツの流用が効かないという点も問題であった。

ユニコーンガンダムとの戦闘で大破した際には、ネエル・アーガマに收容され、実質的に修理は不可能な状態と思えた。だが、連邦軍用MSのパーツを半ば強引に組み込むことによって、クシャトリヤ・リペアードとして再生。クシャトリヤの機能を100%活かされる状態ではないが、再度出撃を果たしている。

Weapon

武器・装備



ファンネル

サイズ的にはキュベレイのファンネルと同程度だが、技術の進歩によってより優れた機動性を実現している。



ビーム・サーベル

ビーム・サーベルはマニピュレーターだけではなく、サブ・アームに持たせてることでトリッキーな戦法を行った。

Variation

バリエーション

NZ-666

クシャトリヤ・ベッセルング

パラオ攻略戦で大破したクシャトリヤに対し、ネエル・アーガマにて「袖付き」側の主導による一方的な補修作業が行われた状態。欠損部分はフレームがむき出しとなっている。



NZ-666

クシャトリヤ・リペアード

欠損した頭部やコクピットブロック、パインダーなどを連邦製部品で代用。脚部にビーム・ガトリング、右腕にハイパー・ビーム・ジャベリンをじかに接続。対バンシィ戦を想定し、ファンネルはファンネル・ミサイルに置き換えられた。



25m

11m

10m

9m

8m

7m

6m

5m

4m

3m

2m

1m



「袖付き」

ROZEN ZULU

YAMS-132

ローゼン・ズール

Pilot

主なパイロット



アンジェロ・ザウパー

「袖付き」の兵士であり、フロントル親衛隊隊長。フロントルに心酔しており、彼の行動を邪魔する者には異常なまでの敵意を抱く。フロントルがバナーに興味を持ったことにも、嫉妬心を抱いていた。

Spec

●頭頂高：22.5m ●本体重量：72.6t ●ジェネレーター出力：4,950kW ●スラスター総推力：257,200kg
●装甲材質：チタン合金セラミック複合材（一部ガンダリウム合金使用） ●武装：3連メガ粒子砲×1、サイコ・ジャマー、ほか



➡1 背面コンテナ／バックパック自体はサイコ・ジャマーユニットのコンテナとなっている。4基のサイコ・ジャマーユニットを搭載する。

➡2 胴体ユニット／サイコ・フレームを採用しつつも、機体の根幹はギラ・ズールを継承しており、胴体部はベース機の面影を残している。

➡3 肩部ユニット／ギラ・ズールのシルエットを残す胴体に対して、スラスターが追加された肩から、インコムを搭載する腕部が大型化。

➡4 脚部ユニット／脚部ユニットは、ギラ・ズールから大きく変更されている。膝部にはスタビライザーが追加されるなど、形状も変化。

対ユニコーンガンダムの カウンターとしての役割

第一次ネオ・ジオン戦争時の試作機ハンマ・ハンマのコンセプトを、ギラ・ズール親衛隊機をベースとして昇華させた試作MS。一般量産機をベースとした特殊機であり、かつてヤクト・ドーガと同様なプロセスを経て、完成に至ったと思われる。

ハンマ・ハンマは一般兵でも扱えるサイココミュニケーションの実用を目指して

開発された機体だったが、決してそのコンセプトを実現できていたわけではなかった。

本機は、OSによる機械的な制御が可能となる準サイココミュ装置インコムを採用によって、一般兵によるオールレンジ攻撃を実現する一方、コクピット周辺にはシナシユと共通のサイコ・フレームが用いられている。サイコ・フレームは一般兵の微弱な脳波でも感知できる特性があり、機体制御のレスポンス向上などに結びついている。

いわばサイココミュのハイブリッドMSというべき形態ではあり、結果的に一般兵士が扱えるハイスペック機の高レベルな機体として完成するに至った。さらに本機には切り札というべき機能であるサイコ・ジャマーが搭載されているのも特筆すべき点だ。サイコ・ジャマーは特殊デバイスを周囲に展開し、その領域内ではサイココミュニケーションの機能を一切遮断するというシステム。これはニュータイプ機の持つシステムを封じるための機能であり、実戦

においてもユニコーンガンダムを一時稼働停止に陥らせた。ユニコーンガンダムは、計画を進めていた連邦軍サイドやアナハイム・エレクトロニクス社にとっても脅威となる側面があり、安全装置として『袖付き』にこうした装備を譲渡していた可能性も考えられるだろう。ネオ・ジオングなども『袖付き』が独自に建造するには不可能に近く、アナハイム・エレクトロニクス社の思惑が見え隠れする存在でもある。

Weapon

武器・装備



サイコ・ジャマー

機械誘導で移動するパラのような特殊デバイス。対象となる機体を領域内に取り込むことで、サイココミュを遮断する。



有線式シールド・ユニット

中央部にフィールドジェネレーターを搭載したうえで、3門のメガ粒子砲を装備。有線式遠隔操作も可能となった。

Variation

バリエーション



YAMS-132
ローゼン・ズール
(右腕改修後)

最終決戦に臨むにあたり、ネエル・アーガン艦内での戦闘によって破損した箇所を修復を行った。右腕のクローユニットを失ったため、装備案の1つであった有線式遠隔装置を内蔵したシールド・ユニットを採用している。



YAMS-130
クラーケ・ズール

一年戦争当時、ジオン軍によって開発されたサイココミュ高機動試験用ザクのコンセプトを継承した試作MS。肩部には、腕部とは別に有線式遠隔兵器となる大型腕部ユニットを装備し、下半身は大推力スラスターユニットへと換装されている。



SINANJU

MSN-06S

シナンジュ

Pilot

主なパイロット



フル・フロンタル

ネオ・ジオンを継承する組織『袖付き』の首魁。赤いMSシナンジュを駆る姿から『シャアの再来』と呼ばれる。仮面をつけた姿はまさにシャアそのものだが、彼のルーツを知るものはいない。

→1 フレキシブルスラスタ― 本機の圧倒的な機動を生む大型スラスタ―。高速時にはバックパックが翼のように展開し、最大出力を発揮する。

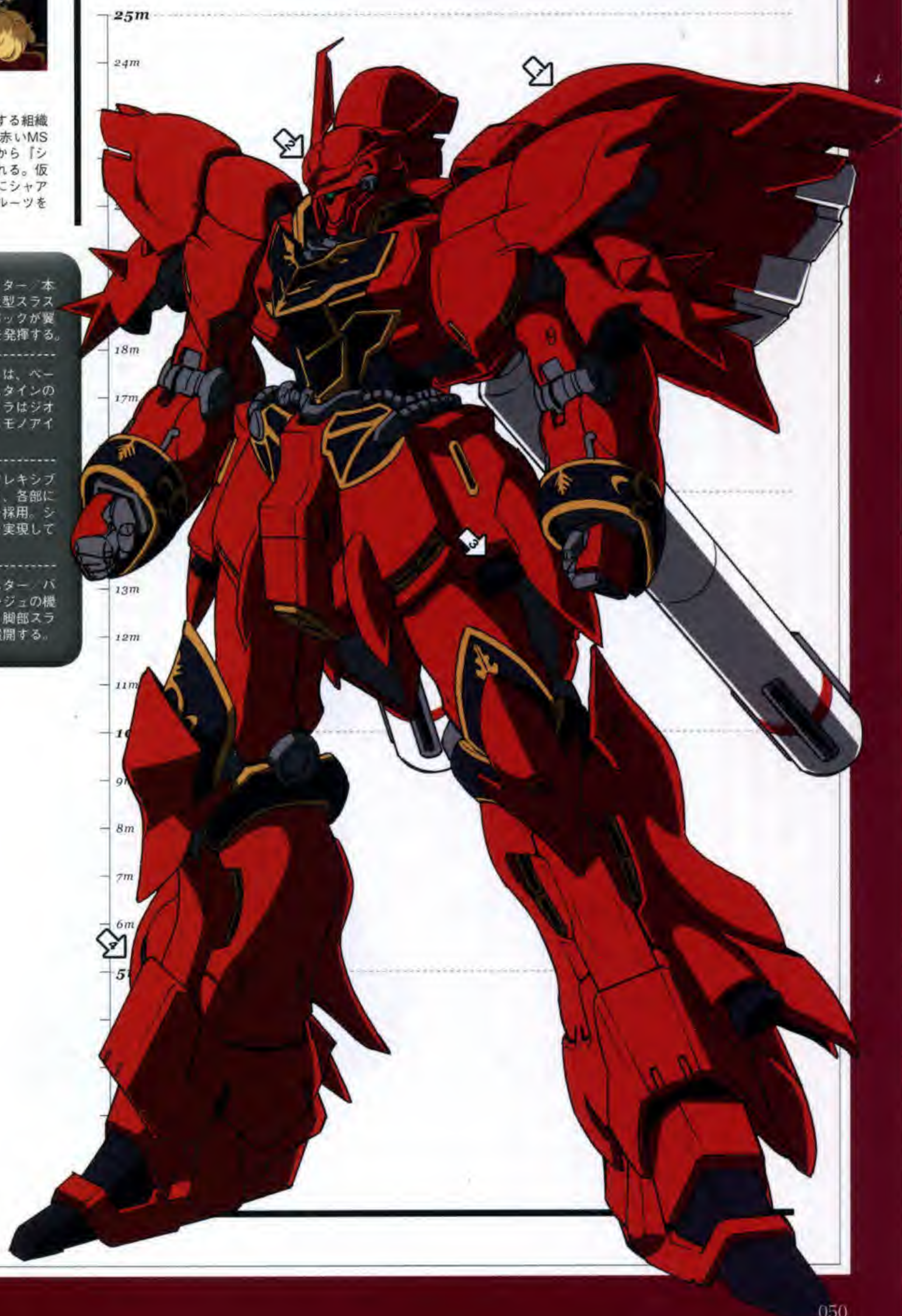
→2 頭部 頭部ユニットは、ベースとなったシナンジュ・スタインのシルエットを残すが、カメラはジオンの伝統をイメージさせるモノアイ型に。

→3 各部スラスタ― フレキシブルスラスタ―だけではなく、各部には多数のサブスラスタ―を採用。シナンジュの驚異的な機動を実現している。

→4 フレキシブルスラスタ― バックパックと同様、シナンジュの機動性を支えるスラスタ―。脚部スラスタ―も最大出力時には展開する。

Spec

●全高：22.6m ●本体重量：25.2t ●ジェネレーター出力：3,240kW ●スラスタ―総推力：128,600kg
●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ビーム・アックス×2、グレネード・ランチャー、専用バズーカ、ほか





ビーム・ライフル

シナンジュ専用のビーム兵器。ビーム・マグナムのように特筆すべき点はないが、一般のMS用ビーム兵器よりも出力は高い。銃身下部にグレネードランチャーや専用バズーカの装備が可能である。



専用バズーカ (ロケット・バズーカ)

シナンジュ専用の実弾兵器。ビーム・ライフルやシールドに接続することができる。ゼネラル・レビル戦では、ビーム攪乱膜が散布されたことを察知して、すばやくバズーカに切り替えて対応している。



ビーム・アックス

シールド先端部に2基装備されている高出力格闘兵器。2基連結することでビーム・ナギナタにもなる。またシールドに接続した状態のまま、ビーム刃を発生させて使用することも可能となっている。



ビーム・サーベル

格闘戦用のビーム兵器。通常は前腕部に収納されている。装甲形状こそ異なるものの、構造自体はシナンジュ・スタインから継承。ユニコーンガンダムも前腕部にサーベルを備えるなど、構造的に影響を受けている。



MSN-06S シナンジュ・ スタイン

Spec

●武装：
ビーム・サーベル、
ハイ・ビーム・ライフル、
専用バズーカ、他

「UC計画」の一環として開発されたサイコフレーム実装型試験機。開発コードは「スタイン01」であり、原石を意味している。機体構造自体はシナンジュにそのまま受け継がれているが、本機は「袖付き」による改修前の機体であるために、連邦系MSの意匠を色濃く残している。

恐るべきポテンシャルが 「赤い彗星」を復活させる

フル・フロンタル専用MS。もともとは「袖付き」の機体ではなく、地球連邦軍の軍備再編計画「UC計画」の一端として、アナハイム・エレクトロニクス社で開発されていた試作MSの一機、シナンジュ・スタインであった。そのコンセプトは、ムーバブル・フレームの一部にサイコ・フレームを採用した際の強度や耐久性テストを目的

とした実証実験機。前提として「サイコフレーム」がどの程度まで耐えうるのか」という点を探るため、あえて現実的ではない驚異的な機動性をもたされていた。さらにインテンション・オートマチック・システムを採用したことによるパイロットへの肉体的・精神的な負荷は、尋常ではないレベルに達した。それゆえ人が乗ることは当初から想定されておらず、一般パイロットでは不可能な機体の限界を、計測機器上でテストするのが主目的であった。

だが、その後、「袖付き」によって強奪された(計画的な譲渡とする説も)シナンジュは、兵装や装飾に手が加えられ、「赤い彗星の再来」たるフル・フロンタルにふさわしい機体となった。背面と脚部のフレキシブル・スラストーをはじめ、全身のスラストーを駆使して行う機動はまさに「赤い彗星」であり、人間では不可能と思われていた理論上のスペックを、フル・フロンタルの搭乗によって実現している。従来のネオ・ジオンよりもさらに影響力が

低下した「袖付き」にとって、その存在は機体性能以上に、勢力の精神的支柱として機能した。

一方で本機で培われた「MSのフレームにサイコ・フレームを使用する」というノウハウは、ユニコーンガンダムなどに継承され、ムーバブル・フレームをすべてをサイコ・フレーム化した、「フル・サイコ・フレーム」機が完成するに至った。

アクシズのモビルスーツ 開発の不思議

一年戦争で降伏を拒否した旧ジオン公国軍の勢力の多くが集結したアクシズだったが、地球連邦軍の追及の可能性もあり、また小惑星帯での生存が優先されたことから、少しでも多く、かつ優秀なMSを必要としていた。当面の戦力は、ジオン公国時代の旧MS（および派生機）だったが、絶対数は足りず、作業用機械をベースにガザシリーズが急遽開発されることとなった。そのような状況下でもアクシズの幹部たちは地球圏への帰還とジオン再興を諦めず、少ないリソースの中からでも、さらなる戦力の増強は必須であった。

こうしてアクシズは新たなMS開発を行うことになるが、ある意味それはアクシズ本来のキャパシティをはるかに超えた規模であったといっている。ジオン由来で独自技術を確認しつつあったサイコミュ搭載機以外にも、実に様々な機種が開発、生産されたのだから。

中にはAMX・011ザクⅢとAMX・014ドーベン・ウルフのように競争試作方式で生み出された機体もあった。それは兵器の開発方法としてはオーソドックスだが、大戦末期に開発されたMS・14ゲルググなどは、ジオン公国軍は競争試作といった手法を捨

て、少ないリソースを一つに集約する手法を採ったことから考えても、状況や時代に逆行していたともいえる。

こうした事情の背景に考えられるのは、これらの機体がすでに、ある程度の基礎開発が進んでいたということだ。つまり、一年戦争時に策定された次期主力機の、開発コンセプトをある程度継承している可能性も考えられる。状況から見ても、アクシズには多くの技術者が流れ込んでいたことは間違いなく、彼らがそれらの資料を持ち込んでいたとしても不思議はない。

そして、MS開発にとって、技術開発におけるデータの蓄積は重要である。アクシズ製のMSは、一見するとその外見上は個性的で、それまでのジオン公国系MS開発の流れからは断絶しているようだが、一つずつ機体の性能や特徴を調べていくと、一年戦争時のMS開発の流れを汲んでいると思わしき機体が多いのも事実である。

またアナハイム・エレクトロニクス社には、ジオン系技術者も少なくなく、彼らと水面下で交流していた痕跡もあり、最新の情報なども、ある程度伝わっていたようである。

それだけにアクシズ陣営は連邦軍が攻勢をしかける可能性は少ないと認識していたことは想像に難くない。だからこそ、ある程度の余裕を持って、通常MSの開発もオーソドックスな方式

アクシズ／ ネオ・ジオンの 通常MSの開発

第一次、第二次ネオ・ジオン戦争を挟み、TMS（可変モビルスーツ）やニュータイプ専用機など、最新技術を投入したMSが戦場の中心で活躍した時代。しかしそのような状況下でも量産機や汎用機といった通常MSの開発は続いている。当然、アクシズやネオ・ジオンも同様だ。しかし、それは地球連邦軍とはずいぶん異なっていた。

構成・文 南波健一郎

を採用することができたのだろう。

アクシズの型式番号 0と1の違いとは!?

アクシズ製MSを見ると、面白いことに気づく。それはAMXの型式番号に続く数字の頭には、0番代と1番代で構成されているということだ。本来、アクシズ製MSの型式番号はMMTという型式で、AMXは地球連邦軍が機体識別のために付与した型式という説と、逆にMMTが地球連邦軍の付与した型式、という二説がある。ここではAMXがアクシズ側の用いたMSの型式番号という説をもとに考えたい。

AMX・0系のMSとしては、003がガザC、004がキュベレイ、006がガザD、008がガ・ゾウム、009がドライセン、011がザクⅢ、014がドーベン・ウルフなどとなっている。AMX・100系の場合、101がガルスJ、102がズサ、10

AMX-101 AMX-102
ガルスJ&ズサ

近接戦闘用のガルスJと、支援攻撃用のズサは、開発当初セットでの運用を想定されていた。使用用途や目的に添った機体の開発は、連邦軍のV作戦を参考にしたかのようだ。



アクシズの
試作MS

ional MS

年代別に見るMS性能の推移

第一次ネオ・ジオン戦争期 (U.C.0088)

名称	全高	本体重量	全機重量	ニュータイプ専用	スラスター推力
AMX-101 ガルスJ	19.5m	52.7t	78.3t	2,840kW	121,900kg
AMX-102 ズサ	15.0m	23.7t	74.5t	1,820kW	120,400kg
AMX-103 ハンマ・ハンマ	21.5m	40.3t	79.4t	3,820kW	258,200kg
AMX-011 ザクⅢ	21.0m	44.2t	68.3t	2,150kW	172,600kg
AMX-014 ドーベン・ウルフ	22.0m	36.8t	74.5t	5,250kW	87,300kg
AMX-004G 量産型キュベレイ	18.4m	35.2t	62.1t	1,820kW	61,600kg

第二次ネオ・ジオン戦争/ラプラス戦争期 (U.C.0093 ~ 0096)

名称	全高	本体重量	全機重量	ニュータイプ専用	スラスター推力
AMS-119 ギラ・ドーガ	20.0m	23.0t	50.8t	2,160kW	54,000kg
AMS-129 ギラ・ズール	20.0m	21.8t	55.2t	2,470kW	62,100kg

一方で100系は、状況(戦局)に応じた特殊な機体つまりジオン公国軍で例えるなら、陸戦での近距離戦に特化したMS、07Bゲフであったり、水陸両用型を指し、地球連邦軍ならばRXシリーズの支援用MS、RX-77ガンキャノンやRX-75ガンタンクがそれに該当するだろう。100系のガルスJはグフ的な発想で、ズサがそれと連携するド・ダイYSのようなサブ・フライト・システムの発想を具現化したMSだ。R・

3がハンマ・ハンマ、104がR・ジャジャ、107がパウ、109がカプールといった具合だ。
AMX・0系などは、並びを見ると、前線に登場した順ともいえ、地球連邦軍の付与した型式番号という説にも頷ける。しかし中にはAMX・100系

の機体がAMX・0系の機体よりも戦場に早く登場した例もあり、説得力としては弱い。となると、やはりAMXがアクシズ側の付与した型式番号で、頭の数字に振られた0系と100系には、意味があると見るべきだろう。おそらく、0系はいわゆる主力型、

100系は特殊型と考えるべきではないか。そうした場合、キュベレイが主力型に分類されるのは疑問だが、これはアクシズ(ネオ・ジオン)がニュータイプ部隊を中核に据え、戦力の編成を整えるつもりと考えれば納得がいく。

ジャジャは白兵戦型、ハンマ・ハンマも広義には近距離戦用といえ、パウは敵可変MSへの対抗策、カプールが水陸両用という局地戦仕様ゆえ、どれも機能に特化した機体といえる。

そういった意味では、アクシズ(ネオ・ジオン)のMS開発体系は、実は主力型と支援(特化)型で構成するといふ、一年戦争時のジオン公国とそれほど大差がない。戦場における戦闘のほとんどをMSに機能を付加して解決しようとする姿勢も同様だ。このあたりがアクシズの限界だったといえる。

アクシズ(ネオ・ジオン)のMS開発の欠点は、ただでさえ少ないリソースを数多くのMS開発に振り分けたことではないか。もちろんMSの性質(機能)に一騎当千が求められていたことは疑いようがなく、その時点での方向性に間違いはなかったのだろう。だがもう少し先を見据える視点、すなわち基礎技術の革新という方向にも気を配るべきだったのかもしれない。

実際、その後シャアの新生ネオ・ジオンでは、結果的にアナハイム・エレクトロニクス社にアウトソーシングという形でMS開発を依頼する。これは、旧ネオ・ジオン勢の技術の持ち込みもあったであろうが、基礎技術及び生産体制は、すでにアナハイム・エレクトロニクス社の方が優れているという状況にあった、ということでもあるのだろう。

AMX-109
カプール

水陸両用MSなどの開発は、母体となる旧ジオン公国の伝統に則っている部分と、組織の誕生当初から地球侵略作戦は念頭に置いていた、ということの表われではないだろうか。



AMX-103
ハンマ・ハンマ

一般兵でもニュータイプのような攻撃を可能にする準サイコミュ兵装。こうしたシステムの実現は、少数陣営のアクシズ(ネオ・ジオン)にとっては悲願であり、必須だった。



Convent



GALLUSS-J AMX-101 ガルスJ

Spec

●頭頂高：19.5m ●本体重量：52.7t ●ジェネレーター出力：2,840kW
●スラスター総推力：121,900kg ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル、フィンガー・ランチャー、アーム・パンチ、エネルギー・ガン、ミサイル・ポッド

地球侵攻を想定した 近接戦闘用MS

ガルスJは、作業用機械から発展したガザ系列とは別に、旧ジオン公国軍のMS開発技術を土台に、ムーバブル・フレイムやリニア・シートといった当時、最新のMS開発技術を投入している。近接戦闘を主眼にした機体で、後

方支援用MSのズサと連携しての運用が想定されていた。携行火器は、エネルギー・ガンと呼ばれる光学兵器だが、特殊な形状をしているが通常のビーム・ライフルなどと比べて小型で、市街戦などでの取り回しの良さを追求したものだろう。左右の腕で装備が異なる点などから、グフなどの旧ジオン公国軍の設計

思想が色濃く反映された部分もあるが、機体の総合的なコンセプトは、地球連邦軍のV作戦の影響も垣間見ることが出来る。シヤングリラ・コロニー制圧に向けたエンドラ隊にテスト機が配備された実戦投入された（機体は大破）。後に少数の機体が生産され、ラプラス戦争では、派生機なども確認されている。

Pilot

主なパイロット



マシュマー・セロ

ネオ・ジオンのエンドラ隊の隊長。各コロニーをアクシズ（ネオ・ジオン）に協力させる先遣として派遣された。テスト段階のガルスJに搭乗しZガンダムと対戦するが、機体は撃破された。





AMX-101K

ガルスK

Spec

- 頭頂高：19.5m ●本体重量：52.7t
- 武装：ビーム・キャノン、ビッグガン、3連ミサイルポッド

ガルスJの派生機で砲戦仕様MS。宇宙世紀0090年代にトリントン基地を襲撃した機体は、左肩部にガ・ゾウムのハイパー・ナックルバスターと同型の砲を装備。両肩部のミサイル・ランチャーや左腕部のフィンガー・ランチャーといったオリジナルの内蔵火器は廃され、通常タイプのマニピュレーターに換装している。左腕にはザク・デザートタイプなどの3連ミサイル・ランチャー、右腕にはザクキャノンのビッグ・ガンを装着するなどしている。

ただし、運用していたのが旧ジオン残党軍なので、制式採用された機体かは定かではない。



AMX-101E

シュツルム・ガルス

Spec

- 頭頂高：19.5m ●本体重量：24.9t
- ジェネレーター出力：2,840kw
- 装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：スパイク・シールド×2、チェーン・マイン×1、ほか

『袖付き』が運用するガルスJの派生機。拠点突破用の強襲用MSに改修が施されている。ほとんどの装甲が撤去され徹底した軽量化が行われている。武装もスパイクシールドとチェーン・マイン以外に携行していない。そのため機体重量はオリジナルのガルスJの半分以下。スラスター類も外部に依存するという思い切った設計となっている。

ネェル・アーガマを強襲した機体も、ズサのブースター・ポッドを利用する形で肩部のマグネット・アンカーで艦に取り付いている。当然、自力での帰還は不可能といえ、作戦行動そのものが、一種特攻機のような性格を帯びていたようだ。





ネオ・ジオン

ZSSA

AMX-102

ズサ

Spec

●頭頂高：15.0m ●本体重量：23.7t ●ジェネレーター出力：1,820kW
●スラスター総推力：120,400kg ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル、ミサイル・ポッド、ブースター・ポッド、ほか

ガルスJの支援用
中距離攻撃MS

アクシズ（ネオ・ジオン）の地球圏攻略において、近接戦闘用のガルスJを後方から支援する目的で開発されたのがズサだ。機体本体の頭頂高は15メートルと、当時のMSサイズで見ても小型だが、機体各部（腕、脚部など）

にはミサイルを多数内蔵している。オプションとして、ミサイルキャリアといえるブースター・ポッドの装着が可能で、装備時のミサイル総数は70発以上を誇る。一方で、ビーム・サーベルは装備しているものの、光学兵器は腹部の拡散ビーム砲のみという、後方支援に徹したアンバランスな機体構成でもある。初の実戦投入はガルスJ

と同じシャングリラ・コロニーだが、ブースター・ポッドのミサイル・ポッドの一部を肩部に装備する変則運用であった。後に少数が生産されたが、ガルスJと共同運用される場面はあまりなかった。ラプラス戦争時には『袖付き』の機体として、ギラ・ドーガと同タイプのビーム・マシンガンやシールドなどを装備した機体が確認された。

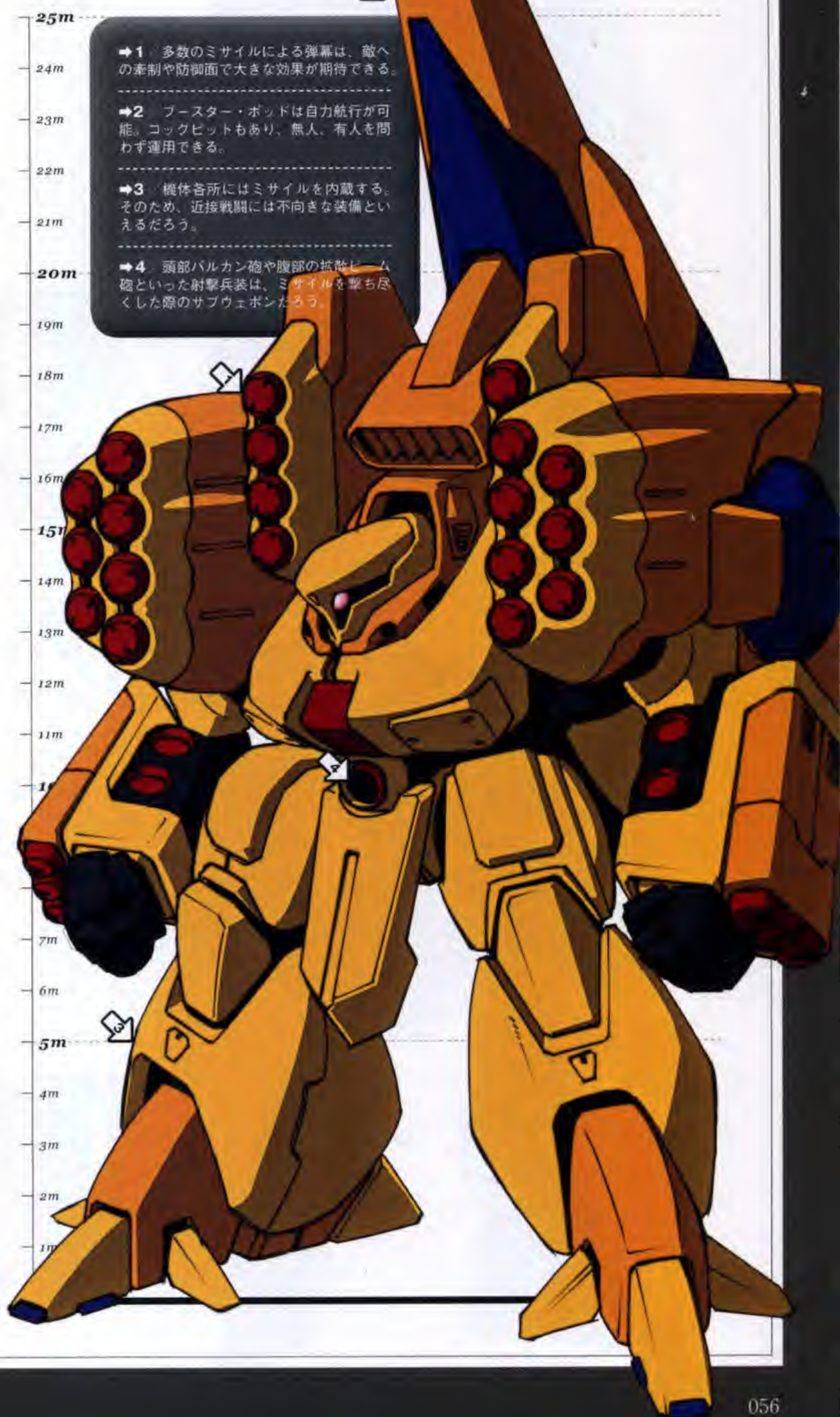
Pilot

主なパイロット



マシュマー・セロ

ガルスJに続いて自らが搭乗して出撃。アーガマを襲撃している。ジドー・アーシタのZガンダムと交戦。この時の戦闘では、オプションであるブースター・ポッドは未完成状態だった。



➡1 多数のミサイルによる弾幕は、敵への牽制や防御面で大きな効果が期待できる。

➡2 ブースター・ポッドは自力航行が可能。コックピットもあり、無人、有人を問わず運用できる。

➡3 機体各所にはミサイルを内蔵する。そのため、近接戦闘には不向きな装備といえるだろう。

➡4 頭部バルカン砲や腹部の拡散ビーム砲といった射撃兵装は、ミサイルを撃ち尽くした際のサブウェポンだろう。



HAMMA HAMMA

AMX-103

ハンマ・ハンマ

Spec

- 頭頂高：21.5m ●本体重量：40.3t ●ジェネレーター出力：3,820kW
- スラスター総推力：258,200kg ●装甲材質：ガンダリウム合金
- 武装：ビーム・サーベル×2、3連装ビーム砲×2、ほか

一般兵用サイコミュを 搭載した試作機

ニュータイプ専用機に搭載されるサイコミュ兵装の類は、威力が高い反面適合者（＝ニュータイプ）不足という問題があった。

アクシズ（ネオ・ジオン）でも、その問題は同様で、強化人間のクローニ

ングにしても限界があったことは想像に難くない。一般の兵士でも扱えるサイコミュ兵装の実現は、少数勢力の彼らにとっても急務だった。

それらをクリアするために、準サイコミュ兵器実用化に向けて、開発試作されたのがハンマ・ハンマだ。有線式クロー・アームによるオールレンジ攻撃は、一年戦争時のブラウ・ブロやジ

オンダなどを彷彿とさせる。ただ実戦投入はされたが、ガルスJやズサのようには量産化に結びつかなかった。

しかし、その後も準サイコミュを搭載したドーベン・ウルフや、ラプラス戦争時、後継機的なローゼン・ズールが登場するので、ハンマ・ハンマによって準サイコミュ技術は、一定の成果を挙げたといえるだろう。

Pilot

主なパイロット



マシュマー・セロ

Zガンダムの頭部を粉砕してみせたマシュマー。ただ、その後に登場したZZガンダムの前には、為す術なく敗れ、機体も失われた。この失敗がもとで強化人間に改造されることに……。

➡1 刺々しい頭部だが、モノアイや動力パイプなど、ジオン系MSのデザインを踏襲している。

➡2 3連装メガ粒子砲を内蔵するクロー・アーム。腕部はフレキシブルアームで伸縮自在。オールレンジ攻撃が可能。

➡3 肩部だけでなく機体各所に多数のスラスターを搭載。当時の新鋭機、Zガンダムを圧倒する機動力を発揮。

➡4 腰部にはサブプロペラントタンクが装備され、大推力によるスラスターの燃費の悪さを補う工夫がされている。



R-JARJA

AMX-104

R・ジャジャ

Spec

●頭頂高：20.0m ●本体重量：36.4t ●ジェネレーター出力：2,320kW
●スラスター総推力：72,200kg ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：ビーム・サーベル、
銃剣付ビーム・ライフル、3連装ミサイル・ポッド×2

ギャンの流れを汲む 格闘戦用MS

R・ジャジャは、本来、アクシズ（ネオ・ジオン）の主力MSの一つとして、量産化を視野に開発が進められていた。開発コンセプトは旧ジオン公国軍の白兵戦用MS、ギャンに通じるもので、近接戦闘を主眼にしている。

➔1 兜を思わせる外見の頭部や鎧型の装甲など、意識して中世の騎士のようなデザインが取り入れられた。

➔2 バリアブル・シールドは可動域も広く、腕に装着するシールドよりも多方面の攻撃に対応可能。

➔3 肩部アーモアには3連装ミサイル・ポッドを装備。攻防一体の装備はギャンの伝統か。

肩部に搭載された可動式のバリアブル・シールドは、スラスターが内蔵され、高い機動性を発揮。また、肩部アーモアにはミサイル・ポッドも内蔵しており、ギャンのウェポンラック兼用シールドの発展型と見ていいだろう。主兵装は腰アーモアに懸架した大型ビーム・サーベルだが、ビーム・ライフルを携行するなど、時代のニーズも

取り入れられている。だが、スペック面で見ると後発のザクⅢやドーベン・ウルフなどと比べて、見劣りする点も少なからずある。実戦でもパイロットの資質に問題があったとはいえ、想定されていた性能を存分に発揮できたかは疑問も残る。一説には、指揮官用の機体として少数生産されたというのが詳細は不明だ。

Pilot

主なパイロット



キャラ・スーン

エンドラ隊のマシュマーの監視役として着任した女性士官。MSに搭乗すると興奮する異常体質の持ち主。そのため戦闘は苦手で、搭乗していた機体も大破してしまった（本人は捕虜に）。





CAPULE

AMX-109

カプール

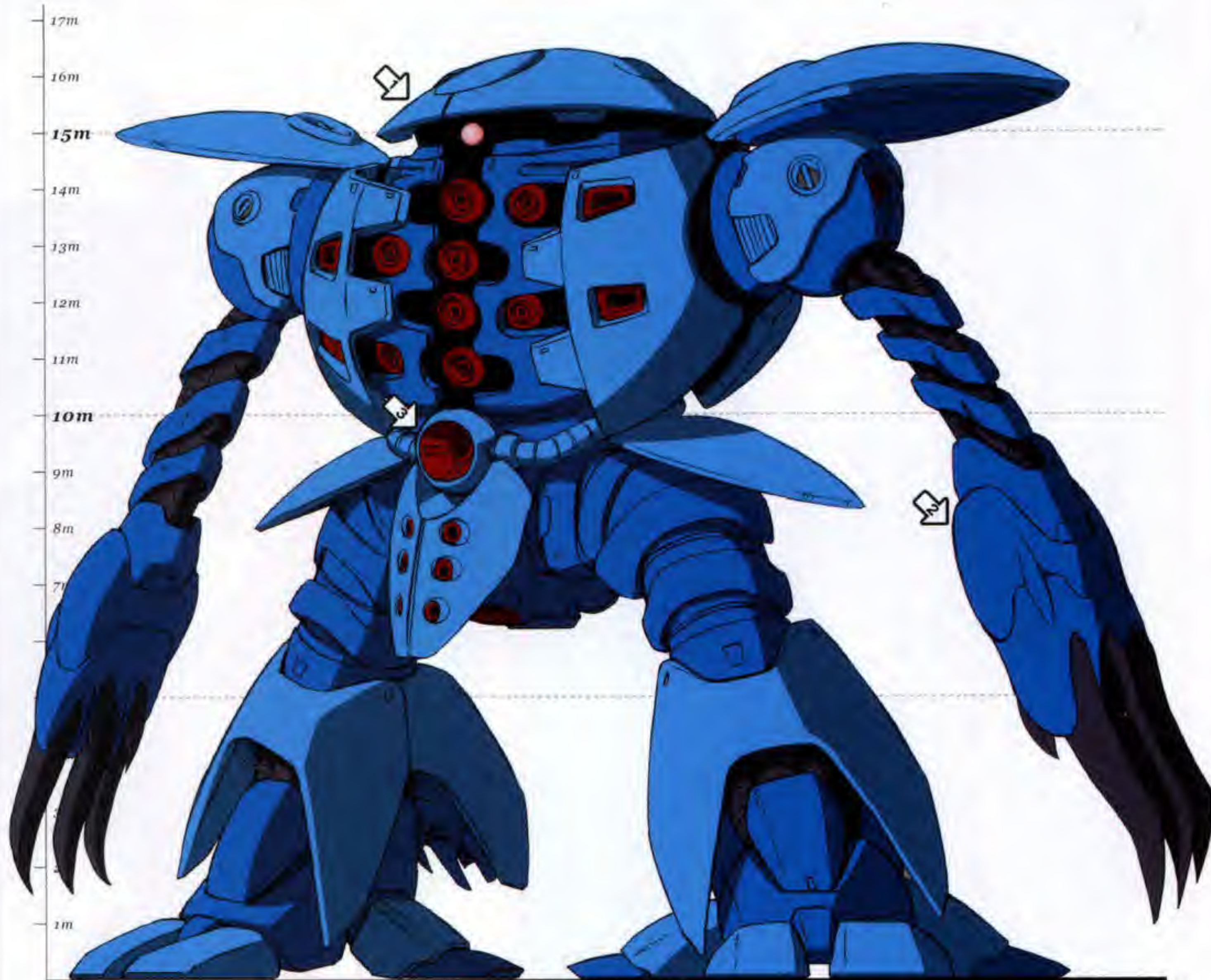
Spec

- 頭頂高：16.5m ●本体重量：38.7t ●ジェネレーター出力：3,680kW ●ロケット総推力：6,800kg
- 装甲材質：ガンダリウム合金（二重装甲）
- 武装：レーザー・ビーム、ソニックブラスト、ミサイル×8、ほか

→1 球形の機体は耐圧性と水の抵抗を抑える効果を狙ったもの。

→2 手首にはアイアン・ネイルを装備。腕部は伸縮機構を採用している。

→3 腹部にソニックブラスト。胸部装甲下にミサイル・ランチャーを装備。



巡航形態



水上や水中を高速移動する際、手足を機体内に収納して変形する。頭頂部からビーム・アイを出して周囲の索敵も可能。

宇宙で生まれた 水陸両用MS

アクシズ（ネオ・ジオン）の水陸両用MS。地球侵攻時における局地戦用の機体として開発された。

一年戦争時の最優秀機ともいわれたズゴックと比べてもジェネレーター出力は約1・5倍に上がり、本体重量も40%ほど軽い。装甲材にはガンダリウム合金が用いられ、強度面も十分だ。

しかし、地球圏で活動する旧ジオン公国軍残党に機体が供与された際、現場の兵士の中には搭乗を拒否する者もいた。こうした反応は、宇宙で開発された機体に対する不信や不安の表われなのかもしれない（宇宙へ逃げた同朋へのやっかみか？）。

だが、そうした不信感に関してもラプラス戦争時には払拭されたようで、ダカールを襲撃する部隊の中に、本機の姿が確認できる。



DREISSEN AMX-009 ドライセン

Spec

- 頭頂高：22.0m ●本体重量：36.7t ●ジェネレーター出力：2,380kW
- スラスター総推力：107,800kg ●装甲材質：ガンダリウム合金
- 武装：ビーム・ランサー、ビーム・トマホーク、3連装ビーム・キャノン×6、トライ・ブレード×3、

高い汎用性を獲得した ドム系MS

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発した汎用MS。おもに陸戦能力を重視して開発が進められたという。その外観は、旧ジオン公国軍の重MSのドムを思い起こさせるシルエットだ。

しかし、ドムが陸戦用と宇宙戦で機体を分けて開発したのに対し、本機の場合、宇宙空間でも運用が可能という、汎用性の高い機体となっている（一説には旧ジオン公国軍のドム系の開発者が携わっていたという話も）。

武装は、両腕に内蔵された3連装ビーム・キャノンをはじめ、ビーム・ランサー（ビーム・トマホーク兼用）や、自律型の投擲兵器、トライ・ブレード

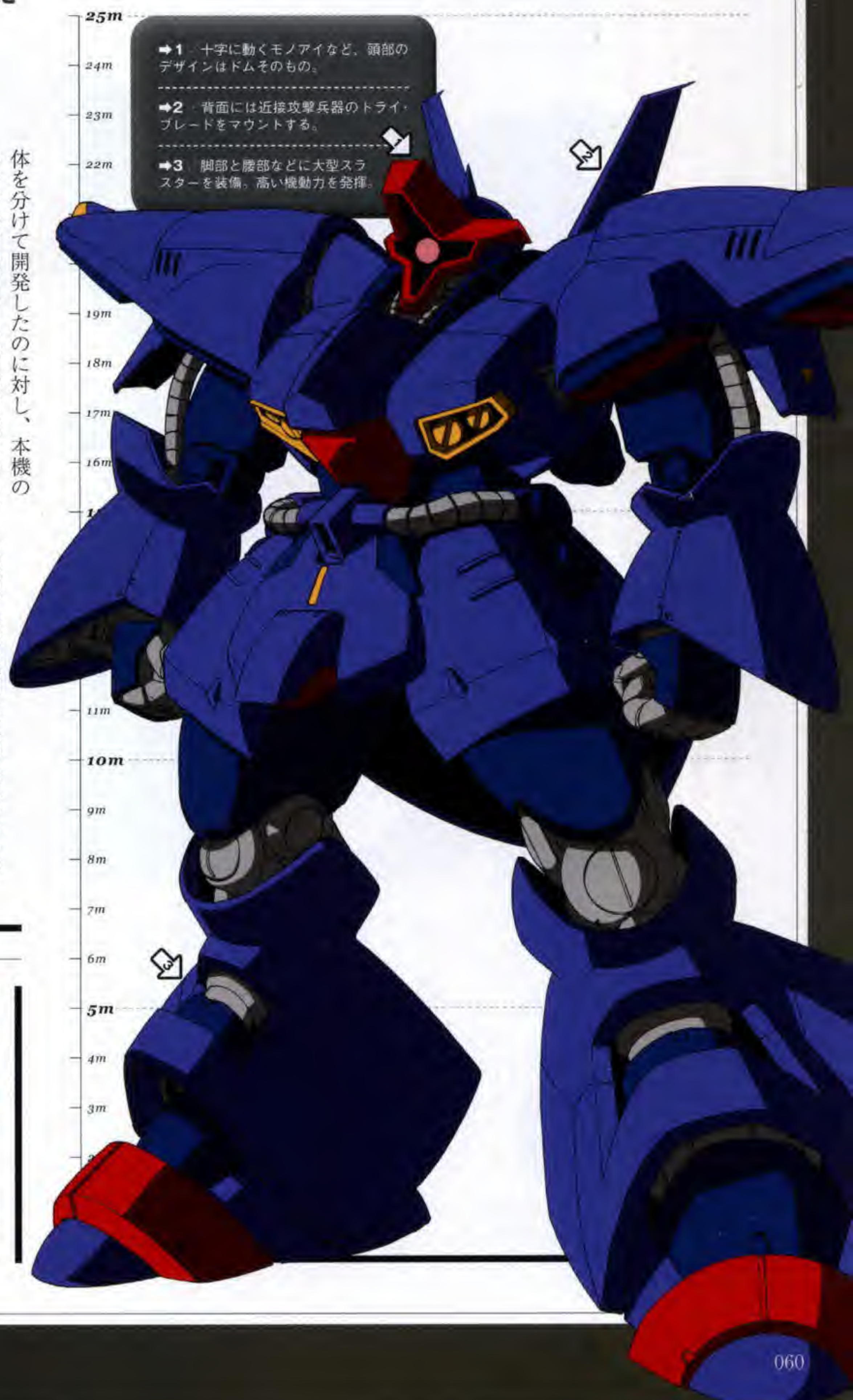
Pilot

主なパイロット



オウギュスト・ギダン

グレミー・トトの監視役としてハマーン・カーンが送り込んだ士官。上昇志向が高く、グレミーの野心に感化され同調。ドライセンを駆りガンダムチームを追い詰めるが、もう少しのところで撃破された。





ZAKU III AMX-011 ザクⅢ

Spec

- 頭頂高：21.0m ●本体重量：44.2t ●ジェネレーター出力：2,150kW
- スラスター総推力：172,600kg ●装甲材質：ガンダリウム・コンポジット
- 武装：ビーム砲（口吻部）、ビーム砲×2、ほか

ジオンの栄光再び！ ザクの正統後継機

小惑星アクシズに逃亡したジオン公国残党や技術者たちによって、開発された汎用MS。名前が示すとおり、かつてのジオン公国軍の名機、MS-06ザクⅡの純正後継機を念頭に置いて開発された。

その開発コンセプトは、ザクのような汎用機を目指し、次世代の主力機に相応しい性能を付与するというものだった。しかし、同時期に開発されていたドーベン・ウルフが採用されたというストーリーがあるが、果たして真実はそうなのだろうか？ なぜなら、ジオン公国系の主力MSの最終機体はゲルググだ。ならば、本来はゲルググの

後継を目指すのが本筋はず。しかし、本機はザクの名前を冠している。少数勢力のアクシズ（ネオ・ジオン）にくつも主力MSを開発する余裕はないはずだ。ゆえに、本機は伝説的MSの名前にあやかっただけ、戦意高揚のフラッグシップモデルではないか？ という推論も成り立つ。いずれにせよ機体の生産は少数に留まっている。

25m

24m

23m

22m

21m

19m

18m

17m

16m

15m

14m

13m

12m

11m

10m

9m

8m

7m

6m

5m

4m

3m

2m

1m

→1 / ザクを彷彿とさせるデザインが各所に取り入れられている。

→2 / ビーム兵器が主体。携行するビーム・ライフルはR・ジャジャと同型。

→3 / 出力、推力など基本性能や武装も含めてどれも高い水準を持つ。

Pilot

主なパイロット



ラカン・ダカラン

一年戦争の生き残りで歴戦のパイロット。ニュータイプにも劣らないMS操縦技術を持つ。戦争の非情さを知るからか残酷な作戦や戦闘も冷徹に遂行する。コロニー落としの際にザクⅢに搭乗した。



ZAKU III CUSTOM

AMX-011S

ザクⅢ改

Spec

- 頭頂高：21.0m ●本体重量：44.3t ●ジェネレーター出力：2,860kW
- スラスター総推力：211,500kg ●装甲材質：ガンダリウム・コンボジット
- 武装：ビーム砲×2、ビーム・サーベル×2、30mmバルカン×2、専用ビーム・ライフル、ほか

ザクⅢを徹底改修した 高機動タイプ

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発したザクⅢの改良型。

ドーベン・ウルフと何かと比較されるザクⅢだが、汎用性そのものは高く、設計面もそれなりの余裕があった。そうしたザクⅢに改造を施したのが本機

だ。おもにスラスターの増強により、高い機動性の実現を目指したという。本体重量は、ザクⅢから微増した程度で、推力は20%以上のアップだから、本体にもかなり手が加えられたはずだ。いわば高機動型ザクⅢだ。

一見するとアンバランスな機体性能だが、搭乗者が強化人間という点を考慮すると、的外れでもないのだろう。

つまり「数に劣る戦局を有利に進めるため、単機に過大な能力を負わせた」といえる。その実、内輪もめのグレミーの反乱時、マシユマー搭乗機がドーベン・ウルフ数機を相手に戦闘を行い、相手を道連れにして爆散。本機の性能の高さと危うさを実証することになったのは、皮肉な結果といえる。

Pilot

主なパイロット



マシユマー・セロ

失態の責を問われ強化人間化の措置を受ける。当初はリゲルグでテストをしていたが、グレミーが起こした内乱時にはザクⅢ改に搭乗。スペース・ウルフ隊との戦闘で壮絶な死を迎えた。

➡1 頭部にバルカン砲を設置。近接戦闘時の威嚇や牽制用。

➡2 左肩のアーチャーには機雷を発射するハイド・ボンブ投射機を装備。

➡3 プロペラントタンクは標準型の8倍の容量。リアスカートも大型化。



DÖVEN WOLF

AMX-014

ドーベン・ウルフ

Spec

●頭頂高：22.0m ●本体重量：36.8t ●ジェネレーター出力：5,250kW ●スラスター総推力：87,300kg
●装甲材質：ガンダリウム・コンボジット ●武装：ビーム・サーベル、30mmバルカン砲×2、隠し腕（ラカン専用機のみ）、メガ・ランチャー兼ビーム・ライフル、対艦用大型ミサイル×2、インコム、ほか

一般兵用サイコミュを 搭載した主力MS

ニュータイプ能力を持たない一般兵でも扱えるサイコミュ兵器（準サイコミュ）を実装したMS。

こうした準サイコミュ装置の研究は、ハンマ・ハンマなどでも行われているが、本機に搭載されている装置などは、

グリプス戦役時に入手した、連邦軍のガンダム Mk・Vをベースにする（入手経路などは不明）。一説には同戦役で鹵獲したサイコ・ガンダム Mk・IIも研究の参考にしたといわれる。

第一次ネオ・ジオン戦争では、ラカン・ダカラン率いるMS部隊のスペー
ス・ウルフ隊へ配備されるなど、それ
なりの数が生産された。

その後、小惑星アクシズが連邦軍に
接收されると、そこに残っていた機体
はアナハイム・エレクトロニクス社に
渡り、シルヴァ・バレットの開発ベース
になったという。

また一部は木星圏や小惑星パラオに
落ち延びて『袖付き』の機体として運
用されるなど、数奇な運命を辿ったM
Sである。

Pilot

主なパイロット



ラカン・ダカラン

スペース・ウルフ隊の隊長として同隊を率いた。グレミーが起した反乱に同調し、ハマーン派と対立。マシュマのザクⅢ改を撃破するが、その後のフルアーマーZガンダムとの戦闘で戦死。

→1 背面には準サイコミュ兵器のインコムなどを搭載。

→2 腹部メガ粒子砲はメガ・ランチャー用の接続コネクターを兼ねる。



GEARA DOGA

AMS-119

ギラ・ドーガ

Spec

- 頭頂高：20.0m ●本体重量：23.0t ●ジェネレーター出力：2,160kW
- スラスター総推力：54,000kg (14,000kg×2、13,000kg×2) ●装甲材質：チタン合金セラミック複合材
- 武装：ビーム・ソード・アックス、ビーム・マシンガン、グレネード・ランチャー、シュトルム・ファウスト

第二次ネオ・ジオン戦争の ネオ・ジオン主力MS

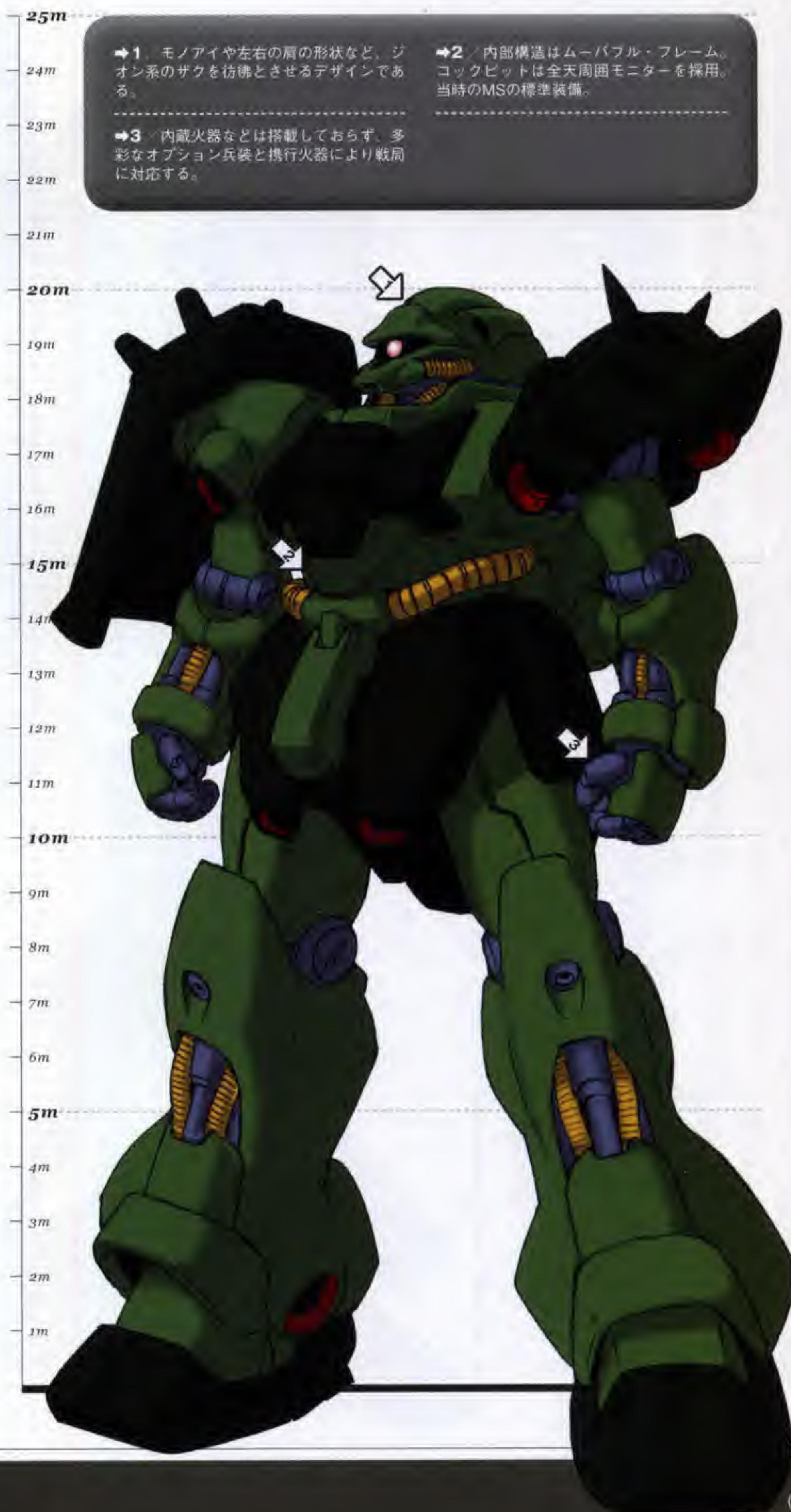
第二次ネオ・ジオン戦争、いわゆる「シャアの反乱」において、新生ネオ・ジオンの主力機となったのがギラ・ドーガだ。

開発はアナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社によって行われたが、一

➡1. モノアイや左右の肩の形状など、ジオン系のザクを彷彿とさせるデザインである。

➡2. 内部構造はムーバブル・フレーム。コックピットは全天周囲モニターを採用。当時のMSの標準装備。

➡3. 内蔵火器などは搭載しておらず、多彩なオプション兵装と携行火器により戦局に対応する。



説によると原型機は第一次ネオ・ジオン戦争終結時には、すでに完成していた、かなり早い段階で、ロールアウトしていたともいわれる。

しかし、その設計思想は、当時のMS開発の流行であった、機体に極端な機能を付加し大型化する、俗にいう「恐竜的進化」の方向性には行かず、MS本来のバランスを追求した非常にオー

ソドックスなコンセプトであった。当然ながらA.E.社の技術やノウハウも相対注入されていると見るべきだろう。

A.E.社でもジオン寄りと言われる同社のグラナダ工場では100機ほどが生産され、一部は指揮官機となり、82機が実戦に投入されたという。ラプラス戦争時には、『袖付き』仕様へと改装されている。

Pilot

主なパイロット



レズン・シュナイダー

ネオ・ジオンMS隊の隊長。優れた指揮官で、高いMS操縦技術を持つが、ニュータイプや強化人間に対して強いコンプレックスを感じている。ラー・カイラム襲撃時に戦死した。

AMS-119 ギラ・ドーガ レズン・シュナイダー機

ネオ・ジオンMS隊隊長のレズン・シュナイダーの機体。指揮官機用にブレード・アンテナを頭部に装備。それ以外は一般機と差はない（携行兵器は専用のビーム・マシンガン）。また、ジオン系組織の伝統として、エースパイロットにはパーソナルカラーの使用が許されている。



AMS-119 ギラ・ドーガ （『袖付き』仕様）

主力MSとしてギラ・ズールを運用する『袖付き』だが、決して絶対数が足りているわけではない。親衛隊やエースパイロットには、優先的に新鋭機（ギラ・ズールなど）を配備しているものの、不足分を補うため第二次ネオ・ジオン戦争時代の被災を免れた機体も現役機として戦線に数多く投入されている。組織名を象徴するように機体前腕に袖の意匠を施しているのが特徴だ。



AMS-119 ギラ・ドーガ重装型 （『袖付き』仕様）

ギラ・ドーガの長距離砲撃戦用の派生機。背部バックパックの下段プロペラントタンクは、ランゲ・ブルーノ砲のマウントに改装され、2基の巨大なプロペラントタンクと冷却ユニットを装着。実体弾兵器のランゲ・ブルーノ砲の口径は200mm。超長距離からの一撃で敵を撃破する破壊力を持つ。後にビーム兵器へと改修され、ランゲ・ブルーノ砲・改としてギラ・ズールのオプション兵装に採用された。





GEARA ZULU

AMS-129

ギラ・ズール

Spec

●頭頂高：20.0m ●本体重量：21.8 (22.3) t ●ジェネレーター出力：2,470 (2,760) kW
●スラスター推力：62,100 (74,520) kg ●装甲材質：チタン合金セラミック複合材 ●武装：ビーム・ホーク、ビーム・マシンガン、シュツルム・ファウスト、ほか ※ () 内の数字は観戦隊仕様。

ギラ・ドーガの後継機として 開発された汎用MS

ギラ・ズールはギラ・ドーガの後継機として開発された汎用MSである。開発元は引き続きアナハイム・エレクトロニクス社が担当。基本的な設計開発は第二次ネオ・ジオン戦争時にはほぼ終了していたが、実戦配備は戦後と

なった。
ネオ・ジオンの残党が『袖付き』に統合される中、本機の導入予定も継承され、同組織に配備された。ギラ・ドーガの改良型といわれるが、確かに性能面も15%ほど向上しているものの、額面通りに評価するのは難しい。
そもそも組織として弱体化した相手から「どうやって開発資金などを回収

するのか?」、そこに何がしかのメリットがなければ、企業としての折り合いはつくまい(ましてや相手はテロ組織だ)。
そう考えると、正直なところ本機の真実の姿は、ギラ・ドーガの改良型という側面もあるだろうが、むしろ廉価版のマイナーチェンジ機といった可能性もゼロではないのである。

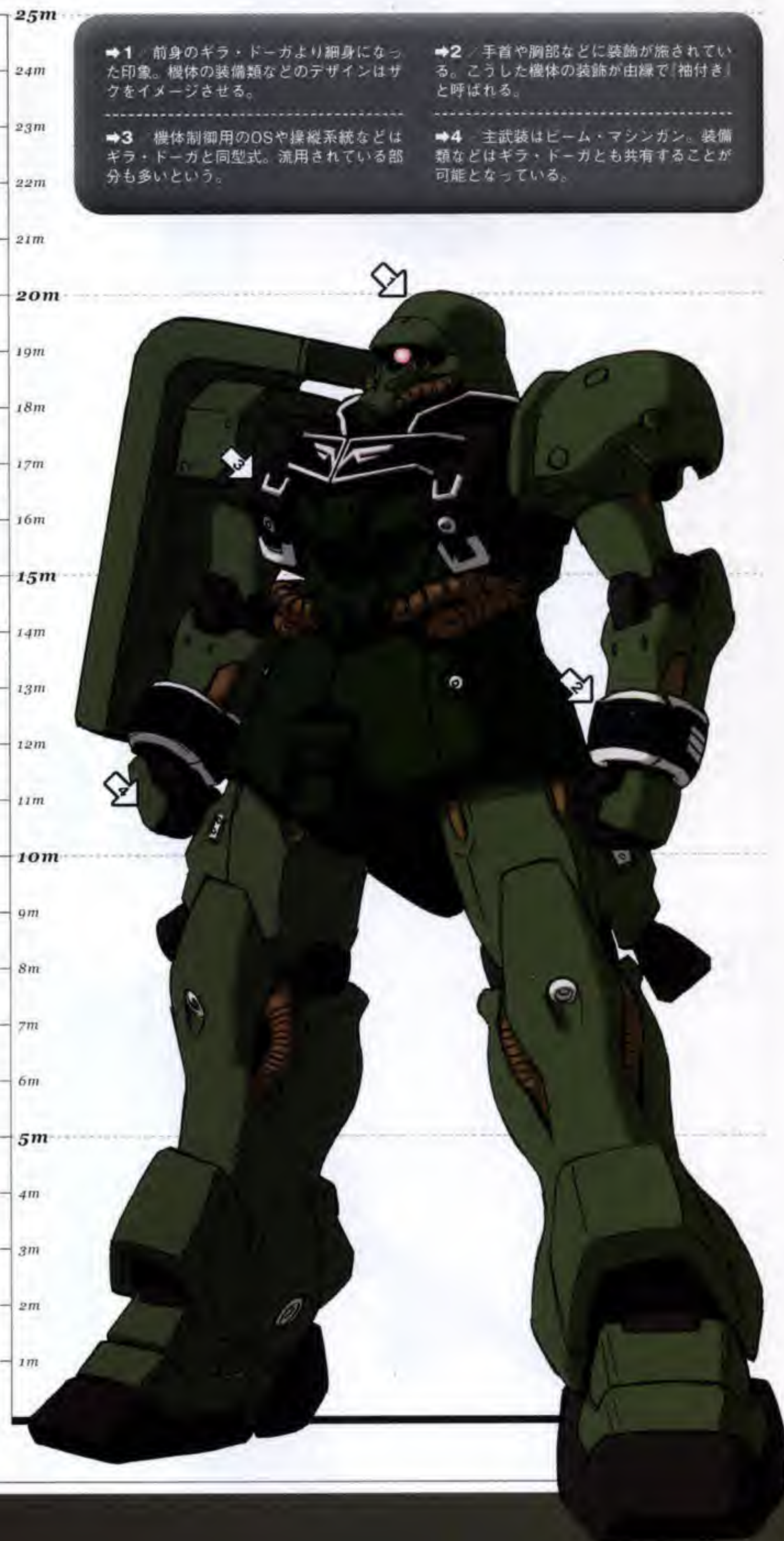
Pilot

主なパイロット



ギルボア・サント

「袖付き」のガランシエール隊所属のパイロット。妻子持ち。ユニコーンガンダムとシナンジュの戦闘中に、シナンジュを庇う形で、ユニコーンガンダムのビーム・マグナムに撃たれて爆散した。



➡1 前身のギラ・ドーガより細身になった印象。機体の装備類などのデザインはザクをイメージさせる。

➡3 機体制御用のOSや操縦系統などはギラ・ドーガと同型式。流用されている部分も多いという。

➡2 手首や胸部などに装飾が施されている。こうした機体の装飾が由縁で『袖付き』と呼ばれる。

➡4 主武装はビーム・マシンガン。装備類などはギラ・ドーガとも共有することが可能となっている。

AMS-129
ギラ・ズール
親衛隊機
アンジェロ・ザウパー
専用機

親衛隊隊長のアンジェロ・ザウパーの専用機。一般の親衛隊機と比べてもジェネレーター出力やスラスター推力は高い。フル・フロンタルに随伴する以外に、大型の装備（長距離砲撃用のランゲ・ブルーノ砲・改やビーム・ショット・ライフルなど）を扱う支援任務を想定しての改良だろう。ラプラス戦争時、アンジェロは本機で実戦に参加しているが、後にローゼン・ズールへ乗り換えている。



AMS-129
ギラ・ズール
親衛隊機

フル・フロンタル直属の親衛隊専用のギラ・ズール。外観の違いは頭頂部にブレード・アンテナを装着し、両肩ともスパイクアーマーに改められている。一般兵の機体と比べて、ジェネレーター出力は2670kWと8%ほどアップされ、スラスター推力も74520kgと20%ほど高い設定だ。これは、親衛隊が随伴するフル・フロンタルの扱う機体に合わせた変更といえるだろう。



AMS-129M
ゼー・ズール

Spec

●頭頂高：20.3m ●本体重量：28.9t ●ジェネレーター出力：2,460kW
●スラスター推力：92,400kg ●装甲材質：チタン合金セラミック複合材
●武装：ビート・クロウ×2、ビート・ナイフ×2、ビーム・マシンガン×1

ギラ・ズールをベースに開発された局地戦用機。水陸両用MSとして、バラストタンクや潜水装置、推進ユニット（ハイドロジェット推進器、水中用フィンなど）を装備する。本来ならば組織規模的にも地球圏侵攻などを考える余裕のないはずの「袖付き」が、なぜわざわざ水陸両用型を開発したのかは謎である。もっとも地球の旧ジオン勢力に戦力を供与する必要から、専用設計でなく既存の機体を改造することで、安価に製造することを考えたのかもしれない。そうした案の一つがゼー・ズールであり、アナハイム・エレクトロニクス社に委託する形で開発が進められた。こうして開発された機体は、実際に地球圏で活動する旧ジオン軍残党支援のために派遣され、トリントン基地襲撃作戦に参加した。



ジオン系 勢力のMS 運用から 見える傾向

**戦力維持への飽くなき執念と
やりくりにした戦士たち**

一年戦争後、旧ジオン公国軍残党部隊に対して、地球連邦軍は掃討作戦や武装解除を実行し、小惑星帯に逃亡した一部を除き、ほとんどが無力化された、とされていた。しかしその実態は、勢力の無力化どころか、驚くべきことにMS部隊を集団運用が可能なのほどの戦力が残されている状況であった。

これは有史以来、戦争の常識では考えられないことである。その背景には、月の財界などのジオン公国寄りのスペースノイドや、地球の反地球連邦を掲げる民族ゲリラなどの援助があったといわれる。これを連邦政府が許していた背景は、一年戦争終戦時の連邦政府がいかに疲弊していたかの証左ともいえるだろう。

一年戦争の終結はジオン公国軍勢力の消滅とはならず、地球圏の各所やアクシズなどに一定の戦力を保持したグループが存続し続けた。ここでは第一次、第二次ネオ・ジオン戦争とラプラス戦争の期間、旧ジオン系勢力のMS運用について、実情などを振り返ってみよう。

構成・文／南波健一郎

やがて旧ジオン公国の勢力は散発的に連邦軍施設を襲撃するなど、少なくとも連邦軍を悩ます存在となっていく。そうは言うものの、旧ジオン公国の残存勢力のほとんどは、MSをはじめとする兵器（燃料、弾薬の類）の維持管理や調達には相当苦勞していたようだ。例えば宇宙世紀0088年の第一次ネオ・ジオン戦争期に、アフリカで活動

していたロンメル部隊などは、旧ジオン系MSに独自改修を加えた改造機体を運用し、アフリカ解放戦線の青の部隊などは、連邦軍から奪取した鹵獲機体を使っていた（一部には一年戦争期のMSのレプリカもあった）。また、宇宙世紀0096年のラプラス戦争時に活動していた旧ジオン残党軍の勢力も同じような状況だった。それでも、連邦政府の旧首都ダカールや、トリントン基地を襲撃し多大な被害を及ぼした。そ

うした戦力を維持していたのには驚かされるばかりである（襲撃部隊の中には、局地戦用の新型機が確認されている）。

ジオン残党MSを支えたのは 基礎工業力の高さ!?

戦後、少なくとも3〜15年の間、旧ジオン系勢力が自軍のMSを戦線で運用継続できたことは、ジオン系MSが汎用性に優れていただけでなく、故障や破損に対して冗長性を持ち、さらには連邦軍製の規格違いの部品を使うことも可能な柔軟性を持ち合わせていた、ということも考えられるだろう。

実際のところ、兵器、特にMSといった兵器は、メンテナンスの精度もかなり高いものが求められる。それでいて旧ジオン残党軍の機体は、急な出撃要請などによる戦闘へも対応が可能だった。こういう状態は、普段からのメ

ンテナンスが高いレベルで維持されていたからに他ならない。それは技術や補給の面だけでなく、運用する人員も士気が高く、かつ技術的にも高レベルであったことを物語る。旧ジオン軍残党が長らく反地球連邦の活動を続けられたのも、こうしたMSの機械のシステムとしての強靱さと、マンパワーに支えられていた面も大きいだろう。

最新兵器の開発運用には、高度な技術支援を必要とするイメージがあるが、ジオン系MSは設計思想の中に、あらかじめその運用に関しても、高い信頼性を持たなければならぬという観念があったのだろう。そして結果的にその恩恵を受けたのは、旧ジオン残党軍で、15年以上にわたって存在感を示した。歴史としては皮肉なことであるが、これによりジオン公国の工業力の高さが、図らずも証明されたともいえる。



ジオン系勢力のMS運用から見える傾向

現地改修タイプ

旧機体に大小様々な改修を加えたバリエーション機

旧ジオン軍掃討の手を逃れて地球上に隠れ家を確保した勢力では、その地域に対応して局地戦用に旧機体を改修する作業も行われたようだ。代表的なのがディザート・ザクで、これはザク・デザートタイプを基に他の機体の部品や奪った資材を使って改修された。

またネオ・ジオンのガルスJからは、ハイパー・ナックル・バスターを装備した砲撃戦用のガルスKや、装甲を外して軽量化による運動性能の向上と、ズサ用ブースター・ボッドを使用して高機動力を得た拠点強襲突破仕様のシュツルム・ガルスが開発された。

これらの機体は改修の結果としてもとの機体よりも性能を向上していたり、もとの機体にはない特性が与えられ戦線へ投入された。

【代表的なMS】



MS-06D
ディザート・ザク



AMX-101K
ガルスK



AMX-101E
シュツルム・ガルス

継続使用タイプ

旧機体をそのまま維持し作戦目的を限定して活躍

旧ジオン時代の機体をそのまま使用した部隊もあった。内部機器などを新しいものと交換したケースもあるようだが、基本的にこれまで維持管理してきた旧機体であった。

ダカール襲撃に参加したジュアッグは旧ジオンの水陸両用局地戦用MSだが、試作機であるのに稼働状態を維持できていたことは驚かされる。ベースとなったアッガイやその他の水陸両用機と共用部分が多かったのかもしれない。ヨシム・カークス少佐が搭乗したザクIのスナイパータイプは、ビーム・スナイパー・ライフル用の予備バレルを持っていたが、パーツなどの維持も大変なことだろう。ドラッツェはデラズ・フリードが開発した改造機だが、10年以上経っても「袖付き」などで使用されていた。

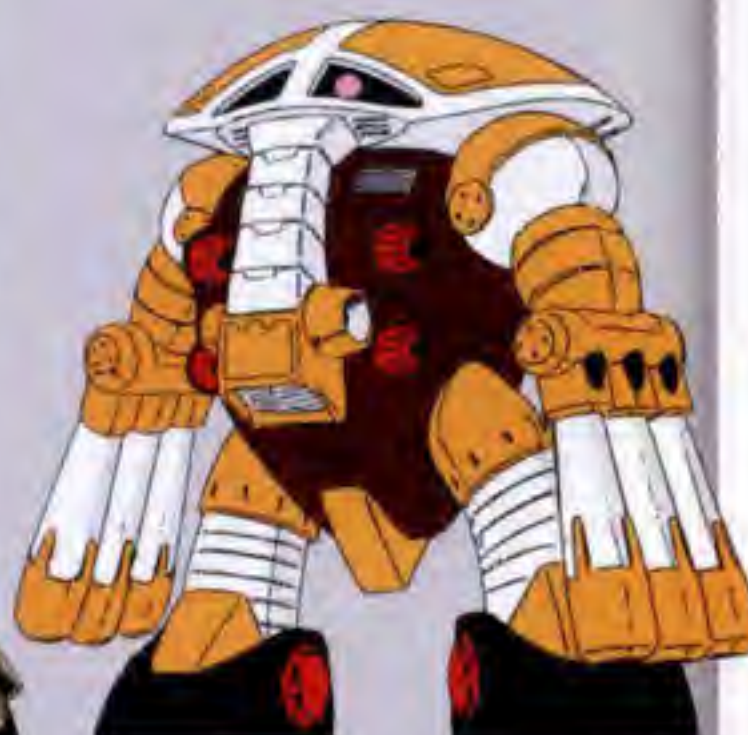
【代表的なMS】



MS-21C
ドラッツェ



MS-05L
ザクI・スナイパータイプ



MSM-04G
ジュアッグ

鹵獲タイプ

連邦軍基地などから鹵獲した前世代の機体も利用

ジオン残党にとって不幸中の幸いだったのが、連邦軍の軍縮と内部での対立が激化したことだったといえるだろう。結果、警戒も薄くなり、より活動を行いやすくなったはずだ。地方基地を襲撃して資材を強奪したり、戦闘で撃破した連邦軍の機体を鹵獲して戦力とするなども行われたようだ。

一方で旧ジオン勢力がマラサイや偵察用特殊機のアイザックなど連邦軍や旧ティターンズの機体を使用していた例もあった。これは地球圏の非主流派が、本末転倒なことに、思想を超えて手を結んでいたことも、伺わせる。

旧ジオン勢力とひとくちにいても、反地球連邦ゲリラという、大きな括りで考えるべきかもしれない。

【代表的なMS】



RMS-119
アイザック



RMS-108
マラサイ

ジオン残党が戦力としたMSはその運用によって大きく3つに分けることができる。第1のグループはジオンやネオ・ジオンの機体を改修するなど手を加えることで性能アップや維持をさせたもの。第2のグループは旧機体をそのまま使用しているもの。そして第3のグループは連邦軍から鹵獲した機体を改修するなどして使用しているものだ。ここでは代表的な機体を紹介しよう。

MOBILE ARMOR

ネオ・ジオン系 MA解析

モビルアーマーは極めて少数が実戦投入された特殊兵器である。そして第一次ネオ・ジオン戦争、ラプラス戦争まで、さらなる独特の進化を遂げるのだ。

高機動力と高火力のトレンドを 追いつけたMAの系譜

MSとはほぼ同時代（一年戦争期）に誕生したMAだが、高機動、高火力というコンセプトは従来兵器の範疇からはそれほど離れておらず、登場当初の評価は、革新的だった汎用兵器のMSほどではなかった。

一方、MSは実戦結果から、汎用兵器の限界も見え始め、改めてMAが注目されることとなった。この時、MAのコンセプトも練り直され、大まかに高機動、高火力型と、重厚な防御システムと火力を備えた要塞型の2つの方向、またはそのハイブリットで進化していった。機動性を確保するため機体は自然と大型化し、その空間的余裕

から、サイコミュなどの最新技術のテストベッドとなる機体もあった。

コンセプトが明確なMAだが、使用

される戦場は自ずと限定され、破格の性能を叩き出したMA・05ビグロでさえ少数生産に留まった。それでもソロモン戦に投入されたMA・08ビグ・ザムなどは、大型で機動性が悪く、稼動時間も短いというデメリットを抱えていたが、Iフィールドジェネレーターによる高い防御力と、大火力で艦隊規模の敵を殲滅する活躍を見せていた。実際のところ、こうしたMAの特筆すべき能力やコンセプトは、戦後の地球連邦軍の興味を大いに引いたようだ。記録は抹消扱いになっているが、軍部と民間企業が共同で推し進めた「ガンダム開発計画（GP計画）」でも、実

証の対象となっている。とはいえ、ビグロで撃ち出されたMAの高機動、高火力というコンセプトは、時代が進みMSの開発技術や性能向上により、次第に可変MSへと吸収される。

そしてジオン公国の流れを汲むアクシズ（ネオ・ジオン）の方が、MAに対する開発姿勢は積極的といえるだろう。そんなアクシズが打ち出した後継コンセプトは、ビグロとビグ・ザムの融合であった。デラーズ紛争時にアクシズが建造し、デラーズ・フリートに供与したA MA・X2ノイエ・ジールは、全高76メートルとビグ・ザムを超え、本体重量はMS・14ゲルググのわずか4・7倍。ジェネレーター出力は約53倍、スラスター総推力は約32倍。これにビグ・ザム譲りのIフィールド

U.C.0083

デラーズ紛争

ノイエ・ジール



U.C.0087

第一次
ネオ・ジオン
戦争

ジャムル・フィン



U.C.0093

第二次
ネオ・ジオン
戦争

a・アジール



U.C.0096

ラプラス戦争

ネオ・ジオング





MRX-011
サイコ・ガンダムMk-II

ティターンズが開発したサイコ・ガンダムの後継機。グリブス戦役で中破したものをネオ・ジオンが直獲回収し技術開発などに利用した。

グリブス戦役から続く第一次ネオ・ジオン戦争にかけては、その戦闘規模

技術の集大成として誕生した ネオ・ジオンのMA

ジェネレーターを実装。しかもMSN-02ジオングのように有線式クロージャーによるオールレンジ攻撃が可能だった（サイコミュは非搭載）。まさに圧倒的な能力だ。

それ以後、アクシズで実戦配備されたMAは、AMX-01Xジャムル・フインのみだが、MA開発の技術的検証は継続はされていたようだ。実際、第一次ネオ・ジオン戦争から6年後のラプラス戦争時、旧ジオン残党軍の手によって、ネオ・ジオンが設計したAMX-7シャンプロが完成している。

がそれほど大きくなかったこともあり、強力なニュータイプ専用機が主力の一角を占めた。また、可変機の登場で高機動タイプのMAとMSの境界は曖昧になった。先のジャムル・フインは、MAでもかなり小型であり、ニュータイプ専用機のNZ-000クイン・マインサは、頭頂高39・2メートルでもMSだ。そんな状況でもMAは命脈を繋いでいき、ひとつのMAの集大成といえる機体が、第一次ネオ・ジオン戦争とラプラス戦争に登場する。

新生ネオ・ジオンのNZ-333α・アジールは過去の機体を参考に開発されたニュータイプ専用MAで、拠点防衛用の性格も有した巨大機であった。もう一つは『袖付き』がラプラス戦争終盤に投入したNZ-999ネオ・ジオングだ。疑似サイコフィールドを発生させる新装備、サイコシャード発生器を搭載した実験的要素の強い機体であった。機体構成は、RX-78GP03ガンダム試作3号機のように、MSをコントロールドユニットにしており、同機を建造したアナハイム・エレクトロニクス社らしい手法といえる。

このようにMAは、ジオン公国によりそのコンセプトが生み出され、サイコミュなどの新技術を貪欲に取り込み、その姿やコンセプトを変化させていった。まさにMAとはジオンの魂を体現する存在でもあったのだ。

第一次ネオ・ジオン戦争の亡霊？ ハマーンの遺産、謎多きMA

AMA-X7

シャンプロ

Spec

- 全高：31.8m（陸上戦闘形態）
- 全長：77.8m（水中巡航形態）
- 本体重量：196.8t
- 搭乗者：ロニ・ガーベ



ラプラス戦争のトリントン基地襲撃戦などで、旧ジオン残党軍が使用したMA。第一次ネオ・ジオン戦争時に開発設計された機体で、その後、『袖付き』や反地球連邦勢力の支援を受け、6年の歳月を経て旧ジオン残党軍が完成させた。ニュータイプ専用機だが、ブラウ・プロのように一般兵が複数搭乗しての操作も可能である。ミノフスキー・クラフトとフィールドジェネレーターを推進に利用することで、水中でも優れた機動力を発揮。また大口徑メガ粒子砲や拡散メガ粒子砲、リフレクタービットなど、相対的な火力も高い。



Neue Ziel

AMA-X2

ノイエ・ジール

Spec

●全高：76.6m ●本体重量：198.2t ●ジェネレーター出力：75,800kW ●主スラスター推力：1,938,000kg
(359,000kg×1、204,000×1、125,000×11) ●装甲材質：ガンダリウム合金（二重装甲） ●武装：有線クロ
ー・アーム×2、メガ粒子砲×6、偏向メガ粒子砲×9、大型ミサイルランチャー×4、メガ・カノン、ほか

デラース・フリートに
送られた巨大MA

宇宙世紀0083年に起きた、ジオン公国軍残党のデラース・フリートによる武装蜂起（デラース紛争）に際し、アクシズから譲渡されたのが本機だ。

まず巨大な機体が目を引くが、有線式クロー・アーム、多数のメガ粒子砲

にミサイル、ビグ・ザム譲りのIフィールドジェネレーターといった攻守両面の充実した装備の数々は、一年戦争のジオン系MA開発技術の集大成といった趣である。

本機はある意味ビグ・ザムのコンセプトを洗練させた、次世代機に向けた

技術検証機といった位置付けだろうが、開発陣営（アクシズ）の台所事情を鑑みした場合、一年戦争時にベースとなる機体があり、その開発を続行し完成させた可能性もあるだろう。

「ソロモンの悪夢」の異名で知られたジオン公国軍のエースパイロット、アナベル・ガトー少佐の最期の乗機である。

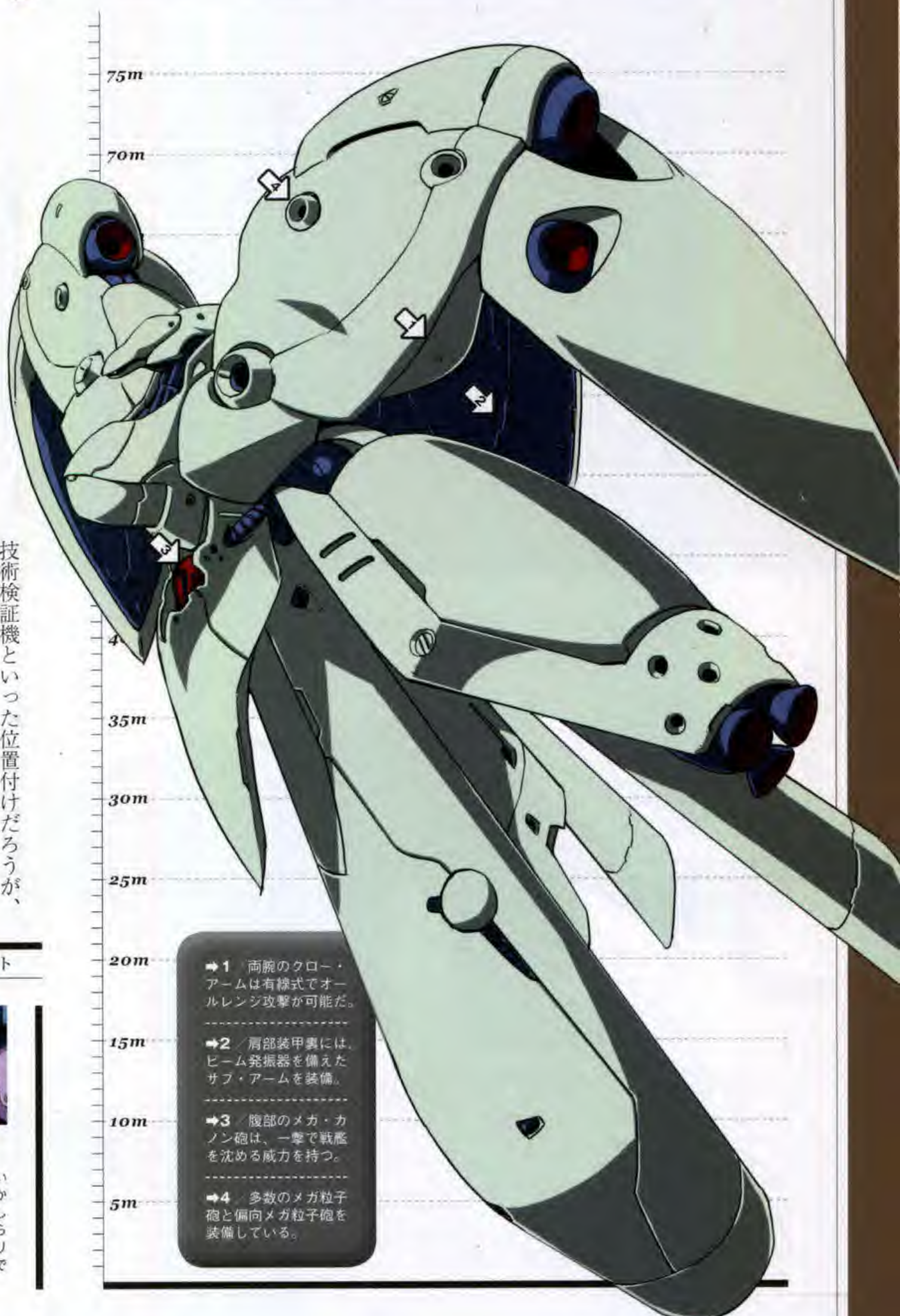
Pilot

主なパイロット



アナベル・ガトー

一年戦争のソロモン戦において、鬼神のごとき戦いぶりから、「ソロモンの悪夢」として連邦軍の兵士を震え上がらせた。戦後はデラース・フリートに参加し、星の屑作戦で中心となって行動する。



➡1 両腕のクロー・アームは有線式でオールレンジ攻撃が可能だ。

➡2 肩部装甲裏には、ビーム発振器を備えたサブ・アームを装備。

➡3 腹部のメガ・カノン砲は、一撃で戦艦を沈める威力を持つ。

➡4 多数のメガ粒子砲と偏向メガ粒子砲を装備している。



JAMRU-FIN

AMX-01X

ジャムル・フィン

Spec

- 頭頂高：15.0m ●本体重量：24.7t ●ジェネレーター出力：4,750kW
- スラスター総推力：82,600kg ●装甲材質：ガンダリウム
- 武装：ハイ・メガ・キャノン、2連装小型ミサイルランチャー×2、ビーム砲×2

→1 完成時の頭頂高は15mと、当初の予定よりかなり小型になった。

→2 ZZガンダム以外でハイ・メガ・キャノンを搭載している。MAでは唯一。

→3 メガ・ブースターを装備することでメガ・ファイター形態にもなる。



巡航形態

ジャムル・フィンの巡航形態。MAからMAへ変形する特殊な機体だ。巡航形態は、高速移動を得意とした宇宙戦闘機といえるだろう。

Pilot

主なパイロット



チーム3D

ジオン共和国の3人組パイロット。ダニー、デル、デューンの頭文字がDからチーム3Dと呼ばれる。ジャムル・フィンの高い機動力と三位一体のコンビネーションを活かした戦法を得意とする。

ハイ・メガ・キャノンを搭載
未完成の高機動・高火力MA

ジャムル・フィンは本来、MSとして開発を進められていた機体と言われる（諸説あり）。搭載予定のジェネレーターは強力で、完成時は旧ジオン公国軍のビグ・ザムに匹敵するサイズが想定されていたが、資材不足などから開発は一時的に中断。完成していた上半身に簡易マニピュレーターや脚部を取り付けて完成したのが本機といわれる。

要は戦力不足を補うための急造MAで、本来の姿ではない機体というわけだ。しかし本体中央に搭載されたハイ・メガ・キャノンは強力で、機動性を活かした高速戦闘は、それなりの成果をあげた。

またメガ・ブースターを装備すれば、さらなる高い機動力の獲得（メガ・ファイター形態）が可能である。



α Azieru

NZ-333

α・アジール

Pilot

主なパイロット



クェス・エア (バラヤ)

地球連邦政府高官、アデナウアー・バラヤの娘。シャアに惹かれて新生ネオ・ジオンに参加。その際、偽名としてクェス・エアと名乗る。ニュータイプとしての高い素養があり、α・アジールなどに搭乗。

→1 頭部にはモノアイ式センサーを採用し、後頭部にコックピットハッチがある。また可倒式の頭部カバーは、駐機時に使用する。

→2 肩部左右には、オールレンジ攻撃が可能な有線式5連装メガ・アーム砲と白兵戦用のサブ・アーム・ユニットを装備している。

→3 機体下部のシュツルム・スラスタ・ユニットは、プロペラントタンクと推進器を兼ねた装備。これを装着した状態の全高は108.26m。

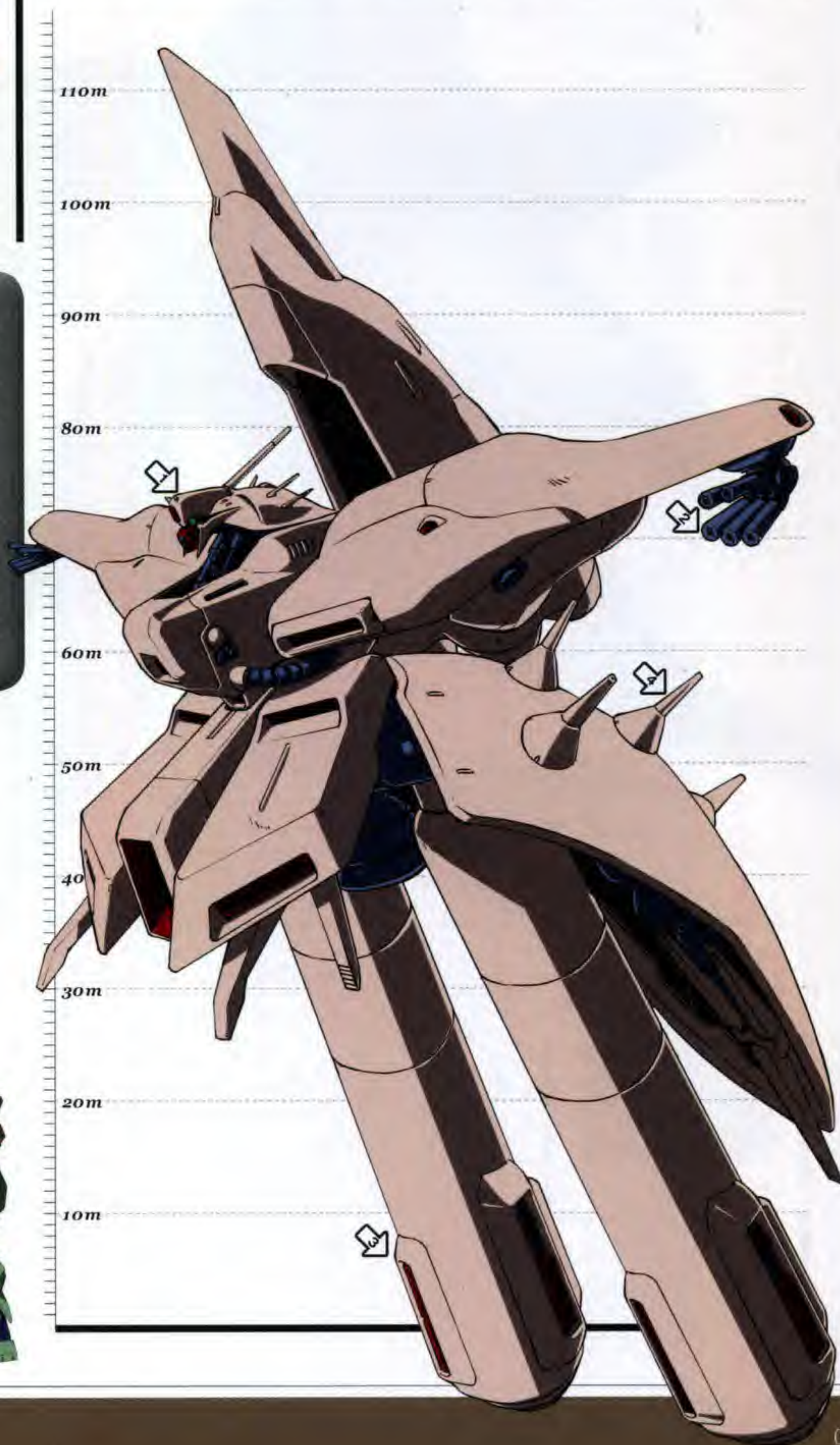
→4 リアスカート部分には大型のファンネルを搭載。前後のスカート裏には駐機するためのランディング・アームを備えている。

RGM-89
ジェガン
頭頂高
19m



Spec

- 頭頂高：58.4m ●本体重量：128.6t ●ジェネレーター出力：19,830kW
- スラスタ総推力：2217.500kg ●装甲材質：ガンダリウム合金
- 武装：2連装バルカン砲、メガ粒子砲、有線サイコミュ式メガ・アーム砲×2、大型ファンネル×9



MA進化の一つの到達点 ネオ・ジオンの ニュータイプ専用機

α・アジールは、第二次ネオ・ジオン戦争に投入されたネオ・ジオンのニュータイプ専用MAで、全高約108メートルという規格外の巨体を誇る。本機が極端に大型化してしまったのは、もちろん要求される性能を満たすためだろう。主兵装の大型ファンネルは、

当時の技術的流行に反し、ジェネレーターを搭載している（MSは通常充電式）。これは大型化してしまふものの、大火力を確保し、その稼動時間の延伸を図るためと思われる。本機の全高の半分を占める巨大なシュトルム・スラスト・ユニットは、迅速かつ速やかに戦場に展開させるための装備で、目的に到着した後は切り離される。一方で口吻部にも大型メガ粒子砲を装備している。これは収束率変更する

ことが可能であり、接近戦にも配慮がなされている。つまり本機は、ある程度の距離をおきながら複数の敵を同時に攻撃するという、一年戦争以来のコンセプトを引き継ぎ、極めてオーソドックスな構成のMAともいえるのだ。サイコミュがMSに搭載された時代とはいえ、その火力はMS戦ならば問題ないものであるが、圧倒的な大火力を必要とされる艦隊戦や要塞攻略戦に

は力不足だったはずで、本機はビグザム+エルメス、という能力を求めた結果ともいえるだろう。また旧ネオ・ジオンのクイン・マンサと型式番号が同列であるが、クイン・マンサはMSで兵器のカテゴリーは異なっている。おそらく、そのコンセプトや技術系統はある程度共有されていたのだろう。カテゴリー分けは単に大きさと機能によってなされたと見るべきだ。

Weapon

武器・装備



大型ファンネル

α・アジールのファンネルは充電式ではなくジェネレーターを内蔵。高出力のビームと長い稼動時間を獲得。



メガ粒子砲

頭部の口吻部にメガ粒子砲を備えている。また額部分には2連装バルカンを装備（側頭部に排気口あり）。

PICK UP!



実際の戦闘では連邦軍のロンド・ベル隊のエース、アムロ・レイの駆るνガンダムとも交戦している。ヤクト・ドーガとタッグで挑むものの、軽くあしらわれてしまう（ヤクト・ドーガは撃破）。経験の差なのか、搭乗者であるクエスの感受性が強すぎて、コントロールが乱れたためかは定かではないが、戦果はあげられなかった。



写真はネオ・ジオンの旗艦、レウルーラにけん引され運ばれるα・アジール。本体の頭頂高も60m近くあり、既存のMS運用艦の格納デッキに収まらないためだ。整備などを行うにしても、それなりのスペースを必要とする。そうまでしても、巨大MAを投入せざるを得ないネオ・ジオンの戦力不足が如実に表われている場面でもある。

Column

圧倒的な火力を持って敵を殲滅することを念頭に開発されたであろうα・アジールだが、実戦に投入された結果だけをみれば非常に苦い結果に終わったといわざるを得ない。

確かに連邦軍（ロンド・ベル隊）のMS部隊に対しては、圧倒的な火力で優位な戦いを展開する場面も見られた。しかし、ニュータイプ能力を有した敵に対しては、そうした効果は薄かった。相手が一年戦争時の英雄とはいえ、本機的能力は決して劣るものではなかったはずである。

では、なぜこうした事態を招いたのか？ それはサイコミュを搭載したニュータイプ専用機の宿命ともいえる。そう、ニュータイプ能力＝搭乗者のメンタル（感受性）に常に左右されるという不安定要因がついて回るのだ。実際、本機の最後は中破状態のリ・ガズィが放ったグレネードランチャーで撃墜されるという、あっけないものだった。

本機のパフォーマンスからすると考え難い予想外の結果だ（主兵装のファンネルは、ほとんど失われてはいたが）。だが、対峙した相手がニュータイプ能力ないしは、それに類するプレッシャーを放ち、搭乗者に影響を及ぼし、機能不全に陥らせたのなら、あり得る帰結といえる。

通常の兵器として考えた場合、こうしたサイコミュ兵装の持つ、一種の不安定さは、とてつもなくデメリットにみえる。しかし、そうした要因を黙殺してでも一騎当千的なニュータイプ専用機にするのは、宇宙世紀を通じて、持たざる組織の悲しき性なのかもしれない。





NEO ZEONG

NZ-999

ネオ・ジオング

Pilot

主なパイロット



フル・フロンタル

ネオ・ジオン残党「袖付き」の首魁。赤い彗星(=シャア)の再来と呼ばれ、卓越した操縦テクニックを持つ。ラプラス戦争のメガロニカ宙域における戦場でネオ・ジオングに搭乗し出撃した。

➡1 巨大なハルユニットに、コアユニットであるシンナージュをドッキングさせている。

➡2 両肩と腰部にサイコシャード発生器を格納。機体後部に展開し疑似サイコフィールドを発生させる。

➡3 胸部は、大口径メガ粒子砲とウェポンコンテナで構成。コンテナ内には、MS用の武器も格納可能。

➡4 左右と背中に4本あるアーム・ユニットには計30基もの有線式ファンネル・ビットを搭載。

➡5 機体下部は切り離し式のシュトルム・ブースター。

RX-0
ユニコーン
ガンダム
(デストロイモード)

頭頂高

21.7m



Spec

●全高：116.0m ●本体重量：153.8t ●ジェネレーター出力：35,660kw（測定不能）
●スラスター総推力：28,827,500kg（測定不能）●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：有線式大型ファンネル・ビット、肩部大型メガ粒子砲、大口径ハイメガ粒子砲、ほか ※（ ）内は最大稼働時



**ネオ・ジオンの亡霊!?
謎多き巨大MA**

シャア・アズナブルのネオ・ジオンの残党からなる『袖付き』が、ラブラス戦争の終盤に投入した超巨大MA、それがネオ・ジオングだ。機体形状は、一見一年戦争のニュータイプ戦用MS、ジオングに似ているが、実際にはシルエット以外の共通点は全くなく、象徴としての名前と思われる。また下半身

に増加推進用のユニットを装着する形式は、第二次ネオ・ジオン戦争のニュータイプ用MA、α・アジールと同様であるが、全装備状態の全高は116メートルと、α・アジールをも上回っている。その大きさは宇宙世紀に登場した単座の巨大機動兵器群の中でもトップクラスだ。本機を一言で表わすなら、まさに「謎」という言葉が相応しい。性能諸元などある程度明かされているものの、開発経緯やその目的につい

ては、判然としない部分や不明な点が多い。製造・開発はシナンジュを開発したアナハイム・エレクトロニクス社が行ったとされる。その目的も一説には「UC計画」で開発したユニコーンガンダムに想定外のアクシデントが発生した時の抑制用のカウンターパワーとされるが、UC計画自体もその全貌が明らかでなく、真実は定かではない。本機の最大の特徴であるサイコシャード発生器にしても、かつてVガンダ

ムが引き起こしたサイコフィールド発生現象、俗にいう「アクシズ・ショック」と同等の疑似サイコフィールドを発生させると伝えられるが、その全容も明らかになっていない。ただシナンジュのサイコ・フレーム増幅器という点はハッキリしている。フル・フロンタルの乗機として実戦投入されたが、機体そのものは失われ、真相は藪の中だ。ある意味、謎多き搭乗者に相応しい機体なのかもしれない。

Weapon

武器・装備



肩部大型メガ粒子砲

左右胸部の大型メガ粒子砲4門に、腹部にはハイ・メガ粒子砲と、大火力のビーム兵器を多数装備。



ファンネル・ビット

ファンネル・ビットの先端部にはビーム発振器があり、ビーム・サーベルのように使用することも可能。

PICK UP!



ユニコーンガンダムとの最終決戦、6本のアーム・ユニットで相手を拘束して、ファンネル・ビットを体に潜り込ませるのかと思いきや、ネオ・ジオングの装甲が展開して中のシナンジュがユニコーンガンダムに掴みかかる！どうやらフロンタルは、終始、対峙するバナージを懐柔しようと試みていたようだ（結果は失敗に終わるが）。



メガラニカ内部で「ラブラスの箱」を巡る攻防を続けるネオ・ジオング。対するはロンド・ベルのエコーズ隊。フロンタルは、ファンネル・ビットを巧みに操りエコーズ仕様のジェガンを次々とジャックして同士討ちをさせる。ネオ・ジオングには、自ら手を下さずとも（正確には攻撃）、敵を壊滅できる驚異の能力が秘められていた。

Function

変形形態



サイコシャード

シナンジュのサイコ・フレームを増幅して、疑似サイコフィールドを発生させる装置。本体から分離した発生器のパーツは、仏像の光背のような光のリングを形成する。



→サイコシャード発生器は、両肩部と腰部側面にそれぞれ格納されている。サイコシャード発生器を放出する際、肩部装甲は鳥の嘴のように展開。発生器は無線誘導で展開（原理は不明、サイコミュ誘導か）。

ネオ・ジオン製MSの迷彩

一年戦争後の新世代MSの迷彩を考える

モビルスーツ

「機動戦士ガンダム」シリーズの映像上では、モビルスーツ（MS）の塗装はいわゆる「設定色」のほぼ一種類である事が多い。しかし、アニメーションの世界を少し離れて宇宙世紀という世界で「実際に何が行われていたのか？」という事を考察してみると、MSは宇宙、地上など様々な場所で行動するからして、おそらく様々な状況にフィットさせるために多種多様な塗装や迷彩があったと考えることは少しも不思議ではない。むしろ、「宇宙世紀の世界で遊ぶ」ということを考えると、そういったことを想像するのも一つの楽しみ方といえるだろう。ということで、このページではネオ・ジオン系のMSの機体の塗装を考えてみたい。なお、ここに登場する機体の設定は、本誌独自に「それらしく」考えてみたものであり、いわゆる宇宙世紀の「オフィシャル設定」ではないことを付け加えておく。プラモデルなどを独自の塗装で表現する時の、参考などになれば幸いである。



資源小惑星
防衛迷彩

A

AMX-006 ガザD 第一次ネオ・ジオン戦争末期 後方部隊カラー

想定設定

ネオ・ジオンは、第一次ネオ・ジオン戦争開始時より多くの新型を試験運用し、量産配備が進むと、初期に前線に配備されていた機体は、後方へ回される機会が増えた。このため、防衛を主任務とする部隊では明度を落とした塗装や迷彩される機体が出てくるようになった。特に末期には内紛により見方識別の要素からも独自塗装が増えていくことになる。

塗装解説

戦争継続に必要な資源を確保するための資源小惑星の防衛部隊は、型落ちのMSが回されることが多く、補給や整備施設も十分ではなかった。少ない戦力の損耗を抑えるため防衛的迷彩を施され、暗色を用い明度を落とすことで小惑星などに同化させる塗装が多く見られた。

資源小惑星帯の防衛部隊に配備されていたと思われるこの機体は、パープル系通常塗装の一部をくすんだブルーへ塗り替えた本体に、濃淡2色のグレーを用いたドットパターンで小惑星帯を模した迷彩が全体に施された。機体ナンバーと思われる「02」が機体カラーと同色で数箇所入られている。ナックル・バスターに迷彩を施されたのはMA形態での機動力を生かした一撃離脱か、複数機で目標に集中砲火を浴びせるなど、生存率を上げる戦法を主としていたからと思われる。

B

AMX-101 ガルスJ 第一次ネオ・ジオン戦争中期 ダカール防衛隊カラー

想定設定

第一次ネオ・ジオン戦争において、ネオ・ジオン地球侵攻作戦用に開発されたガルスJは主力として投入され、主目標であったダカールを占拠。その後も同地に留まり侵攻拠点として強化するため強力な防衛部隊を配備した。

一部の部隊では、吸収した旧ジオン残党軍などが運用する現地で迷彩された機体に合わせて、迷彩が施される機体もあったが、その数は少なかったとされている。

塗装解説

グリブス戦役にて漁夫の利を得たネオ・ジオンは宇宙にて優勢を保っていたゆえか、第一次ネオ・ジオン戦争中盤まではMSの迷彩に消極的ではほとんどその例を見ない。しかし地球侵攻作戦実施時には地上の地勢に合わせた迷彩を施す例が散見されるようになった。

この機体はダカール防衛部隊の配備機体とされ、サンドイエローと薄いブラウンのベース塗装にブラウンとグリーンを斑点状迷彩が施されている。この迷彩は旧ジオン系MSに見られたパターンに近く、旧ジオン残党を傘下に加えた部隊の機体なのかもしれない。脚部に入られた赤緑付きブラウンの「104」は第1小隊の4号機を表し、4号機の「04」のみ肩部に白でステッカーにて入れられている。共同運用のズサも同様な迷彩を施されて配備されていたとされるが、詳細は不明だ。



アフリカ戦線迷彩

文・ニック木村
協力・ヤマザキ軍曹

C

AMX-102 ズサ 第一次ネオ・ジオン戦争後期 突撃部隊機カラー

想定設定

ガルスJとペアを組む支援用MSとして開発されたズサは、ブースター・ボッド装備による強襲作戦も念頭にあった。

ネオ・ジオン設立宣言後に士気高揚のため旧ジオン公国軍の伝統部隊を引き継ぐ部隊名が多数採用され、なかには突撃艇ジッコやガトルで使用されていた部隊名までもが復活、ズサ配備部隊の多くは伝統ある突撃部隊名が与えられたといわれている。

塗装解説

ネオ・ジオンを二つに別けた内紛勃発後、宇宙でも敵味方識別のため独自塗装や迷彩を施す機体が増えていった。ズサ系はその支援用との用途から、防御系の塗装や迷彩をされることが多く、明度の低いカラーが用いられていたといわれる。

この機体はパープルを主に施されていることから旧ジオン宇宙突撃軍の伝統部隊名を持つ、強襲を主とする部隊所属機と思われる。ズサ本体はグリーンとパープルに塗り分けられているだけだが、ブースターは基本塗装のうえに濃いブルーとブラックによるダットパターン迷彩が施されている。脚部には赤字で「314」、ブースターは迷彩が上塗りされている「302」で、書体も違う機体ナンバーが入っていることから、本体は補充用機体なのかもしれない。



伝統の
宇宙突撃軍カラー

D

AMX-109 カブール 第一次ネオ・ジオン戦争後期 海洋侵攻部隊機カラー

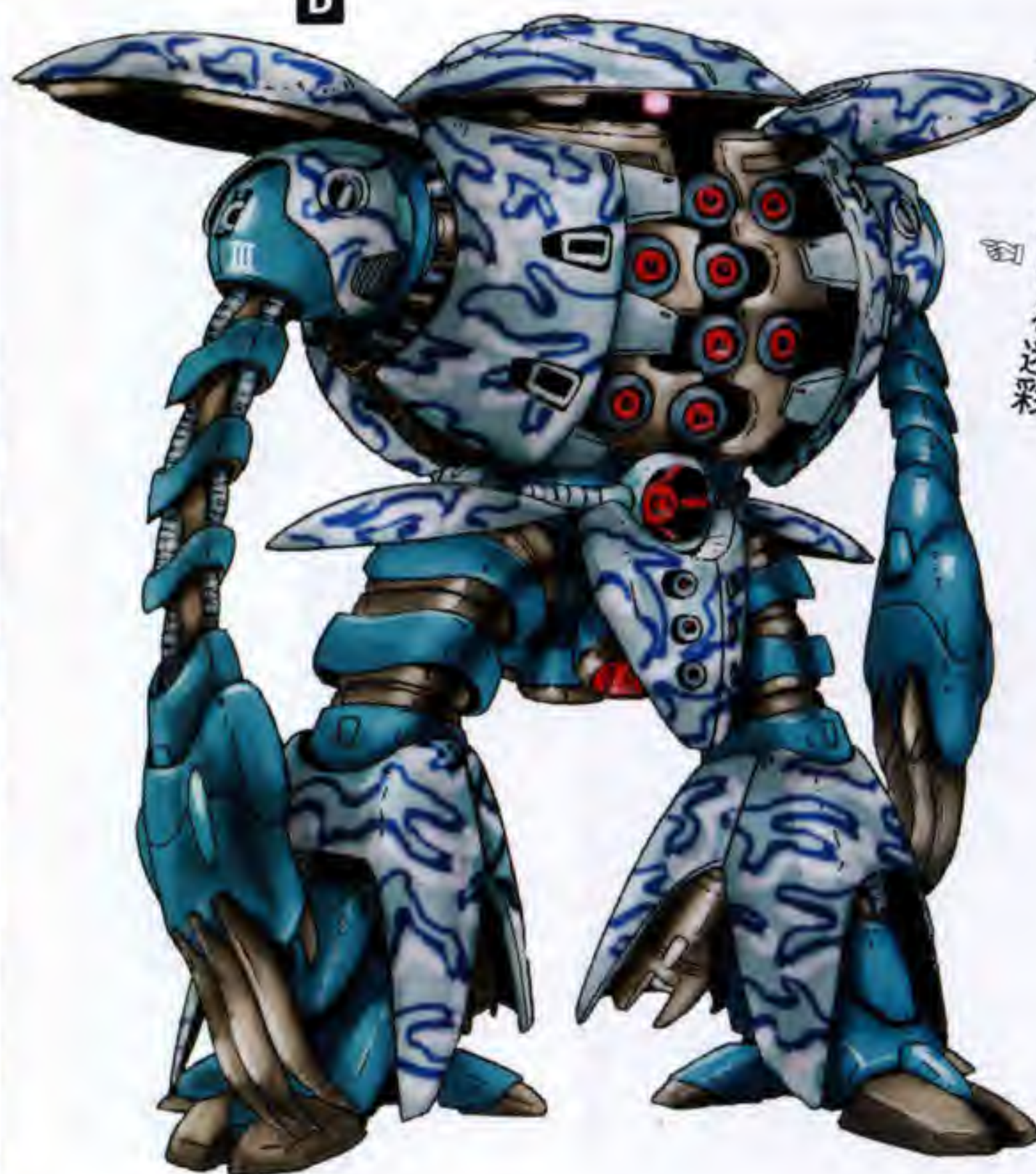
想定設定

地球侵攻作戦用に開発された水陸両用MSのカブールは、海の深いアクシズで開発されたために、その性能が懷疑された。しかし、実際に投入されると高性能を発揮し主戦場であった大西洋海域において侵攻作戦を捕佐した。一年戦争以後、疲弊した連邦軍の海上戦力は回復が遅れ、さしたる脅威にはならず、地上目標制圧の支援を行ったとされている。

塗装解説

海上からの強襲上陸作戦を主に展開したカブールは、遅滞なく上陸地点へ接近するため、洋上における迷彩効果が重視され、濃淡2色のブルーを用いた通常塗装のまま運用されることが多かったとされており、上陸後の地上戦闘を考慮された塗装はまず見られなかった。

この機体も通常の濃淡2色のブルー塗装のまま、水中移動形態時に外装となる薄いブルー地部分に濃いブルーと薄いグレーの2色で蛇行した線状の迷彩を施し、水面下の移動時を重視した塗装となっている。肩部に白字のローマ数字で「Ⅲ」と入っているが部隊マークなのか機体ナンバーなのかは不明。ネオ・ジオンのMSについては内紛のうえに敗退したこともあり、不明な点が多く、特に地球侵攻作戦は短期間で終了し撤収されたため、活動状況など詳細を知る手がかりも少ない。



海面下を
遊弋する迷彩

E

AMA-01X ジャムル・フィン 第一次ネオ・ジオン戦争末期 偽装強襲部隊用カラー

想定設定

グリプス戦役時に登場した可変MAは大幅な機動向上を見せ、続く第一次ネオ・ジオン戦争ではサイコミュ搭載によるオールレンジ攻撃と大出力エネルギー兵器搭載の2つが主要素として進められた。

ジャムル・フィンは後者を主眼として開発、紆余曲折の末の急造感が高いが、その火力と機動力、様々なオプションによる多用途性の評価は高い。

塗装解説

その開発経緯から試作機の域をでなかったゆえに少数生産に終わったとされる。ある程度まとまった数が共闘関係にあったジオン共和国軍へ供給され、ブルーを基調塗装とした機体が知られている。ネオ・ジオンでも少数使用されたようだが詳細は不明である。

末期に突撃部隊にて運用されたとされるこの機体は、メガ・ブースター装着形態においてその外見から戦闘艦艇を模した偽装塗装がなされ、ジオン艦艇に多く見られたレッドとオレンジの本体に、ブラウンで幾何学模様の迷彩が施されている。コーション部分などはイエローが配され側部のブースター部分にはこれもジオン艦艇に見られた2番艦を表す2本線が入れている。敵MSパイロットに機動力の劣る艦艇との油断を誘い、遠近感が掴みにくい宇宙空間ならではの迷彩だが実験的に施された観が強い。

E



艦艇塗装で
偽装した迷彩

F

AMS-119 ギラ・ドーガ 第二次ネオ・ジオン戦争前期 地球進攻演習機カラー

想定設定

固体性能の特化を追及した時代が終わり、生産性重視へ立ち返ったギラ・ドーガは、その汎用性からあらゆる作戦に投入される可能性があった。連邦軍への攻撃を示唆した時点でMSによる地球進攻作戦もあり得ると思わせ、本命の5thルナ落下攻撃を偽装することに成功するなど、戦略面で存在効果を発揮した。

塗装解説

サイド3のコロニー内においてMSによる地球進攻作戦用の演習を行い、秘匿する体制を取りつつ情報リークなどで巧みに操作した結果、5thルナ落下作戦を成功に導いた。一応、本命である落下作戦失敗時の補完作戦との位置付けもあり、本気度の高い演習による真実味も欺瞞成功の一因でもあった。

その演習に参加されていたとされるこの機体は、従来塗装の薄いグリーンと新たにサンド系カラーの2色を本体塗装とし、その上にブラウンを加えた3色で迷彩パターンを描く、簡易であるが明らかにチベット地域を意識した迷彩が施されていた。胸部に白字で入れられた「2-」は第2小隊の指揮官機を表すとされ、下脚部外側には指揮官マークの「<」のみが大きく入れられている。なお、ランドセルは実際に開発した地上用の物に換装されていたとされるが詳細は不明である。

F



実施されなかった
地球進攻作戦カラー

G

AMX-014 ドーベン・ウルフ 第一次ネオ・ジオン戦争末期 狙撃部隊機カラー

想定設定

サイコミュ搭載MSとしてドーベン・ウルフやゲーマルクなどが相次ぎ開発されたが、折からの内紛により、それぞれが対立陣営に投入されている。

ドーベン・ウルフはニュータイプや強化人間ではなくともサイコミュ兵器を扱えるとされたが熟練パイロット級の技量が必要で、有力なパイロット向けに少数が生産されたとされる。

塗装解説

ネオ・ジオンの内紛においてグレミー・トト派が使用したとされるドーベン・ウルフ。サイコミュ兵器や各種の内装火器に高い機動力を備えた機体として、切り札である強化人間部隊の補佐を有力パイロットにて担い、親衛隊的な運用をされたとされるが、一部は一般部隊へも流れたようである。

この機体はグレミー派が自陣営カラーとしたとされるグレーを基本塗装とし、その部分に濃いグレーとブルーの2色を重ねた迷彩を施しその境界はドット処理されている。極力暗い塗装とし暗礁空域やデブリの影などに潜みインコムによる待ち伏せ攻撃を常套とした狙撃部隊所属機といわれている。パイロットを特定するパーソナルマークも機体ナンバー等のマーキングもないなど、複数機を擁する部隊ではなかったか機体によって違う塗装であったかなど詳細は不明である。



待ち伏せ攻撃用の
ダークカラー

H

AMS-129 ギラ・ズール ラプラス戦争 特殊作戦機カラー

想定設定

ギラ・ドーガをブラッシュアップしたギラ・ズールは凡庸な性能ながら規模の小さいネオ・ジオン残党の『袖付き』では主力として運用され、ゲリラ戦を展開し連邦軍を悩ませた。旧ジオンMSを思わせる外見、塗装を採用しつつ、その運用から極力地味な塗装を使用し、少数機による破壊工作などに投入された。

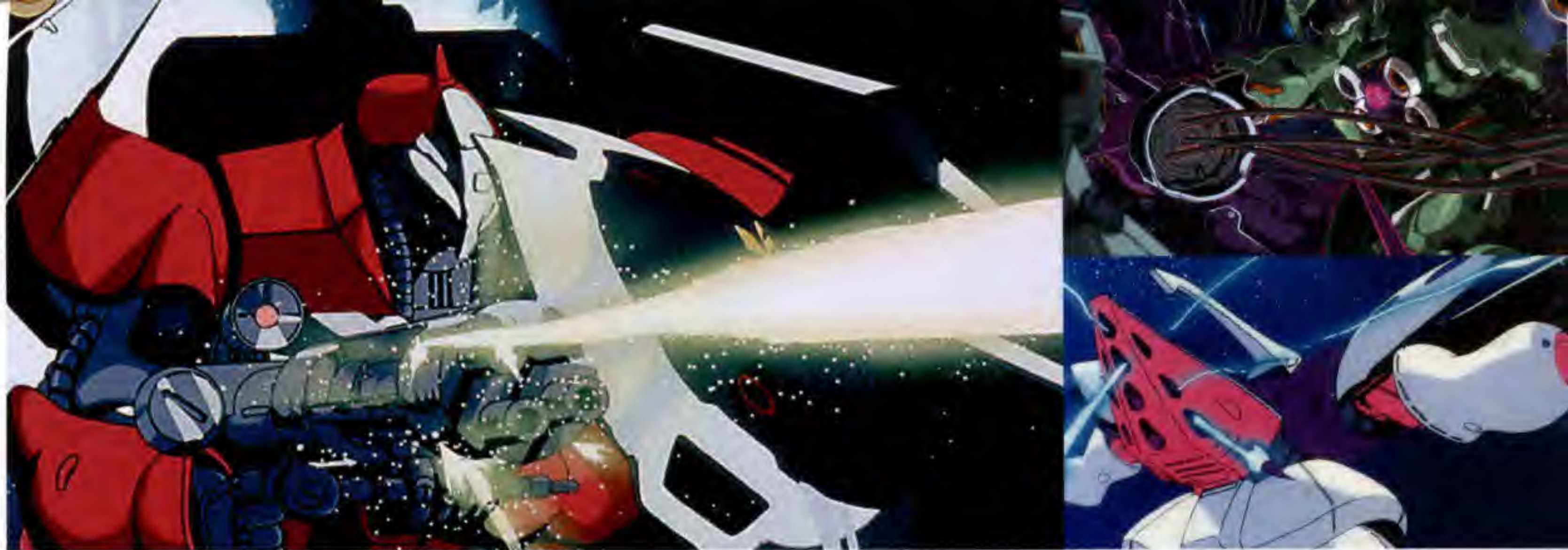
塗装解説

小規模組織にしては他の反連邦組織と連携し、宇宙圏のみならず地球上でも活動を行った『袖付き』のMSであるが、規模や資金面から運用上の制約も多く、特殊な迷彩機などは少数であった。逆に『袖付き』の証である各部の装飾は使用MSのすべてに入れられ、その存在を誇示することで、宣伝効果を狙っていたとされる。

この機体は通常機と全く異なる塗装がされており、宙間建造物を背景に意図したと思われる塗装は、グレーと薄いブラウンがかかったグレーの2色をベースとし、薄いブルーグレーとブラウングレーの2色でパネルライン状の迷彩をかけている。ナンバーの類いはなく、『袖付き』の装飾は入っているがブラック1色でサブデュード化され目立たない塗装である。連邦施設や重要目標の破壊などに投入された特殊作戦機とも、各地で独自行動を取る残党系MS部隊を支援する、顧問団的な部隊機で、作戦中は監視役に徹していたともいわれている。



人工物の背景を
意識した迷彩



宇宙世紀0087年～0096年の

ネオ・ジオン系 MSの武装

宇宙世紀0080年代の後半から0090年代の中盤にかけてのアクション、ネオ・ジオン、『袖付き』といったジオン系MSの武装は、一見トリッキーなテクノロジーが集まっているように見えるが、実際にはどうなのだろうか。それらを俯瞰してみると以外な事実が見えてくるのだ。

「ネオ・ジオンの武装①」 ビーム・ライフルなどの ビーム兵器

宇宙世紀0080年代、すなわち一年戦争後のMSの武装を概略すると、メガ粒子砲¹ビーム兵器の実装、ならびに能力向上がもつとも重要なテーマであったことが分かる。

これはもちろん一年戦争における地球連邦軍のRX-78ガンダムが装備していたビーム・ライフルがもたらした効果の影響が大きいといえるだろう。一撃で戦艦クラスの主砲なみの威力を持つ携行式のビーム・ライフルは、従来の艦載機の火力の域を大きく超えるものであった。MSにビーム兵器を装備させることは、それだけで高機動の移動砲台をもつに等しく、その戦略的価値と効果は絶大だといっていい。

一方でMSにビーム兵器を装備するにはいくつか障害があった。一つは、このビーム・ライフルは、MSのジェネレーター出力の余力に依るところが大きく、宇宙世紀0080年代前半の機体の場合、機体性能を優先すると、出力的な余力はあまりなく、MSは十分にビーム兵器を扱えないケースが多かった。また、ビーム・ライフルのシステムであるエネルギーCAPシステムは、ジェネレーター以外にもエネルギーが必要であり、弾数に限りがあるばかりでなく、その数自体の少なさも問題であった。

この2つの課題は宇宙世紀0080年代後半になると、MSに搭載されるジェネレーターの出力向上や、カートリッジ式のエネルギー・パックの開発などにより次第に解消されていった（おおむねジェネレーターの出力が2

000kW程度あれば、安定してビーム・ライフルなどの携行式ビーム兵器を使用できるようだ）。同時にこの時代では、ビームの集束や出力調整もできるようになっており、常にスペック上の最大出力を維持する必要がないほどの性能向上を果たしている。

強力な火力を誇った ガザ系のナックル・バスター

そしてこの頃のMSの武装は、このビーム兵器をいかに進化させるか、というのがテーマの一つであった。各陣営ともに様々な兵器を考案している。アクシズ（ネオ・ジオン）においては、グリプス戦役当初の主力機であったガザシリーズのナックル・バスターが知られる。これはビーム兵器をジェネレーターに直結する方式で、さらなる火力を実現しようとするものであった。

ガザシリーズ最初の制式機であるAMX-003ガザCは、ジェネレーター出力が1700kW程度と、当時の主力MSでは標準的な数値だが、ジェネレーター直結型のナックル・バスターの出力は6・7MWと極めて高かった（Zガンダムのビーム・ライフルの5・7MWよりも高い）。この方式は機体の動力性能にも影響を与えそうなものだが、本機の場合、スラスタ推進力を頼みに、高機動での一撃離脱戦法や、集団運用による火力の集中など、

年代別に見るファンネル／ファンネルコンテナの形状

グリブス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争の頃は、ファンネルコンテナのファンネル搭載数は増加傾向だ。第二次ネオ・ジオン戦争期になると数は減っている。クシャトリヤは特殊な例と考えられる。

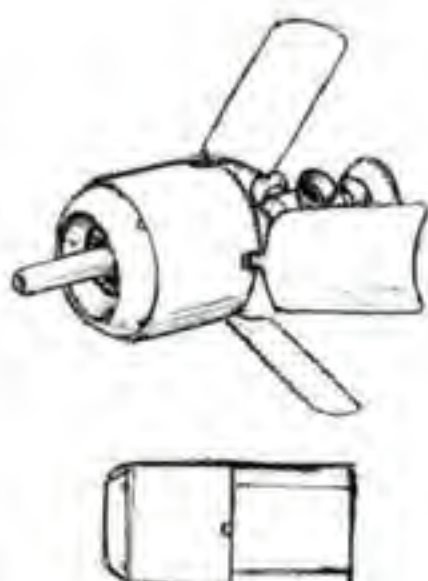
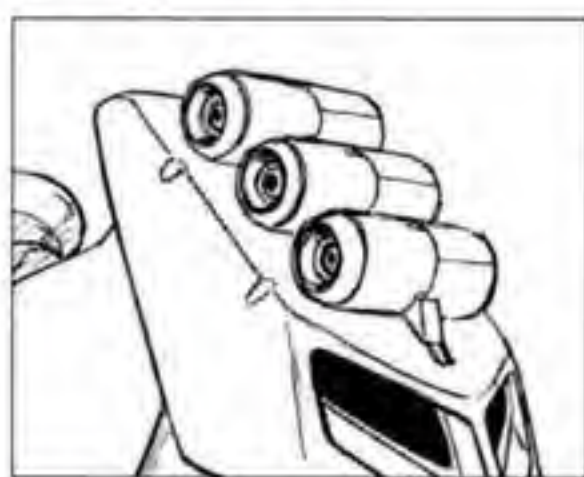
U.C.0087

キュベレイのファンネル／ファンネルコンテナ



U.C.0093

ヤクト・ドーガのファンネル／ファンネルコンテナ



U.C.0096

クシャトリヤのファンネル／ファンネルコンテナ



ある意味移動砲台として使用することがコンセプトであったと考えられるため、火力偏重の割りきった設計も、陣営の状況を鑑みると納得できるものだ。

ビーム兵器の新種 マシンガン系

第一次ネオ・ジオン戦争時のネオ・ジオン系MSのビーム兵器は、ガザシリーズのナックル・バスター以外、携行式のビーム兵器は専用型が多かった。かろうじてAMX・011ザクⅢとAMX・104R・ジャジャ、AMX・107バウとAMX・009ドライセンが共通のビーム・ライフルを使用していた程度。これは当時の陣営の実情や運用効率という意味を考えると驚くべき点である。ただ、ビーム・ライ

フルなどの携行式ビーム兵器に関しては、他のMSでも様々な形式やタイプが散見されるゆえ、実用化に向けたトライアルの最中という可能性も考えられる。一方、同時代のネオ・ジオンでのビーム兵器全般で、面白いトライアルを行っている例がある。それは、ドライセンに搭載された3連装ビーム・キャノンだ。名前こそキャノンとあるが、実際の効果などを見ると、後の時代に登場するビーム・マシンガンそのものである。そもそもビーム兵器とは、その光跡はある程度長く、エウーゴのMSZ・006Zガンダムはビーム・ライフルによる斬撃、いわゆる「ギロチンバースト」のように、射撃中に銃口を動かすだけで、ある程度のマシンガン効果（斉射ないしは、掃射）はあ

ったようである。それを3連装ビーム・キャノンでは、その一発の光跡を短い間隔で撃ち出すことで、マシンガン効果を狙っていた。言い換えれば、ビームのエネルギー使用量を抑えつつ、より多大な効果を発揮するより多くの弾が撃てる、ということだろう。ドライセンの場合、エネルギー・バック方式かは不明だが、内蔵式という不利を克服する効率的な考え方といえるだろう。

実際、こうした方法は、それなりの成果もあつたようで、シャアの興した新生ネオ・ジオンの主力機であるAMX・119ギラ・ドーガの携行するビーム兵器は、ビーム・マシンガンが標準装備される。さらに強力なビーム・ガトリングガンは、MSN・03ヤクト・ドーガなどで実装され、時代が移りラプラス戦争時の『袖付き』のMSでも採用されている。ビーム・ガトリングガンは砲身を増やすことでさらなるマシンガン効果を狙ったもので、その効果は絶大だった。

「ネオ・ジオンの武装②」 ビットからファンネルへ サイコミュ兵器の発達

こうしたビーム兵器の進歩は、ネオ・ジオン系MSの武装にとって、一つの光明をもたらした。それは、ファンネルの登場である。

もともと、ニュータイプ専用機が装備する攻撃ユニット（サイコミュによる遠隔操作砲台）は、ビットと呼ばれるもので、登場時期がビーム兵器の黎明時代だったこともあり、各々に核融合炉（ジェネレーター）を内蔵していた。はじめてビットの実用化に成功したジオン公国軍のMAN・08エルメスは、搭載するサイコミュ機器の大きさもあり、機体も大型化し、付属するユニットも大型という、きわめて運用が難しい兵器であつた。

しかし、時代が進みビーム兵器やジェネレーター関連のテクノロジーレベルが上がると、新たな方式が生み出される。それがファンネルだ。ファンネルは母機でエネルギーチャージをする充電式の遠隔操作砲台で、大幅な小型

化に成功した。親機に搭載されるサイコミュ関連の機器類も小型化され、MSサイズに収めることができるようになった。

これはサイコミュ兵器が通常MSと一体運用が可能になるということ、戦術面での選択肢が大幅に増加するということでもあった。AMX・004キュベレイには10基のファンネルが搭載され、AMX・004G量産型キュベレイになると30基ほどに増加する。

ファンネルの数と機体性能の関係

増加傾向にみえるファンネルも宇宙世紀0090年代に製造された新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用機では、一転して減少傾向を辿る。MSN・03ヤクト・ドーガやMSN・04サザビーなどはファンネルの数が6基に減じている。おそらく、ファンネルのビーム兵器もMS本体のエネルギーをある程度食うので、ファンネルの搭載個数とジェネレーター出力のバランスは重要な問題だったはずで、それらを考慮した上での個数減とみるべきだろう。

これに対して大型機であるNZ・00クイン・マンサのファンネル搭載数の30基は、万単位のジェネレーター出力を持つ機体として、適切な数字だったといえるだろう。ファンネルのビームの出力はビーム・サーベルよりも

少し高い程度だが、1700kW級の量産型キュベレイと、20000kW級のクイン・マンサのファンネル搭載数が同じというのは、キュベレイに無理があったといえるだろう。

一方で『袖付き』が使用したクイン・マンサの発展型といえるNZ・666クシャトリヤも、大出力のジェネレーターにファンネルを多数搭載するという手法だ。ラプラス戦争の終盤では、NT・Dやサイコ・ジヤマーといった対ニュータイプ兵器対策として、搭載するファンネルを廃し（戦闘で多くを喪失したというのもある）、サイコミュを使ったミサイル型の誘導兵器（ファンネルミサイル）に換装している。

「ネオ・ジオンの武装③」 一般兵型有線式サイコミュ兵器・インコム

この時期にもう一つ進化を見せたのが、有線式サイコミュ兵器である。これは一年戦争時のMAN・03ブラウ・ブロが嚆矢で、その後MSN・02ジオングに継がれた武装だ。この有線式サイコミュの特徴は、無線式よりも一見非効率的に見えるが、ある意味、革新的といえるものだった。

ビットやファンネルといった無線式のサイコミュ兵器は、その操作にニュータイプの発する強い感应波を必要とする。しかし有線式の場合、それと比

シールドに武器を内蔵するということ

歴史を遡るとシールドを一種のウェポンキャリアとして使用するのには、一年戦争のガンが起源だろう。連邦軍でもこうしたシールドの利用法は見られるが、火器類を内蔵するのはジオン系の機体が圧倒的だ。攻撃による誘爆などの危険性も考えられるが、それなりの効果があるのかもしれない。



U.C.0088

ハンマ・ハンマの
メガ粒子砲
内蔵シールド

U.C.0088

パウのメガ粒子砲
内蔵シールド



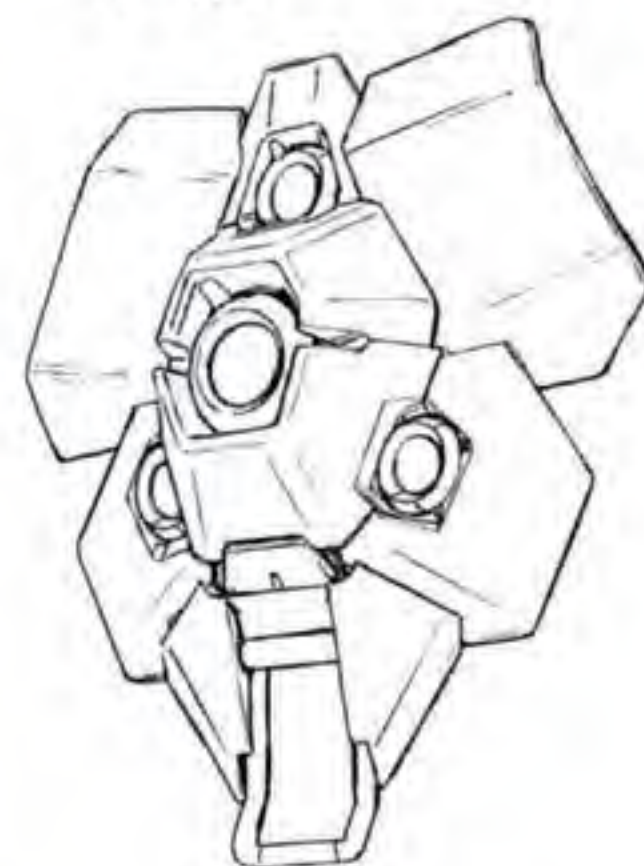
U.C.0093

ヤクト・ドーガと
シールド



U.C.0096

ローゼン・ズールの
シールド



べて極めて低い値で稼働する。これは言い換えればニュータイプ能力の低い（もしくは無い）一般兵レベルでも、感应波増幅装置を使用すれば、オールレンジ攻撃が可能ということになる。サイコミュ搭載MSを戦略の中心に据えるアクシズ（ネオ・ジオン）は、ニュータイプパイロットの数が問題であったが、この有線式サイコミュ兵器は、その抜本的な問題を解決する福音であ

ったのかもしれない。

この一般兵用でも扱える準サイコミュを搭載した有線式サイコミュ兵器は、インコムとも呼ばれ、実はその技術は地球連邦軍のオーガスタ研究所で開発実用化されたものだった。同所の開発したORX・013ガンダム Mk・Vをベースに（機体の入手経路は不明）、ネオ・ジオンが開発したAMX・014ドーベン・ウルフにもインコムは採

時代別に見る 有線式サイコミュ兵装

有線式サイコミュ兵装の特徴は、ニュータイプ能力の有無に関わらず、ある程度扱えるという点。ネオ・ジオングに装備されているファンネル・ビットは、名前こそ無線式サイコミュ兵装だが、アーム・ユニットから有線式で稼動する変わり種だ。

U.C.0088

ドーベン・ウルフ
有線式サイコミュ兵装

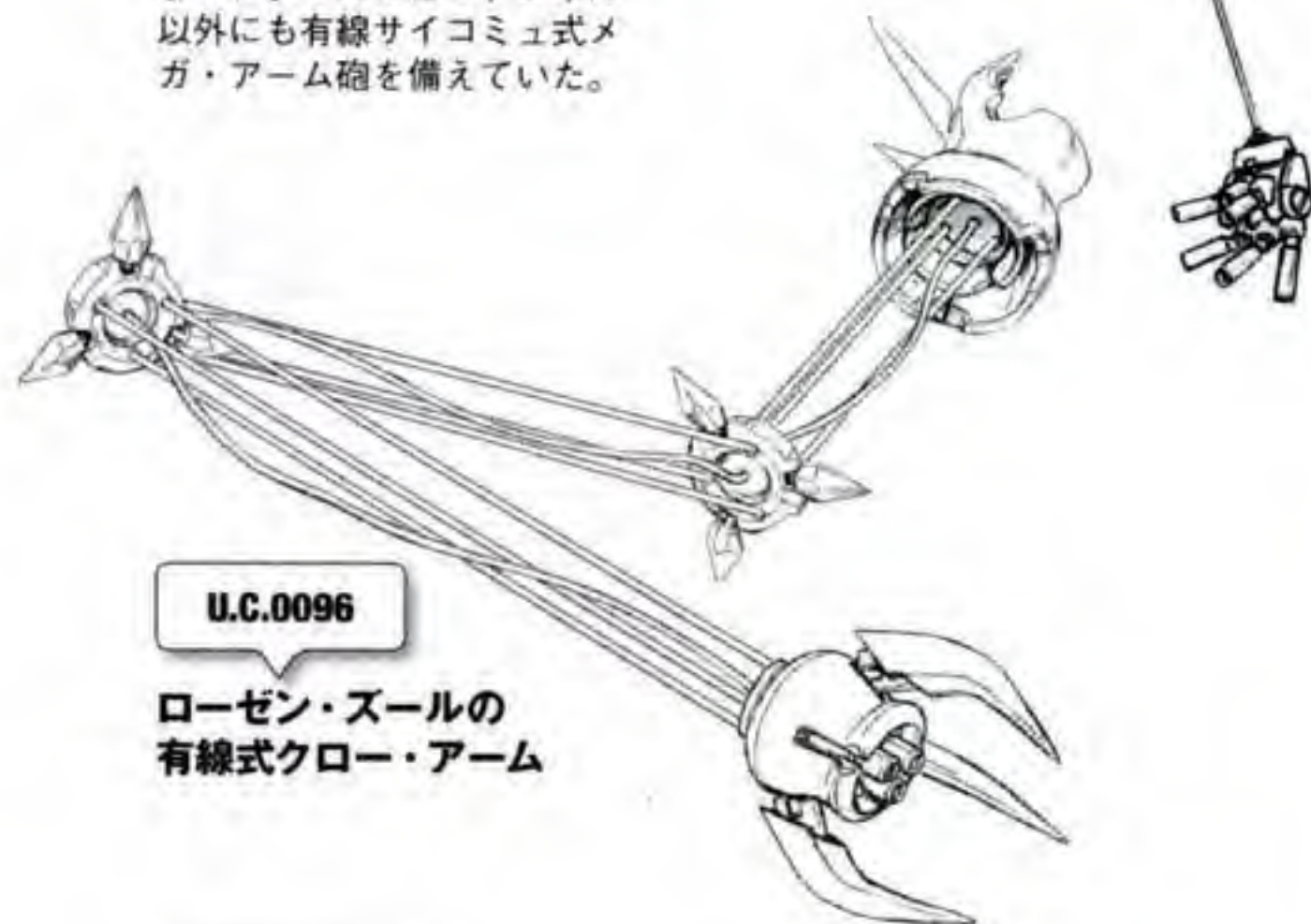


インコム

U.C.0093

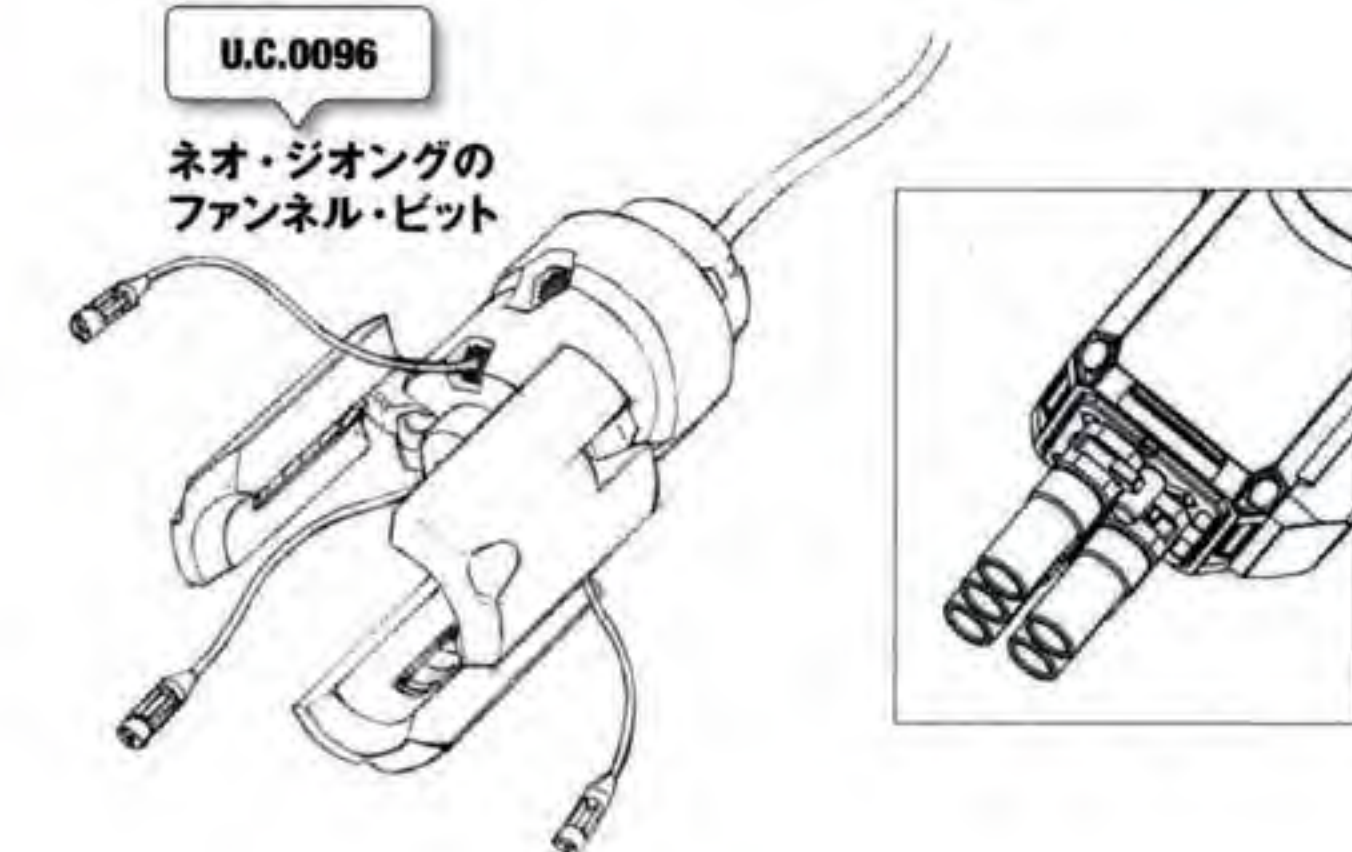
α・アジールの
有線式5連装メガ・アーム

α・アジールにはファンネル以外にも有線サイコミュ式メガ・アーム砲を備えていた。



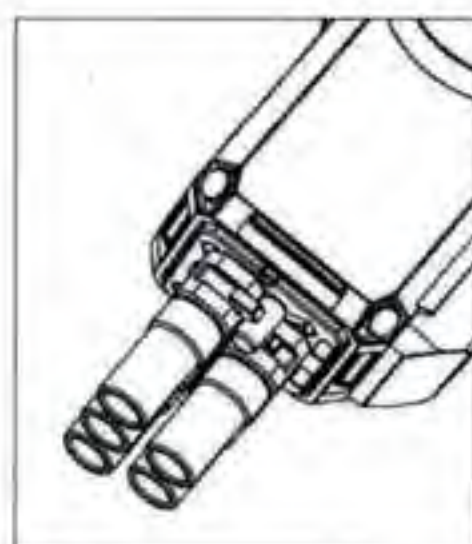
U.C.0096

ローゼン・ズールの
有線式クロー・アーム



U.C.0096

ネオ・ジオングの
ファンネル・ビット



用され、ネオ・ジオンの主力機となったことから、こうした技術をネオ・ジオンがいかに重要視していたか、ということが分かる。

しかし、準サイコミュ兵器の問題は、通常のサイコミュ兵器よりも動きが単純にならざるを得ないということだった。実際にこのインコムは、後のその使用例はほとんどなかった。

有線式サイコミュ兵器自体は、第二次ネオ・ジオン戦争時、新生ネオ・ジオンのNZ-333α・アジールにも採用されているが、これは補助兵器としてだった。何かの原因でファンネルの使用が不可能になった時の保険ともいえるだろう。また『袖付き』での

YAMS-132ローゼン・ズールなどでも採用例があるが、やはりその使用は特殊用途に限られた。

「ネオ・ジオンの武装④」 ジオンの伝統!? シールド内蔵型火器

宇宙世紀0080年代以降、ネオ・ジオンのMSの武装で、もう一つ進化したのは武装付きのシールドだ。

これは一年戦争時のジオン公国試作MSであるYMS-15ギャンにその源を見ることが出来る。ギャンは手持ちのマシンガンやライフルといった射撃用携行火器がない、という大胆な発想のMSで、火力不足を補うため盾に武

装を施していた。しかし、さすがに防御を司る盾に火器類を内蔵するのは危険とも考えられる。つまり、これは従来イメージされる盾でなく、一種の武装キャリアと見るべきだろう。

後年登場するネオ・ジオン系のMSでも、盾に武器を内蔵する機体がいくつか存在した。これはギャンの実体弾兵器と違い、ビーム兵器を搭載した例が多い。これは盾の損傷時の被害（誘爆）などを考慮しての措置であったり、時代による機器類の進歩と考えられる。さらに、エネルギー・バックといった予備兵装などは、もともと盾の裏側に装備されるケースが多く、これの有効使用を考え一体化を図ったのかもしれない。

ない。一方、地球連邦軍側のMSでも、盾にマイクロミサイルやグレネード・ランチャーを内蔵する例も多く、被弾や誘爆といった影響はそれほど問題ではなかったのだろう。

いずれにせよ宇宙世紀0080年代後半～0090年代における、ネオ・ジオン系MSの武装は、実質的には一年戦争でジオン公国が作り上げた技術の発展型に、当時の技術トレンドを加えたものであった。そういった意味では一年戦争ほどの技術的イノベーションはなかったといっていいたいだろう。

ネオ・ジオンという少数勢力の組織力・開発力を考えると、それはごく当たり前のことかもしれない。

AMX-014

MSZ-010

ドーベン・ウルフ vs ZZガンダム

第一次ネオ・ジオン戦争のごく一時期において現れた、大出力ジェネレーター搭載による超高火力というコンセプトをもつMS。ドーベン・ウルフやZZガンダムがその体現者だが、両者が戦えばどうなるのだろうか。



↑投入初期においてはハイ・メガ・キャノンを発射すると直後は満足に動けなくなる欠点があった。

ドーベン・ウルフ	スペック比較	ZZガンダム
22.0m	頭頂高	19.86m
36.8t	本体重量	32.7t
74.5t	全備重量	68.4t
5,250kW	ジェネレーター出力	7,340kW
87,300kg	推力	101,000kg
12,000m	センサー有効半径	16,200m
肩部ビーム・キャノン 胸部メガ粒子砲 メガ・ランチャー (ビーム・ライフル) インコム ビーム・ハンド ビーム・サーベル ミサイル、対艦ミサイル 30mmバルカン砲	武装	ハイ・メガ・キャノン ダブル・ビーム・ライフル ハイパー・ビーム・サーベル 小型ミサイル ダブル・バルカン



↑ドーベン・ウルフは火力にも優れるが、トリッキーな武装を用いたチーム戦が一番の持ち味だった。

THE 対決

グリプス戦役からラプラス戦争までの約10年にわたり、戦場で戦っていたアクシズ、ネオ・ジオン勢のMS。そこではどのような戦いが繰り広げられたのか？

構成・文/星★繁介

自慢の高出力メガ粒子砲では、いつ使うのか？

まずはスペックを見てみよう。ドーベン・ウルフは5250kWという、通常のMSの2倍強の出力を誇る機関を搭載。ZZガンダムはそれすら上回る7340kWを発揮するが、3基のジェネレーターの合計値である点は留意すべきだろう。また、装備される最高威力の兵装はドーベン・ウルフの場合は出力40・2MWのメガ・ランチャーだ。一方のZZガンダムは頭部のハイ・メガ・キャノンで、出力は50MW。両者にジェネレーター出力ほどの差はない。ドーベン・ウルフのメガ・ランチャーは変わった機構を持つ装備で、通常時は高出力のビーム・ライフルとして使用するが、腹部のメガ粒子砲と接続することで増幅器として作用し、メガ・ランチャーとして機能するといふものだ。ZZガンダムのハイ・メガ・キャノンは出力こそ高いものの、射程はそれほど長くはない。どちらかというと自機の近くにいる相手をまとめてなぎはらう、といった用途だ。

武装の豊富さという点では、ドーベン・ウルフに軍配が上がる。ZZガンダムの兵装はダブル・ビーム・ライフルからハイパー・ビーム・サーベルまで高出力ではあるが、オーソドックスなMS用の兵装といえる。一方のドー

ベン・ウルフはやはりインコムなどの準サイコミュ兵装の存在が大きい。指揮官用は無線式、一般用は有線式と違いもあるが、これは単純に使う人間の技量に合わせた違いというよりは目的の違いだろう。

実戦においては、ドーベン・ウルフよりセンサー能力が大幅に優れるZZガンダムが会敵時には有利。そこからダブル・ビーム・ライフルでの狙撃で一気に勝負を付けたい。互いを認識してから戦うのは、武装の多彩さや手数の多さでドーベン・ウルフに分がある。運動性に関するスペックはZZガンダムの方が優れるが、ZZガンダムは実証試験機的な性格が強く、操縦性に神経質な部分があるのがネックだ。

ただ、一連の戦いの中でどちらも自慢の高出力メガ粒子砲を使う機会は意外に少ない。そもそもMS戦はビーム・ライフル(ドーベン・ウルフの場合は腹部のメガ粒子砲も含む)で事足りるし、一撃必殺を狙って使用するには外した後のことを考えるとリスクが高い。発射までのわずかなタイムラグも高技能のパイロット相手では命取りになる可能性もある。大出力のジェネレーターと高火力を備えたMSは、ドーベン・ウルフやZZガンダムの後には登場していない。それはつまり、ことMS戦に関していえば「必要がなかった」ということなのかもしれない。

MSN-04 サザビー vs MSN-06S シナンジュ vs RX-93 vガンダム

U.C.0090年代初頭から中頃にかけて開発されたサイコミュ搭載機はMSのひとつの到達点だったといつてよいほどの進化を遂げた。そんな時代に作られた3機のニュータイプ専用MSの戦闘力について見てみよう。



↑サイズ以外のスペックでは優れているサザビー。その設計はどちらかといえばコンサバティブ。

スペック比較	サザビー	シナンジュ	νガンダム
頭頂高	23.0m	22.6m	22.0m
本体重量	30.5t	25.2t	27.9t
全備重量	71.2t	56.9t	63.0t
ジェネレーター出力	3,960kW	3,240kW	2,980kW
推力	133,000kg	128,600kg	97,800kg
センサー有効半径	22,600m	23,600m	21,300m
武装	ビーム・ショット・ライフル ファンネル×6 ビームトマホーク ビーム・サーベル 腹部メガ粒子砲	ビーム・ライフル ビーム・サーベル ロケットバズーカ ビーム・アックス グレネードランチャー 60mmバルカン砲	ビーム・ライフル ニュー・ハイパー・バズーカ フィン・ファンネル×6 グレネードランチャー ビーム・サーベル 90mmバルカン砲 シールド内蔵 ビームキャノン 小型ミサイル



↑ニュータイプの優れた反応速度を高度な機体にダイレクトに反映させているシナンジュ。

兵装の制御ではなく機体の制御へと向かうサイコミュの進化

サザビー、νガンダム、そしてシナンジュの3機について共通している点は、サイコ・フレームを採用している、という点だ。しかし、そのサイコ・フレームによるサイコミュ機能をどう使うかはそれぞれ少しずつ異なる。

サザビーは3機の中ではコンセプト的には割と保守的な、充電式のファンネルを搭載したニュータイプ専用機だ。しかし、ファンネルに対する依存率は第一次ネオ・ジオン戦争時のMSに比べれば低い。νガンダムはジェネレーター内蔵かつ多機能なフィン・ファンネルや、サイコミュを敵パイロットの脳波を感知するために使うという、これまであまり見られなかったコンセプトを持つ。

この2機よりもさらに新しいシナンジュになると、ファンネルの類はまったく装備されなくなる。この頃にはファンネルがすでに旧式装備とされていたのだから。かわりにサイコミュを介してパイロットが思い描いた操作イメージによって直接機体を操縦するインテンション・オートマチックと呼ばれる機能が実装されている。

ではこの3機が戦ったらどうなるのだろうか。推力やジェネレーター出力などのス

ペックが一番優れているのはサザビーだが、サザビーは機体が大型で重量もある。慣性が大きく動き、インファイトでの戦闘はやや不利だ。それを補うためか腹部には拡散メガ粒子砲を備えるが、実戦ではパワーダウンの要因となっていた。ただ、これは単純な調整不足かもしれない。

νガンダムはスペック面で両者に劣っているが、ジェネレーターを内蔵し、防御にも使用できるフィン・ファンネルという他に類を見ない装備を持つ。加えてパイロットを補助するデバイスとしてサイコ・フレームが実装されており、実戦ではスペック上に現れない強みがあるのかもしれない。事実、νガンダムはサザビーをほぼ無傷で戦闘不能に追い込んでいる。

シナンジュは非常にオーソドックスな武装ながら、推力/重量比や操縦系統を見るとMS同士のドッグファイトでは3機中もっとも優れている機体といえる。全備重量を見るに若干推進剤の搭載量が少なく、戦闘が長引くと思いの通りの機動を行うのが難しくなるが、推進剤の進歩で、少ない推進剤でより効率よく飛べるようになってくるのかもしれない。

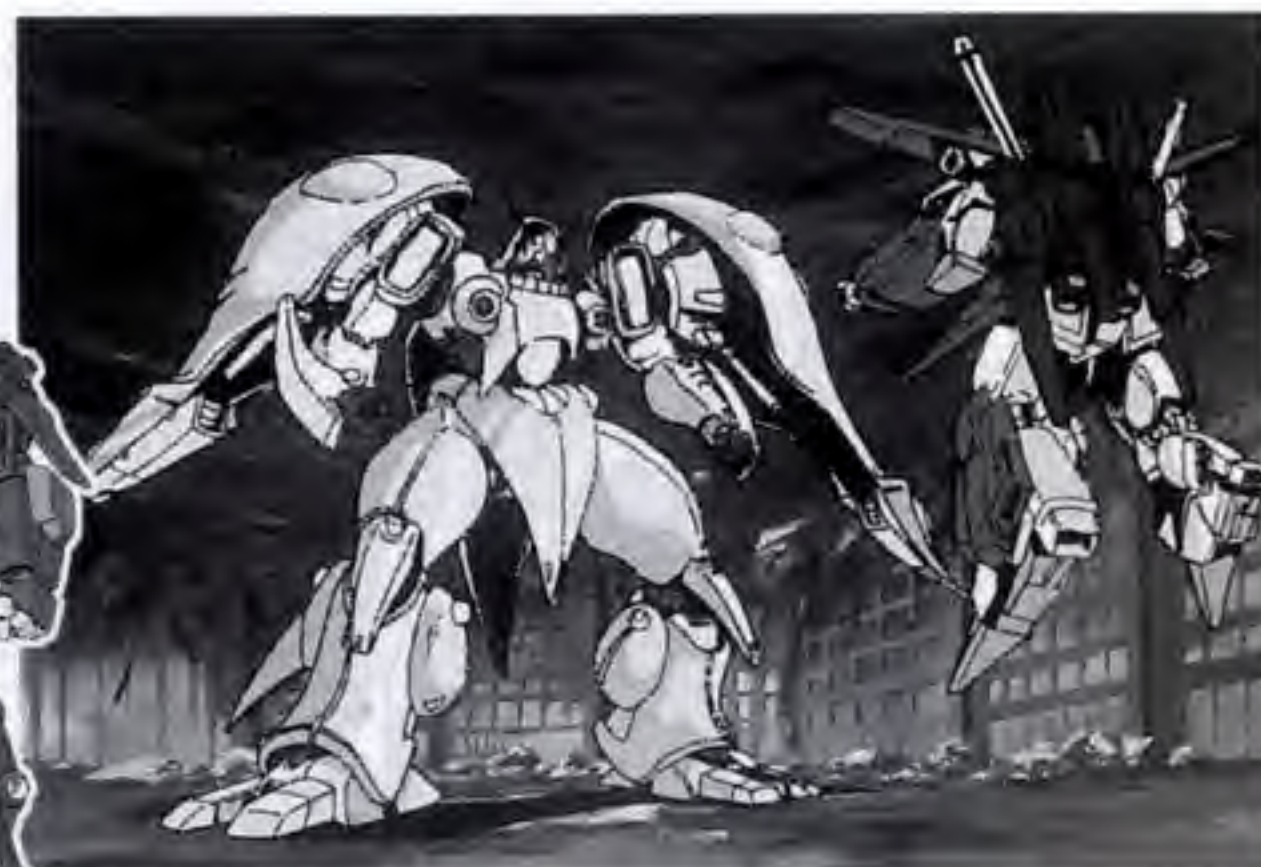
ともあれ、基礎性能を高めた特殊なサイコミュ装備を持たなくなったU.C.0130年以降のハイエンドMSにも通じる進んだ設計思想のMSといえる。

NZ-000

MRX-010

クイン・マンサ vs サイコ・ガンダム Mk-II

サイコミュを搭載した大型MSやMAといえば、ネオ・ジオンの象徴ともいえる存在だ。しかし、そういった機体は連邦軍にも存在し、さらに両者は性質が異なる。この両者が戦った場合、どうなるのだろうか。



↑クイン・マンサは強力ではあったが、パイロットの安定性の問題は解決できなかった。

クイン・マンサ	スペック比較	サイコ・ガンダム Mk-II
39.2m	頭頂高	39.98m
143.2t	本体重量	187.8t
264.7t	全備重量	183.9t
21,370kW	ジェネレーター出力	19,760kW
287,100kg	推力	244,240kg
14,800m	センサー有効半径	16,230m
頭部メガ粒子砲 胸部メガ粒子砲 腕部メガ粒子砲 ファンネル×30 大型ビーム・サーベル	武装	メガ粒子砲×20 腹部拡散メガ粒子砲 頭部メガ粒子砲 レフレクター・ビット 腕部内蔵ビーム・ソード 指部ビーム砲



↑連邦軍が遺棄したサイコ・ガンダム Mk-II を鹵獲して使用するネオ・ジオン。彼らの目にはどう映ったのだろうか。

スペックは近似だが用途は異なる2つの大型機

スペックに関しては、意外と両者の数値は近い。ジェネレーター出力はクイン・マンサのほうが約1割程度大き

いが、大きな差ではない。また、推力もクイン・マンサの方が約15%高いものの、サイコ・ガンダム Mk-II も大気内でZガンダムを追い回したりとイメージと異なる機動性を発揮する。しかし、武装となると両者にはかなりの違いがある。

クイン・マンサは機体各部に高出力のメガ粒子砲を内蔵するが、主兵装となるのは30基のファンネルである。その他、大型のビーム・サーベルを装備する。対するサイコ・ガンダム Mk-II は腹部をはじめとして機体のいたるところに内蔵されたメガ粒子砲が主兵装である。このメガ粒子砲とメガ粒子を反射できる多数のレフレクター・ビットとを組み合わせてオールレンジ攻撃を可能としている。また、両腕それぞれが大型のファンネルとして遠隔操作可能だ。

これは、クイン・マンサが主に一対多数のMS戦闘を重視したコンセプトであるのに対し、サイコ・ガンダム Mk-II は敵拠点や艦船など、大型物(かつMSなどに比べあまり動かないもの)を対象に攻撃することを目的にしているという違いによるものだろう。

そんな両者がもし戦った場合はどうなるか。クイン・マンサはファンネルやメガ粒子砲でサイコ・ガンダム Mk-II に攻撃をしかけることになるが、普通に攻撃してはレフレクター・ビット

トによって攻撃を妨害されるだろう。クイン・マンサとしては相手の防御網をかくぐるため、できる限りのファンネルを用いて飽和攻撃を行わなければならないが、ファンネルのローテーションを無視した使用は自らの危機を招くことにもなる。よしんば本体にファンネルを当てることができたとしても、サイコ・ガンダム Mk-II の装甲はZガンダムのダブル・ビーム・ライフルすら防ぐほどで、より出力の小さなファンネルでは決定打を与えにくい。ピンポイントで頭部などを狙うか、本体内蔵メガ粒子砲による一撃を与えなければ勝利は難しい。

サイコ・ガンダム Mk-II としては有利な要素が多く、レフレクター・ビットの攻撃/防御への割りふりに留意しつつ、正面から火力で押ししていけばよいだろう。クイン・マンサにはイーールドジェネレーターが搭載されており、実体弾兵装を持たないサイコ・ガンダム Mk-II 側の不安材料の一つではあるが、いざとなれば腕部を質量弾的に運用するか、あるいはIフィールドを突き破った後に砲撃を行うという手もある。ただ、クイン・マンサのような機体(とパイロット)を相手に戦う場合は、ただでさえ大きいパイロットの負担が増大することも考えられるので、多少の被弾も覚悟しつつ短時間で決着をつけるのがよさそうだ。

MATCH no.4

AMX-003 RMS-106 RMS-179
ガザC vs ハイザック vs ジムII

グリプス戦役に普及型の量産機としてそれぞれの組織で運用されていたハイザック、ジムII、そしてガザC。2つは一年戦争時のMSを改修したもの、そして残るひとつは産業用機械を改造したものという出自だが、どの機体が優れているのだろうか。

↓スペックはともかく、ベース同様操縦性は良好だったハイザック。



↑意外と高スペックなガザCだが、百式クラスが相手だと流石に厳しいか。

スペック比較	ガザC	ハイザック	ジムII
頭頂高	18.3m	18.0m	18.1m
本体重量	40.8t	38.7t	40.5t
全備重量	72.5t	59.6t	58.7t
ジェネレーター出力	1,720kW	1,428kW	1,518kW
推力	79,200kg	64,800kg	62,000kg
センサー有効半径	10,600m	8,900m	8,800m
武装	ナックルバスター ビームガン ビーム・サーベル	ザク・マシンガン ビーム・ライフル ヒート・ホーク ビーム・サーベル ミサイルポッド	ビーム・ライフル ビーム・ライフル バルカン砲 他

主力MS三つ巴戦
熾烈な戦い!?

意外にも、スペックだけを見ればもつとも優秀なのはガザCで、ハイザックとジムIIはほぼ互角。特にガザCのナックル・バスターは他の2機を圧倒する高火力である。全備重量が少し重い、これは推進剤が潤沢という見方もある。ガザCはMS同士のドッグファイトでは機体にかかる高Gに機体が耐えられず不向きという説もあるが、

一撃離脱戦法に徹すればその戦闘力は侮れない。逆に他の2機としてはガザCの足をとめ、有利な接近戦でカタを付けたところだ。
ハマーン・カーンはアクシズに当然存在したであろうゲルググなどの残存機体を改造して使用せず、つなぎといえガザCを己の乗機とした。彼女の技量をもってすればナックル・バスターはまさに一撃必殺の武器となるに違いない。そのMS選択は正しかった、ということだろうか。

MATCH no.5

AMS-129 RGM-96X
ギラ・ズール vs ジェスタ

ラプラス戦争に投入されたネオ・ジオンの親衛隊仕様ギラ・ズールと地球連邦軍のジェスタ。カテゴリーとしてはハイエンドな量産機といえるが、この2つを比較してみよう。

ギラ・ズール(親衛隊仕様)	スペック比較	ジェスタ
20.0m	頭頂高	19.3m
22.3t	本体重量	24.8t
56.5t	全備重量	57.2t
2,760kW	ジェネレーター出力	2,710kW
74,520kg	推力	89,030kg
18,200m	センサー有効半径	14,200m
ビーム・マシンガン ランゲ・ブルーノ砲 シュトルム・ ファウスト ハンドグレネード他	武装	ビーム・ライフル ビーム・サーベル ハンドグレネード シールド内蔵ミサイル 頭部バルカンポッド



→ユニコーンガンダムを敵機との戦いに集中させる役割を持つジェスタ。

←親衛隊仕様のギラ・ズールも装備するランゲ・ブルーノ砲・改。アウトレンジ攻撃が持ち味。

ネオ・ジオンと連邦の
随伴機の違い

ジェスタが設計の段階からユニコーンガンダムの随伴機として企画されていたのに対し、ギラ・ズール親衛隊仕様は実際の運用において、という違いはあるが、面白い点はどちらもフラッグシップMSに随伴して出撃し、いわゆる「露払い」を行うMSとして使われたという点だ。使われ方が近いせい、か、スペックも非常に近い。どちらもアナハイム・エレクトロニクス社製であり、要求性能も近いことを考えればある意味、当然だが……
両者のもつとも大きな違いは武装に

ある。ギラ・ズール親衛隊仕様はあくまでもフロントルが戦うことを第一としているため、後方支援がメインというところ。ランゲ・ブルーノ砲・改はそのための兵装といえる。
一方のジェスタは積極的にユニコーンガンダムの前に出て戦うことを想定しており、武装は近く中距離向け。そのため「ギラ・ズール親衛隊仕様対ジェスタ」という図式を考えると、接近しようとするジェスタをアウトレンジから狙撃するギラ・ズールが有利。ジェスタには後にキャノン搭載型が登場したが、これは遠距離砲撃を行うギラ・ズールに対する対抗手段という側面もあったのではないだろうか。



Geara Doga vs Jegan

ネオ・ジオン
ギラ・ドーガ

VS 地球連邦軍とネオ・ジオンの
同世代、同レベル同士の戦いの真実

地球連邦軍
ジェガン

宇宙世紀のモビルスーツの歴史で、面白い時代がある。
それはいわゆる第二次ネオ・ジオン戦争から
ラプラス戦争にかけてである。
この時代の地球連邦軍とネオ・ジオン軍の主力機は、
同じメーカーによって製造されていた。
それにはどのような事情があって、
両機はどのように違っていたのだろうか。

構成・文／市ヶ谷ハジメ

ジェガンに統一された!? 連邦軍のMS開発

一年戦争で戦場に華々しくデビューしたモビルスーツ（MS）。戦後の軍縮時代でもその性能は向上の余地が多にあった。またジオン公国残党などの潜在的脅威も高く、地球連邦軍はMSの開発を積極的に行っていた。

それは結果的に地球連邦軍の特殊部隊ティターンズと、アナハイム・エレクトロニクス（AE）社の息がかかったエゥーゴの2大陣営によってなされ、彼らの起こす内戦の中で実戦テストが行われることによって、さらなる発展

へと繋がっていった。一方で旧ジオン公国残党、特に一大勢力のアクシズ（ネオ・ジオン）は、MS開発能力が高く、バラエティに富んだ機体を生み出していった。

結果、グリプス戦役や第一次ネオ・ジオン戦争中、MSはいわゆる第2（第4世代MSというカテゴリーができるほど爆発的進化を遂げたが、その後、新機種の開発合戦には急ブレーキがかかっている。実際には地球連邦軍のMSは宇宙世紀90年代にはほぼRGM・89ジェガンに統一され、ジェガンにパーツを追加する形やジェガンをベースにさらなる性能向上型を開発するとい

う形で進化していくことになる。

そしてジェガンは、結果的に宇宙世紀120年代まで使われ続け、その後のMSの小型化への橋渡しになった。つまり30年以上に渡り使用され続けたことで、その機体の実力を証明したのだ。

Z計画を継承!? 大幅軽量化がジェガンの強み

ジェガンという機体はなぜそこまで優れていたのか。スペックから分かるのは、この機体がきわめて軽量にできているということである。

RGM・89ジェガンの本体重量は驚くべきことにRGM・79RジムIIの約

半分しかない。仮に同じエンジン、推進器を使用したとしても、実質的には倍近い性能を確保しているといえるのだ。

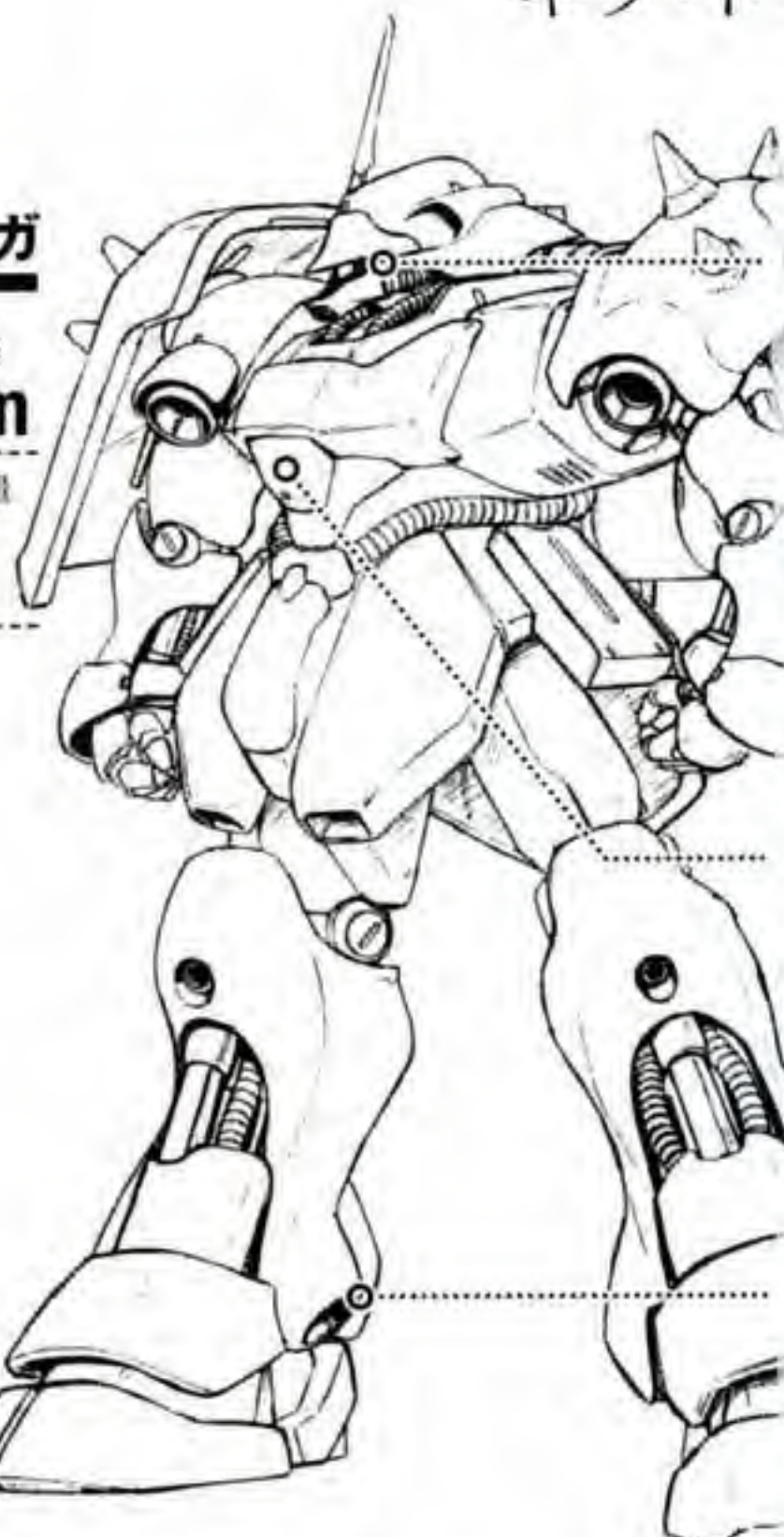
実際にはジェネレーター出力、スラスター推力とも向上しているの、性能差はさらに開く。ジェガンの登場する4～5年前の第一次ネオ・ジオン戦争時代の主力MSと比べても大幅に軽量である。では、それは突然生まれたMSの機体構造に関するエポックメイキングだったのだろうか。おそらくそれは違うだろう。

MS軽量化のエポックは、グリプス戦役時代の可変MSであるMSZ・0

ギラ・ドーガとジェガンの相違点

AMS-119 ギラ・ドーガ

- > センサー有効半径
16,400m
- > 全備重量・本体重量
=ペイロード
27.8t
- > シールド
有



センサー有効半径はギラ・ドーガの方が高い。索敵能力はギラ・ドーガが上か？ しかし、どちらの頭部センサー部分も実はモノアイ式を採用している。

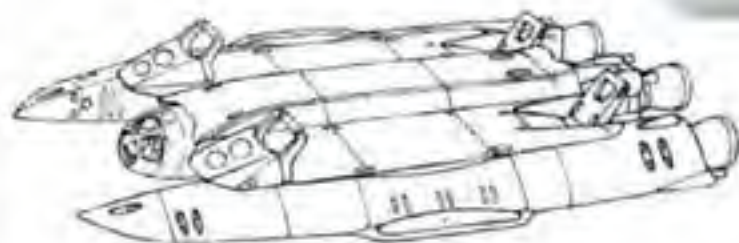
コクピットは、シート形状は双方で違うが、全天周モニターの採用や、アームレイカーによる操縦方式などが共通している。

スラスタ推力はジェガンが高い。全開にした場合の推進剤の消費量も多い。速度ではギラ・ドーガが不利だがコストランニングは悪くない？

サブ・フライト・システム

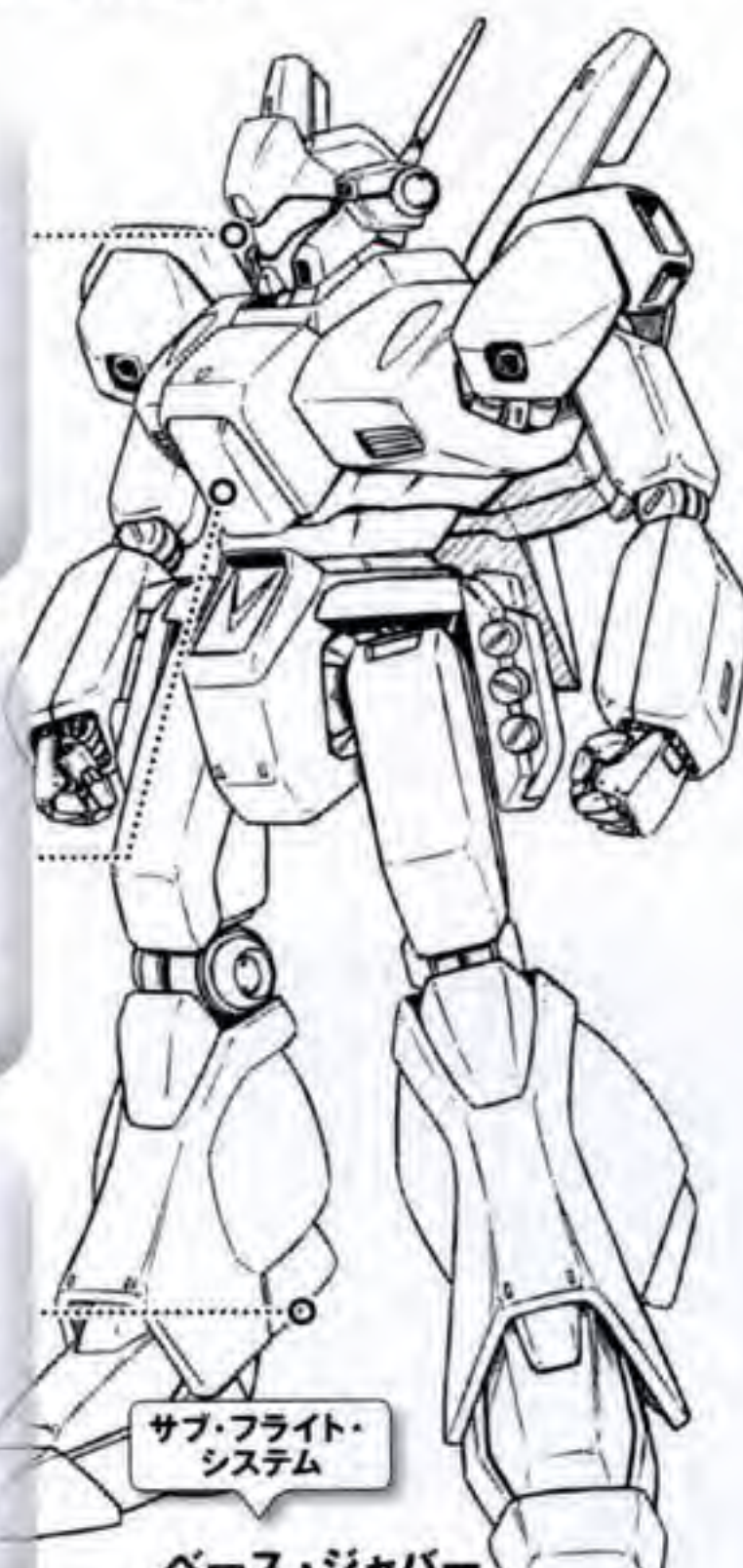
シャクルズ

基本的に単機で運用されるネオ・ジオンのシャクルズ。出撃時にシャクルズに搭乗して艦艇から発進する。有人/無人を問わず運用可能。



RGM-89 ジェガン

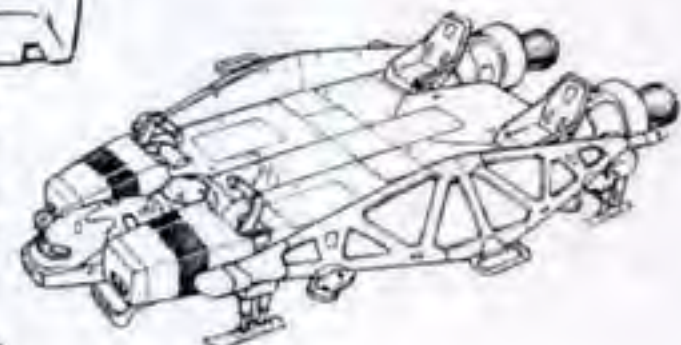
- > センサー有効半径
14,200m
- > 全備重量・本体重量
=ペイロード
26.0t
- > シールド
有



サブ・フライト・システム

ベース・ジャバー

2機で運用する際は、機体の上面と下面にそれぞれ機体を搭載する形で運用する。その際は宇宙空間上でベース・ジャバーに搭乗。単機運用も可能。



06 Zガンダムがその嚆矢だろう。大気圏の単独突破が可能で、しかも航空戦力としてある程度行動できた。こうした機体にとって軽量化は至上命題だった。そしてZガンダムの本体重量は20トン台という、当時のMSの中で破格の軽量機となった。

AE社が実質的にこのZガンダムと並行して開発していたMSZ-010 Zガンダムは、このZガンダムとは正反対の重装備型だが、軽量構造はある程度継いだため無理があったのか、結果的には強化型へ改修され、後に増加装甲を付けざるを得なくなった。

一般的には可変MSの試作計画といわれるZ計画は、実際には様々な技術トライアルもなされており、その成果として画期的だったのは、おそらく軽量化に代表される機体構造関係の進化だろう。そして、それは次世代の基礎技術として、つまりジェガンに結実したといえる。

これは爆発的進化期に実用化された主に装甲や機体構造の技術が、実のところ量産機というカテゴリーにおいてはそれほど重要でなく、ジェネレーターやスラスタの高出力を維持しつつの軽量化による実質的な基礎性能の大幅な底上げが、もっとも適切という結論であろう。この考え方をベースにし、特殊任務には増加装備を施すことで、次世代主力MSの「汎用性」は完成を

見たといえる。結果的にこの技術確立のアドバンテージにより、AE社がMS開発をほぼ独占するまでに発展していくのだ。

ジェガンとギラ・ドーガは兄弟機なのか？

一方でこの時代は面白い事態があった。地球連邦軍と敵対したシャアの新生ネオ・ジオンのAMS-119ギラ・ドーガもAE社で開発、生産を行っていたことだ。

これは政治的な事情が背景にあるとはいえず、珍しいことである。なぜなら、防衛技術はその国の命運にも関わることなので、外部に漏れる可能性があることは致命的であるからだ。

実際、AE社においても、さすがに同じ生産ラインに乗っていたわけではなく、各々別の事業部が管轄していた。そうすることによって各陣営の抱える軍事機密の保持がなされたのだろうが、不安定な事態に変わりはしない。双方の陣営がそれを認めていたのは、それだけAE社の政治力(影響力)が大きいということだろう。

ゆえにギラ・ドーガとジェガンの両機は、技術的には同じ会社、同じ世代であるからして、そのテクノロジーレベルはあまり変わらなかったといえるだろう。では、それらは果たして実質的には外側が違っただけで、中身は同じ

機体なのだろうか。

ギラ・ドーガと ジェガンの真の姿

ギラ・ドーガとジェガンのスペックは、極めて似通っている。それでも両機の間には10〜20%の性能差がある。比較してみるとギラ・ドーガはジェガンに比べて出力が高い反面、重量は重く、推力も劣る。全備重量と本体重量の差（推進剤や燃料の搭載量）もあまり変わらない。こうした性能差からみえるのは、軽量で推力の高いジェガンは展開能力が速い。対するギラ・ドーガはパワーがあり作戦行動時間が長い、といえる。ジェネレーター出力の差は、武器の選択肢の広さにも直結するだろう。また、ギラ・ドーガとジェガンの本体重量差の1.7トンという数字は、搭載するセンサーや補機類、ひよっとしたら装甲強化が施された結果から来るのかもしれない。高出力のジェネレーターを使いたい（武装選択の多様化などの理由）がゆえに重くなったのか、重くなった（装甲などにより重量を割り振っている）がゆえに、ジェネレーターを大型化せざるを得なかったのかは不明だが、外見から、おそらく両方の理由があるのではないだろうか。

この両機における総合的な性能は同等だが、微妙に生じる差は想定される任務、各軍の要求による違いだろう。



ネオ・ジオン側は、当初から数が少ないことは承知しており、より汎用性と生存力が高い機体を選んだということだ。それだけMSの用途は様々であり、本来なら軽量を活かしたいところを犠牲にしても構わないという姿勢の表れだろう。

一方、地球連邦軍（ロンド・ベル）は有事への即応部隊としての役割は明確だが、基本的には母艦との連携運用が必須で、防衛戦における迎撃機としての機動性が重視され、軽量な機体の良さを十分に活かしている。それ以上の任務には増加装備や別の機体で対応する方針なのだろう。

実際、両機の運用面でもその差は表われている。その違いは、両陣営のサブ・フライト・システムにも見て取れる。連邦軍のベース・ジャバーは、ジ

ェガンを最大二機搭載でき、ネオ・ジオンのシャクルズはギラ・ドーガ単機での使用が前提である。前者は目的地近くまで母艦で運搬し、そこから戦場までの距離で必要となる推進剤の節約が主眼で、後者はMS部隊のみによる長距離侵攻も視野に入れられている。

実際に宇宙でのMS戦は、おそらくお互いの位置関係の把握が、機体の性能でより重要視されたことは間違いがないだろう。そういった意味で、この両機の間には決定的な有利不利があったわけではないだろう。しかし、個々の状況の場合ギラ・ドーガの方が汎用性が高いがゆえに、総体的にはジェガンが有利になる状況は多かったと見るべきだろう。

ギラ・ズールはなぜ 登場する必要があったのか？

そしてギラ・ドーガは登場後ほんの4年で、後継機が登場することになる。フル・フロンタルを首魁とする『袖付き』の主力MS、AMS-119ギラ・ズールである。本機はギラ・ドーガをベースとして開発された発展型とされている。その外見は一部にはMS-06ザクⅡ的な外観を与えることで視覚的效果によって、求心力の低下を補ったとされることもあるが、その考え方は現実的ではないだろう。

本機のスペックは、ギラ・ドーガよ

U.C.0093-0096の各陣営の主力機のスペック一覧

U.C. 0093

地球連邦軍

RGM-89
ジェガン

- > 頭頂高
19.0m
- > 本体重量
21.3t
- > ジェネレーター出力
1,870kw
- > スラスター総推力
61,400kg



ネオ・ジオン

AMS-119
ギラ・ドーガ

- > 頭頂高
20.0m
- > 本体重量
23.0t
- > ジェネレーター出力
2,160kw
- > スラスター総推力
54,000kg



りジェネレーター出力で約10%前後の向上を果たしているし、スラスター推力は15%ほど高い。同時に、本体重量を1・2トンも削り込みつつ、全備重量を10%近く積み増したことで生まれたマージンは、より稼働時間を伸ばすために、推進剤にまわされたと考えるのが自然だ。つまり、総合的性能向上を果たしたMSということである。

しかし、これはどうにも怪しい。というのにもかかわらず4年のモデルチェンジは早すぎるということと、『袖付き』の現状では、経済的にも政治的にも果たしてそれが可能かということだ。

同世代のジェガンの派生機D型は、基本的性能は通常型のジェガンと変わらない。そう考えると、いかにもギラ・ズールの存在はバランスが悪いことがわかる。ひょっとしたらその額面の性能に本当は達しておらず、単なるギラ・ドーガの簡易生産型でしかない可能性や、一見量産タイプだが、ギラ・ドーガのチューンアップバージョンで、数自体が最初から限定されることを前提とした、先のジェガンD型のような派生機という可能性もある。

この時期、地球連邦軍もニューモデルを投入している。可変MSのRGZ・95リゼルだ。本機はMSA・005メタスやMSZ・008ZIIの可変機構を参考に、ジェガンとの部品共有を図った簡易版Zガンダムに位置づけ

られる機体だ。

本機は、グリプス戦役時代のモビルアーマー(MA)とMSの融合という位置づけというよりは、軍縮時代に対応するため、従来機(ジェガン)との互換性を高め、なおかつロンド・ベルのような即応部隊の要求に応えられるよう、素早い展開能力と高い機動性を主眼にした機体であるともいえる。

同時代に同程度の機体はAE社の方針か!?

ギラ・ズールとリゼルを比べた場合、本体重量は若干リゼルが重く、ジェネレーター出力も低い。しかしスラスター推力は圧倒する。低いといってもリゼルはメガ・ビーム・ランチャーの使用が可能ゆえ、出力自体はこの程度で十分だったことが分かる。機動戦になったらリゼルがやや有利となるが、実際には戦場の条件(パイロットの技量)によって異なるだろう。こちらもテクノロジーレベルはほぼ同じであり、当然の数字といえるだろう。

有事への即応性を高めていたロンド・ベルにあって、リゼルは足の長さをはかした緊急即応機として使われたので、ギラ・ズールとの交戦機会はかなり高かったと思われる。当然、ギラ・ズール側は迎撃を受けることを前提に連携して作戦を組み立てるだろうが、連携に失敗してリゼルと交戦状態にな

った場合、機動力で劣るギラ・ズールには厳しい戦いになるだろう。

このように、地球連邦軍とネオ・ジオンのMSは、同時期、同レベルの機体を配している。製造メーカーも同じなので、一見当たり前の結果にも思えるが、実はそうだろうか。

『袖付き』への新型MSの供与は、『ラプラスの箱』の公開を避けたいAE社にとつては、自身の利益に反する行為といえる。それでも『袖付き』に新型機の配備を進めていたという事実は、『ラプラスの箱』の謎と同等の「地球圏の闇」が存在する可能性もまた、高いのだろう。

少なくとも、AE社には、シャア亡き後にも、言い換えれば地球寒冷化作戦という、ネオ・ジオンの背信行為をなかったことにしても、ネオ・ジオンにMSを供給し続ける必要性があったということだろう。

それは、地球圏の政治・経済的なバランスを取るためのものか(つまりリゼルのカウンターとしてのギラ・ズールの供給)、それともサイコ・フレーム技術のように、ネオ・ジオンがある程度保持している新技術を得るためにパイターとして必要だったのか。

その理由は杳として知れないが、少なくともこの時代のMSの戦いは、同じレベルの機体同士の戦いであつたことは間違いがないのだ。

U.C. 0096

地球連邦軍

RGM-95
リゼル

- 頭頂高
20.5m
- 本体重量
25.8t
- ジェネレーター出力
2,220kw
- スラスター総推力
81,500kg

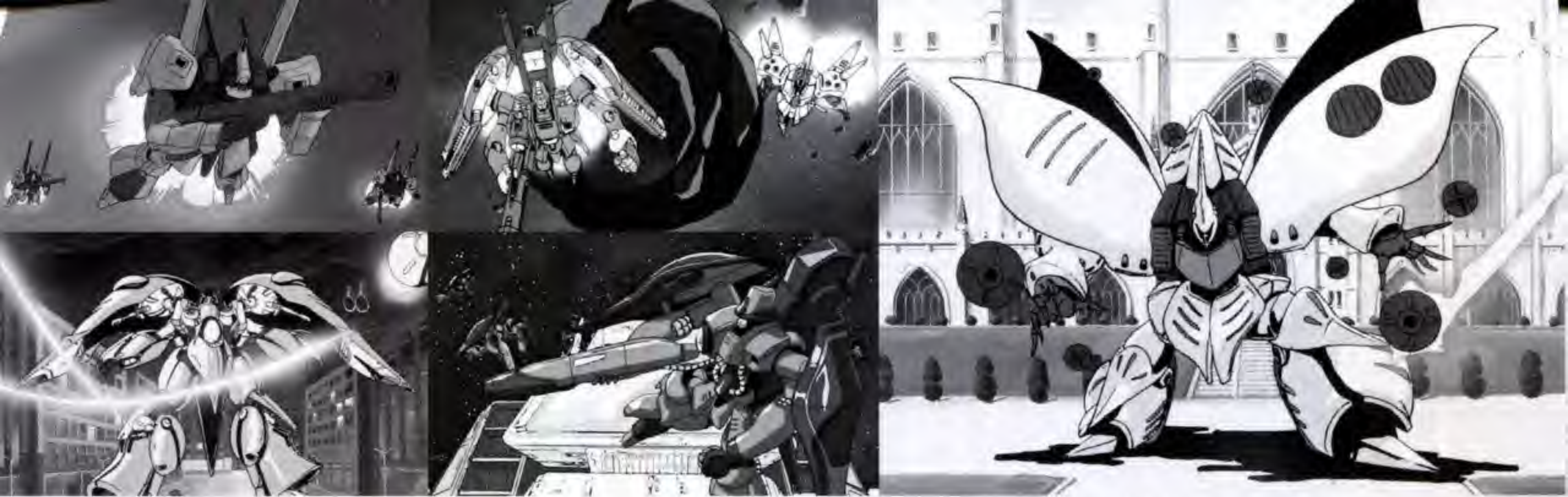


「袖付き」

AMS-129
ギラ・ズール

- 頭頂高
20.0m
- 本体重量
21.8t
- ジェネレーター出力
2,470kw
- スラスター総推力
62,100kg





ネオ・ジオンの モビルスーツ 戦術理論

様々なバラエティに富んだモビルスーツ（MS）が登場したネオ・ジオン（アクシズ）であるが、軍隊という集団である以上、ある一定の戦術理論に基づいて機体の開発、運用がされているはずである。では、それはどういったものなのか。ここでは、いくつかの核になった機体を中心に、ネオ・ジオンのモビルスーツの戦闘方法と、そこから見える戦術思想について分析してみることにしよう。

文・矢吹明紀

新時代の戦いに 対応する戦術とは!?

一口にネオ・ジオンのMSといっても、その母体となったアクシズから始まるネオ・ジオン、新生ネオ・ジオン、ネオ・ジオン残党の『袖付き』まで、使用機種とバリエーションは極めて多岐に渡っていることもあり、その戦闘方法と戦術理論を体系的に捉えることは非常に困難となっている。

とはいえ、基本的には一年戦争時には存在しなかった新たな技術によって戦術が変化していったと見るのが正しい見方であろう。すなわちルナ・チタ

ニウム合金をさらに進化させた強靱なガンダリウム合金、可動部の自由度及び強度を向上させる上で非常に有効だったムーバブル・フレーム、多彩な戦術と戦闘隊形に柔軟な対応をするための可変システム、ジェネレーター性能の向上によって適応範囲及びパワーが拡大したビーム兵器、サイコミュシステムの中核というべき無線コントロール小型ビーム砲のファンネルなどによって、ほぼ格闘戦に近かった近接戦闘戦に終始していた過去のMSの戦い方とは一線を画していたということだ。

とはいえ、ここで解説するネオ・ジオンの場合、当初装備していたMSの数は潤沢というわけにはいかなかったこともあり、基本的にはスペシャルユニットを施した高機能MSを腕利きのパイロットに託し、その総合力を持つて戦域を支配するという、ある意味エースパイロットに依存していたことは否めない。

このあたりはアクシズが開発装備した初期の量産MSである、AMX・003ガザCや、ニュータイプ専用の高機能機であるAMX・004キュベレイによる戦いを振り返ると、非常に興味深いシーンが描かれている。

ガザCの場合、量産機でありながら初期にはアクシズを率いていたハマーン・カーン自身が搭乗していたこともあり、すなわち、それなりのファイ

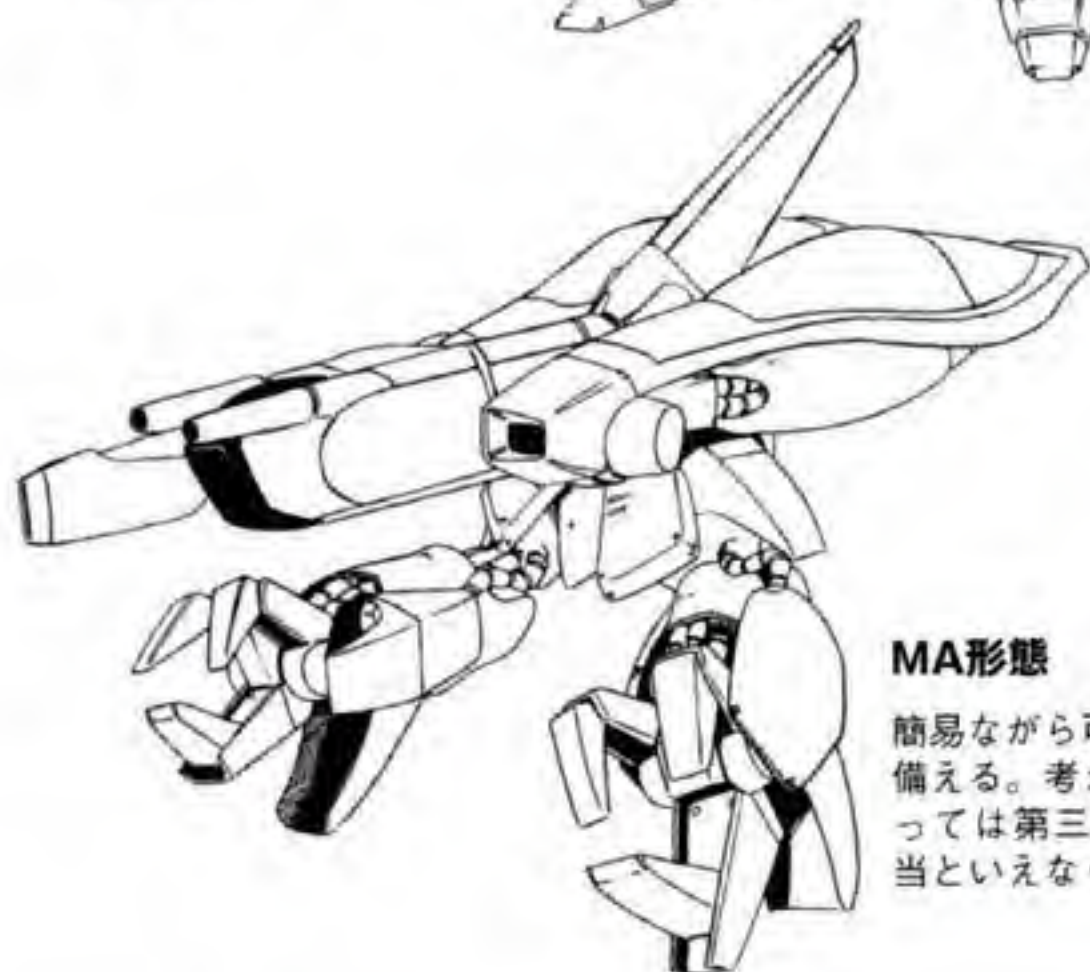
チューン仕様が存在していたということであろう。しかもこの機体は原型がガザA/Bという宇宙空間用作業機というバックグラウンドを持ち、ムーバブル・フレームが導入される以前の設計であり、それでもわずかな仕様変更で限定的ながら可変機構をプラスしていたのは見事といえる。

ガザCによる戦闘の基本は装備していたナックル・バスター、ビーム・ガン、ビーム・サーベルであった。従来の近接戦闘戦は前述の通り、その戦いはパイロットの能力に依存している部分があつた一方、ある程度数が充足していた戦域においては、密集隊形からのナックル・バスターによる集中砲撃、そして散開し体制を整え直してからの再攻撃といった協調運用がなされた例もあつた。

ニュータイプ専用機のキュベレイの場合は、事実上のハマーン・カーン専用だったこともあり、そのサイコミュコントロールによるファンネルの存在は、全周囲に渡る極めて高い攻撃力という意味で、ガザCとはレベルからして異なる機動戦闘を可能としていたことは間違いのない。この場合の戦術としては敵が密集している空間を狙って高速移動の後、そのファンネルにモノを言わせて周囲の敵を各個撃破していくスタイルになったことは、想像に難くない。すなわち一年戦争時のMAN

アクシズ(ネオ・ジオン)を支えたMS ガザC

作業用機械から発展を遂げた可変MSで、アクシズ初期を支えた立役者。一定数を揃え、個々の火力を集中運用するという戦術で、多大な戦果を挙げている。ジオン系にありがちな、エースパイロットの存在に頼るという、旧来的な考え方とは一線を画す。



MA形態

簡易ながら可変機構を備える。考えようによっては第三世代MS相当といえなくもない。

ガザシリーズとキュベレイを中心とした戦術構想

08エルメス、もしくはMSN・02ジョングによる戦いをさらに進化させたものだったということである。

ガザCは、アクシズからネオ・ジオンへと再編された後にはジェネレーター及びスラスター出力を強化し、武装と機動力を大幅に向上させたAMX・006ガザDへと進化した。この機体は量産型でありながらも、ガザCを上回る本格的な変形機能に加えて、小編成での機動戦闘を重視していたのが特徴である。

3機のガザDによるガザ・ストーム・フォーメーションなどは、その代表であり、一年戦争時のジェット・ストリーム・アタックのような3機による機動戦闘が、この時点でも重視されていたのは非常に興味深い。パワーその他の総合戦闘力の面でも戦線で対峙していた地球連邦軍やカラバに配備されていた新型のRGM・86RジムⅢよりも優れており、ネオ・ジオンの量産機として、様々な戦術に対応できたものと推測できる。

キュベレイの系譜とその戦術的な進化は、これもネオ・ジオンに再編された時点で、訓練を経てその才能を開発

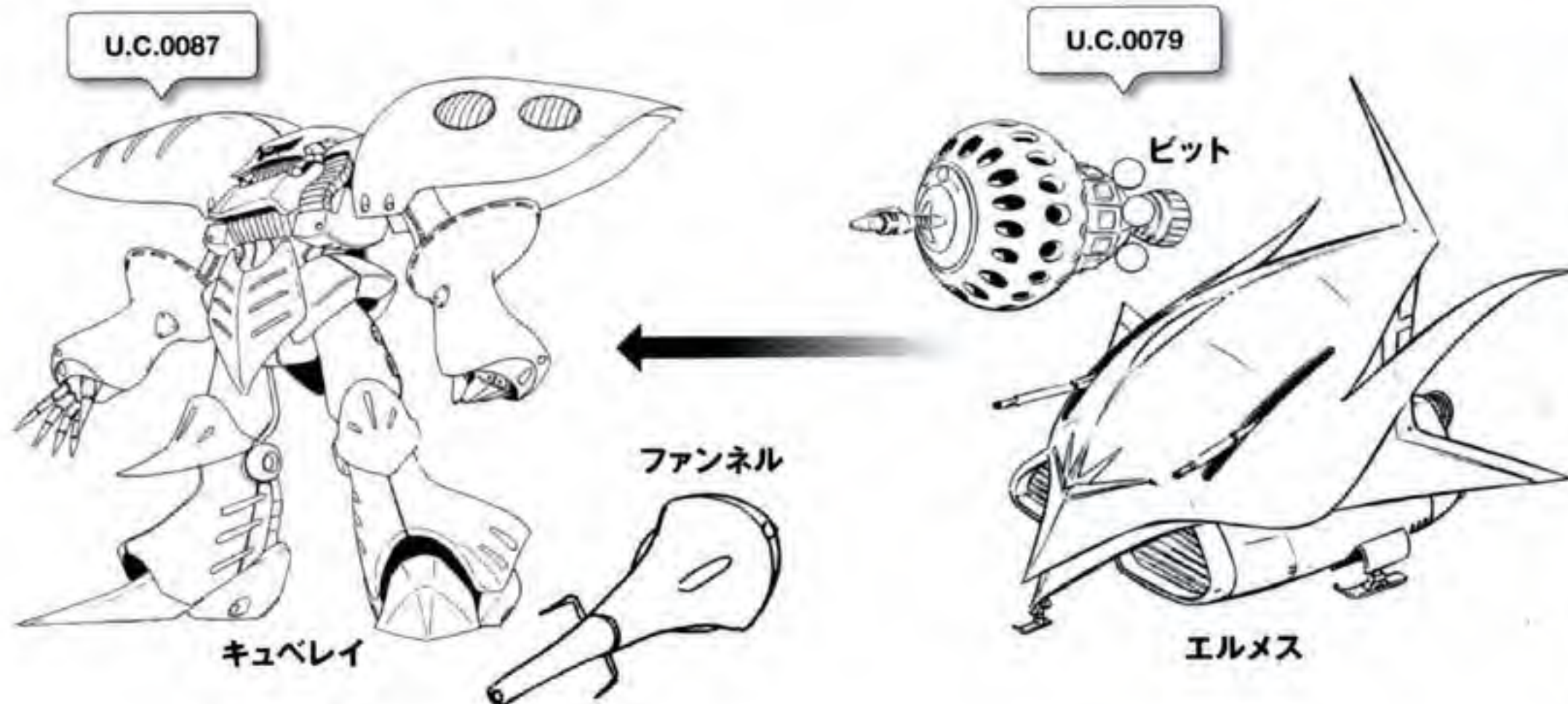
された数人のニュータイプ(強化人間)パイロットのために、AMX・004・2/3キュベレイMk・Ⅱとして数機が製作された。これは量産機というより搭乗者個々の特性に合わせてチューニングしたカスタム機というべき性格で、戦術的にはよりきめ細かなコントロールが可能となったサイコミュを武器に、単機でありながら、あたかもMSの小隊の長機と列機がそれぞれをカバーし合うかのごとくの機動戦を得意としていた。

なおキュベレイにはAMX・004G量産型キュベレイも存在していた。ネオ・ジオンは潜在的ニュータイプの覚醒プログラム(やクロウニング)に熱心に取り組んでいたことから、そのために専用機として一定数が量産された。量産型とはいえ従来型のワンオフカスタム然としたキュベレイと、その性能に大差はなく、逆に武装面などは大幅に強化されていた。これはニュータイプ能力を持つとはいえ、訓練が十分ではなかったパイロットを守るためだったともいわれている。

量産型キュベレイによる戦術は、勢力を増したニュータイプ部隊によって、その圧倒的な火力と戦域支配力を以て制圧するというものだったのだが、これらが投入された時点で政権自体が弱体化していたこともあり、最終的にはその存在を明確にアピールすることな

小型化が必須条件？サイコミュ兵装の変遷

初期のサイコミュ関連の装置や機器類は大型であり、MSサイズ(18m前後)に収めるという課題は、持たざる国のアクシズには必須条件だったはず。大型の機械は運用コストやインフラ整備など余計な費用がかかる。さぞ涙ぐましい努力があったに違いない。



く、敗退していった。

ニュータイプ用MSの決定版としては、NZ・000クイン・マンサが最終型といわれるが、こちらは量産型キュベレイを整備するのと平行して、エースパイロットのためにすべてを見直した決定版的存在で、単機で艦隊を相手にするなど戦闘力の高さを見せた一方、多勢に無勢はいかんともし難く、最終的には撃墜の憂き目を見ている。

既存の機体の改良機が果たした役割

ここまでのネオ・ジオンのMSにおける基本編成とその戦術は、ガザCとその発展型を中心とする量産MSを主力に、キュベレイとその発展型というべきニュータイプ用MSを一点突破用に展開するというものだった。

こうしたスタイルは、一年戦争時とそう大きく変わっていない一方で、MS個々の戦闘力となると過去の比ではなく、かつての実体弾兵器を多用し、接近戦ではヒート兵器を併用するといったスタイルから、ビーム兵器主体かつ、場合によっては高威力のメガ粒子砲さえ装備していたMSも存在していたという過酷な戦場だった。

なお、ネオ・ジオンの地球圏侵攻に際して共闘態勢を布いた旧ジオン公国軍残党が扱う量産MSの中には、かつての主力MSを独自に改修し、バージ

ョンアップしたモデルも相当数存在しており、やや低出力という弱点こそあったものの、構造及び機能的には、すでに熟成の域にあったことから抜群の信頼性と共に二線級の地域においては、相応の活躍を見せた。

MS・09Gドワッジ、MS・06Dデイズート・ザクなどがそれに相当し、いずれも兵器体系は一年戦争時と大差なかったことから、その戦術も近接戦闘が基本となっていた。すなわち宇宙空間ではサイコミュMSが対艦隊戦を展開していた傍らで、地球では相変わらずシンプルな従来型MSが地味な格闘戦を行っていたということだ。

主力隊を支える支援型のMSたち

さて、一連のネオ・ジオンのMSだが、これら2つの基本型の他にもそれぞれの戦術に特化したモデルが存在していた。その中でも量産機を支援するという意味では、相応の存在価値を示していたのが火力支援型である。

元来、こうした任務はいわゆるモビルアーマー（以下MA）が担っていたのだが、基本的に動きが鈍い（＝小回りが効かない）MAは、サイコミュ搭載MSの前に影が薄くなっていた。特にMSが可変機構を備え、空間移動時の機動性を得るようになったことも、こうした流れに至る上で大きな動機

だったといっている。もちろんMAも依然として存在していたが、その種類はMSと比較にならないほど少ない。

こうした流れを思うと、過去に連邦軍が装備していた火力支援型であるRX・77ガンキャノンやRX・75ガンタンクは、先見の明があったといえなくもないが、ネオ・ジオンの場合、比較にならないレベルでその戦闘力を高めていた。ここでの代表機種がAMX・102ズサである。その姿はまさに全身にミサイルポッドをまとったハリネズミのような物々しさ。この機体の任務は味方MS（ガルスJ）を戦域に投入する前に、中遠距離からミサイルによる斉射を行い、敵側の一時反撃能力を弱体化させるというもの。いわゆる準備戦射撃であり、これは現実の戦場においても攻撃のセオリーである。

かつてこうした任務を担当していたMSは、そのまま後方へと退き次の攻撃に備えるという戦術を採っていた一方、ズサの場合はミサイルを撃ち尽くした後は、そのまま前線へと進出し、他のMSと共に機動戦闘を行うという汎用性を備えていたのが特徴だった。これはジェネレーター出力に余裕がある新世代MSならではの戦術であり、装備するブースター・ポッドは、単独運用も可能なため、その後の戦域離脱や移動も極めて迅速に行うことが可能である。こうした戦術は一年戦争時に

戦った従来型MSでは不可能だった。ただしネオ・ジオンにおいてもこのタイプの量産は、なかなか難しかったと見えて、当初は試作機が前線で試験運用されていたが、量産機が前線に姿を見せたのは、第一次ネオ・ジオン戦争も終盤になってからのことである。

そしてこのタイプの火力支援を重視したMSには、高機動突撃強襲型を謳っていたRMS・099Bシュトルム・ディアスを挙げることもできるだろう。もとはアナハイム・エレクトロニクス社製の機体ではあるものの、ネオ・ジオンにおいては、かなり違う性格の機体にモデファイされている。こちらはミサイルを大量に装備していたズサとは異なり、火力や機動性のバランスを重視していたのが特徴である。ベースのMSA・099リック・ディアスの素地の良さを活かし、機動性の向上に重点を置き、突撃時には他の火力支援がなくなるとも敵の第一陣を制圧することができた。

ジオンMSの華!? 特殊型の機体たち

さて、残るは戦術的に特殊な戦いを前提に開発されたMSとなる。その一つ目はAMX・104R・ジャジャである。このMSが装備する武器類は他のMSとは全く異なる。まずはビーム・ライフルに銃剣が付いている。こ

当時のMS開発の トレンドを追った？ 合体可変MSのパウ

MSが世代で分類されるようになる、グリプス戦役以降、可変MSは第3世代機とも呼ばれる。そうしたMS開発のトレンドに追随したのか定かではないが、非可変機が多いアクシズ（ネオ・ジオン）陣営でパウは異彩を放っている。単なる可変ではなく、分離合体する機能は必要だったのか？



パウ



パウ・アタッカー



パウ・ナッター

の剣の部分はいわゆるヒート剣であり、近接戦闘時にはライフルを剣として使うということ。すなわち剣技に特化したMSなのである。

もちろん装備している剣はこれだけではなく、左腰にはビーム・サーベルを備える。その形状はまさに剣であり、しかも機能的にはさほど大きな意味を持たない鞘まで装備されている。いかにも鎧然としたその外装と共に、かつて一年戦争時に登場したYMS-15ギャンを思わせるのがこのR・ジャジャなのである。また一般兵用サイコミュ実験機として試作されたAMX-10

3ハンマ・ハンマなども、格闘戦を重視していた特殊装備が特徴という意味では、性格的にはR・ジャジャに近いかもしれない。ちなみに新生ネオ・ジオンの時代になると、こうしたサイコミュを搭載した特殊機能MSが急激に増加してくるが、これは戦術が純粋に技術の進化に引っぱられた結果といえるだろう。

続いて、これもMS戦にはなくてはならないシチュエーションの水中戦である。実のところアクシズからネオ・ジオンに至る戦いの歴史において、水中戦などの局地戦闘は経験がない。も

時代のトレンドを吸収し ジオン風に仕立てたパウ

つばら地球で活動が続ける旧ジオン公国軍残党にしても、旧来機や連邦系の機体を使用していた。そんな中で唯一新設計されたのがAMX-109カプールだった。

性能的には非常に優秀かつ重武装、高機動で、従来型の水陸両用MSには存在しなかった水上ホバー移動能力も備えていた。一方、第一次ネオ・ジオン戦争では、水中戦の機会が極めて少なかったこともあって、有効活用までには至らなかった。

そしてネオ・ジオンにおけるMSの中で、形状も戦術も、ずば抜けてユニークだったのがAMX-107パウである。合体可変型とカテゴライズされているこのMSのコンセプトは、大気圏内での移動を可能な限り素早く行い、その際に敵側と遭遇した場合は圧倒的な機動性と共に敵を撃破するというものだった。

構造的には、MS形態から飛行形態に変形する際、上下が分割しパイロットは上部に搭乗し操縦を行い、下部はそれに追従し自動で飛行するというもの。上下を分割した際には、どのようにコントロールするかについては明確な言及はないものの、仮に独立した状態で自動的に管制できたら、相当に有

利になるはずである（下部用のコクピットシステムも存在した）。

またパウが実戦配備された時点で、通常MSも機動性という意味ではそれなりに高かったはずだが、それでもさらに下部を分離し、上部のみとした背景には、戦いの道具として究極の機動性を目指したことが理由であると思われる。そのあたりは、これらの可変タイプ機の嚆矢となった、アナハイム・エレクトロニクス社製のMSZ-006 ZガンダムやMSZ-010 ZZガンダムを念頭に置きながら、ネオ・ジオンの技術や事情なども加味された、独自のコンセプトを構築したのかもしれない。

パウのコンセプトは先進を極めていたネオ・ジオンの武器体系を見渡してみても、類似のモノは一切存在しないという異例づくめの機体だった。それでも限界性能をクリアするために採用したスタイルであるならば、それもまたネオ・ジオンらしいし、既述した通り旧ジオン公国が残したMSを地道に改良していたのも、またMSに国の運命をかけていたがゆえの熱心さの顕れだったのかもしれない。

なお、この他にもネオ・ジオンが実戦に投入したMSは多数あるが、戦術的なコンセプトとしてはここで解説したカテゴリーに何とか分けることができるだろう。



徹底比較！

U.C.0080

0090年代の

MS技術と

21世紀の兵器技術

『ガンダム』ワールドは、SF、つまりサイエンスフィクションの世界である。

つまり、作品に出てくるテクノロジーは、

作品製作当時の最新技術などをもとに、

想像して生み出された技術といっている。

そして、本書のテーマである

「ネオ・ジオン」勢が登場する作品の多くは、

製作から四半世紀以上の年月が経っている作品である。

それらの作品と、現在のテクノロジーを比べてみると、

なかなか興味深いことがわかってくる。

文・矢吹明紀

宇宙と地球の 可変機の違いとは？

アクシズからネオ・ジオンに至る時代では、技術的にも3つの陣営が戦線で対峙していた時期があり、そこで投入される新型モビルスーツ（以下、MS）は、その多くが何らかの可変機構を備えていたのが特徴だ。この可変機



構は、現代の戦闘用航空機などでもおなじみであり、それが付加されている理由は、基本的には二つの異なる性能的条件を一つの機体でクリアしなければいけないということである。

現実世界の航空機の場合、それは超音速領域での抗力を低減し、無理なく高速力を発揮すると同時に、中低速領域では一定の抗力を発生させて運動性



MV-22オスプレイ

異なる2つの機能を持たせるという可変MSに、現実世界で近いのはオスプレイかもしれない。飛行機の高速度、ヘリコプターのような機動と垂直離着陸機能の両立を目指した機体だ。設計思想自体は半世紀ほど前のものでもある。

能の向上、機動性を発揮させるための技術である。MSの場合もこの二つの異なる条件を満たすのは同じだったものの、さらに複雑な条件が加味されていたことに注意する必要がある。それは活動する環境に大気があるかないかという点である。

ご存じの通り、MSが機動戦闘を行う舞台は、宇宙空間と大気圏内の二カ所に跨っていた。前者の場合、機体の形状が空力に及ぼす影響はほぼ無視してもOKだが、後者の場合は起動から加速、方向転換から停止まで、すべて大気による大きな影響を受けた。

MSの場合、スラスターという強力な多方向推力発生装置によって、ある程度の機動性を担保できた一方で、スラスターのみに頼った急激な方向転換



現実世界の可変(翼)機

機体の速度域における自由度の高さが可変翼機の特徴。上写真は可変翼機の代名詞でもあるアメリカ海軍のF14。ペットネーム(愛称)はトムキャット(雄猫)。下はアメリカ空軍のF111で、実用化された可変翼機第一号。通称、アードバーク(ツチブタ)。どちらもすでに退役。

耐えることができない。人類の耐えることができない。重力加速度は、瞬間的なものであれば相当のレベルでも可能だが、空中戦機動などで、それが連続するとなると、何らかのデバースを使い、

さらに訓練を行ったとしても10Gあたりが限界とされる。しかもこのレベルであれば現実世界の航空機でも到達している。それがガンダム世界でのMSともなれば、その動きを見ても、レベルが異なることは容易に推測できる。このあたりは、重力加速度を打ち消す、何らかの未知のデバイスが装備されていると判断しないことには説明が付かない部分である。

さて、MSを構成するムーバブル・フレーム及び、それに伴う可変機構の付加は、空力的な作用の他にも戦闘を有利に進める上での目的があった。それは戦闘形態としての理想形への変形である。MSは人型であることに存在意義があった一方で、一年戦争後の実際の戦闘においては、人型でなければいけないシチュエーションはそれほど多くはなかったといわれている。元々は狭いコロニー内や大気圏内(多くは地上)での機動戦が主だったこともあり、人型であることはそれなりに意味があったものの、こと宇宙空間においては戦闘となると、時として人型であることが足枷にもなり兼ねなかったということである。

こうした戦闘シチュエーションに合わせて機体を変形させるという構造と

は搭乗しているパイロットの肉体に、多大な負担を強いるものだった。こうした物理的要因を抑えつつ良好な機動性を確保するには、やはり機体を変形させることで機動性と抗力のバランスを取るというのが一番リーズナブルだったということであろう。

重力の制御こそ可変MSの課題!

そしてもう一つ、MSに課せられた任務には、さらに過酷なものが存在した。それは非常に限定的な運用ではあったものの、メカニズム的に完全でないと即破壊に繋がるといふ厳しい任務、大気圏内突入である。この機能は一年戦争時の連邦軍製MSだったガンダムが先鞭を付けたが、U.C.0087年以降の戦い、すなわちZガンダムが登

場した時代には、バリエーションという大気圏突入用装備がメジャーな存在となっていた。こうした様々な条件を踏まえての可変+追加装備による空力的な機能性向上は、現実世界における航空機技術にもある意味類似するポイントである。もちろん現実世界の場合、せいぜい可変翼や可動スポイラーといったレベルの話ではあるが、抗力をコントロールするという意味では、根本にあるものは同じである。

可変機構の役割
オスプレイとMS

さて、MSを構成するムーバブル・フレーム及び、それに伴う可変機構の付加は、空力的な作用の他にも戦闘を有利に進める上での目的があった。それは戦闘形態としての理想形への変形である。MSは人型であることに存在意義があった一方で、一年戦争後の実際の戦闘においては、人型でなければいけないシチュエーションはそれほど多くはなかったといわれている。元々は狭いコロニー内や大気圏内(多くは地上)での機動戦が主だったこともあり、人型であることはそれなりに意味があったものの、こと宇宙空間においては戦闘となると、時として人型であることが足枷にもなり兼ねなかったということである。

こうした戦闘シチュエーションに合わせて機体を変形させるという構造と

さらに訓練を行ったとしても10Gあたりが限界とされる。しかもこのレベルであれば現実世界の航空機でも到達している。それがガンダム世界でのMSともなれば、その動きを見ても、レベルが異なることは容易に推測できる。このあたりは、重力加速度を打ち消す、何らかの未知のデバイスが装備されていると判断しないことには説明が付かない部分である。

さて、MSを構成するムーバブル・フレーム及び、それに伴う可変機構の付加は、空力的な作用の他にも戦闘を有利に進める上での目的があった。それは戦闘形態としての理想形への変形である。MSは人型であることに存在意義があった一方で、一年戦争後の実際の戦闘においては、人型でなければいけないシチュエーションはそれほど多くはなかったといわれている。元々は狭いコロニー内や大気圏内(多くは地上)での機動戦が主だったこともあり、人型であることはそれなりに意味があったものの、こと宇宙空間においては戦闘となると、時として人型であることが足枷にもなり兼ねなかったということである。

可変機構の役割
オスプレイとMS

さて、MSを構成するムーバブル・フレーム及び、それに伴う可変機構の付加は、空力的な作用の他にも戦闘を有利に進める上での目的があった。それは戦闘形態としての理想形への変形である。MSは人型であることに存在意義があった一方で、一年戦争後の実際の戦闘においては、人型でなければいけないシチュエーションはそれほど多くはなかったといわれている。元々は狭いコロニー内や大気圏内(多くは地上)での機動戦が主だったこともあり、人型であることはそれなりに意味があったものの、こと宇宙空間においては戦闘となると、時として人型であることが足枷にもなり兼ねなかったということである。

この他に一年戦争時にはなくU.C.0087年以降に登場した新技術で、現実世界との比較が可能なモノは他にもある。ひとつは脱出ポッドだ。これは実にシンプルで、要するにコクピットを離脱式とし、緊急時には射出可能としたものである。元々が気密構造であるMSであれば、大気圏内外は問わず安全に脱出できる。こうしたシステムは、現実世界の航空機におけ

なる、現実世界においてはV-22オスプレイが辛うじて相当するかもしれない。オスプレイはヘリコプターの持つ機動性と通常の航空機が持つ輸送能力を両立させるために、大型のテイルローターを採用した。



↑F35ライトニングのコックピットシート。従来の細かな計器を廃し、ひとつのディスプレイに集約している。

る射出座席がそれに相当する。その歴史は第二次世界大戦の末期にまで遡ることができ、少なくとも第一線で戦う戦術機においては完全にスタンダードな装備である。

一方、ガンダム世界はというと、ガンダム、ガンタンク、ガンキャノンのみがコア・ファイターという合体システムを持っていたことから、緊急脱出時にはそれを使うことができたものの、他の機種は、連邦軍もジオン公国軍も等しく脱出装置は備えていなかった（一説には脱出用シートの存在に言及する例もあるが使用例はほとんどない）。設定では、一年戦争時の損害の多さを鑑み、新たに脱出ポッドを装備するようにになったとされているが、かなり遅きに失した観は否めない。ちなみにMAには、脱出装置が装備されて

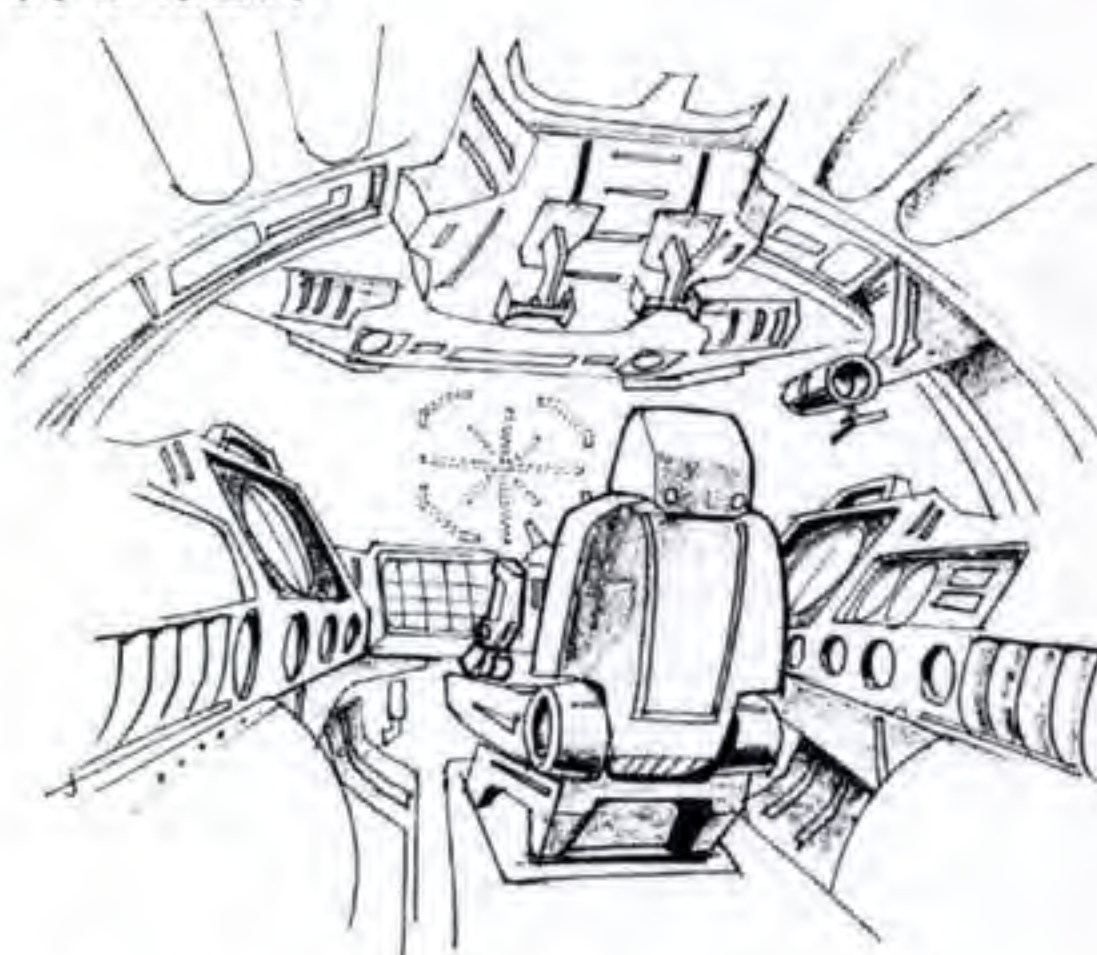
いたのは、本編でも描かれている。

『機動戦士ガンダム』放映時には存在せず、『機動戦士Zガンダム』以降になつて、ネオ・ジオンのMSにも採用された装備は他に全天周囲モニターが挙げられる。これは、かつては頭部カメラなどで撮影した映像、それも主に前方をコックピット内のモニターに映し出す方式から、機体外部にセットした複数のカメラで周囲を撮影し、それをコンピュータで合成してコックピット内に投影して、あたかもオープンコックピットのように映す、というシステムへと大きく進化したものだつた。

この手の合成映像システムは、現代の現実世界において、シミュレーターやアミューズメント施設などで、もはや3D映像として見るができる。しかし実際の実用兵器システムにおいては、実用化には至ってはいない。もちろん技術的には可能となつているものの、カメラが損傷した場合、視界の一部、もしくはすべてが失われるというリスクを無視することができないのが理由だろう。

ちなみに合成画像モニターシステムが車載型として実用化されている例として、日産自動車の一部の車種に採用しているアラウンドビューモニターがある。これはクルマの周囲にセットされた複数のカメラで撮影した画像を合成し、モニターにはクルマの真上から

ザクのコックピット



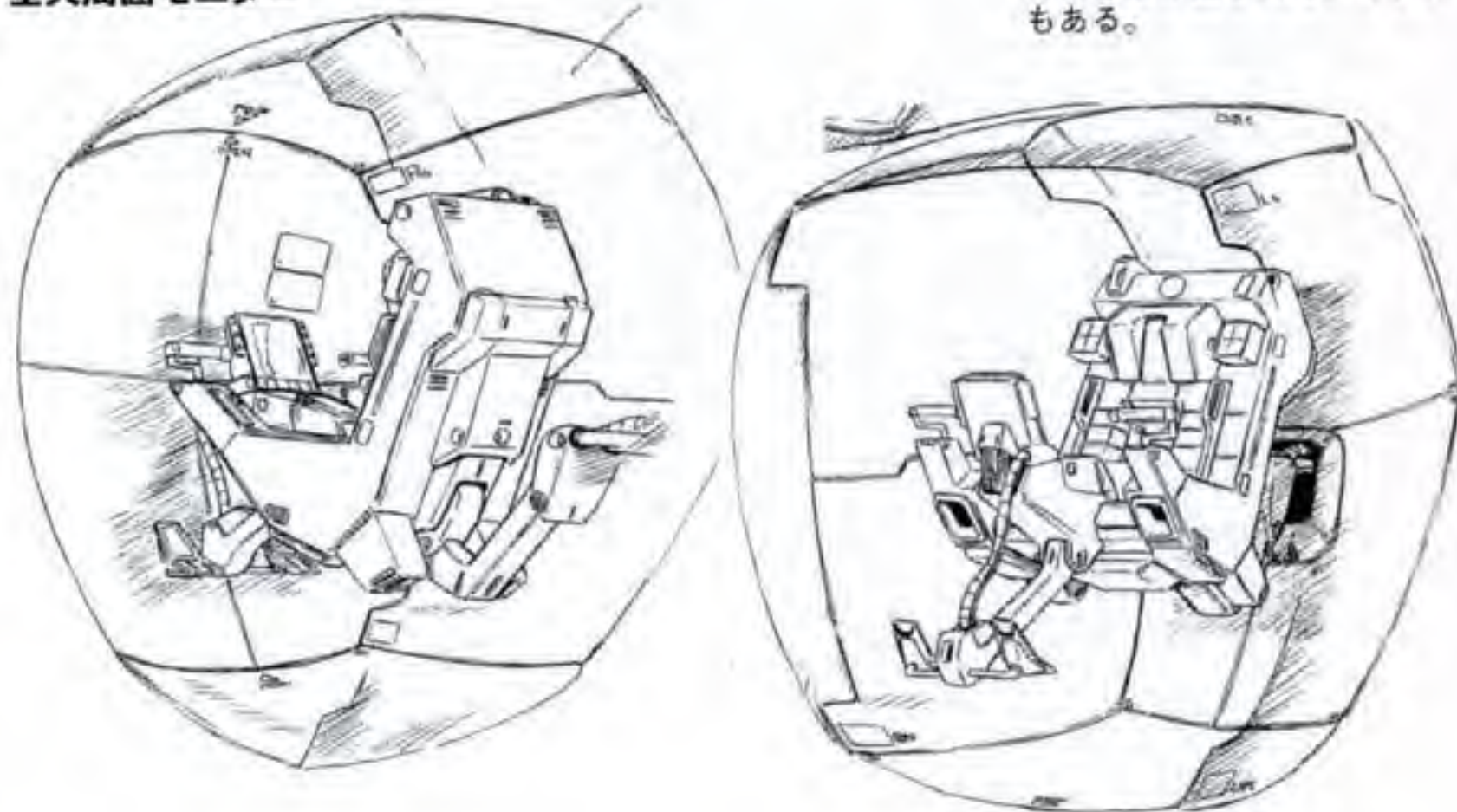
↑↑上の図は一年戦争時のジオン公国軍の主力MS、ザクIIのコックピット。下図はZガンダムのコックピット（全天周囲モニター）。現実兵器の場合、ヘッドマウントディスプレイが考え方は近い？ そもそもコックピットの周囲にモニターを張り巡らし、外の風景を映し出すのは、アニメにおける作画作業の負担軽減のため生み出されたアイデアでもある。

サイコミュ兵器と有線誘導兵器

見た画像として表示するもの。このシステムはいわゆる全天周囲モニターのプリミティブなモノといえなくもない。

兵器システムにおける新技術のなかでは、一年戦争時、極めて特殊なニュータイプ用メカだつたサイコミュシステムが、大幅に適用範囲が広がったことに注目したい。これはニュータイプ

Zガンダムの全天周囲モニター



の存在が広く知られるようになり、潜在能力を持つ人物の発掘や、訓練や投薬、手術といった人造ニュータイプである強化人間の研究が進んだことで、それに見合った兵器システムの開発が求められるようになったことが理由である（車輪の両輪の関係とみることもできる）。

ここでサイコミュシステムのポイントは、従来は相応の大きさが必要だった機器類の小型化が進み、全長がMS



↑写真はアメリカ海軍のオハイオ級原子力潜水艦。潜水艦の戦っている環境は周囲を目視できない。宇宙世紀の場合はミノフスキー粒子の影響から、MSは目視（カメラ）がメイン。環境面では逆転している両者だが、戦闘に置かれている状況は近いのかもしれない。

の1/2ほどあったビットも小型化され、無線式移動砲台という性質はそのままに、ファンネルとなったことである。これによりMSの限られたジェネレーター出力で運用できるようになったのは大きい。

ちなみにこのサイコミュを利用した無線式のファンネルを現実世界の兵器に当てはめて比較することはできるだろうか？ もちろん何らかの意志（＝精神力）でコントロールするビーム兵器という意味では、比較などできるはずもないが、見方を変えて「本体とは別の手段としてのセンサー兼攻撃兵器である」と考えた場合、一つ思い当たるものがある。それは何かというと、潜水艦における有線誘導兵器である。潜水艦が装備する攻撃兵器、すなわち魚雷にしる、機動機雷にしる、一般に

は発射しっぱなしという印象がある。しかし現実には有線で運用されることがほとんどである。この場合、まず艦体に装備されたメインのパッシブソナーで敵艦を見つけ出し、特に敵も潜水艦の場合は一定の距離を保って追跡しつつ、機会を待って攻撃を加えるわけだ。ここで使用される有線誘導魚雷は、単に魚雷というよりは、弾頭を装備したマルチセンサーというべき機能を備えているのが特徴である。魚雷の頭部にもアクティブソナーが装備されている場合が多く、それを通じて探知したデータは発射した艦と結ばれている誘導ワイヤを通じて母艦側に送られ、そのデータは母艦の火器管制装置で処理された上で、再び魚雷側に送られるというシステムが採られている。

初期の有線誘導兵器の場合、その指示はあくまで母艦側からのみの一方通行だったのだが、世代を重ねるごとにシステムは進化、現在では相互通信が標準となっている。通信ワイヤも初期の銅線から最新のものは大容量のデータを高速で送受信できる光ファイバーとなっている。これらのメリットは、敵側との最低限の距離を保った上で精密な攻撃が可能ということ。また有線誘導であればデコイ（囃魚雷）などの、敵側の妨害の影響はほぼ受けない。敵と一定の距離を保ち、精密な攻撃を加えるというのは、サイコミュ兵装

アメリカ海軍Mk48魚雷



↑上の写真はロサンゼルス級原子力潜水艦バサデナの艦内。そこにはMk48魚雷と発射管が写る。この魚雷は誘導方式を無線、有線に切り替え可能。現実世界では、脳波や精神波による誘導兵器は現実味に乏しい。案外、準サイコミュを搭載した有線式インコムドローベン・ウルフなどは、実用性が高かった可能性も。



の大きな特徴かつ、メリットの一つであり、コンセプトとしては類似性が高いといえるだろう。とはいえ、現実世界ではファンネルのように無線でコントロールすることは不確定要素が増す要因でもあり、現実性を優先するのであれば有線が望ましい。すなわち一年戦争時のブラウ・ブロやジオング、ネオ・ジオンのハンマ・ハンマ、トールベ・ウルフのそれである。

現実がガンダムの世界に近づいている!?

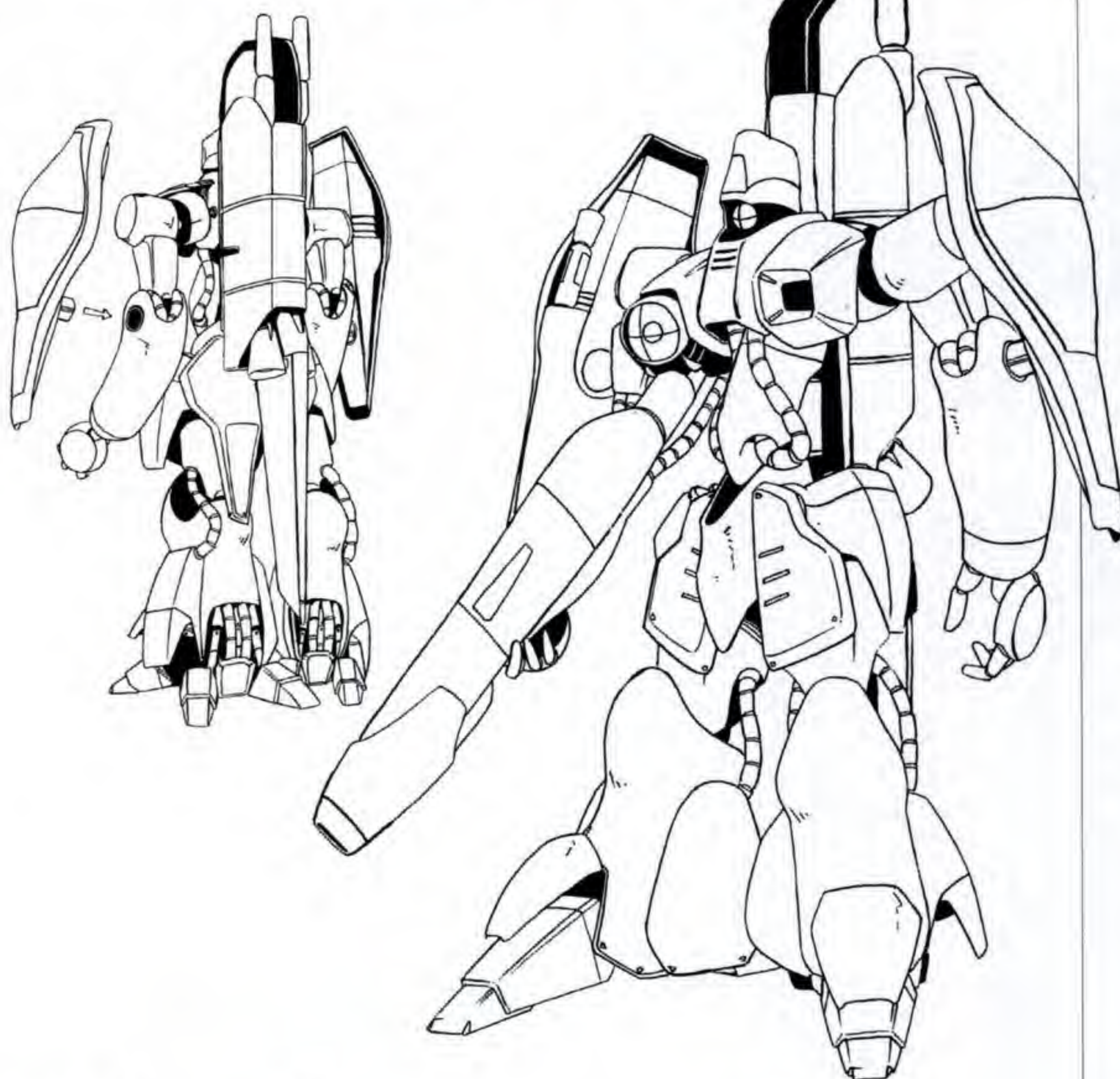
さて最後にここまでの話を総合しよう。可変機構とそれを可能としたムーバブル・フレーム構造、安全性の高い脱出装置、大気圏突入を可能としたパリュート、良好な視界を約束する全天

周囲モニター、そして多彩な攻撃を可能とするサイコミュシステム&ファンネル。

一年戦争時には存在しなかったこれらの新しいメカは、U.C.0087年以降の戦いにおいて、数多くのMSと共にその存在意義を高めることとなった。そしてそれが現実世界の兵器システムと、いかほどの関連性があったかということについては、本来は空想科学の産物であった『Zガンダム』のSF技術が、世に誕生して30年近くの時間を経て、現実世界の方から近づいて来ているといえるだろう。

今後、『ガンダム』にまつわるメカはさらに実現化するものが増えてくることは間違いない。それはMSそのものになるかもしれない……。

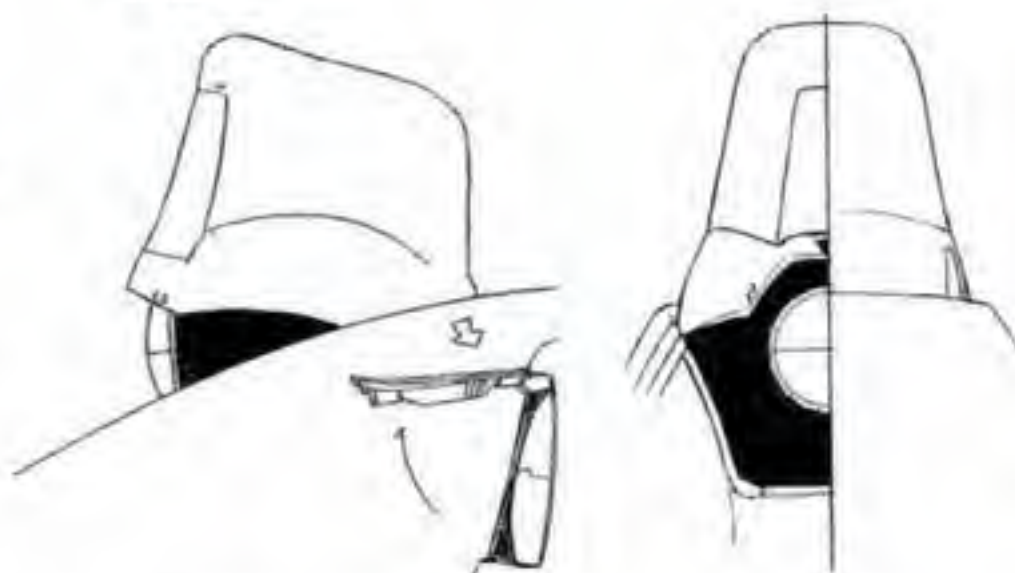
MS 設定資料集



マニピュレーター



頭部



↑コクピットハッチ(額)

AMX-003(MMT-1)

ガゼC

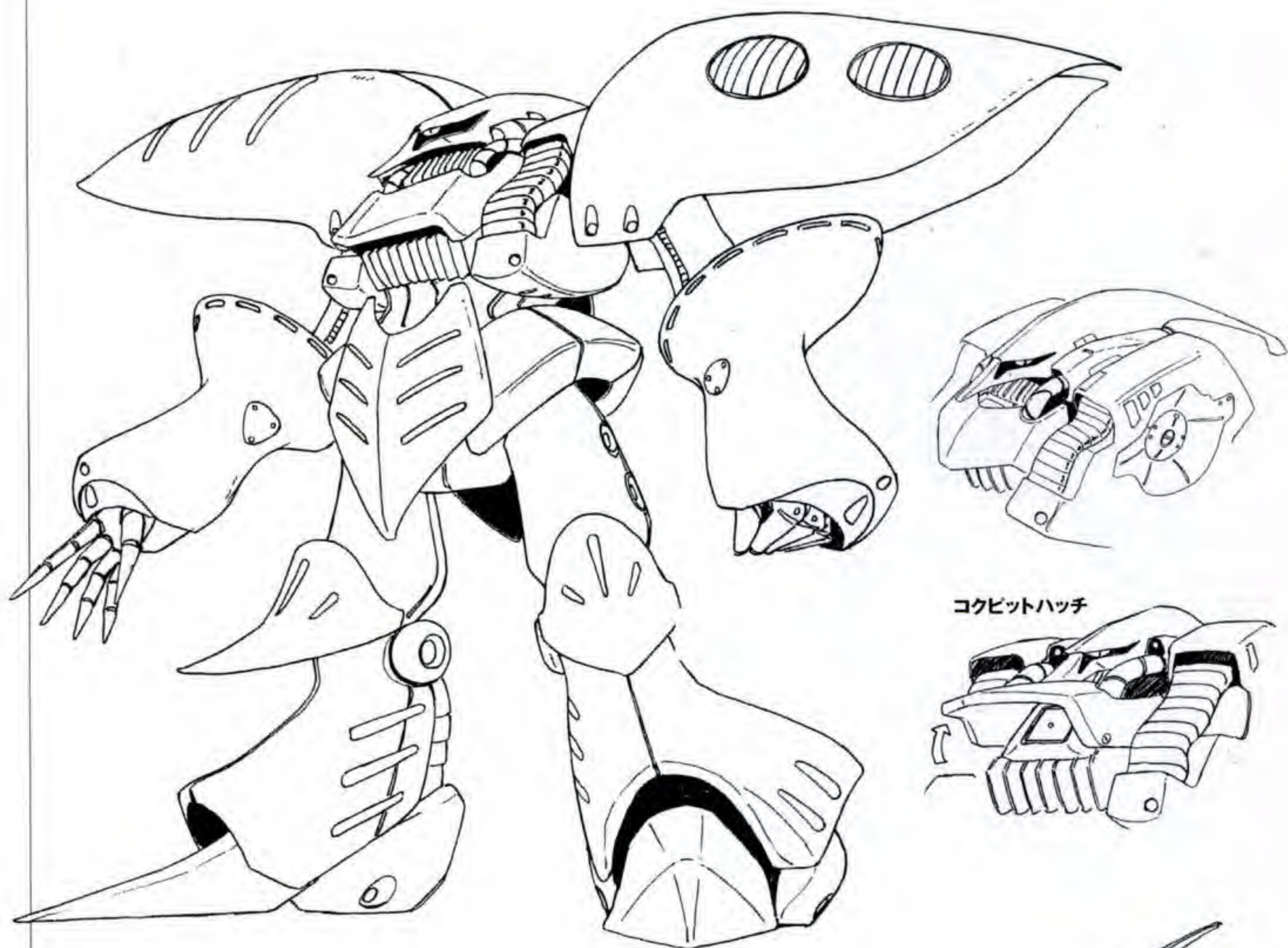
ジオン公国軍の残党が逃げたといわれる、小惑星アクシズで開発されたMS。簡易変形機構を採用しMA形態になる。MS単体としては決して能力は高くないが、集団運用により真価を発揮する。当初はハマーン・カーンも同機に搭乗していた。武装はナックル・バスターなど。

MA形態

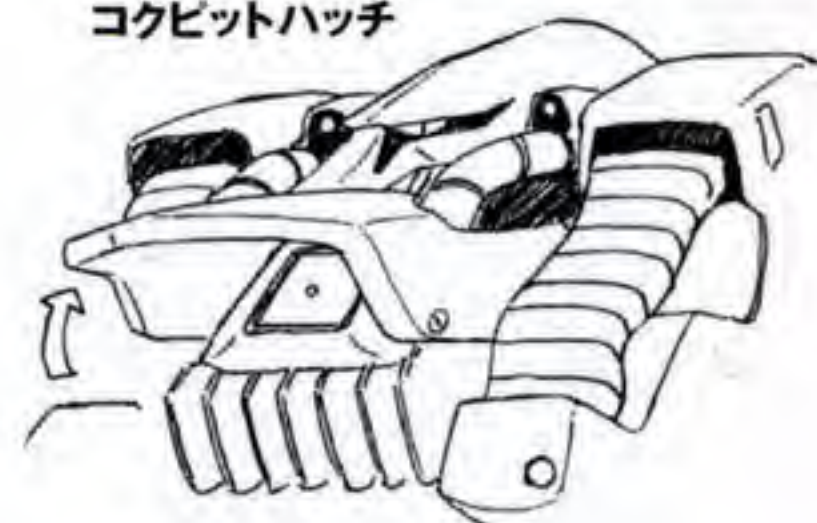


←↑MA形態時は、移動砲台のような運用も可能だった。戦闘用の形態というよりは移動を主眼にした変形といえるだろう。

ここからは映像作品や関連企画（MSVなど）に登場した、MSの設定資料を紹介しよう。取り上げるのは、アクシズ（ネオ・ジオン）、新生ネオ・ジオン、「袖付き」といった各勢力のMSが中心。映像作品から製作年代順、関連企画は映像作品の後という形で掲載した。各作品タイトルの後には年代を記載している。



コクピットハッチ



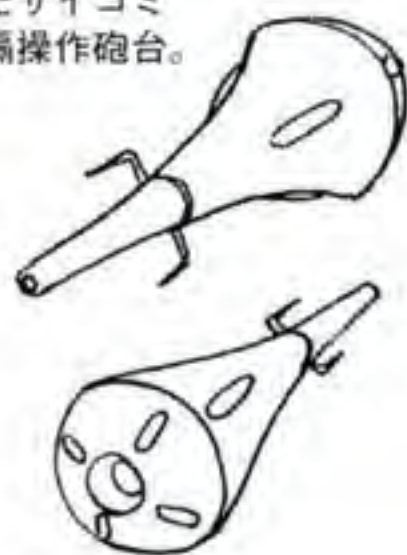
AMX-004(MMS-3)

キュベレイ

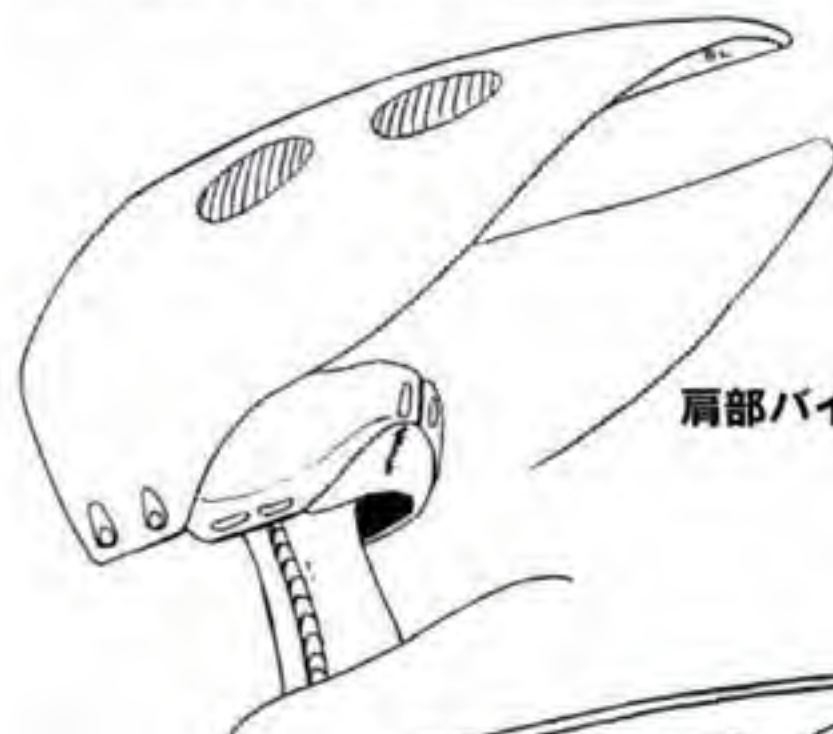
アクシズ（ネオ・ジオン）の摂政、ハマーン・カーンの専用機。サイコミュによる遠隔操作砲台のファンネルを使ったオールレンジ攻撃を主体とするニュータイプ専用機。ハマーンは、この機体でグリプス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争を戦った。

ファンネル

↓一年戦争時のビットと比べて小型化されたサイコミュ式遠隔操作砲台。

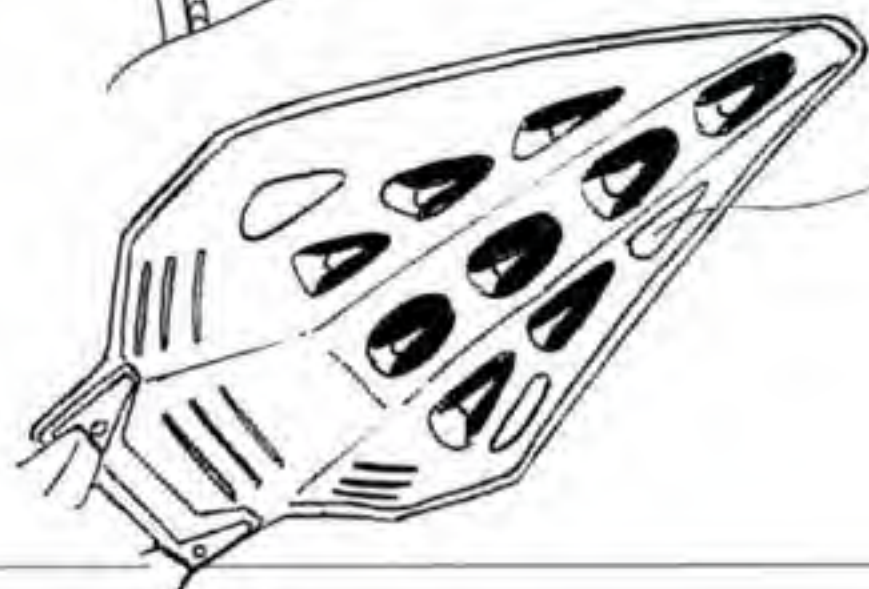


肩部バインダー



ファンネル・コンテナ

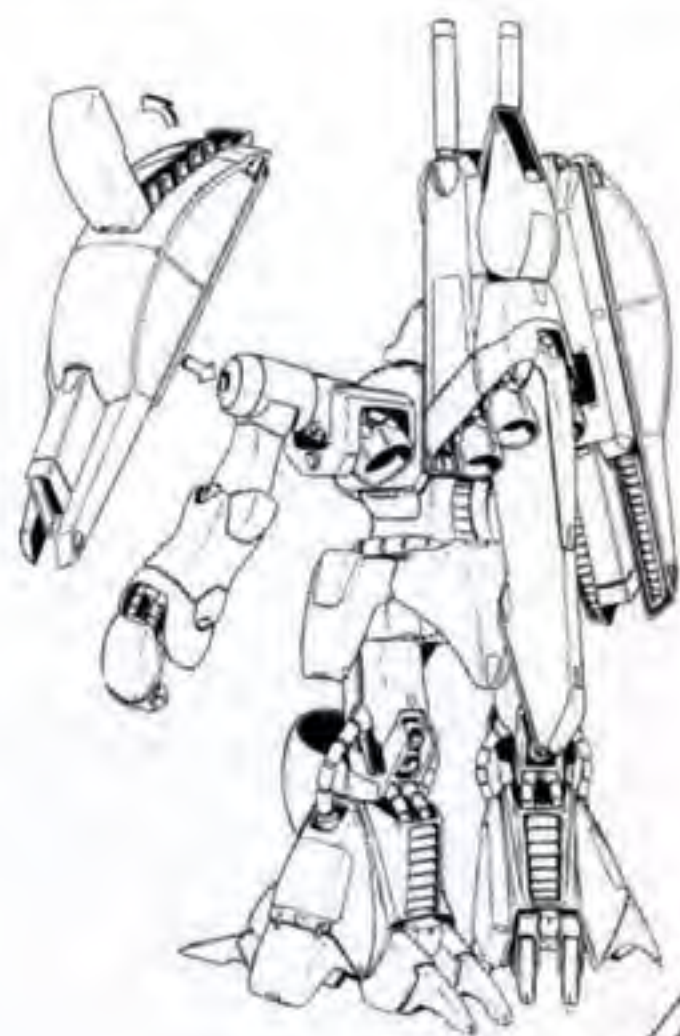
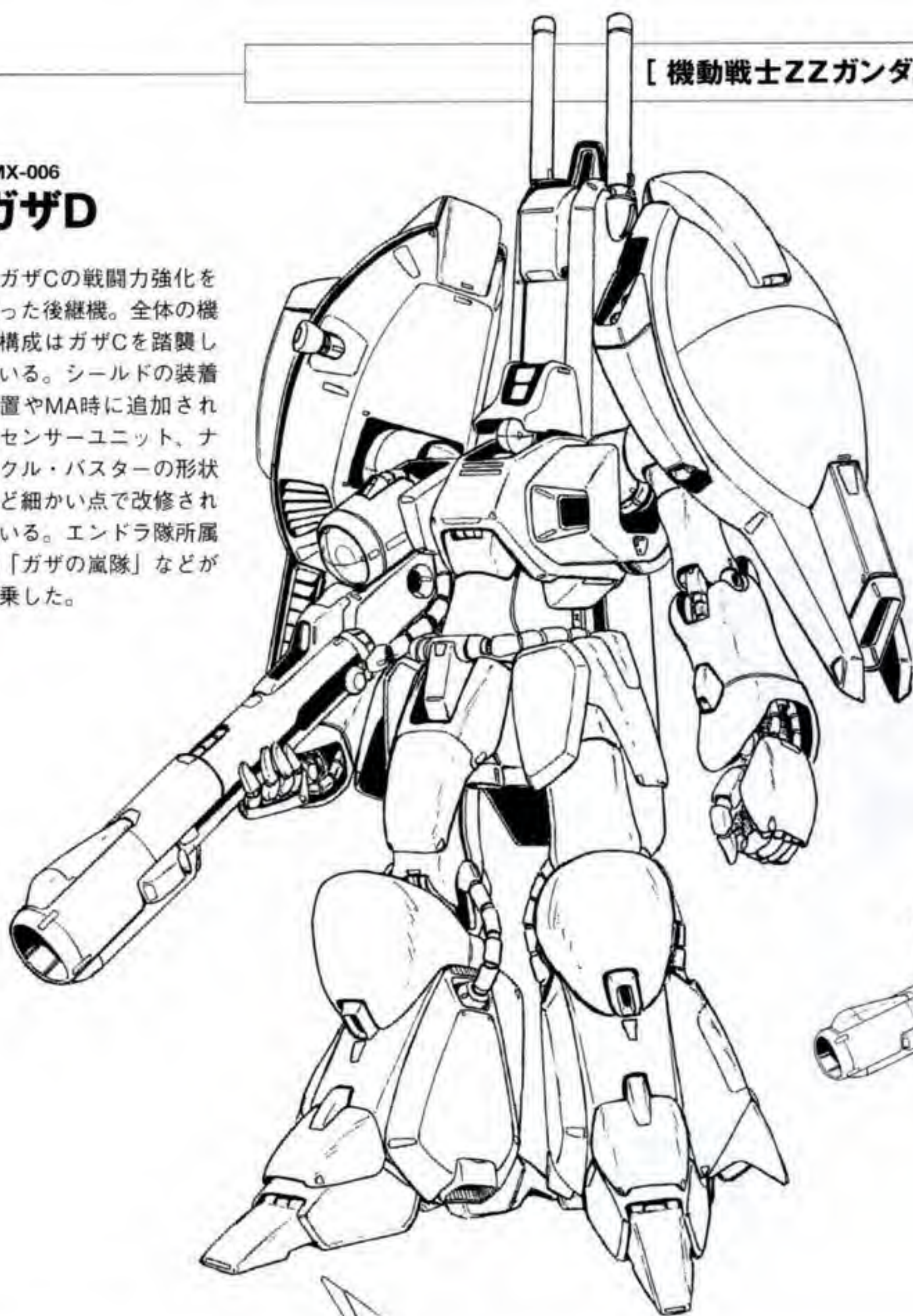
←リアスカート裏にファンネル・コンテナがある。ファンネル自体にジェネレーターは搭載されていないので、コンテナは充電器も兼ねている。



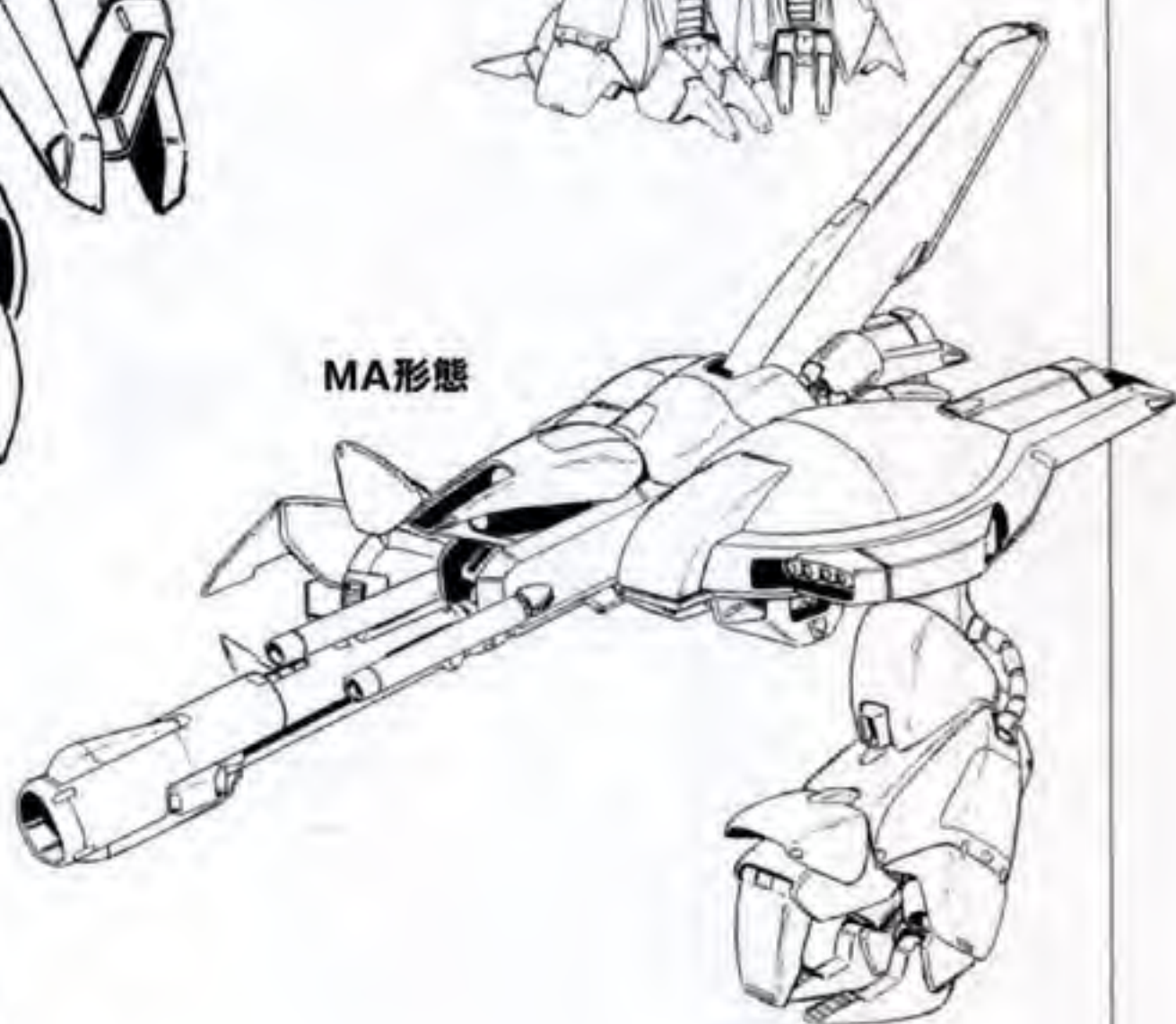
AMX-006

ガザD

ガザCの戦闘力強化を図った後継機。全体の機体構成はガザCを踏襲している。シールドの装着位置やMA時に追加されたセンサーユニット、ナックル・バスターの形状など細かい点で改修されている。エンドラ隊所属の「ガザの嵐隊」などが搭乗した。



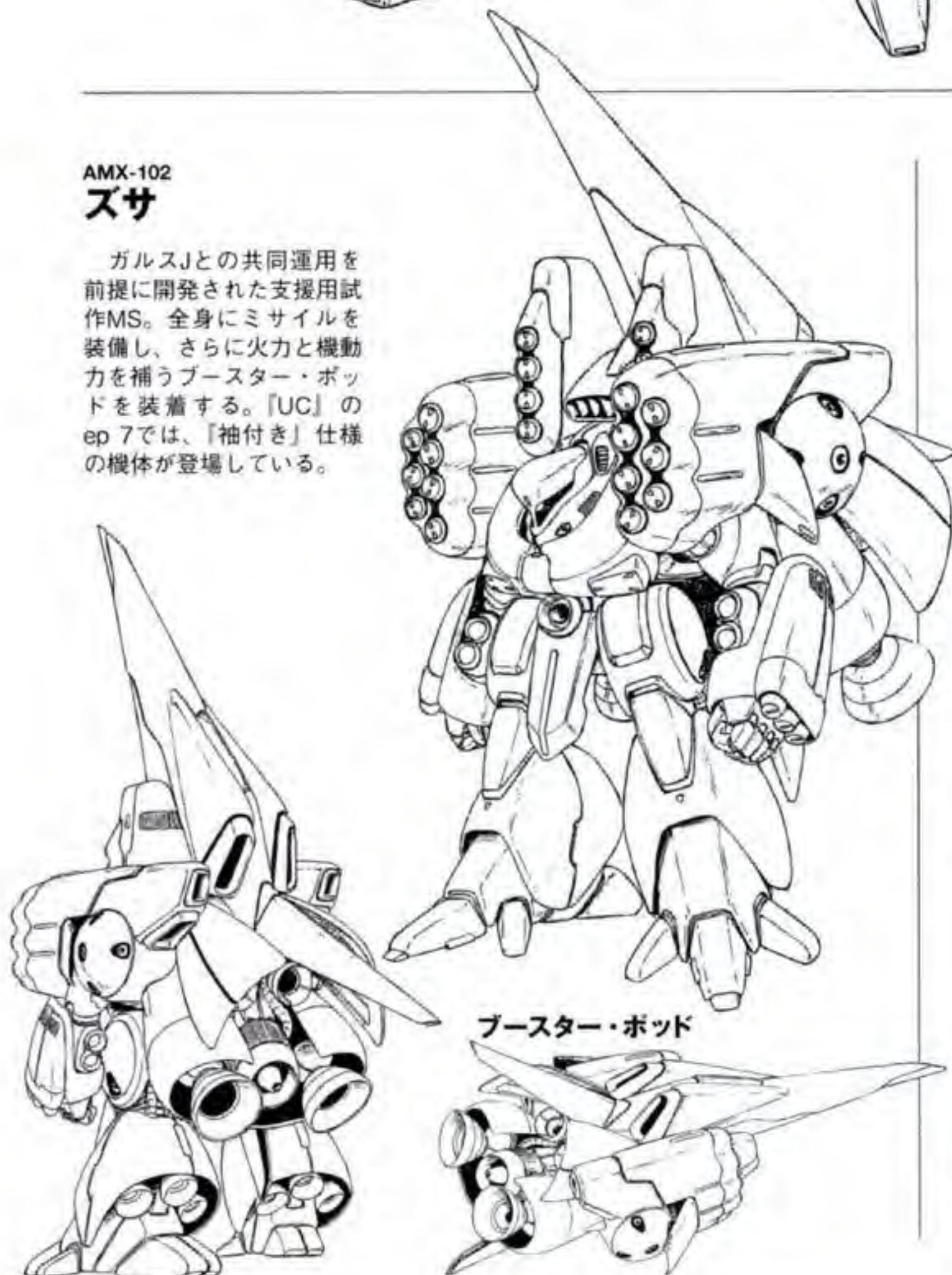
MA形態



AMX-102

ズサ

ガルスJとの共同運用を前提に開発された支援用試作MS。全身にミサイルを装備し、さらに火力と機動力を補うブースター・ボッドを装着する。『UC』のep 7では、「袖付き」仕様の機体が登場している。



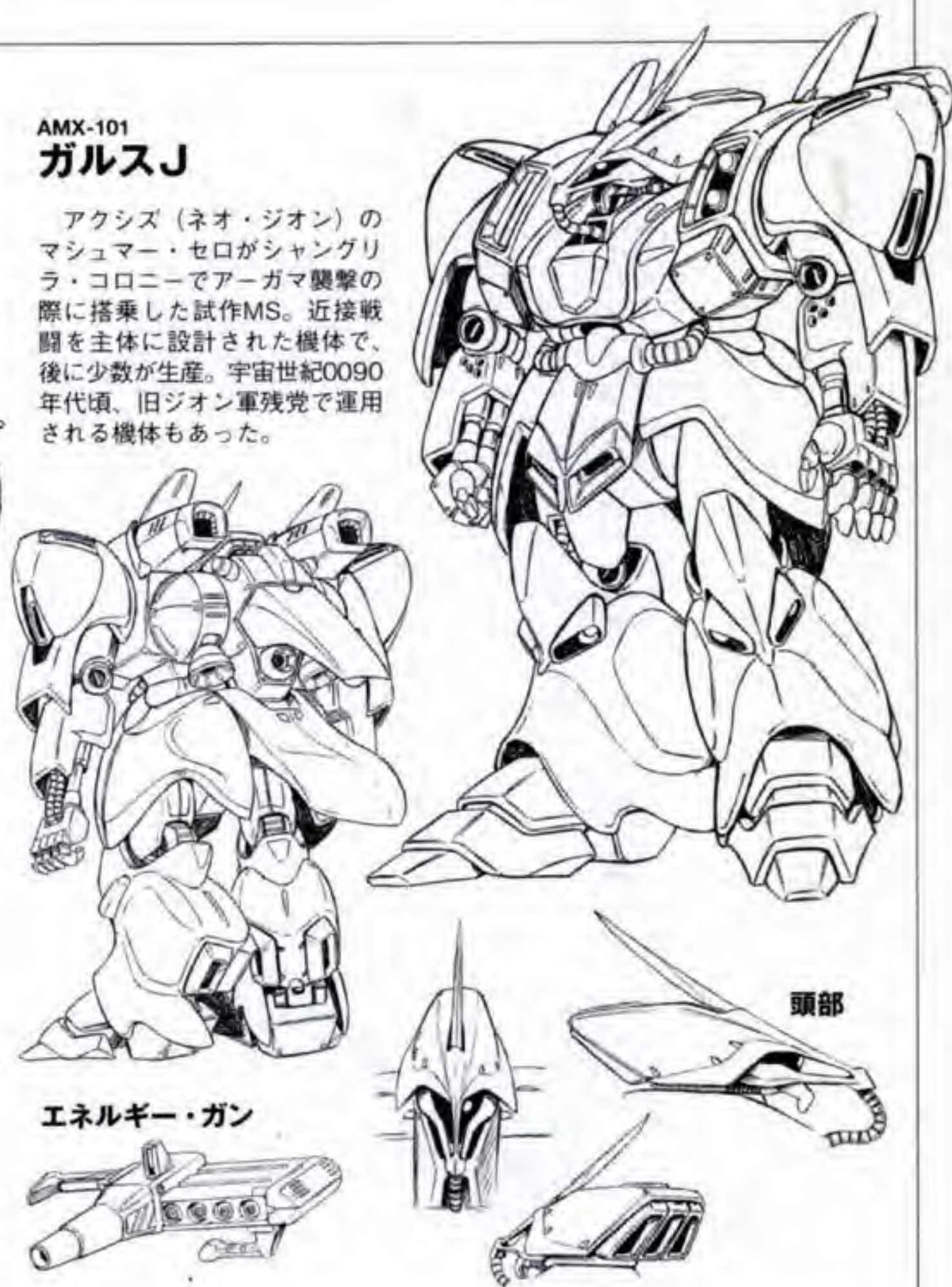
ブースター・ボッド



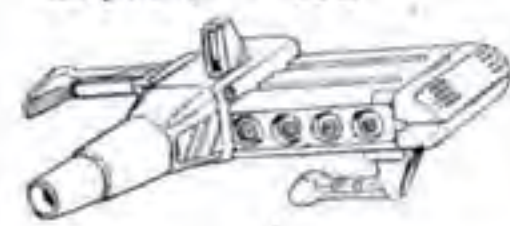
AMX-101

ガルスJ

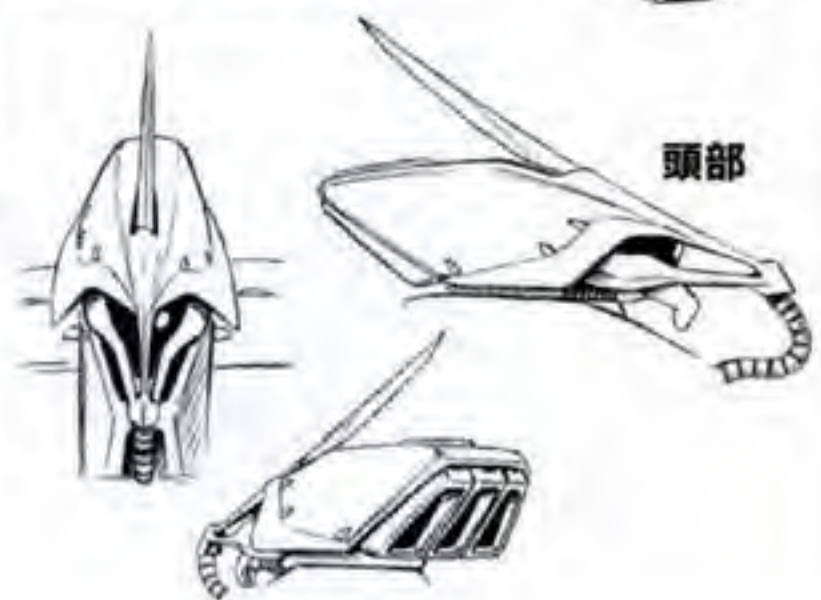
アクシズ（ネオ・ジオン）のマシュー・セロがシャングリラ・コロニーでアーガン襲撃の際に搭乗した試作MS。近接戦闘を主体に設計された機体で、後に少数が生産。宇宙世紀0090年代頃、旧ジオン軍残党で運用される機体もあった。



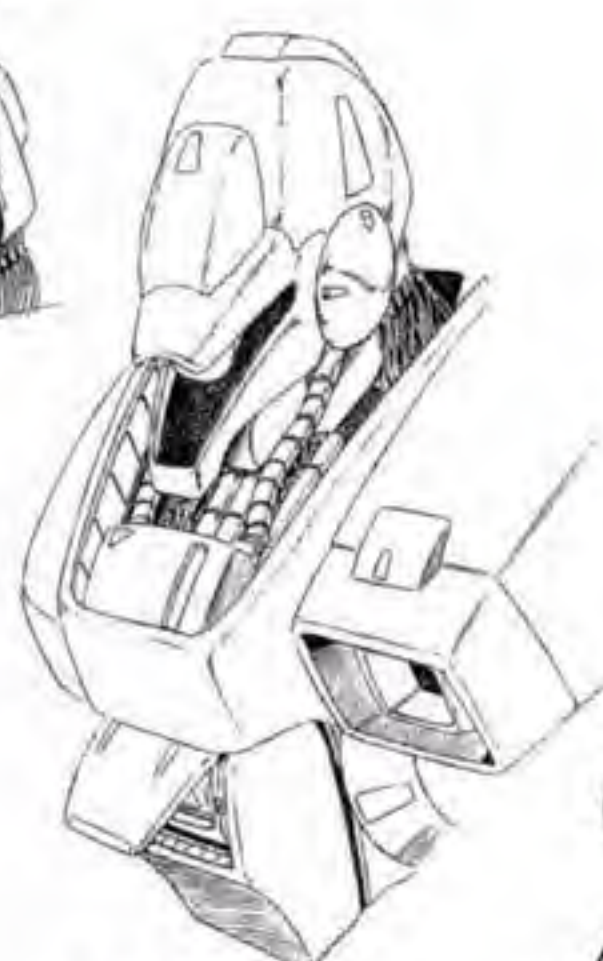
エネルギー・ガン



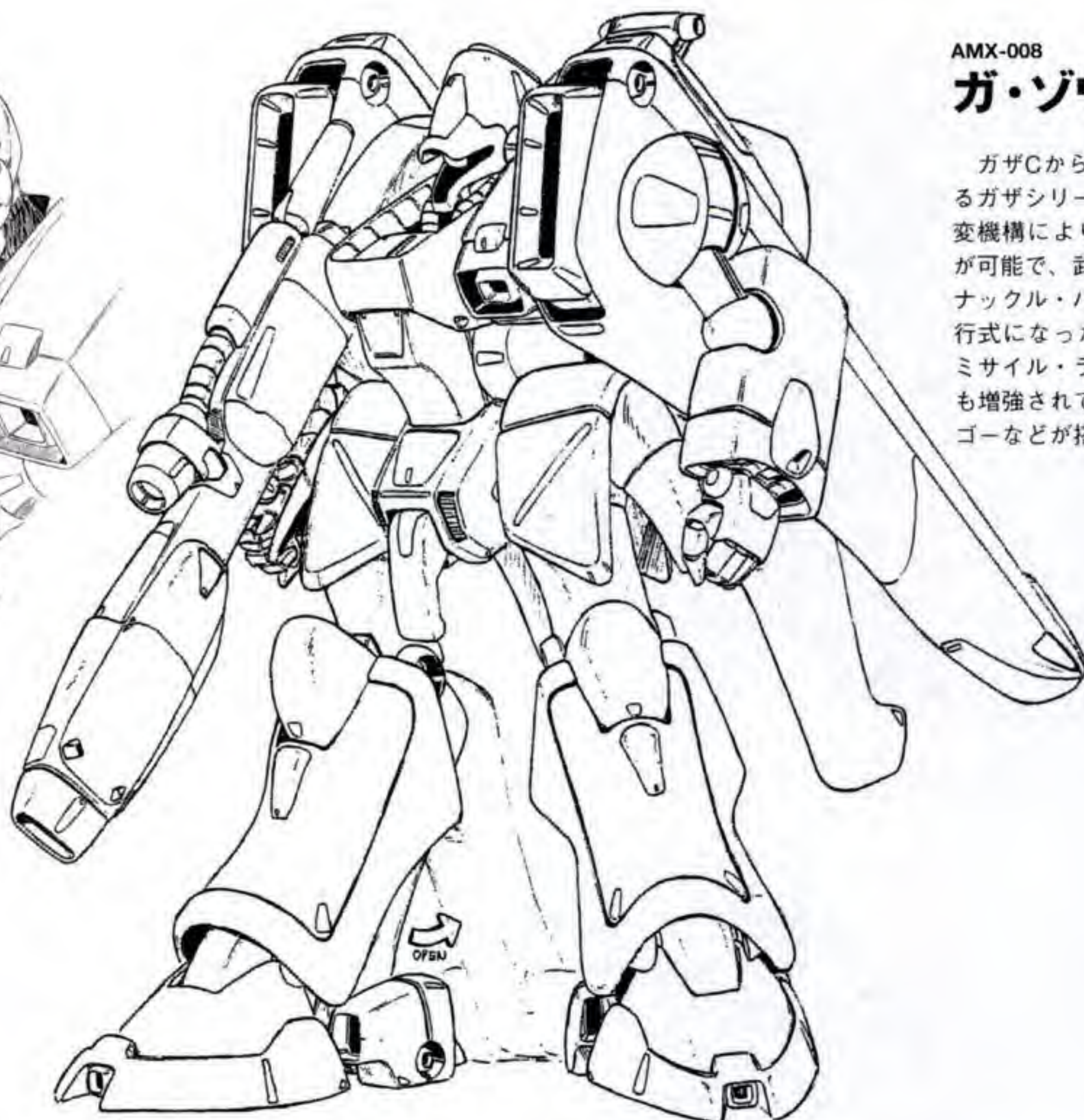
頭部



頭部



コクピットハッチ

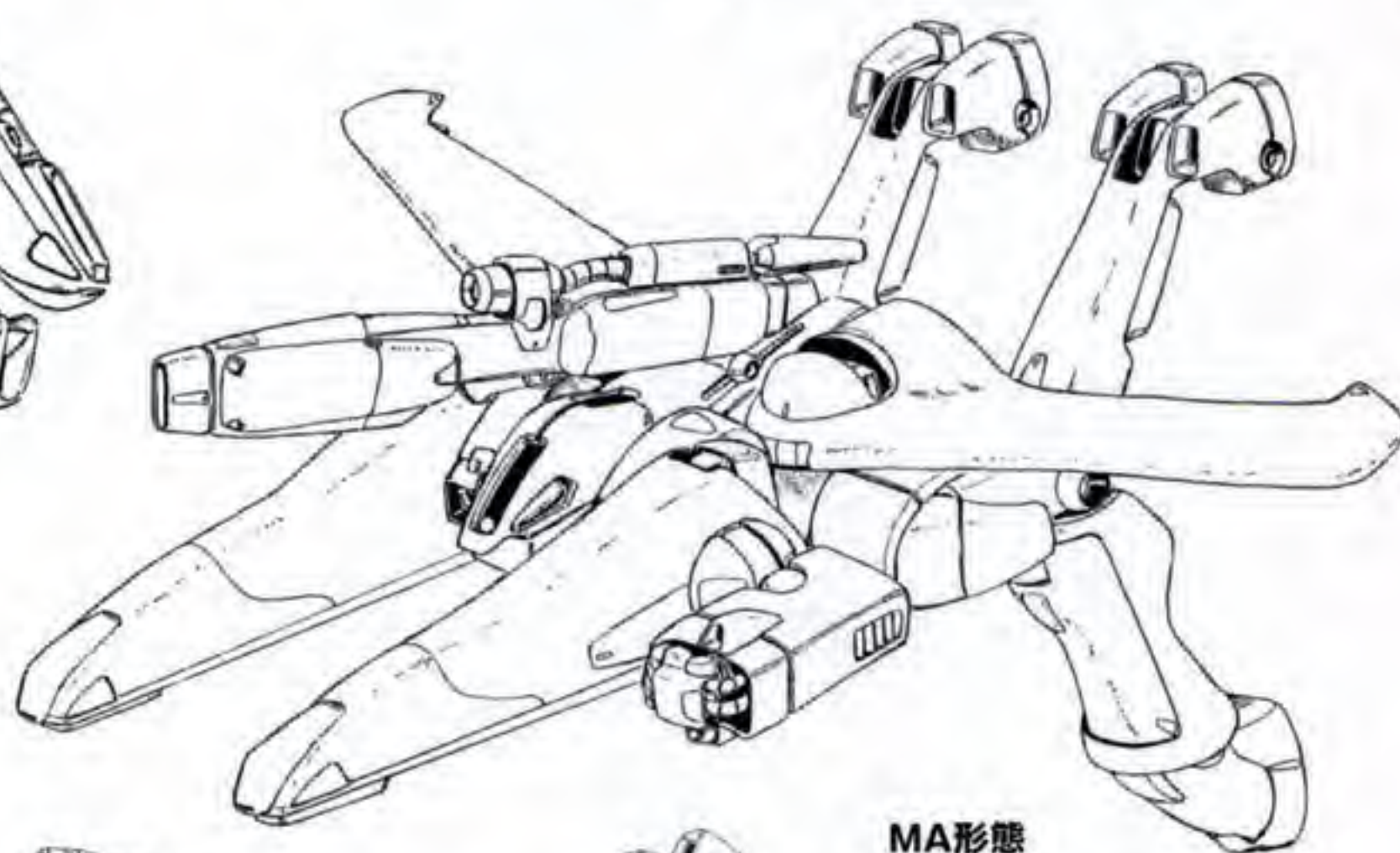
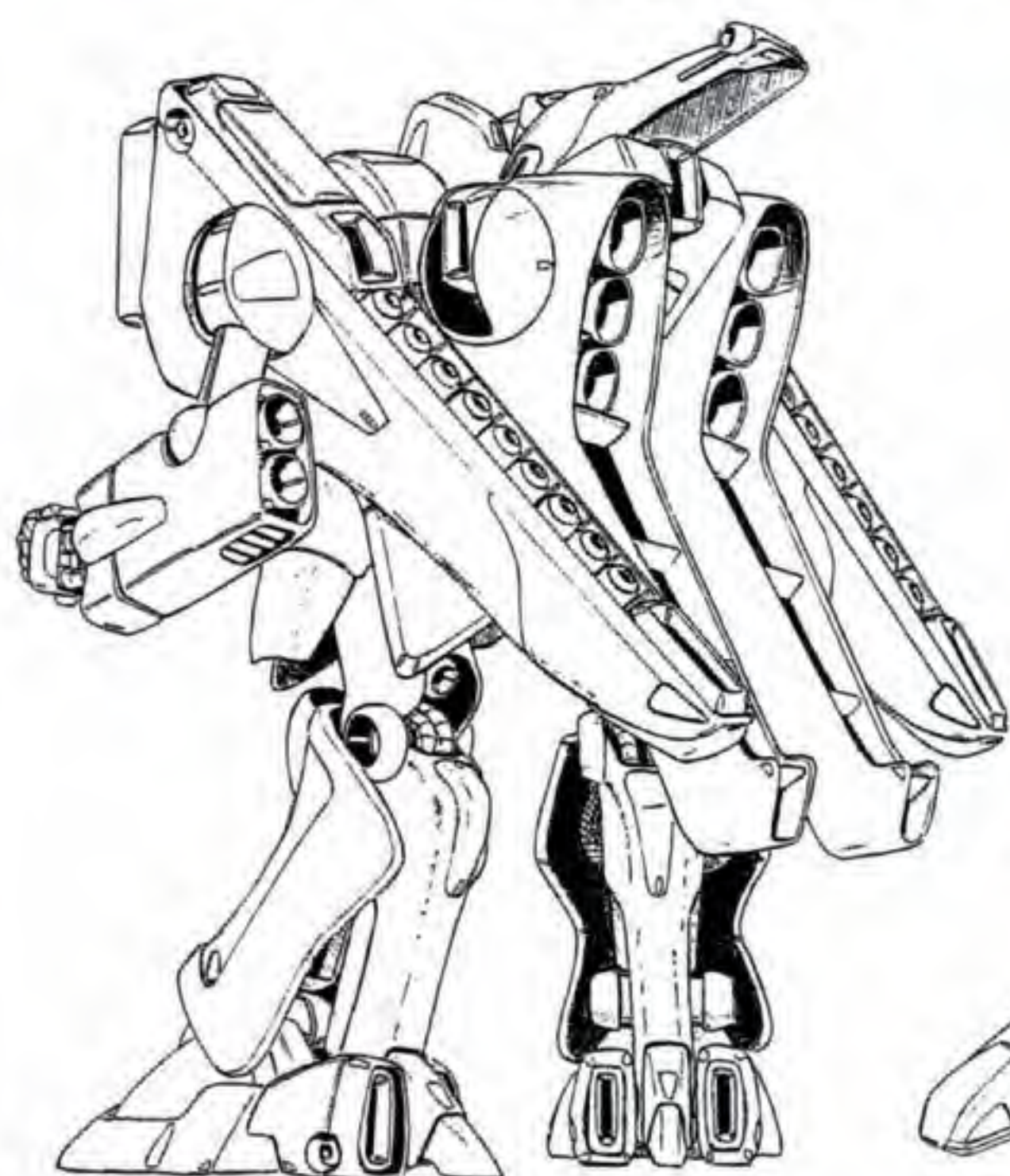
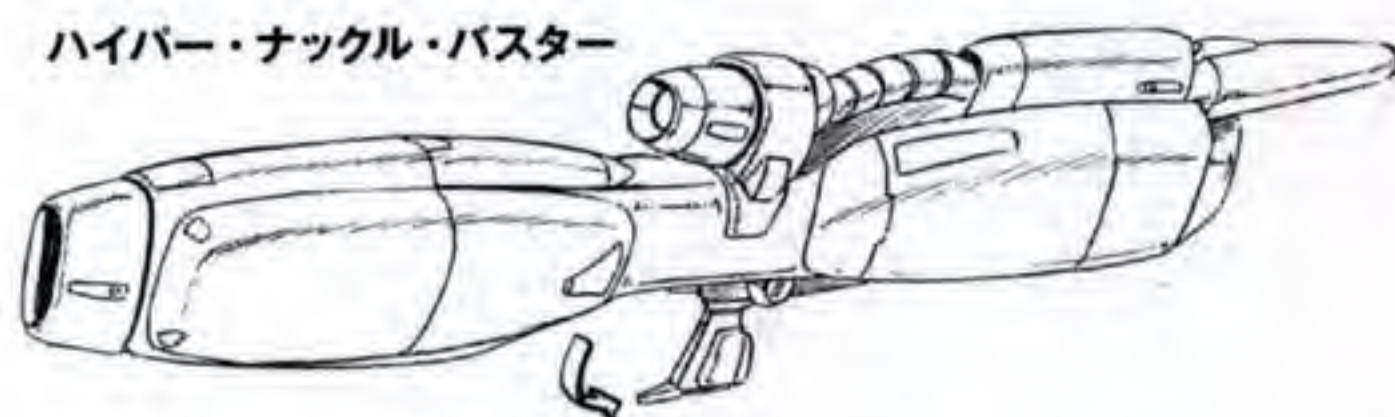


AMX-008

ガ・ゾウム

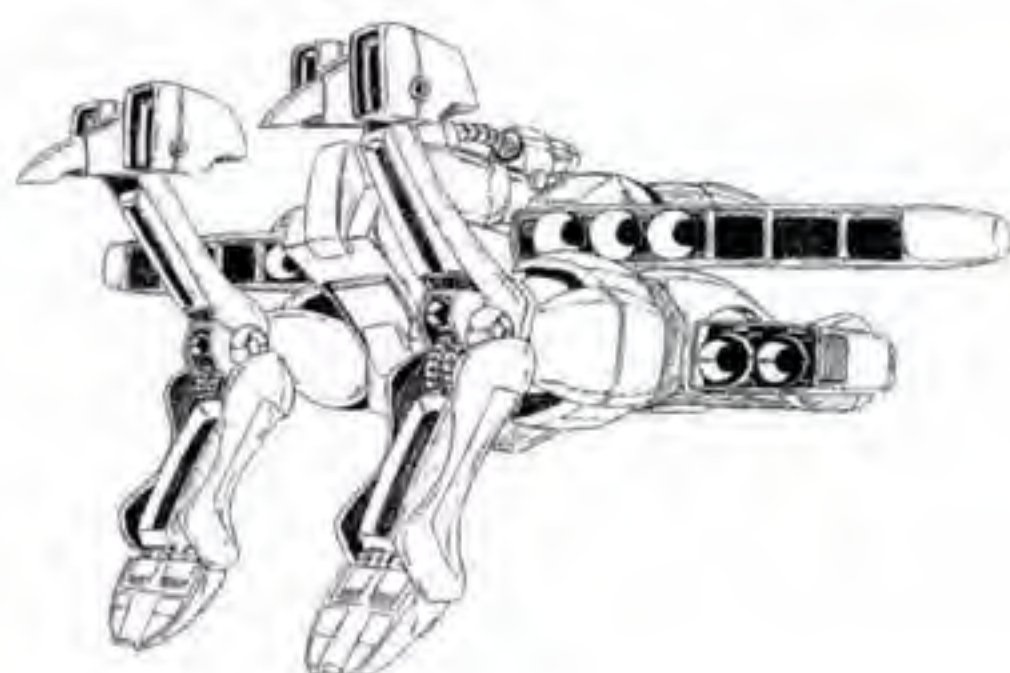
ガザCから連なる、いわゆるガザシリーズの最終形。可変機構によりMA形態に変形が可能で、武装のハイパー・ナックル・バスターも独立携帯式になった。肩部の9連装ミサイル・ランチャーで火力も増強されている。ゴットン・ゴーなどが搭乗している。

ハイパー・ナックル・バスター



MA形態

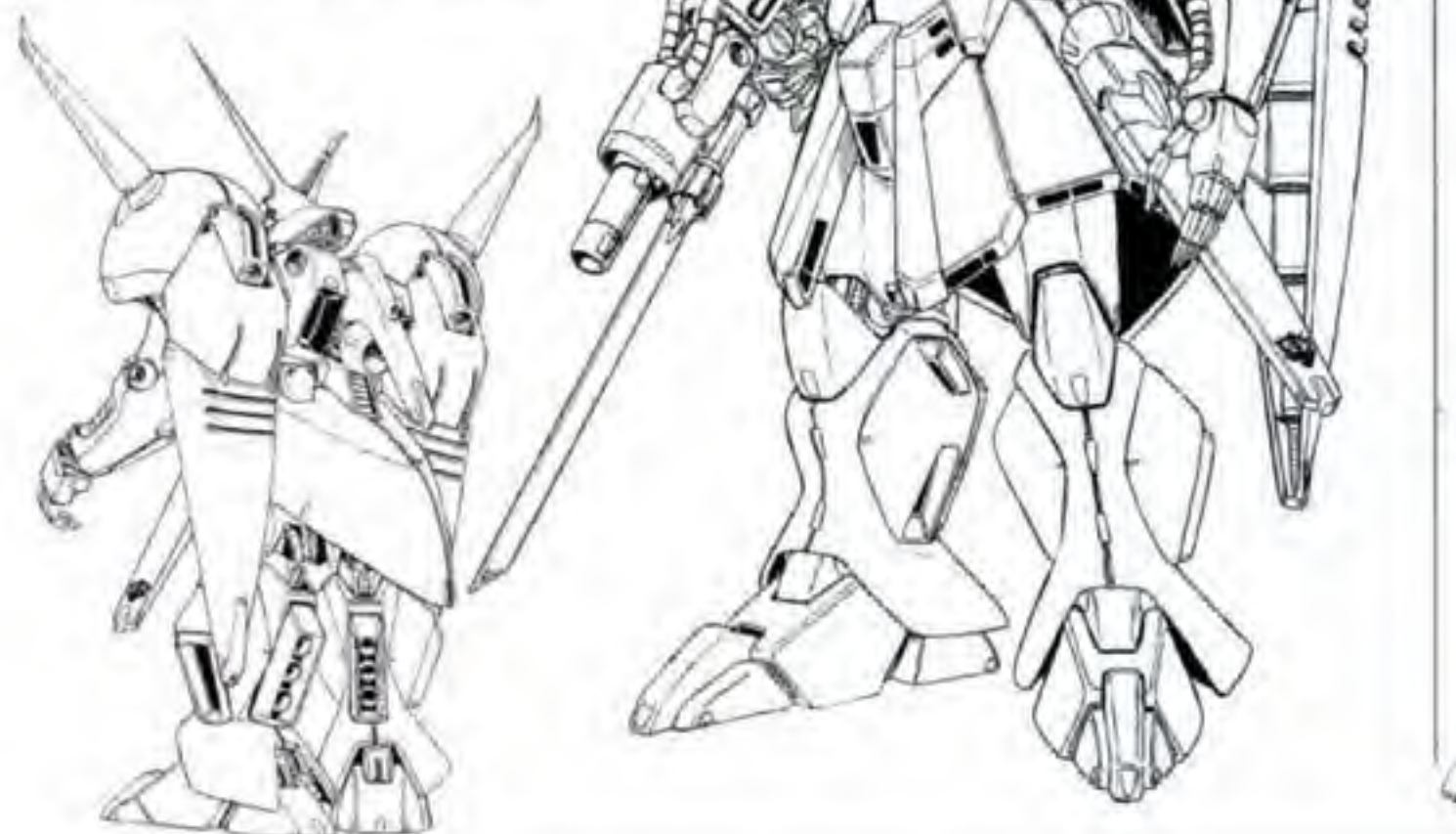
↑肩部のミサイル・ランチャーがMA時には機体下部に面している。爪先と踵部分が分離変形するなど、その可変機構は独特である。



AMX-104

R・ジャジャ

マシュー・セロの監視役のキャラ・スーンの機体。ギャンのコンセプトを参考にした近接格闘用の試作MS。少数ながら量産されたというが、劇中にはキャラの機体のみの登場だった。



AMX-103

ハンマ・ハンマ

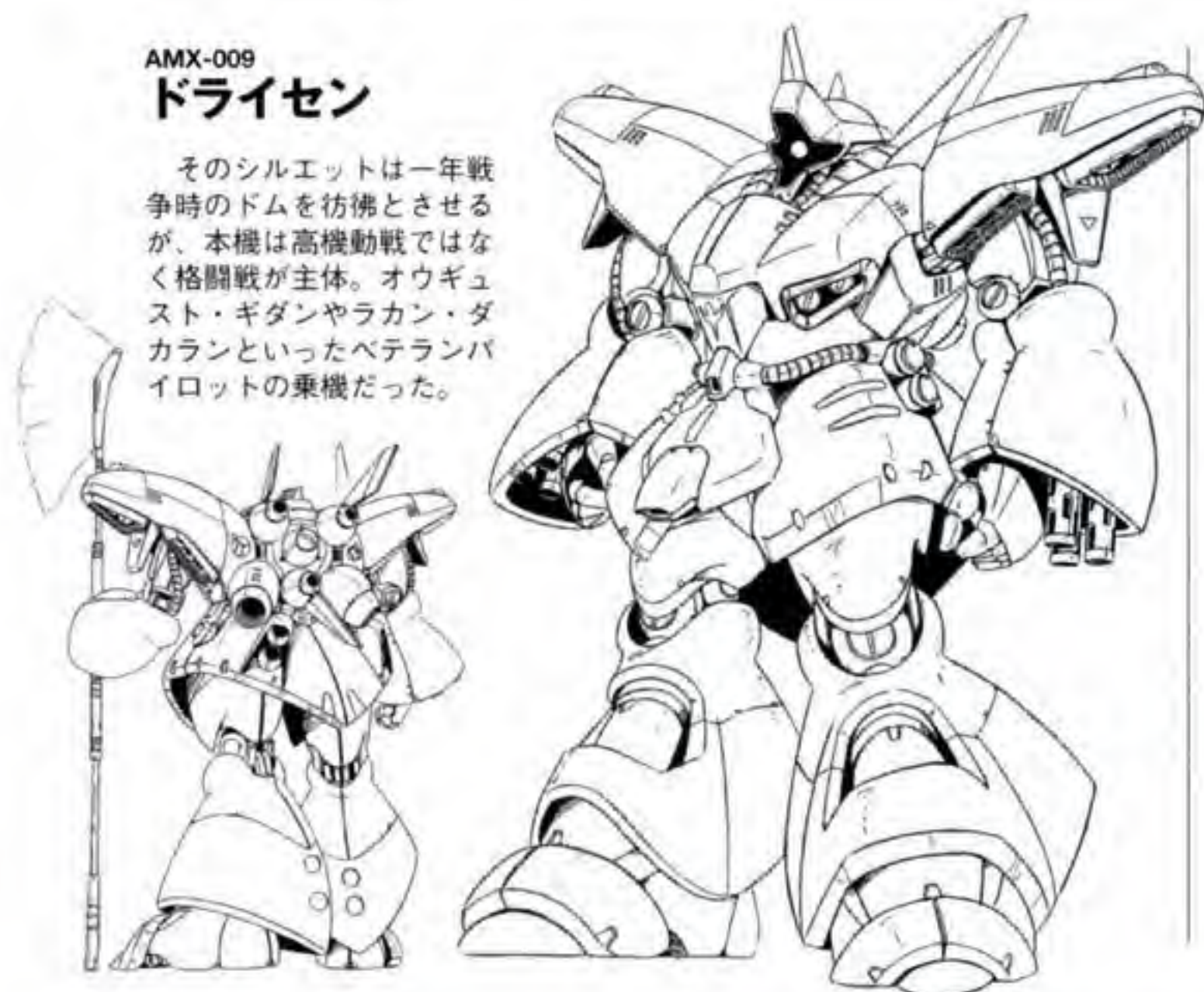
一般兵でも扱える準サイコミュ搭載の試作機。両腕の有線式クロー・アームや3連装メガ粒子砲内蔵シールド（爆雷散布機能付）は強力。ジュードの乗るZガンダムを窮地に陥れた。



AMX-009

ドライセン

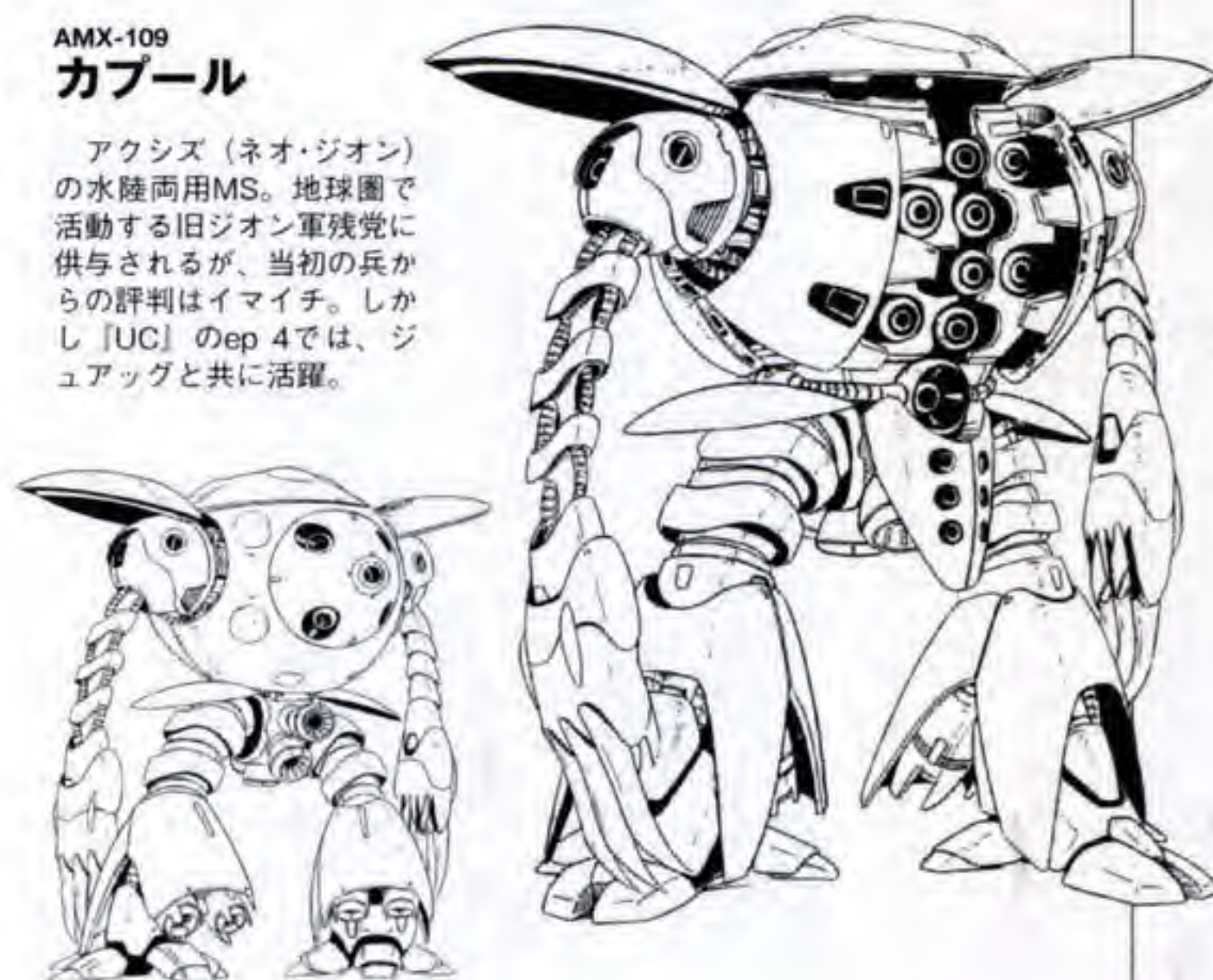
そのシルエットは一年戦争時のドムを彷彿とさせるが、本機は高機動戦ではなく格闘戦が主体。オウギュスト・ギダンやラカン・ダカランといったベテランパイロットの乗機だった。



AMX-109

カプール

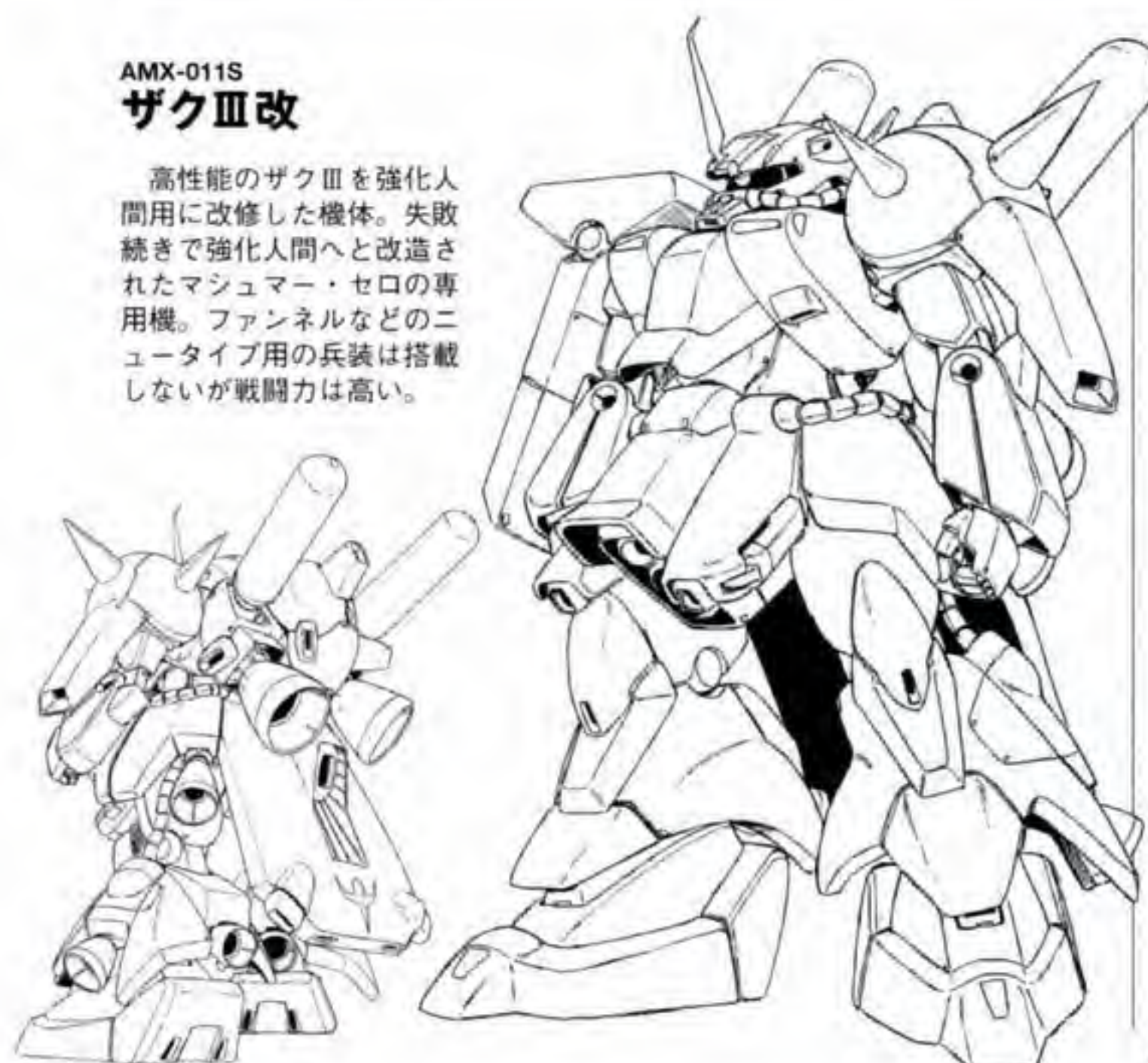
アクシズ（ネオ・ジオン）の水陸両用MS。地球圏で活動する旧ジオン軍残党に供与されるが、当初の兵からの評判はイマイチ。しかし「UC」のep 4では、ジュアッグと共に活躍。



AMX-011S

ザクⅢ改

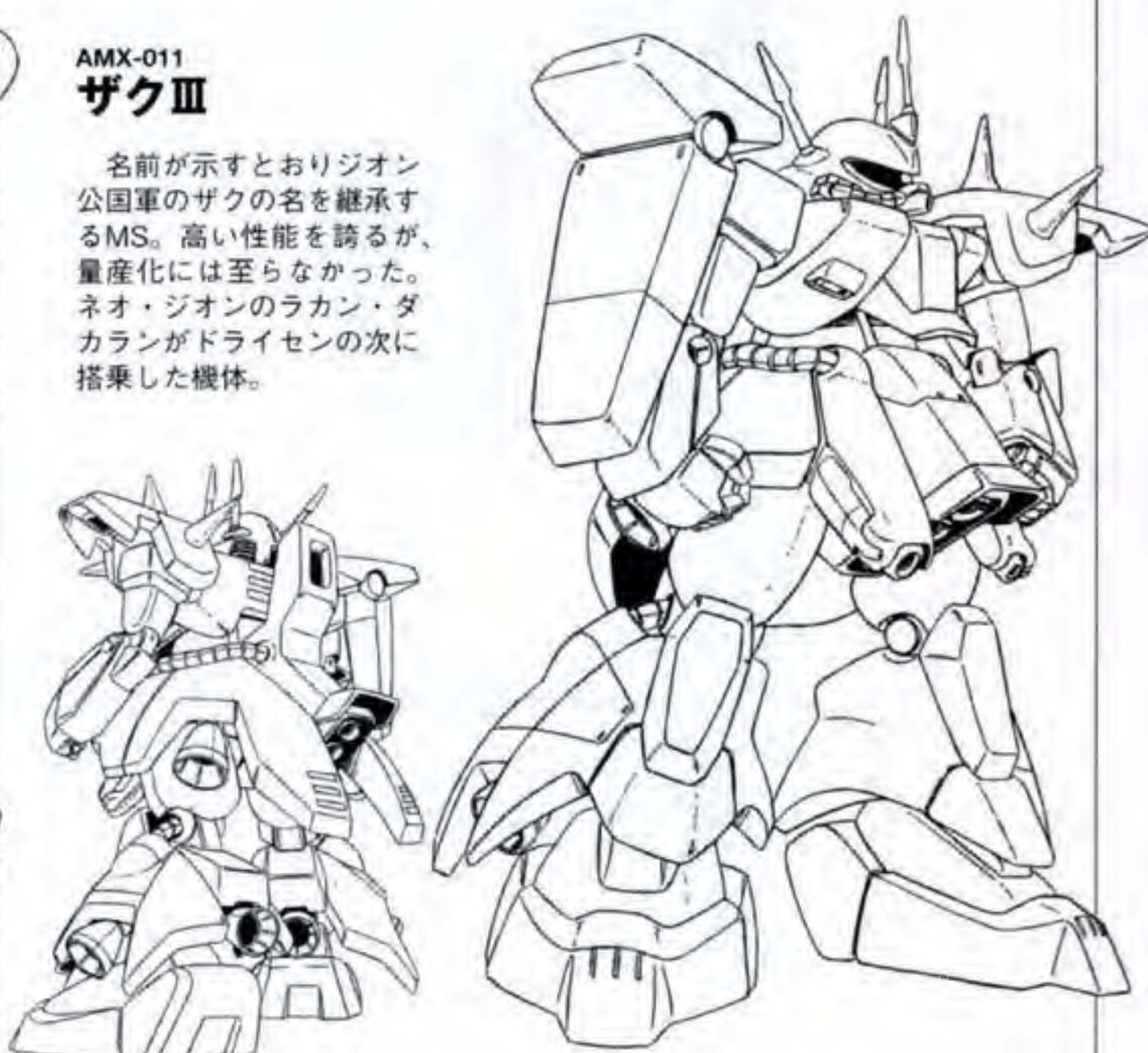
高性能のザクⅢを強化人間用に改修した機体。失敗続きで強化人間へと改造されたマシュー・セロの専用機。ファンネルなどのニュータイプ用の兵装は搭載しないが戦闘力が高い。



AMX-011

ザクⅢ

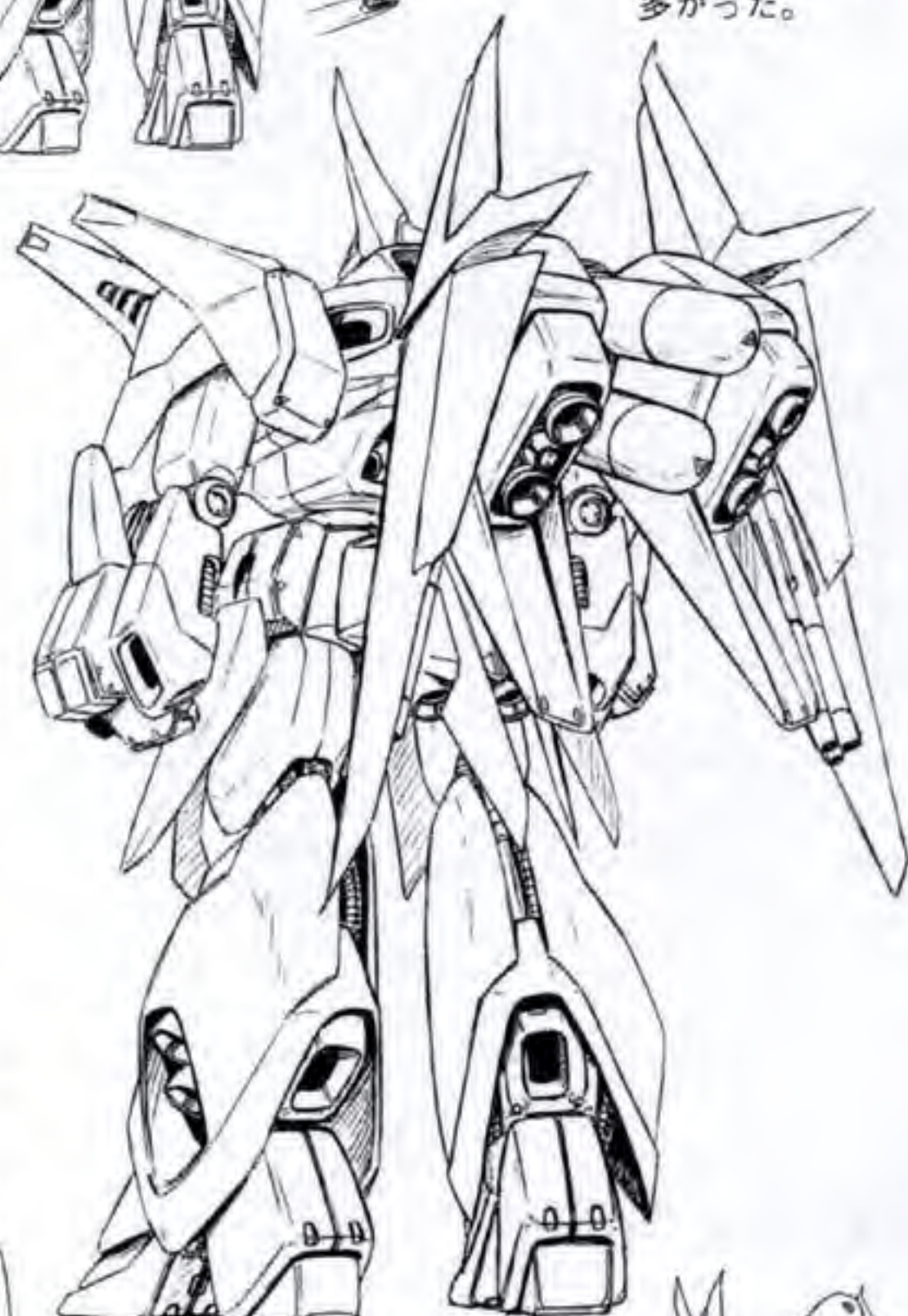
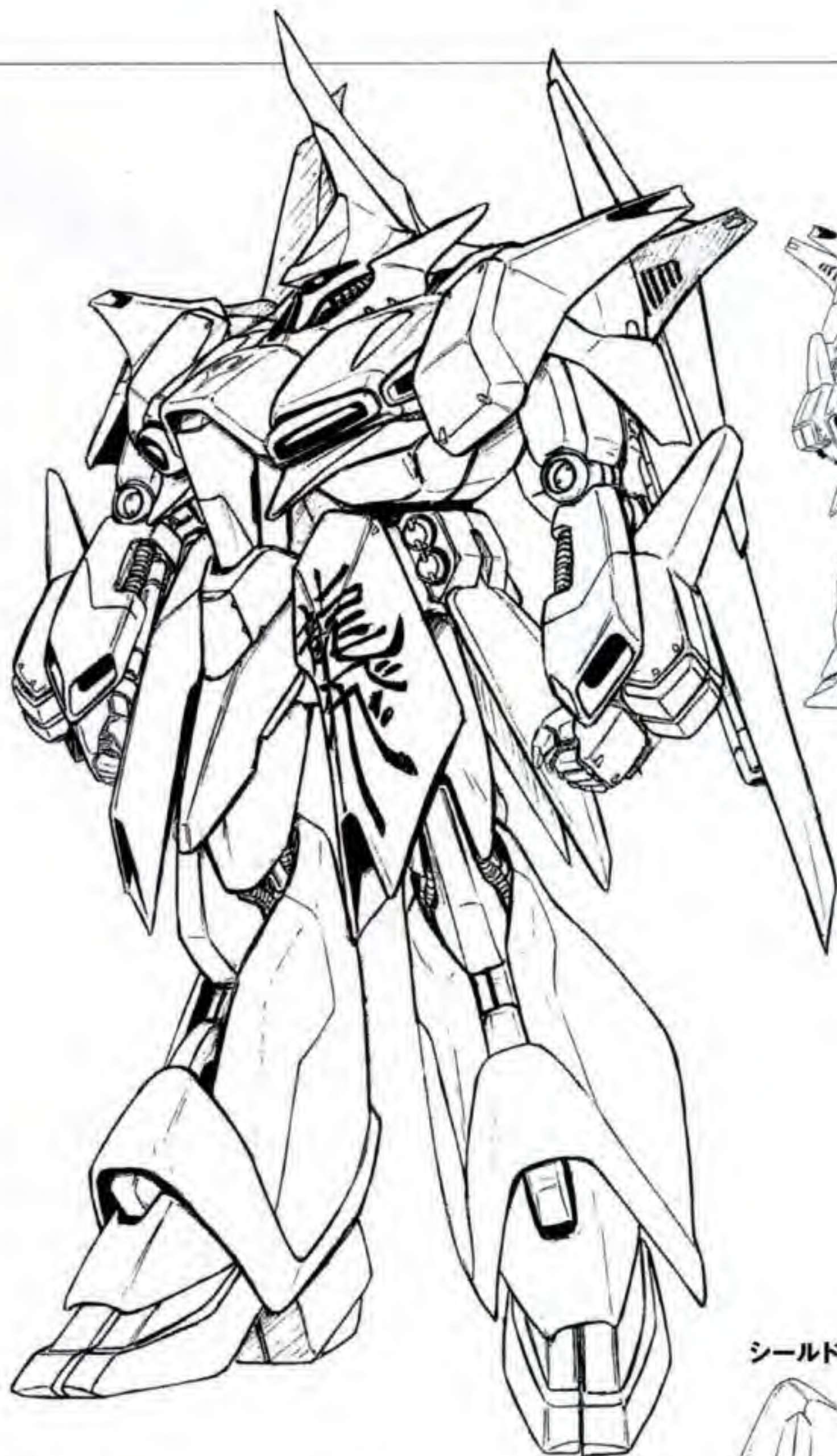
名前が示すとおりジオン公国軍のザクの名を継承するMS。高い性能を誇るが、量産化には至らなかった。ネオ・ジオンのラカン・ダカランがドライセンの次に搭乗した機体。



AMX-107

バウ

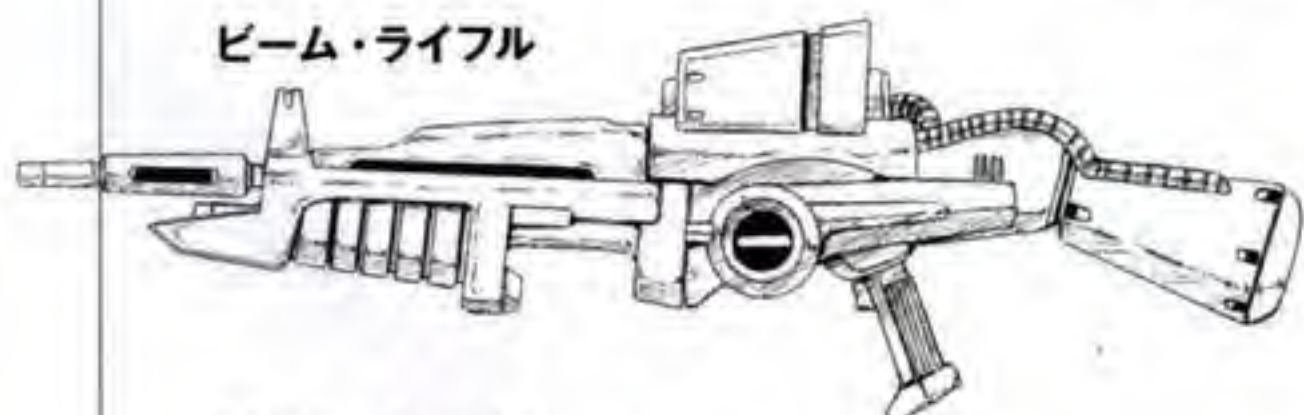
アクシズ（ネオ・ジオン）が開発した合体可変MS。上半身と下半身はそれぞれ戦闘機形態に変形する。グレミー・トトの専用機のほか、少数だが量産化もされ地球進攻部隊などに配備されている。しかし実戦ではMS形態で運用される機体が多かった。



シールド



ビーム・ライフル



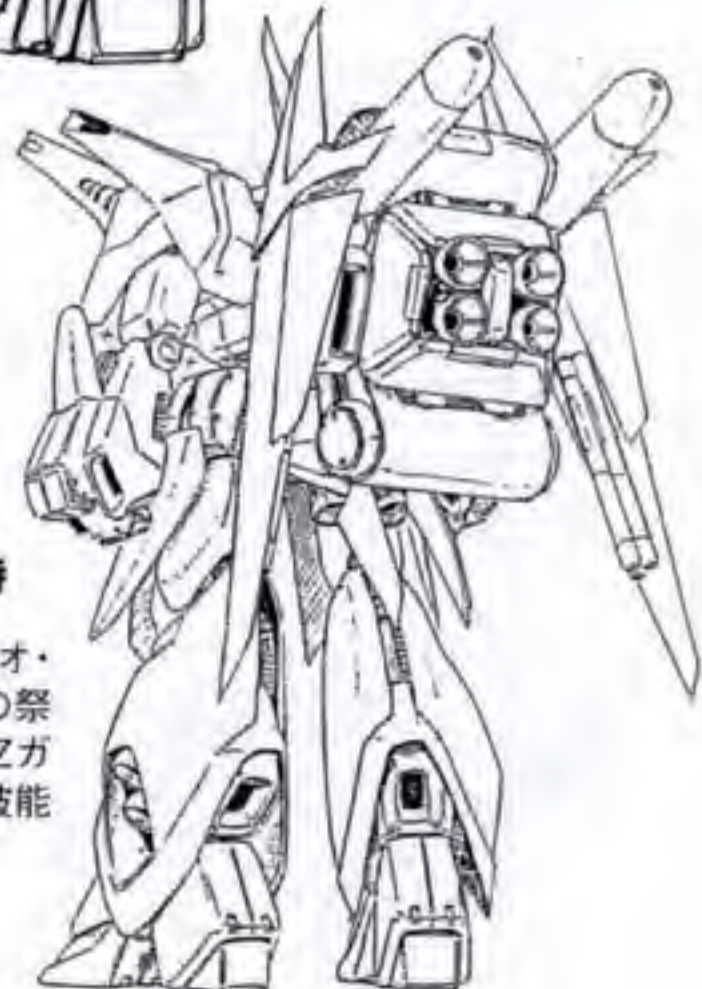
ビーム・サーベル



ミサイル・ポッド

バリュートバック装備時

➡アリアス・モマ率いるネオ・ジオンの部隊が地球降下の祭に用いた装備。本機にはZガンダムのような大気圏突破能力は備わっていない。

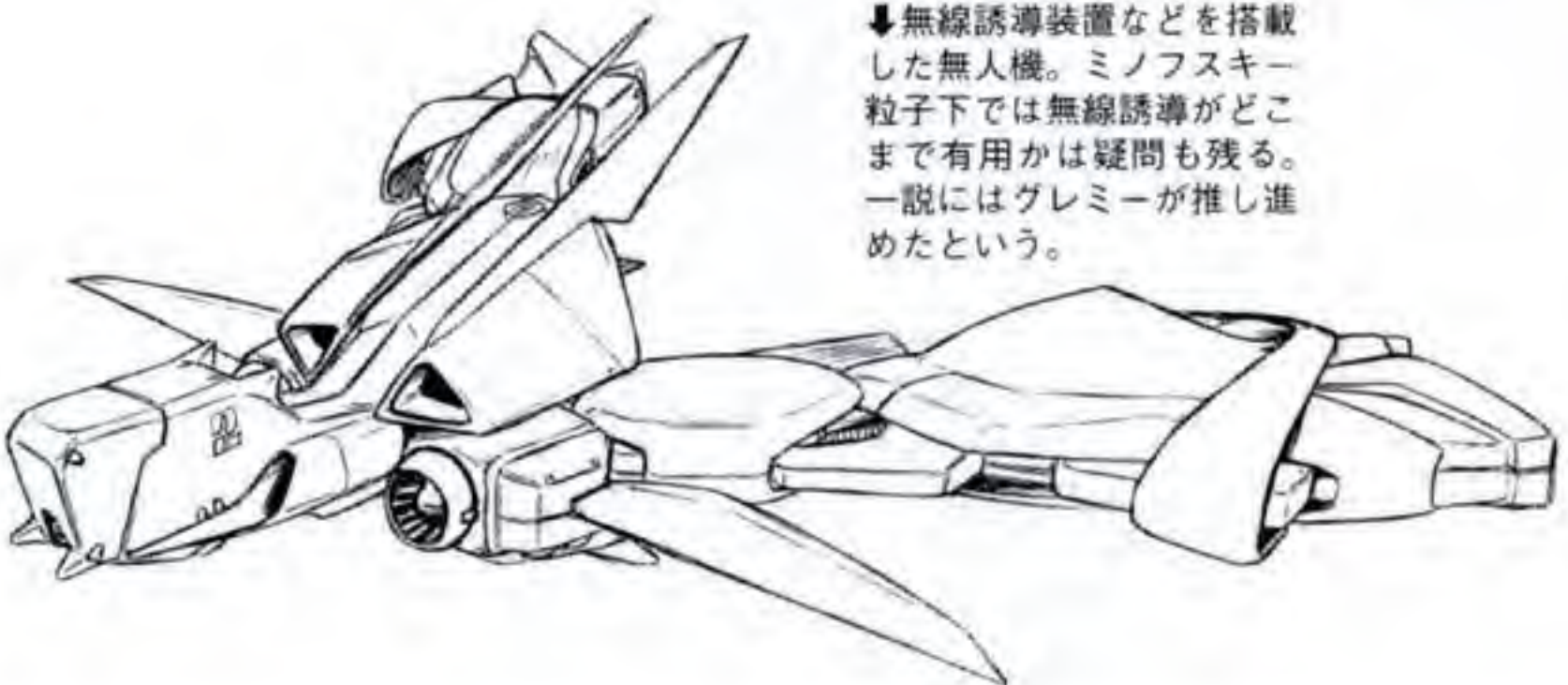


バウ・ナッター

↓無線誘導装置などを搭載した無人機。ミノフスキー粒子下では無線誘導がどこまで有用かは疑問も残る。一説にはグレミーが押し進めたという。

バウ・アタッカー

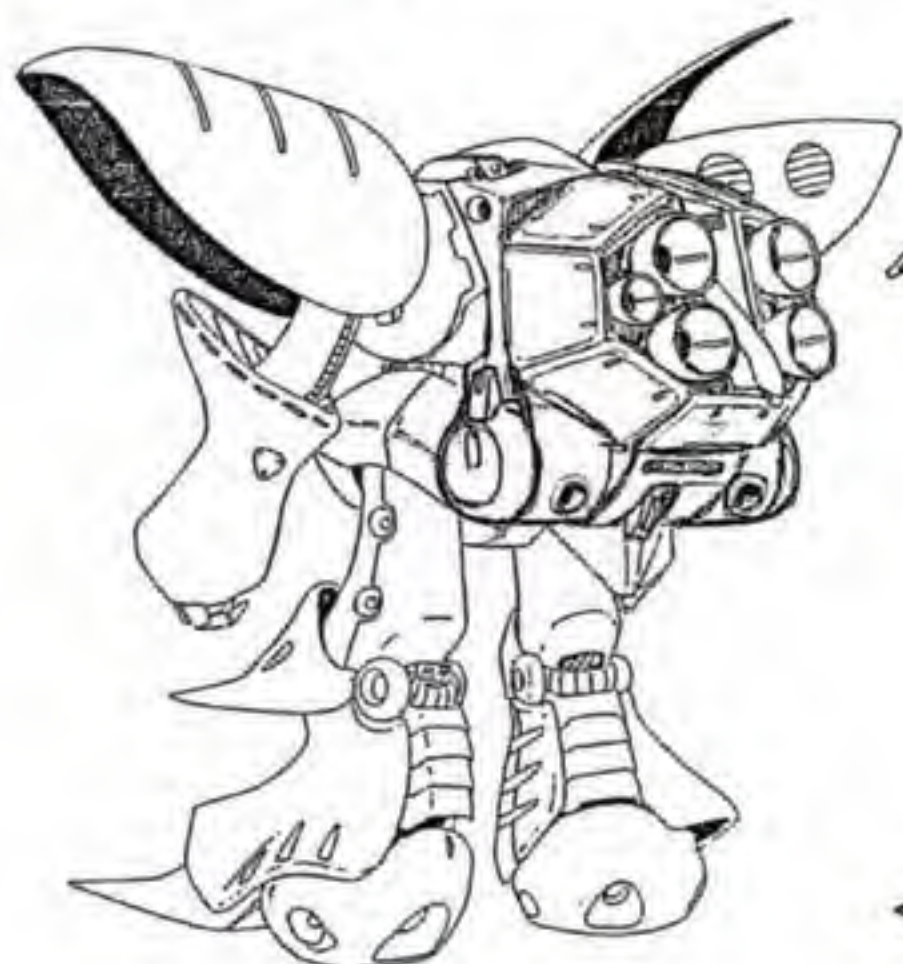
➡計画当初はバウ・アタッカー、バウ・ナッター、それぞれ有人機として開発が進められていたという。『UC』ではバウ・ナッターの有人タイプが登場する。



AMX-004-2 / AMX-004-3

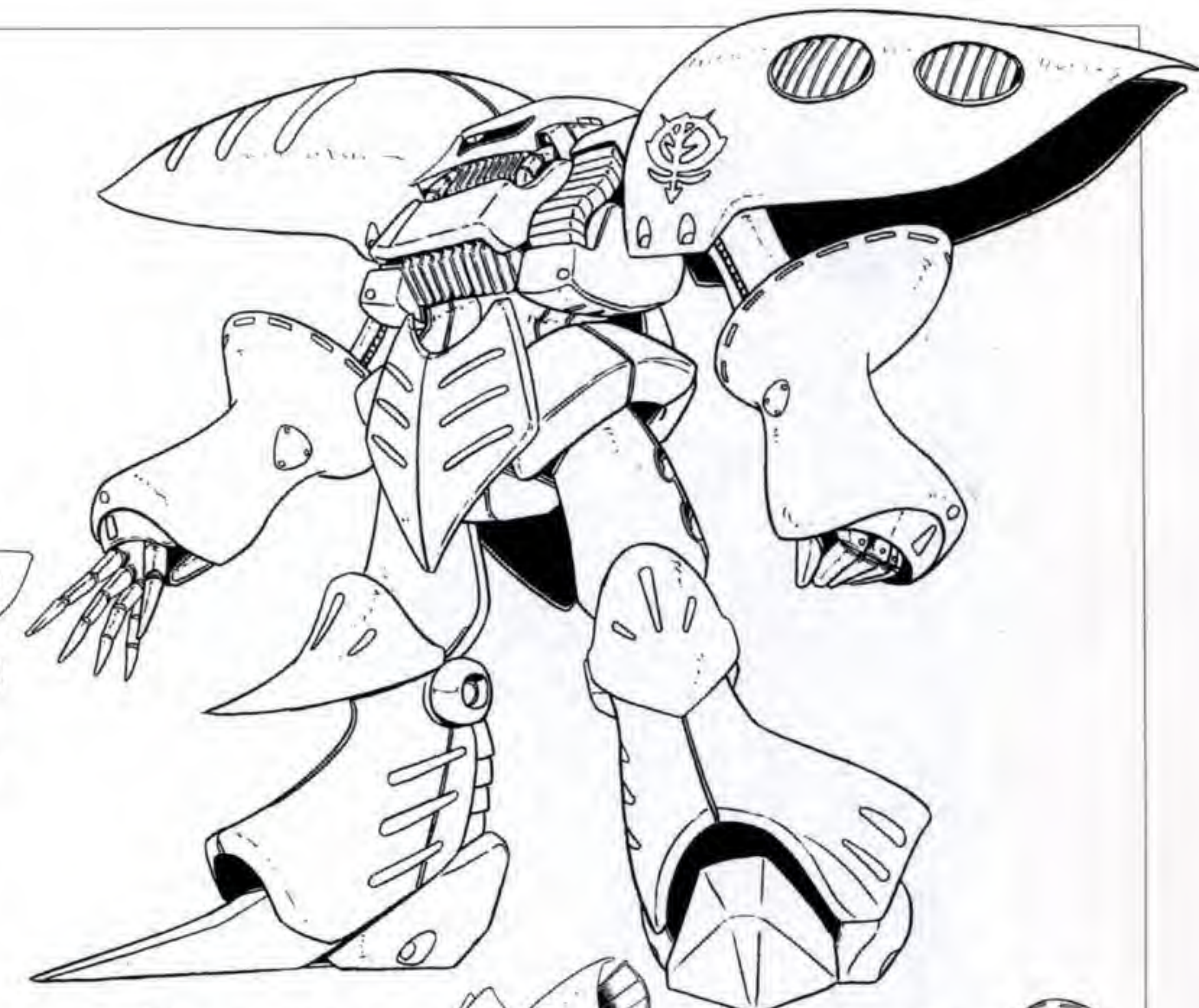
キュベレイMk-II

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発したニュータイプ専用機。ハマーン・カーンの乗る機体と基本性能などは同じで、機体色が異なる程度。ファンネルによるオールレンジ攻撃も可能。エルピー・ブルやブルツーといったニュータイプパイロットが搭乗した。



バリュート・バック装備時

↑実際には劇中には登場していない大気圏突入用の装備。



ビーム・サーベル

←前腕部に装備されたビーム・ガンは、ビーム・サーベルとして使用できる。



巡航形態

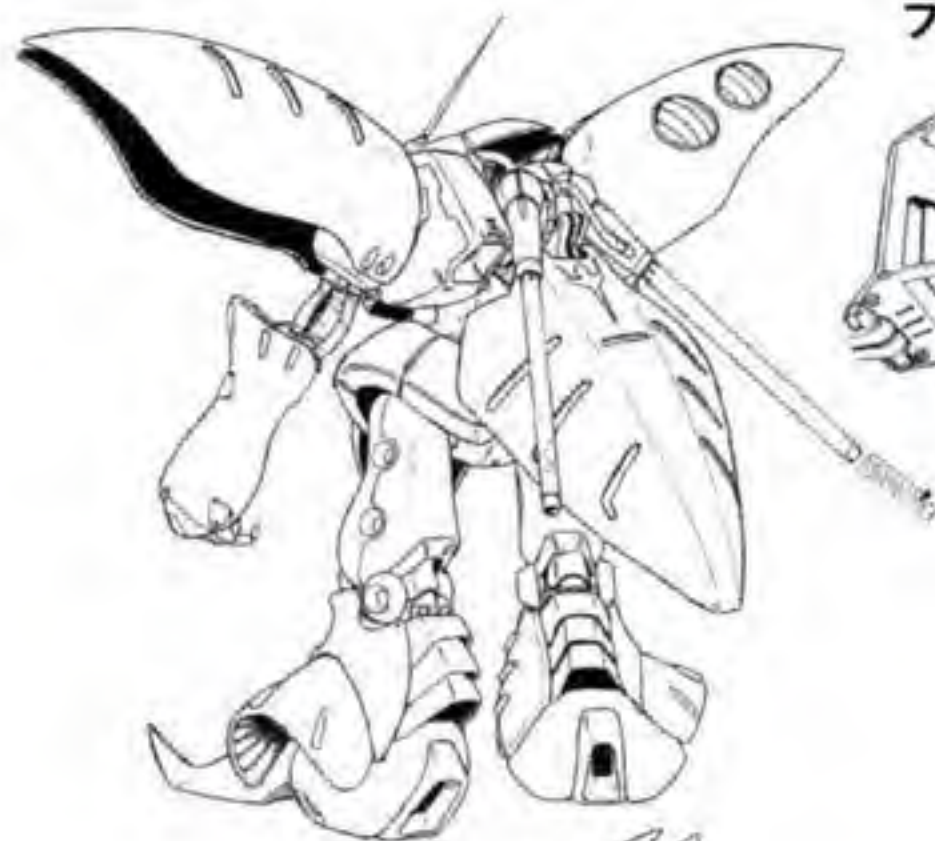
ビーム・ガン



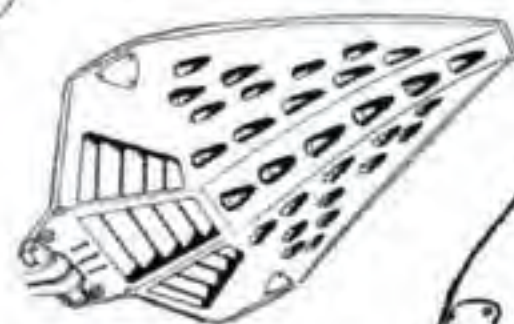
AMX-004G

量産型キュベレイ

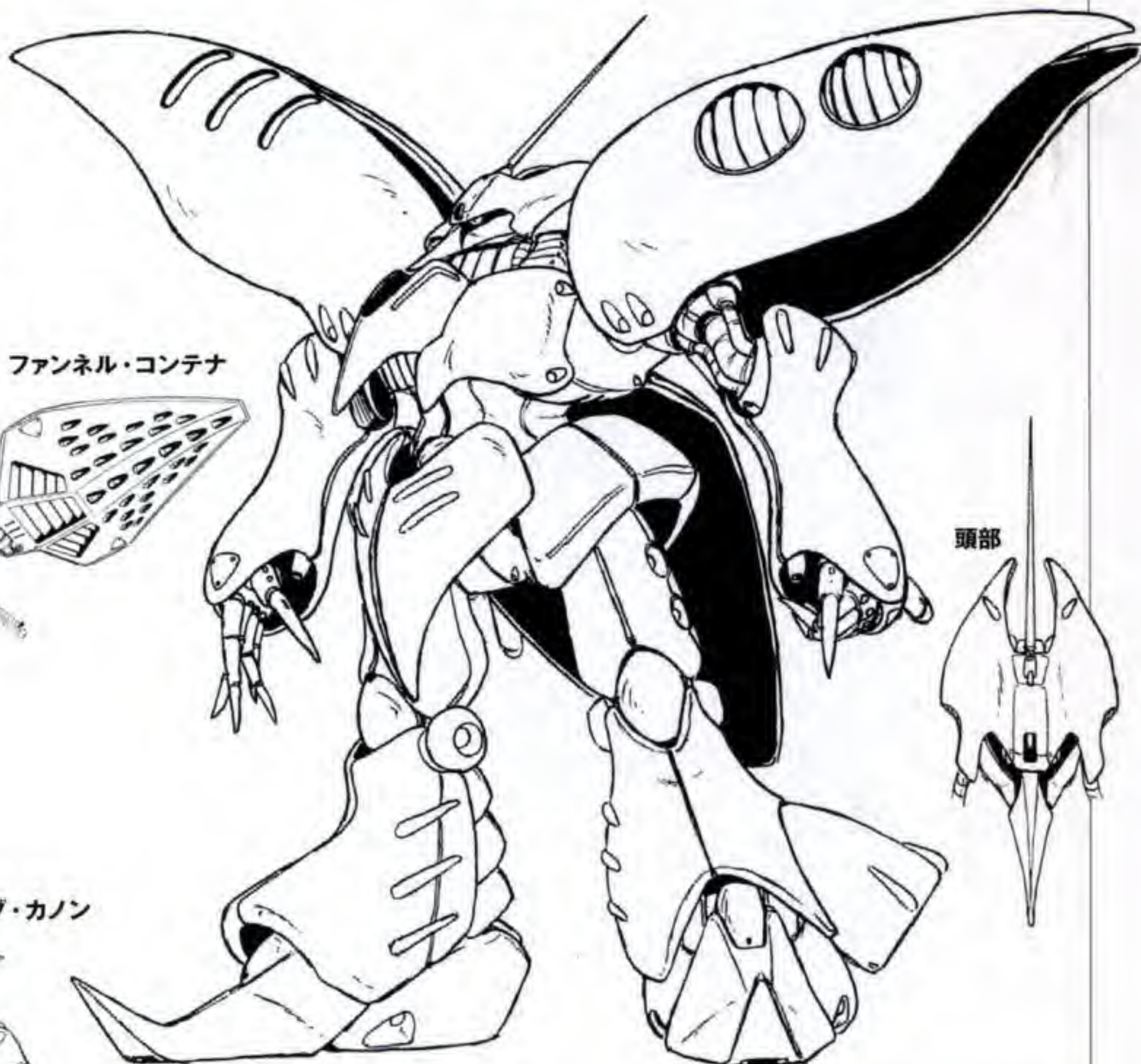
反乱を起こしたグレミー・トトが擁する、ニュータイプ部隊で運用されたニュータイプ専用MS。名前が示すとおりキュベレイの量産タイプだが、背中にはアクティブ・カノン装備し、ファンネルの搭載数もアップされるなど、大幅な強化が施されている。搭乗者はエルピー・ブルのクローン体である、ブルシリーズの面々。



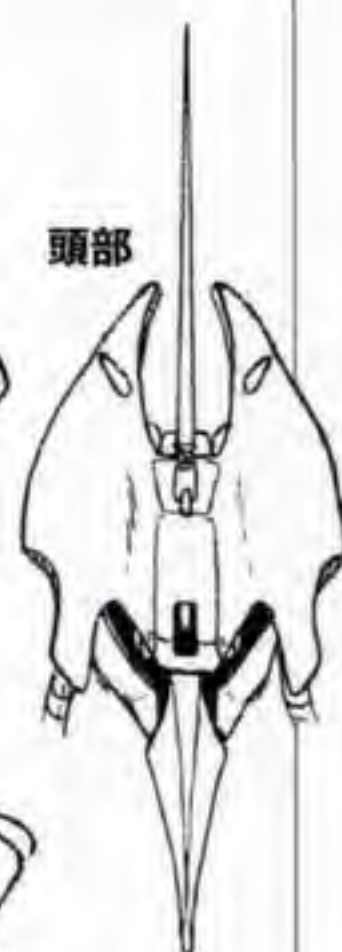
ファンネル・コンテナ

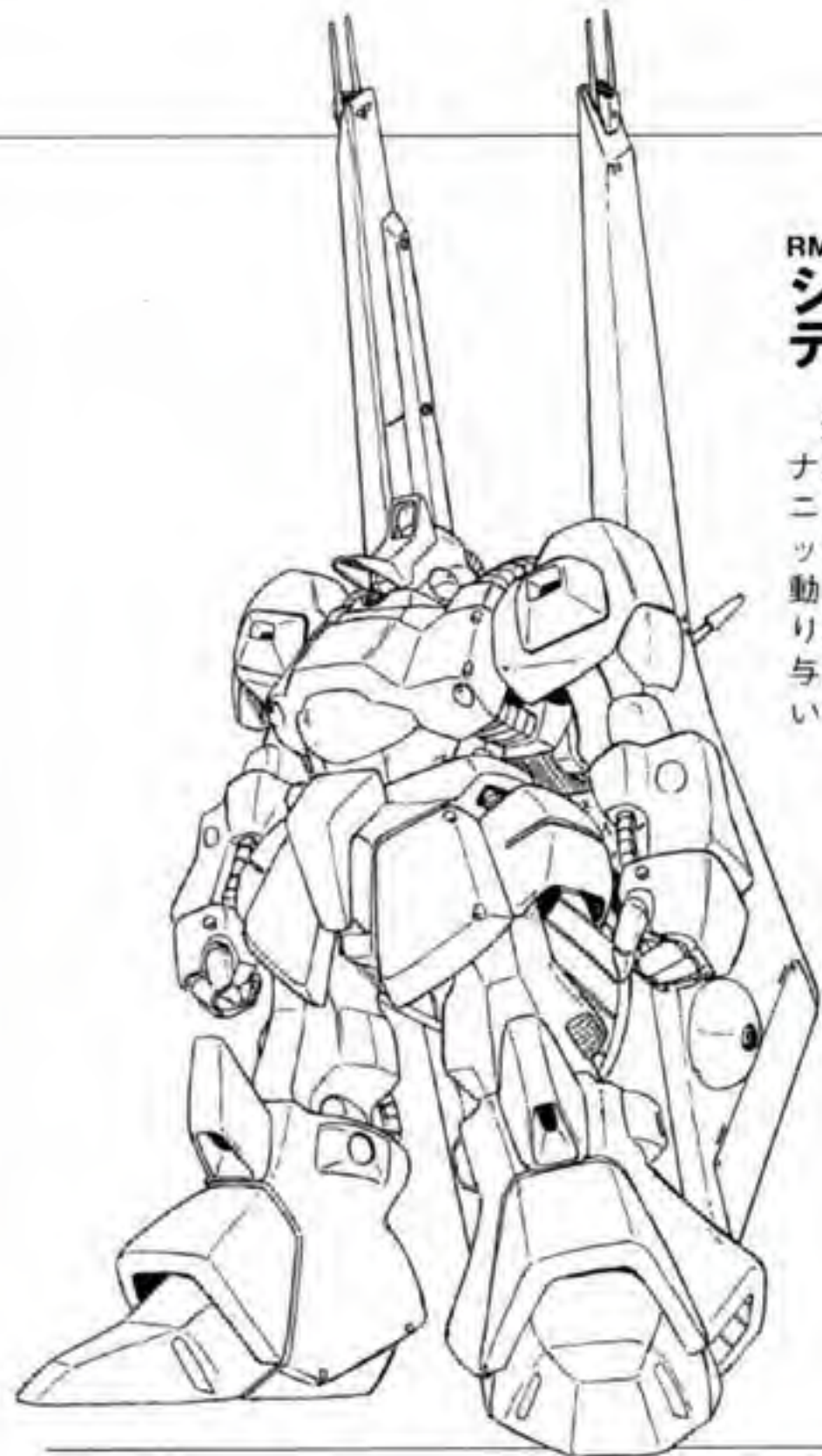


アクティブ・カノン



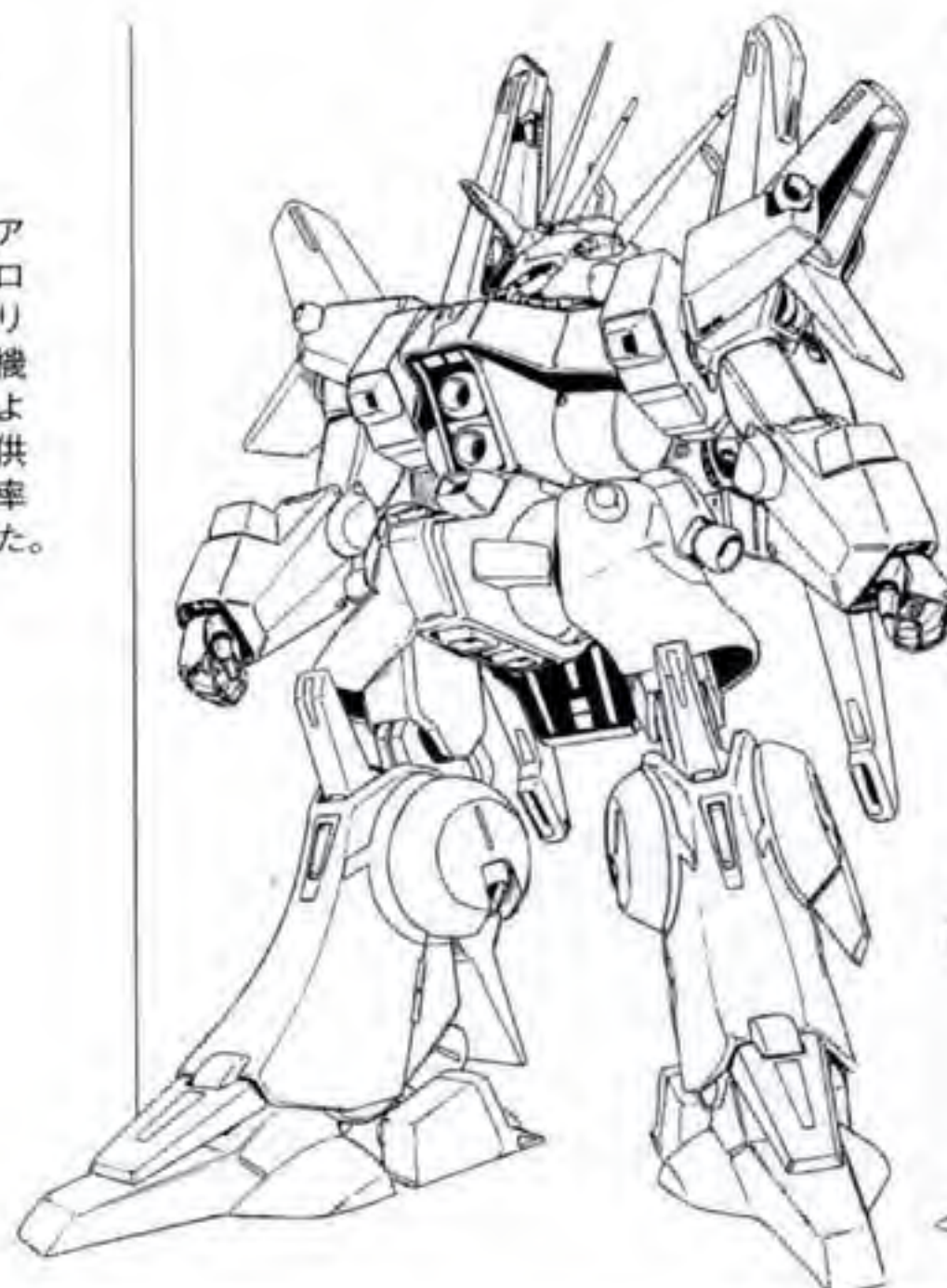
頭部





RMS-099B
シュツルム・ディアス

元々はエウーゴとアナハイム・エレクトロニクス社が開発したリック・ディアスの高機動タイプ。裏取引によりネオ・ジオンへと供与され、サトウ隊長率いる部隊に配備された。



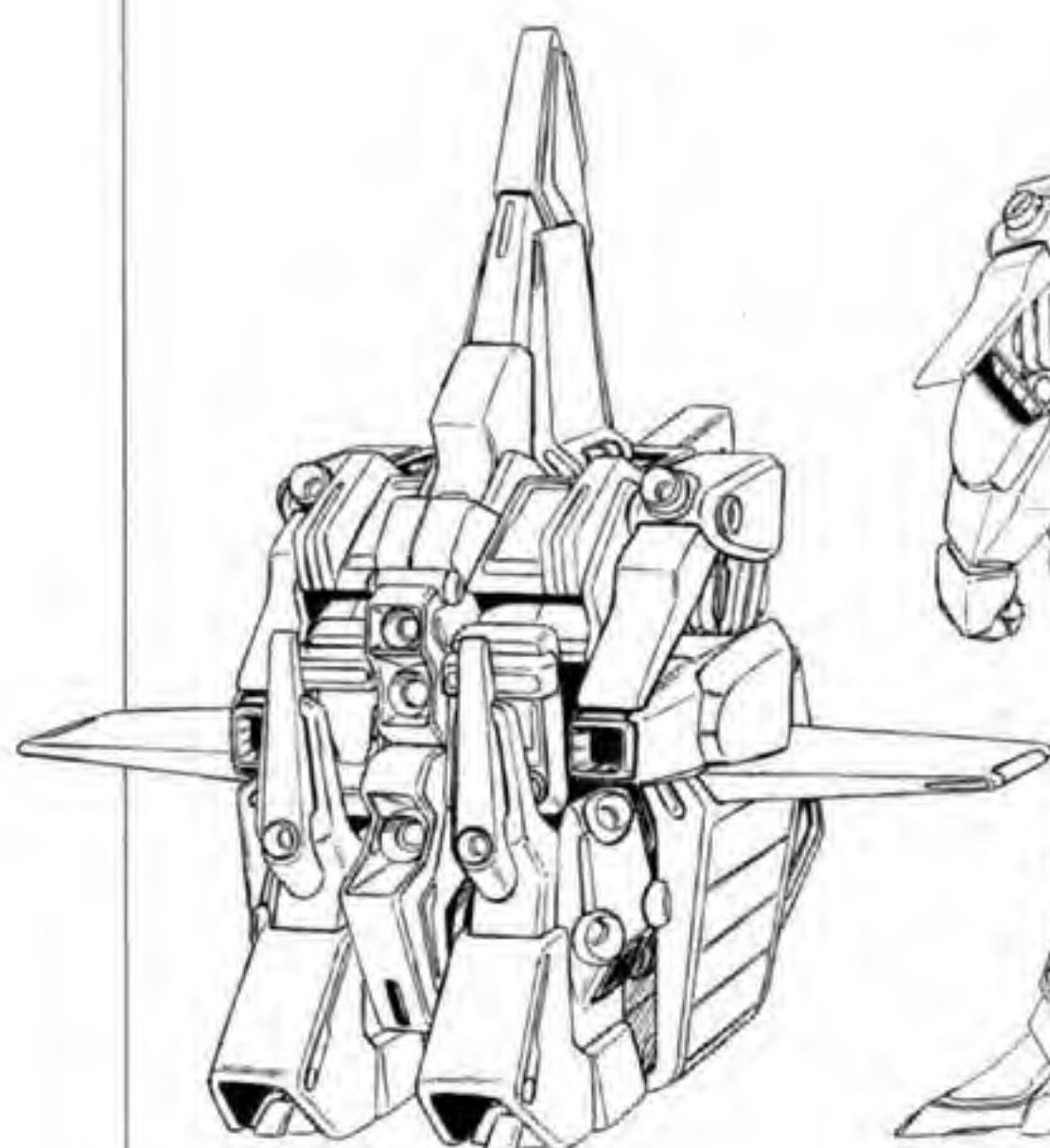
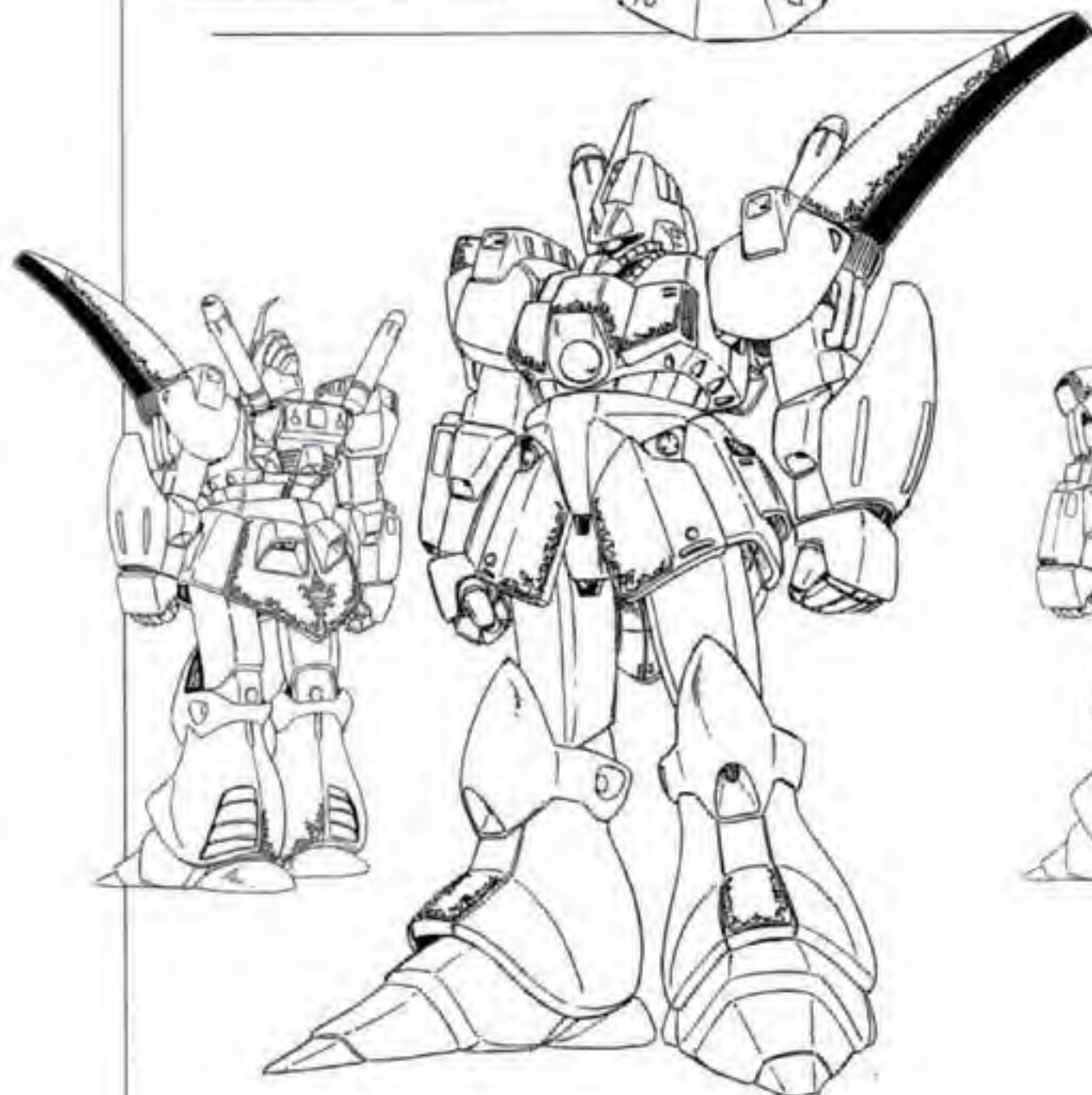
AMX-014
ドーベン・ウルフ

準サイコミュを搭載した量産MS。一般兵でもサイコミュ兵器のインコムなどが扱えるのが特徴。ラカン・ダカラン率いるスペース・ウルフ隊に配備され、キャラやマシュマーと死闘を繰り広げた。

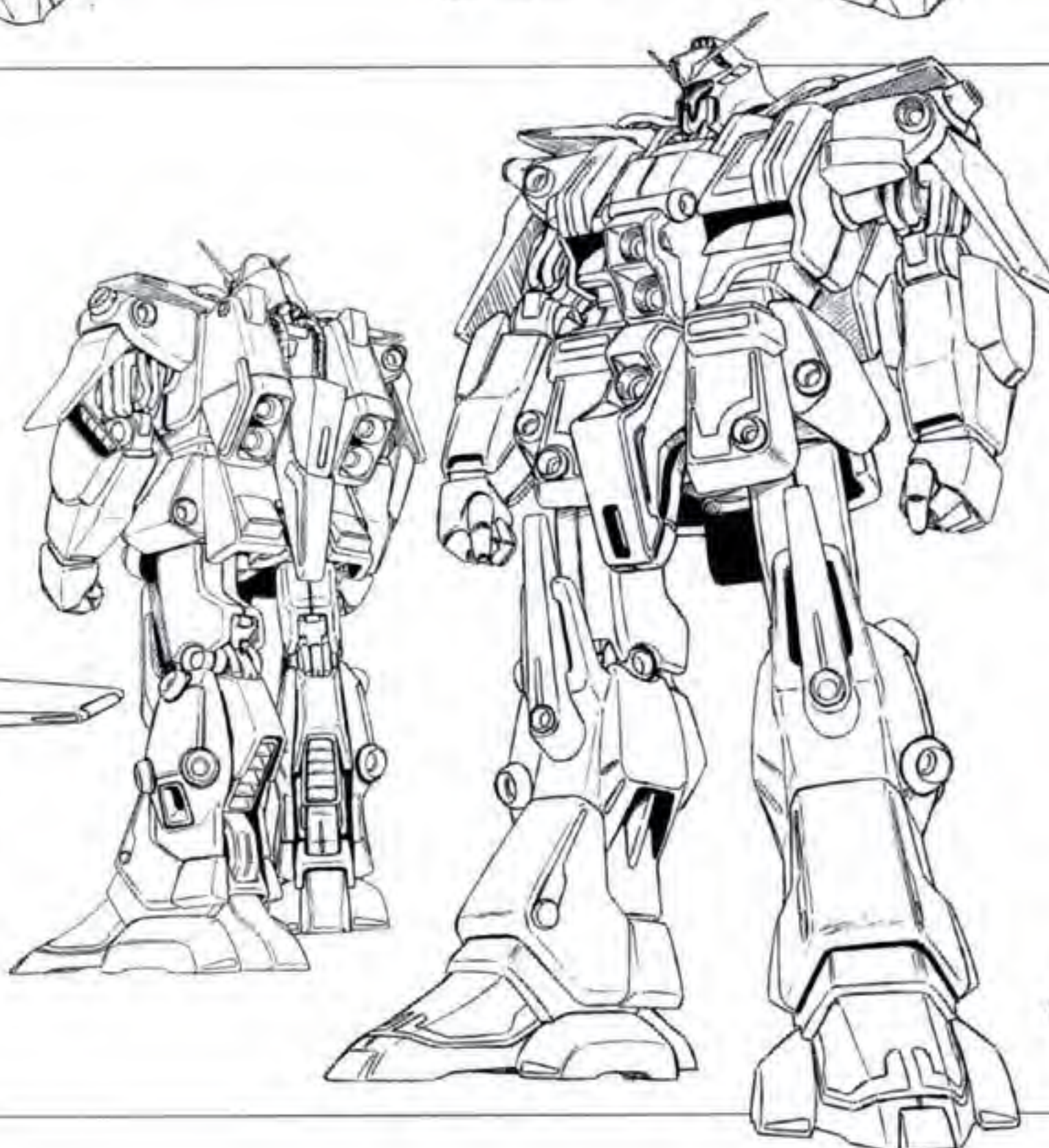


AMX-117R
ガスアル
AMX-117L
ガスエル

ハマーンの親衛隊といえる、ニー・ギーレン、ランス・ギーレン兄弟の駆るロイヤルガード専用MS。強化人間に改造されたキャラ・スーンの監視役として任務に就いている。地球連邦軍のガルバルディβと形状は似ているが、機体性能は別物である。

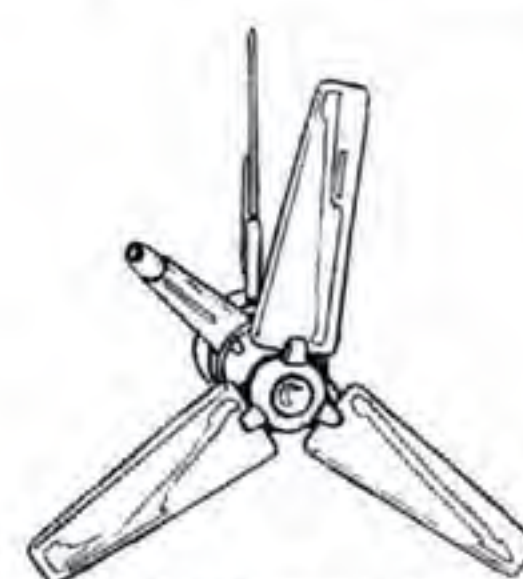


モビルフォートレス形態

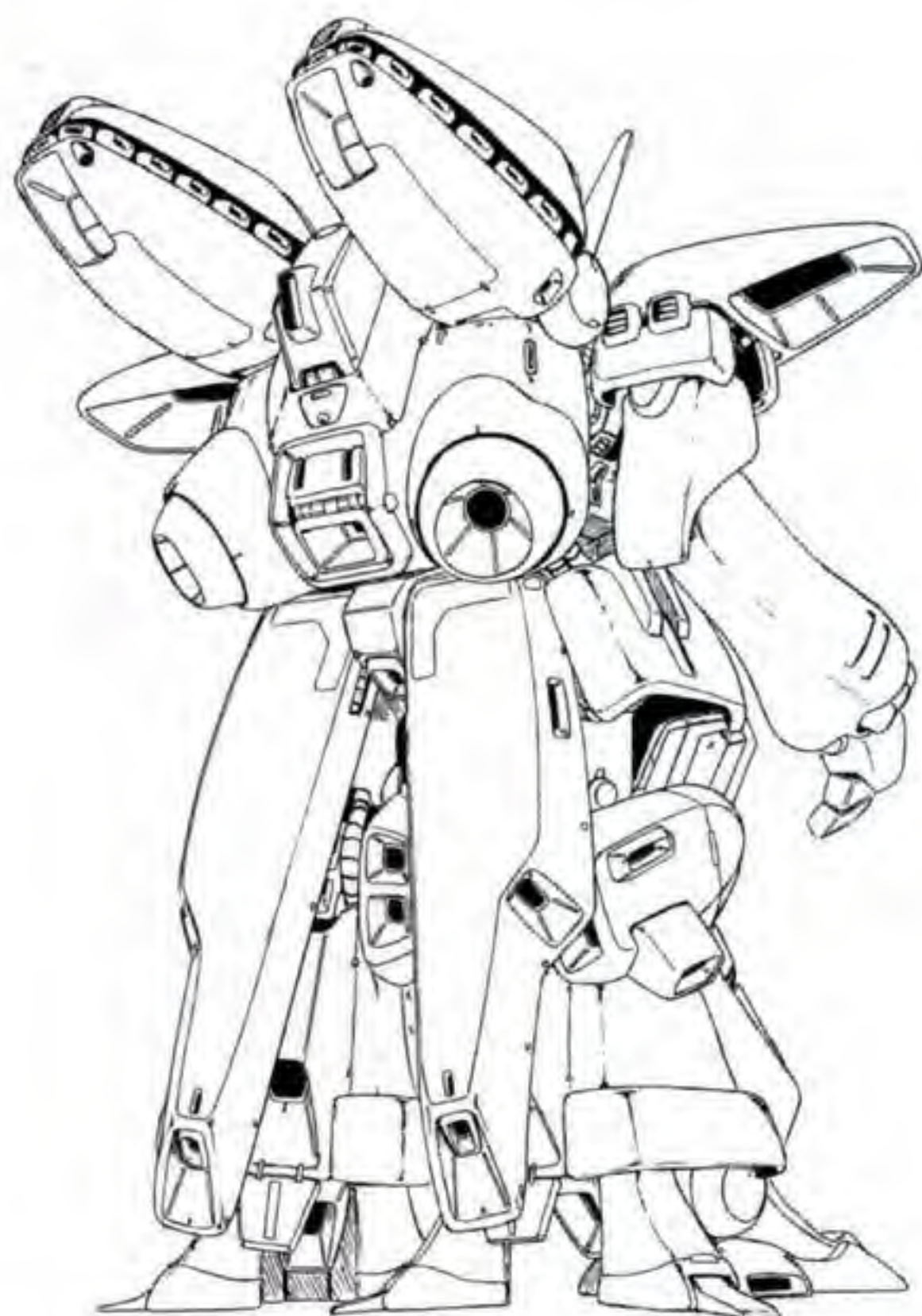


MRX-010
サイコ・ガンダムMk-II

地球連邦軍のムラサメ研究所が開発したニュータイプ専用可変MA。グリプス戦役時に大破した機体をアクシズ陣営が改修（鹵獲）して実戦投入した。その際のパイロットはブルツォ。ダブリンへのコロニー落としの最中、アーガマのガンダム・チームと戦闘を行った。



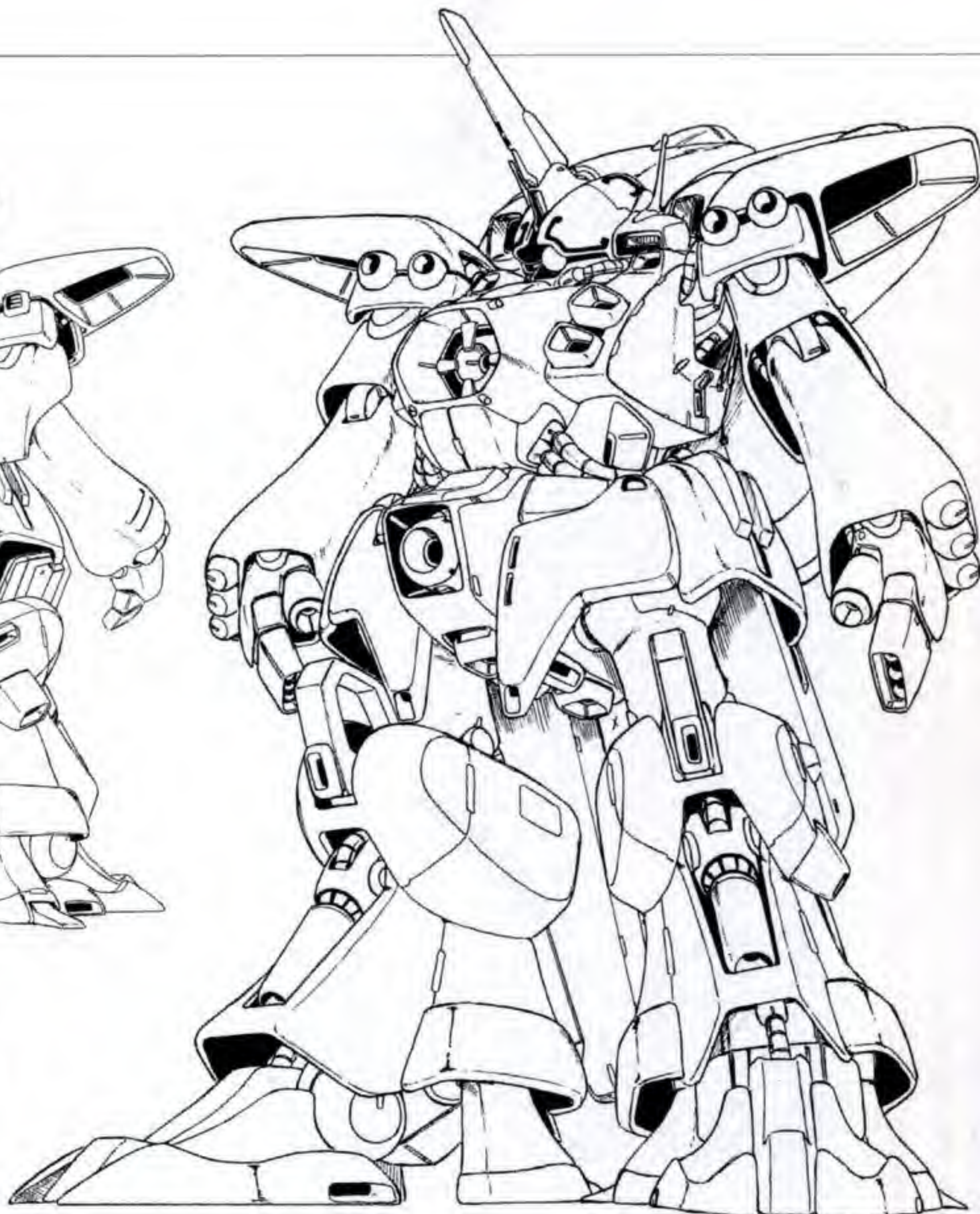
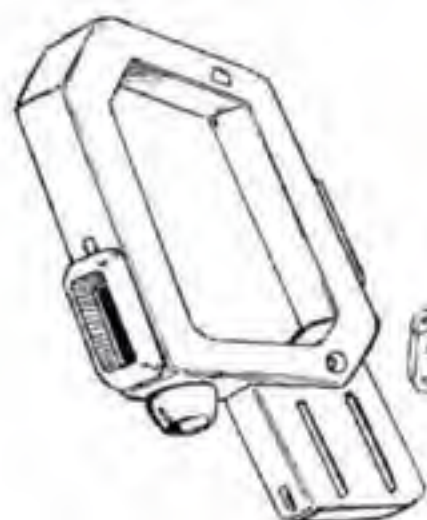
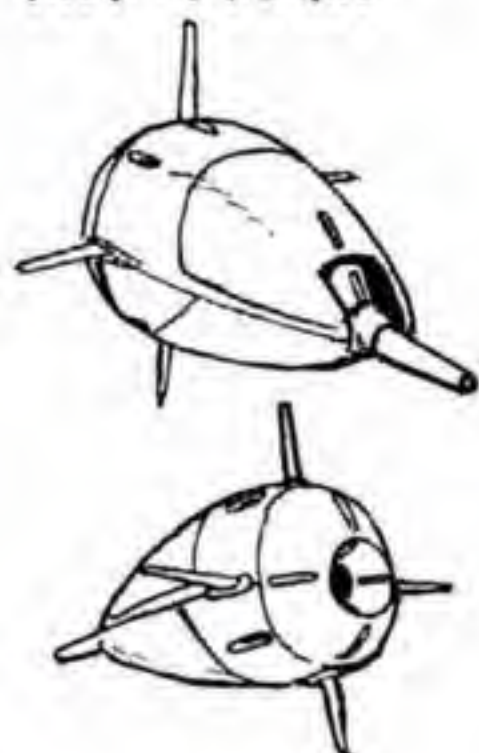
レフレクター・ビット



マザー・ファンネル



チルド・ファンネル



AMX-015

ゲーマルク

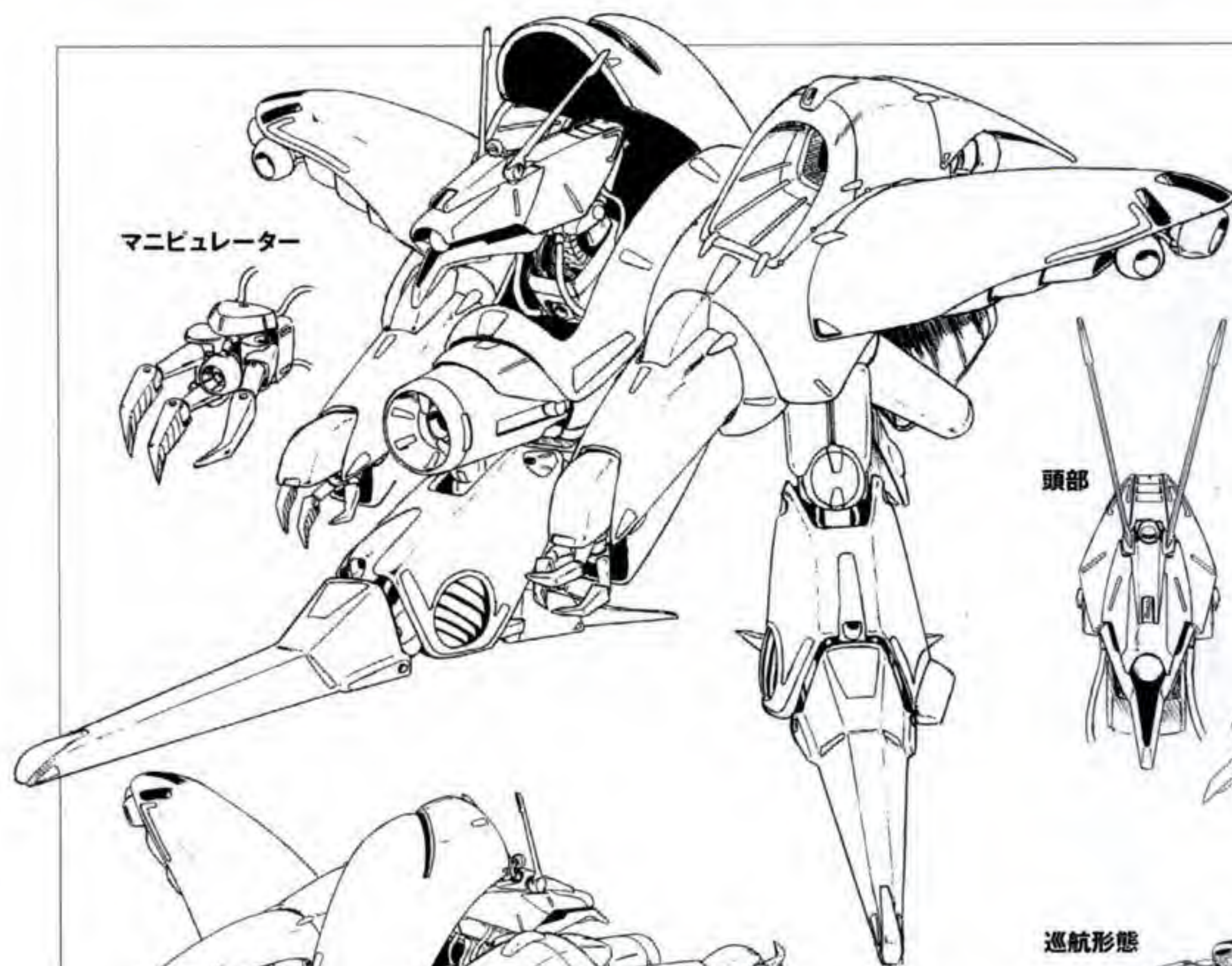
ネオ・ジオンが開発したニュータイプ専用MS。マシュマー同様、強化人間に改造されたキャラ・スーンの乗機。マザー・ファンネルとチルド・ファンネルによるオールレンジ攻撃だけでなく、本体には多数のメガ粒子砲を内蔵しているため火力も高く、戦闘力は群を抜いている。



←背中のマザー・ファンネルが分離して、マザー・ファンネルからチルド・ファンネルが射出展開される。

ビーム・サーベル

←膝アーチャーに装着されているユニットは、ビーム・ガン兼用のビーム・サーベルである。



マニピュレーター

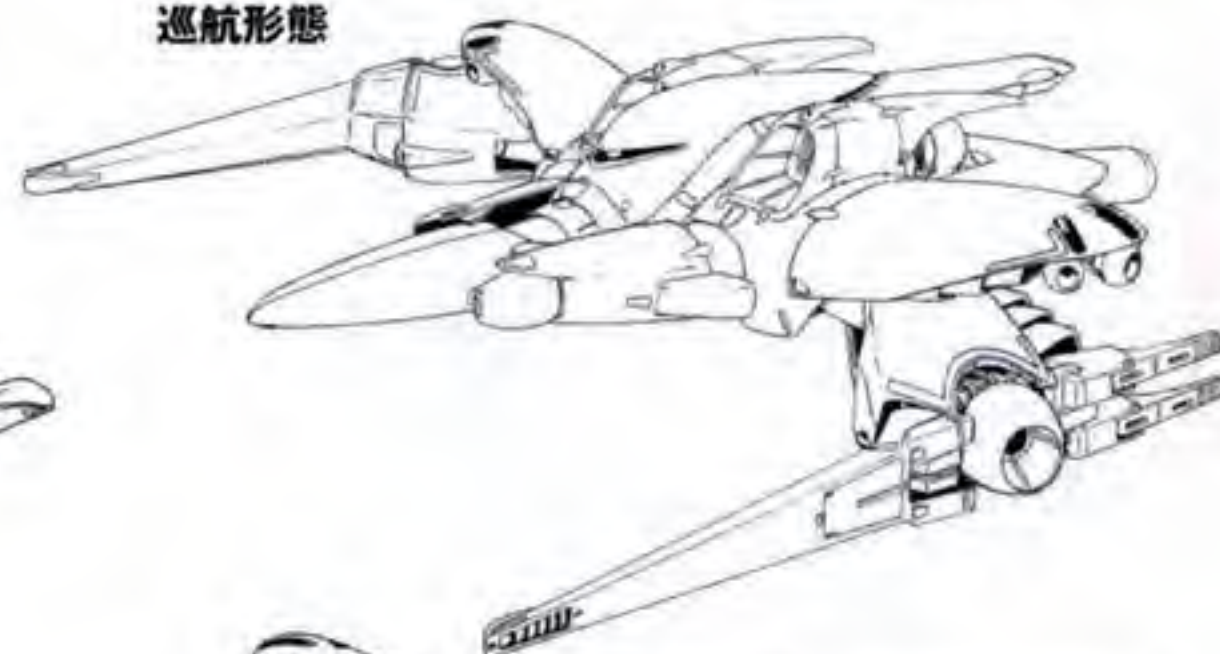
頭部

AMX-01X

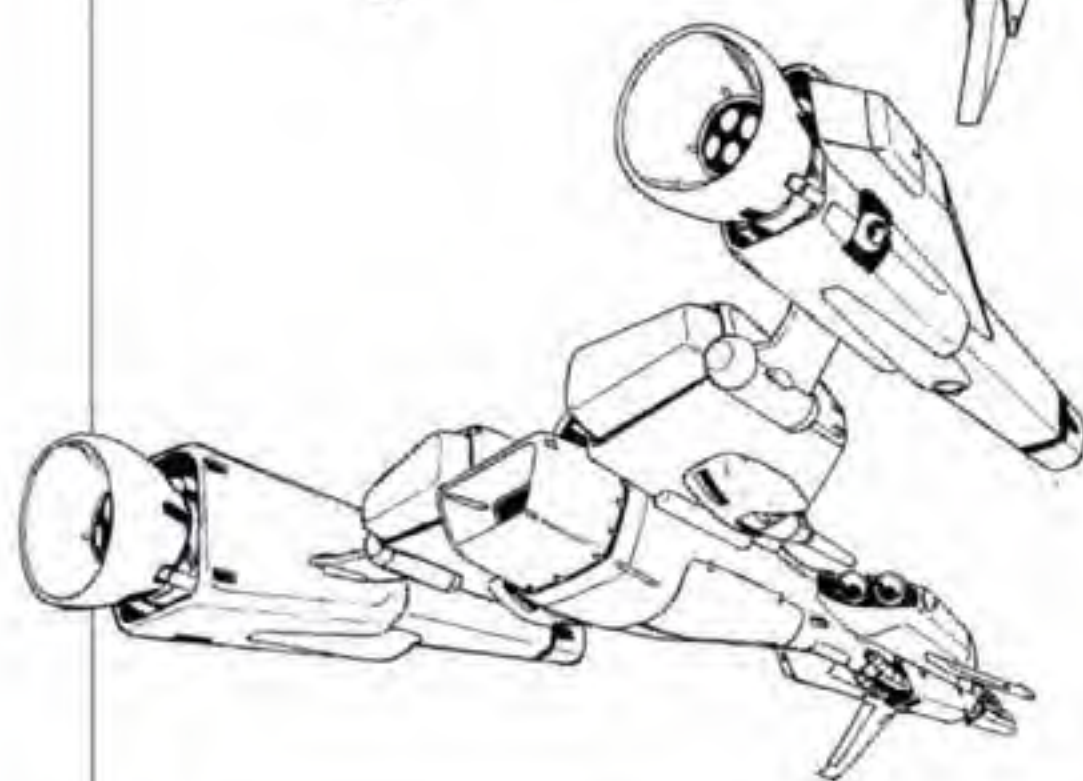
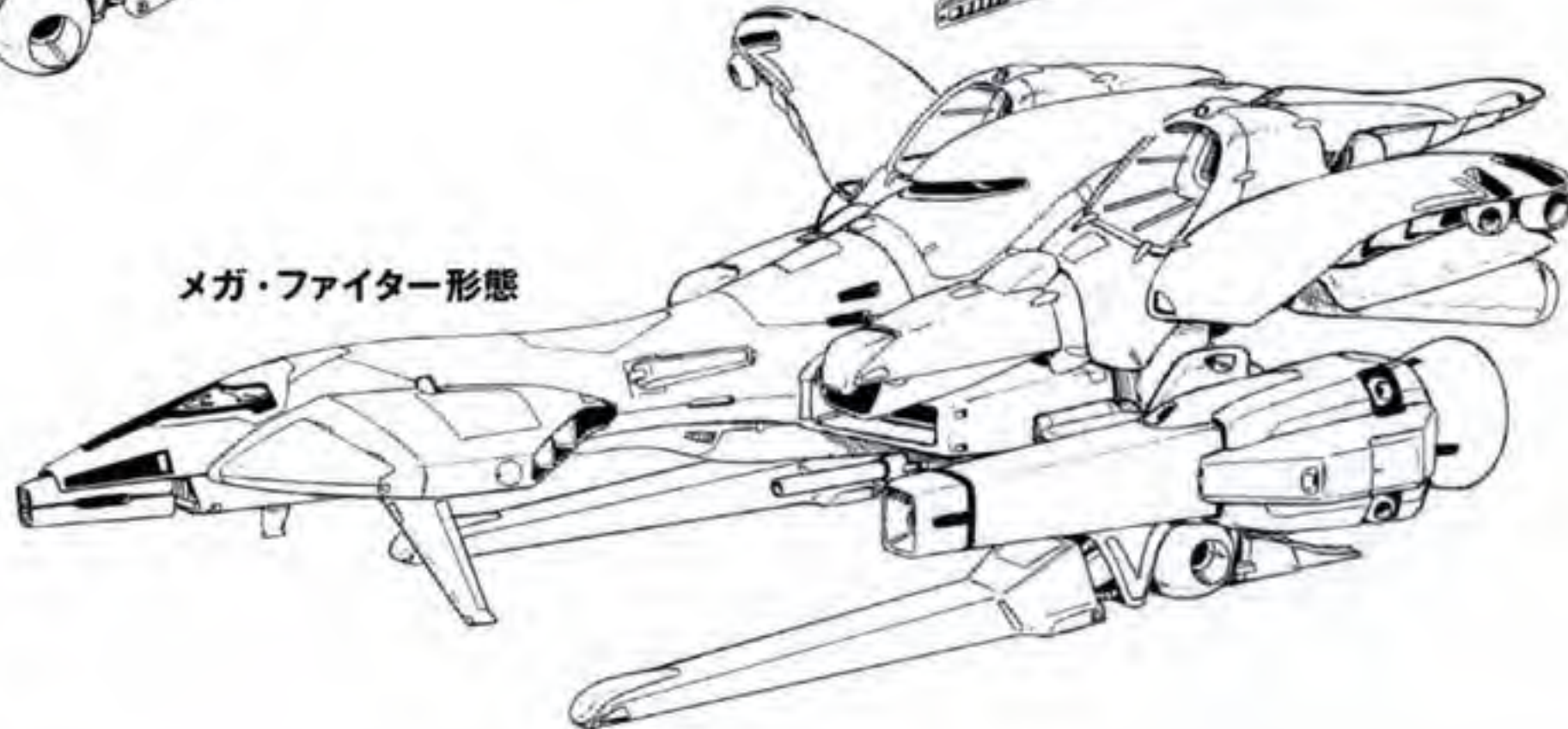
ジャムル・フィン

ネオ・ジオンが開発した試作MA。機体中央にハイ・メガ・キャノンを装備し、高い機動力を活かした高速戦闘を得意とする。ブースターを装着してメガ・ファイター形態にもなる。搭乗者であるチーム3D（ダニー、デル、デューン）のコンビネーションは鉄壁と呼ばれるほど強力。

巡航形態



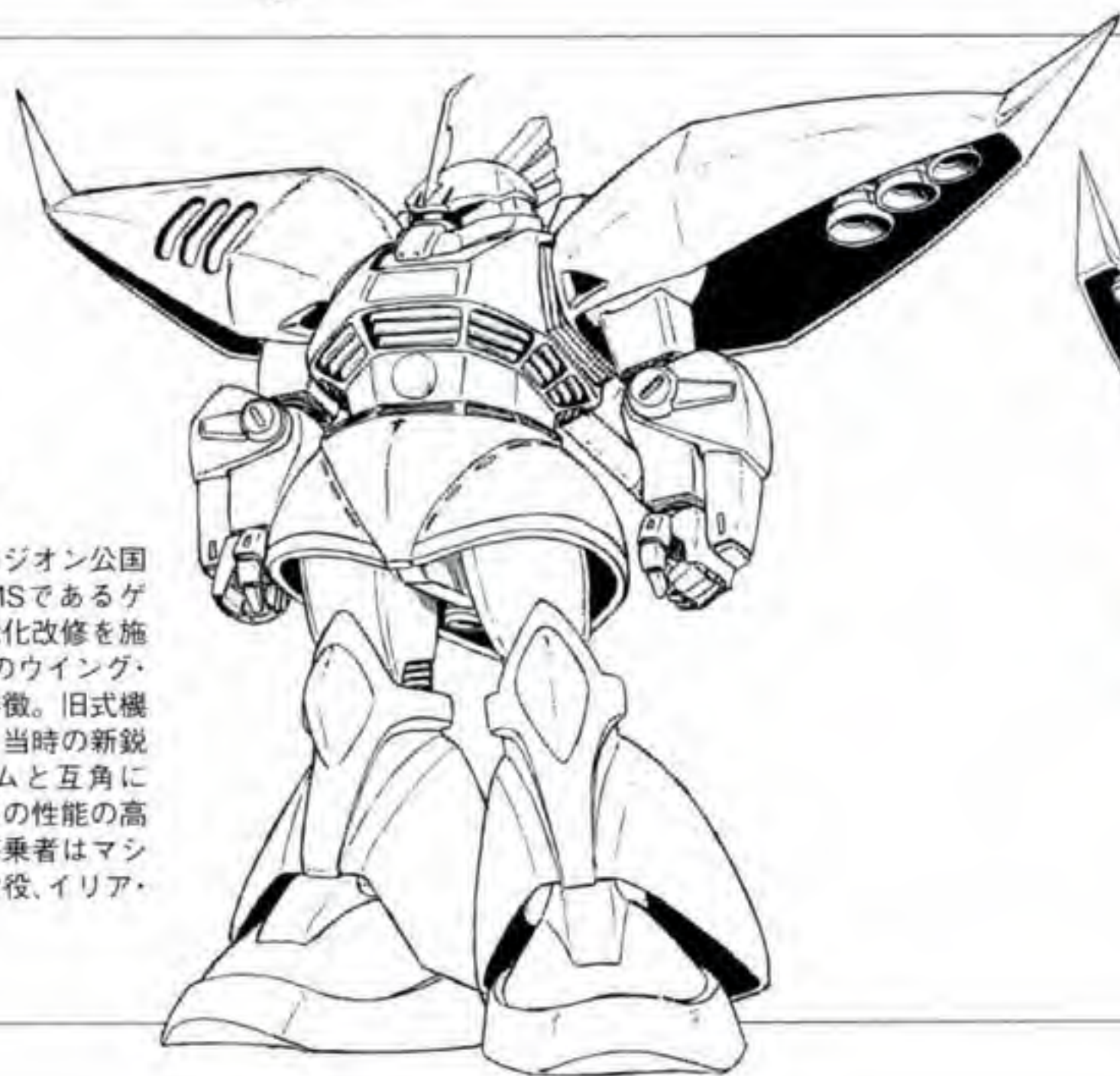
メガ・ファイター形態

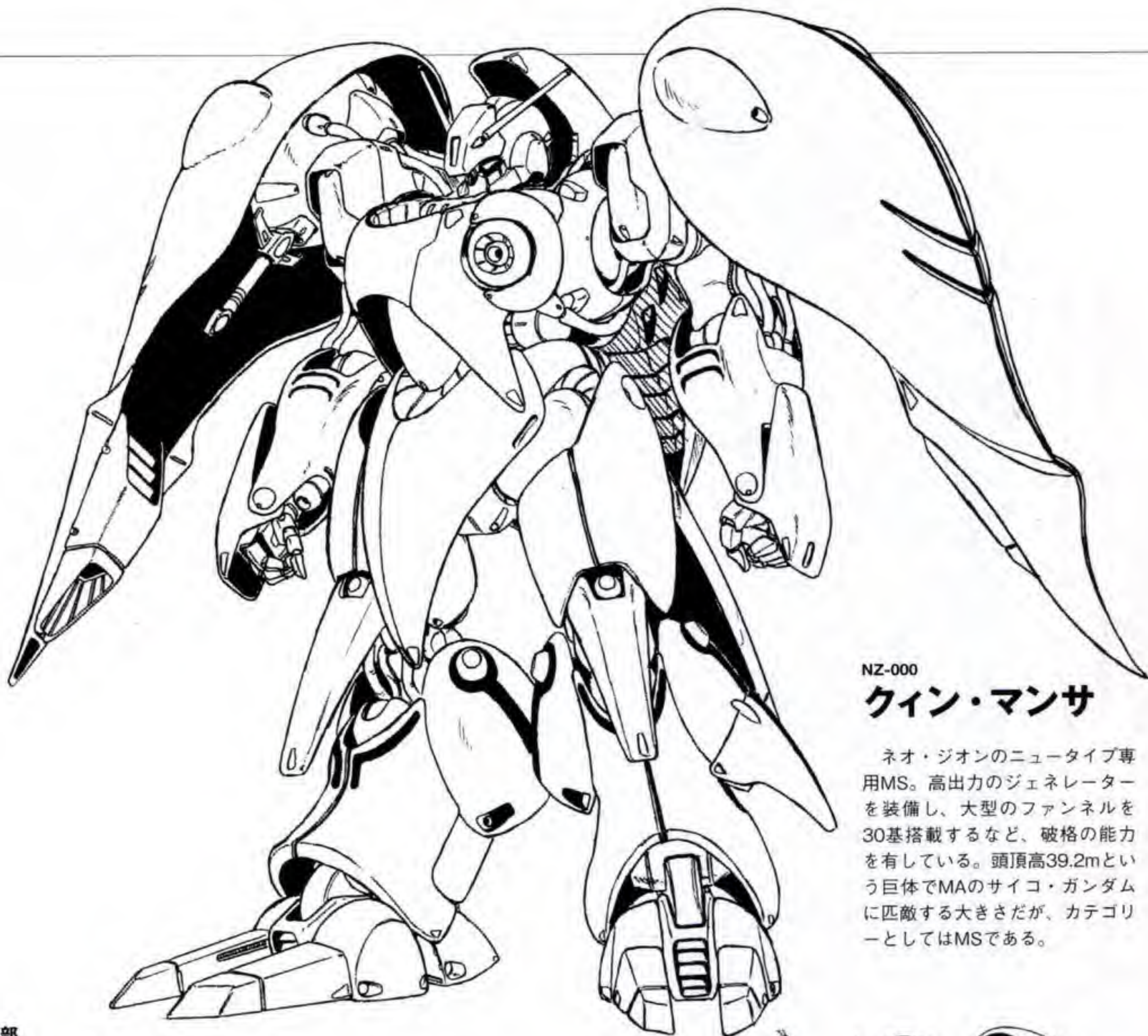


MS-14J

リゲルグ

一年戦争時のジオン公国軍最後の量産MSであるゲルググに、近代化改修を施した機体。両肩のウイング・バインダーが特徴。旧式機ベースながら、当時の新鋭機のZZガンダムと互角に渡り合えるほどの性能の高さを見せた。搭乗者はマッシュマーのお目付役、イリア・バゾム。





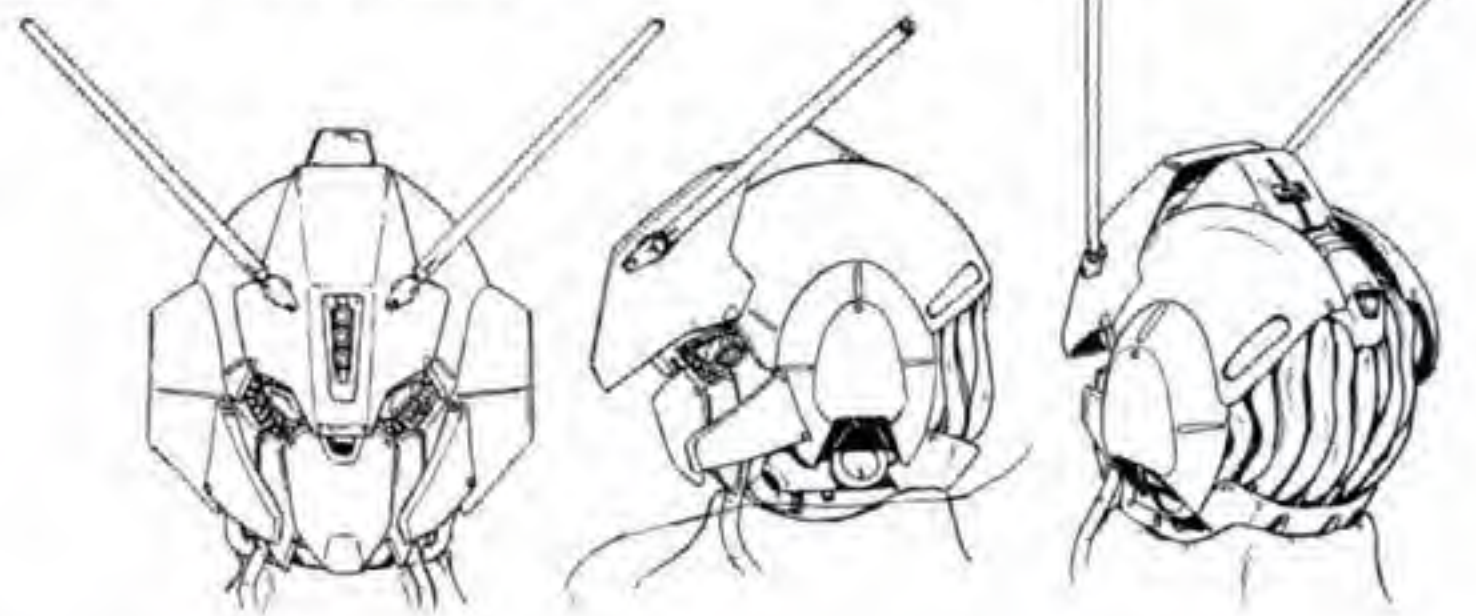
NZ-000

クイン・マンサ

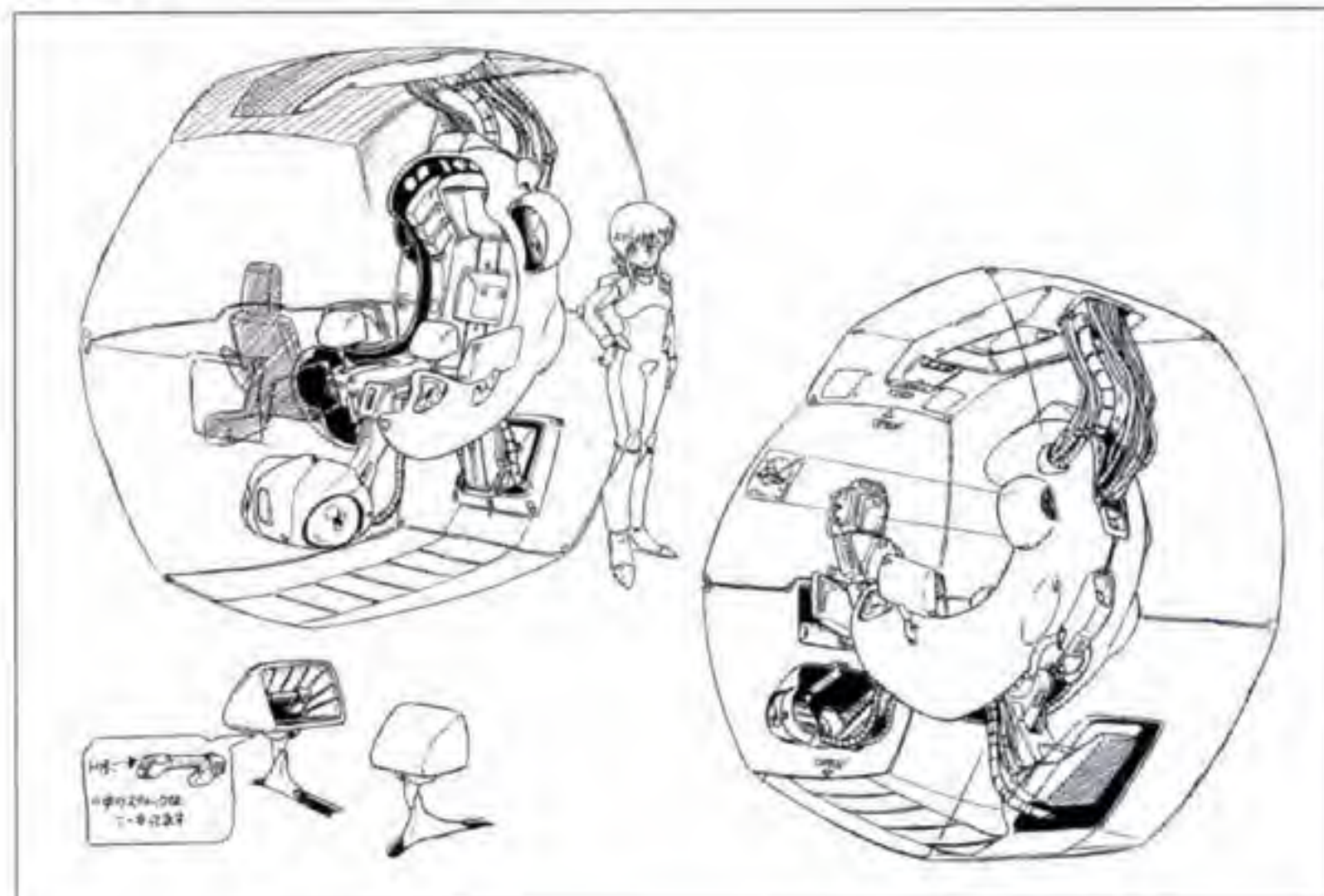
ネオ・ジオンのニュータイプ専用MS。高出力のジェネレーターを装備し、大型のファンネルを30基搭載するなど、破格の能力を有している。頭頂高39.2mという巨体でMAのサイコ・ガンダムに匹敵する大きさだが、カテゴリーとしてはMSである。

頭部

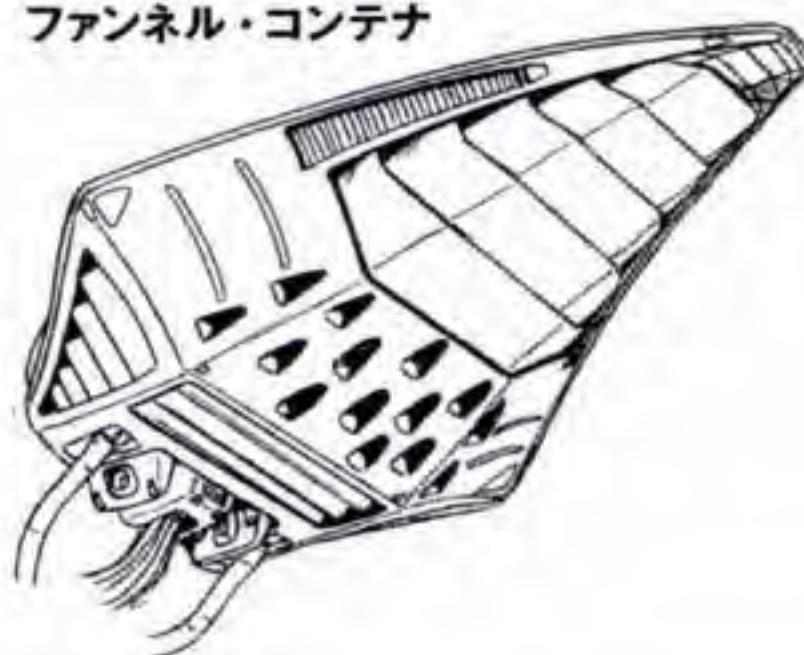
↓頭部にはコクピットがあり、脱出装置のユニットとして機能する。

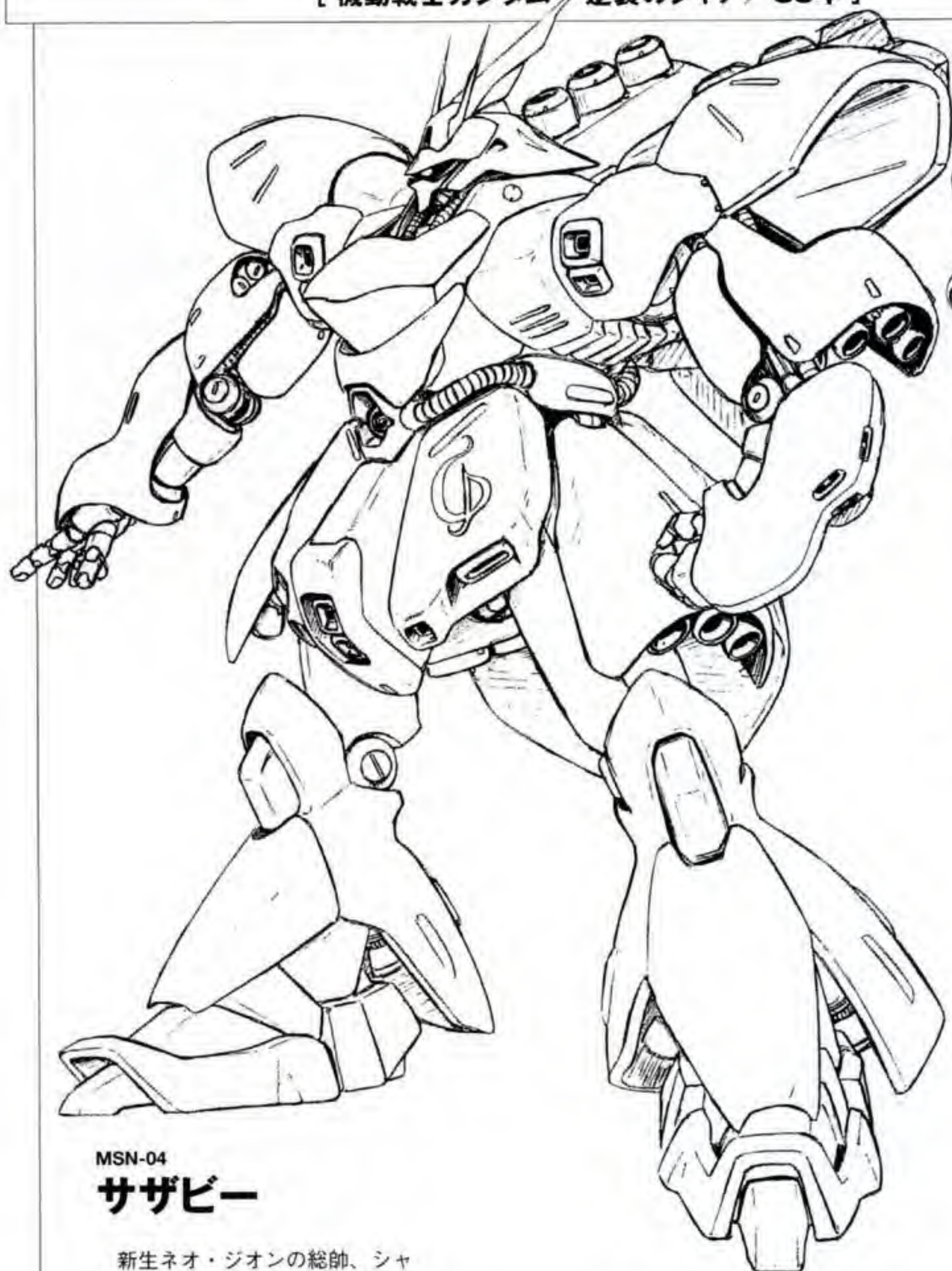


コクピット



ファンネル・コンテナ

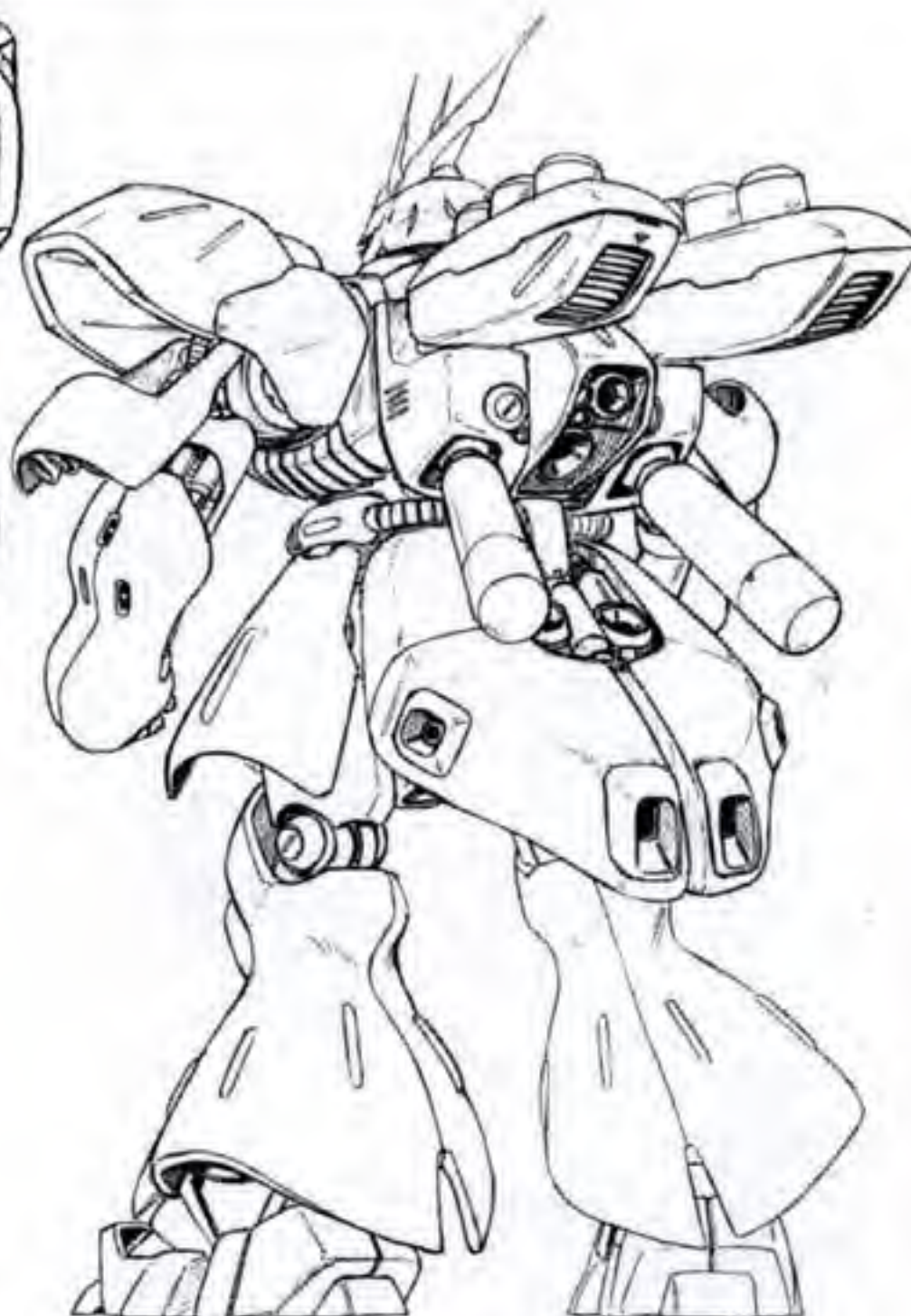




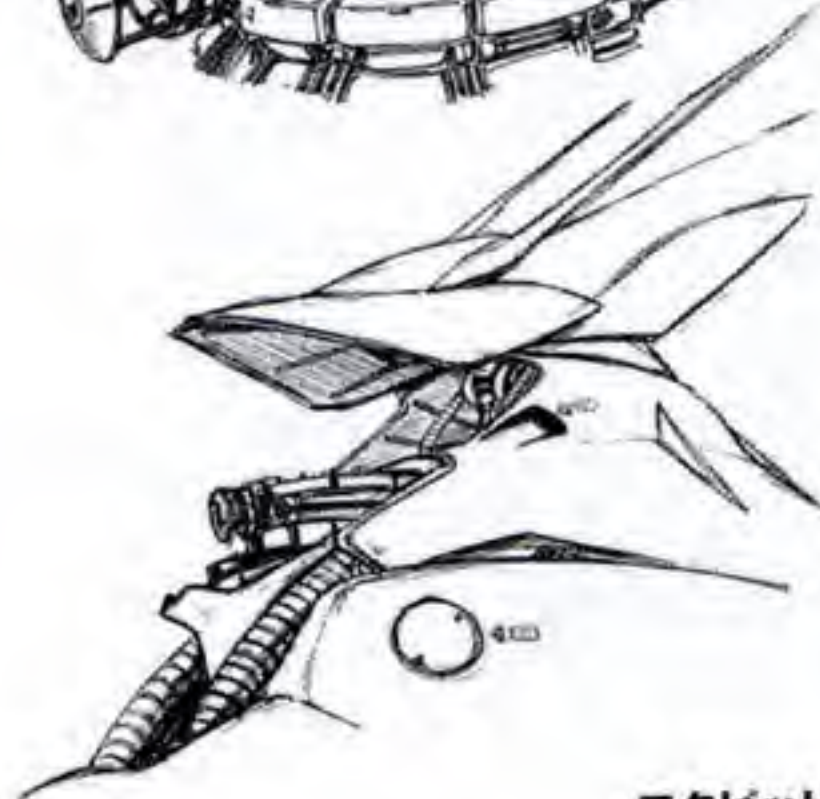
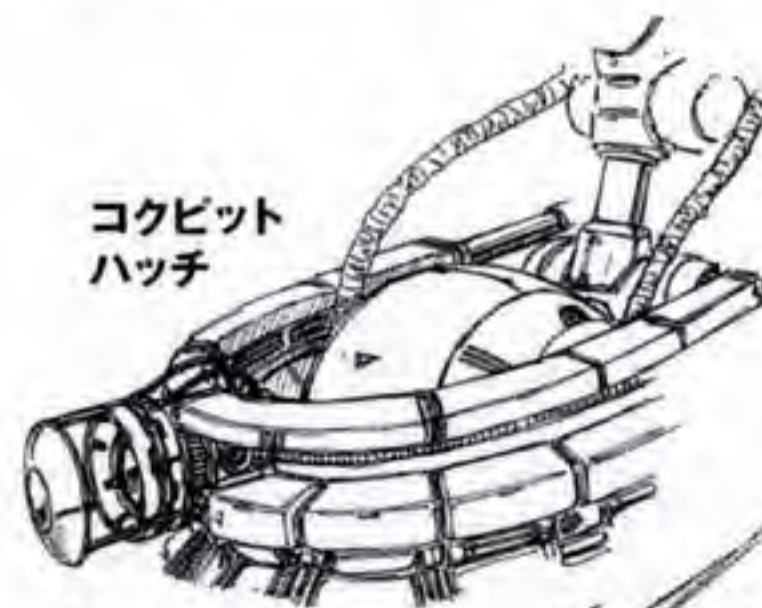
MSN-04

サザビー

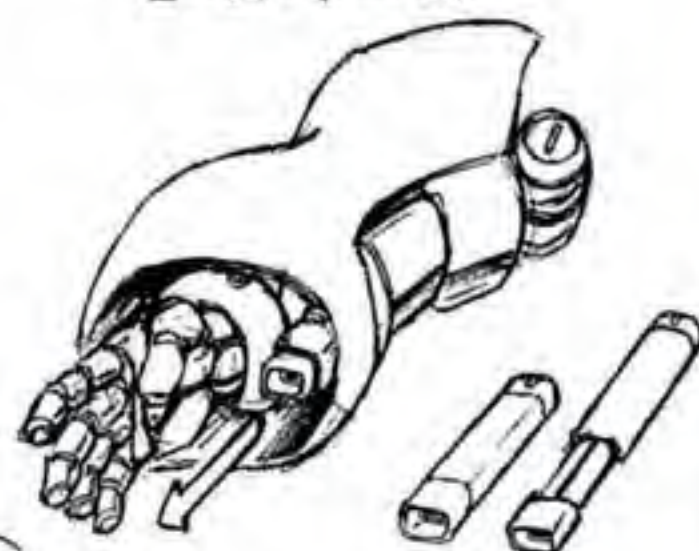
新生ネオ・ジオンの総帥、シャア・アズナブル大佐の専用機。ファンネルを6基装備するニュータイプ専用MS。感應派を感知するチップを誘込んだ、サイコフレームを構造材に用いている。地球寒冷化作戦での小惑星アクシズでアムロ・レイの搭乗するνガンダムと対決した。



コクピット
ハッチ

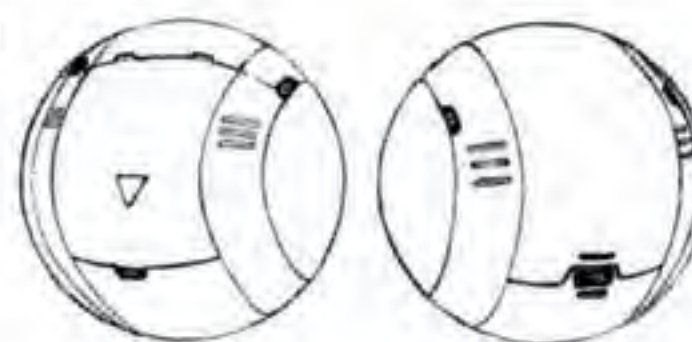


ビーム・サーベル



コクピット・
ボッド

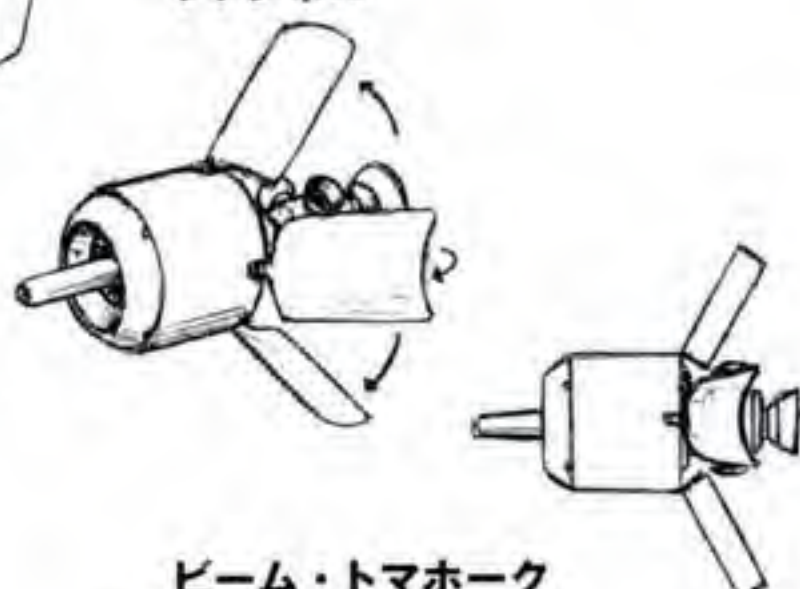
◀時代的にもコクピットの外装は球形が主流のようだ。コクピット・ボッドは脱出装置も兼ねる。



ビーム・ショット・
ライフル



ファンネル



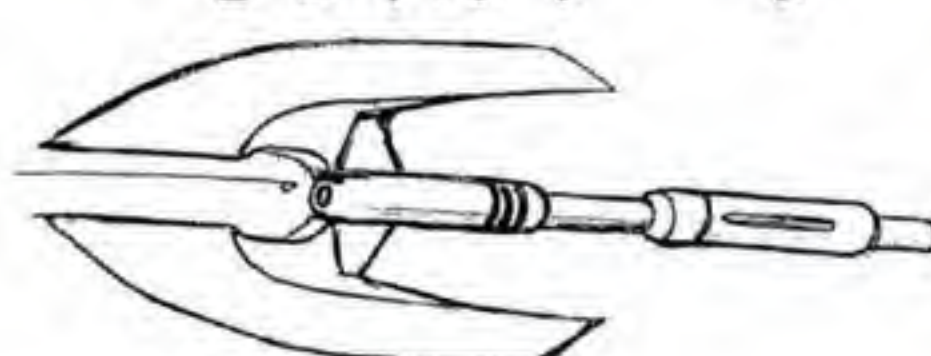
ファンネル・
コンテナ

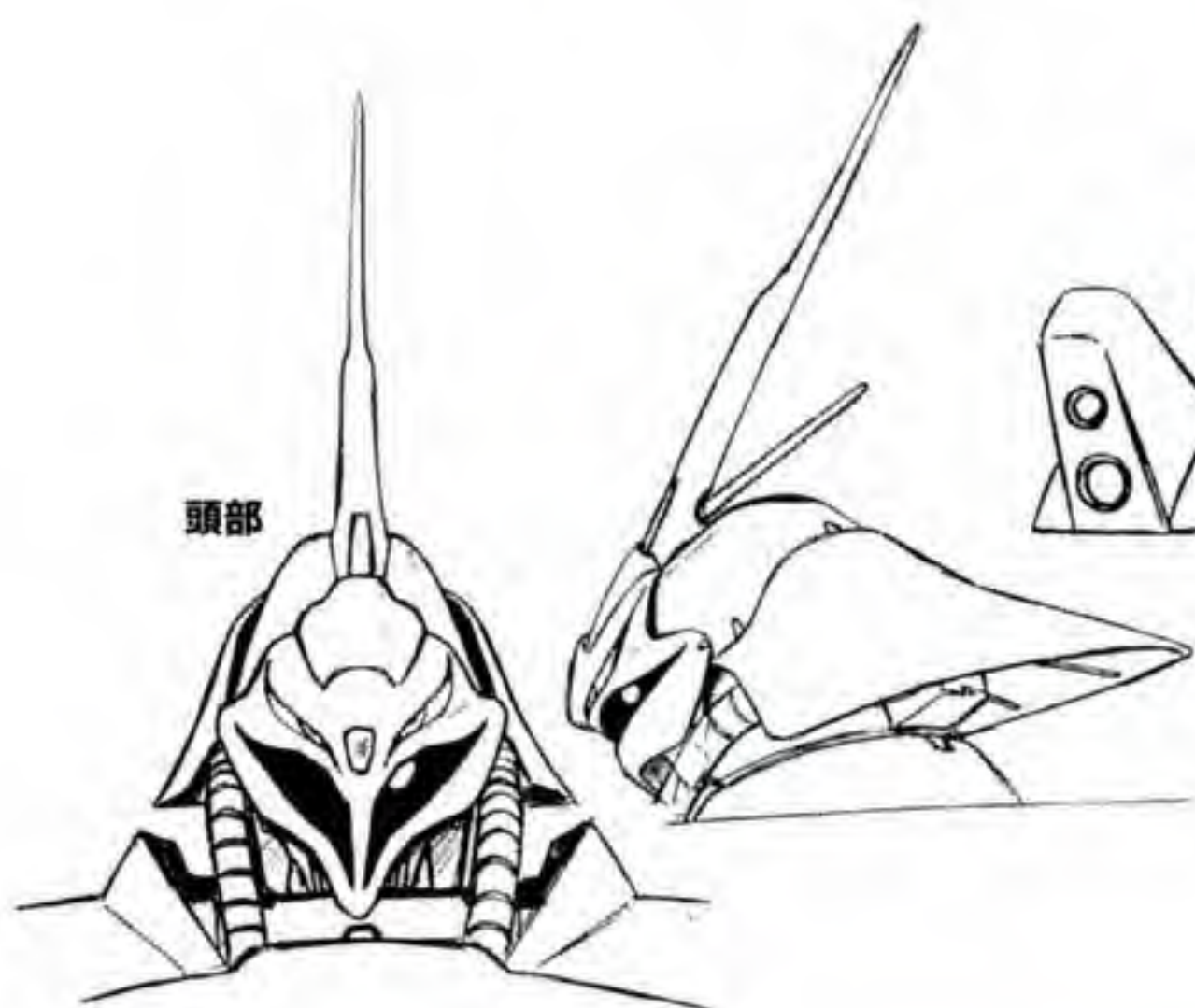
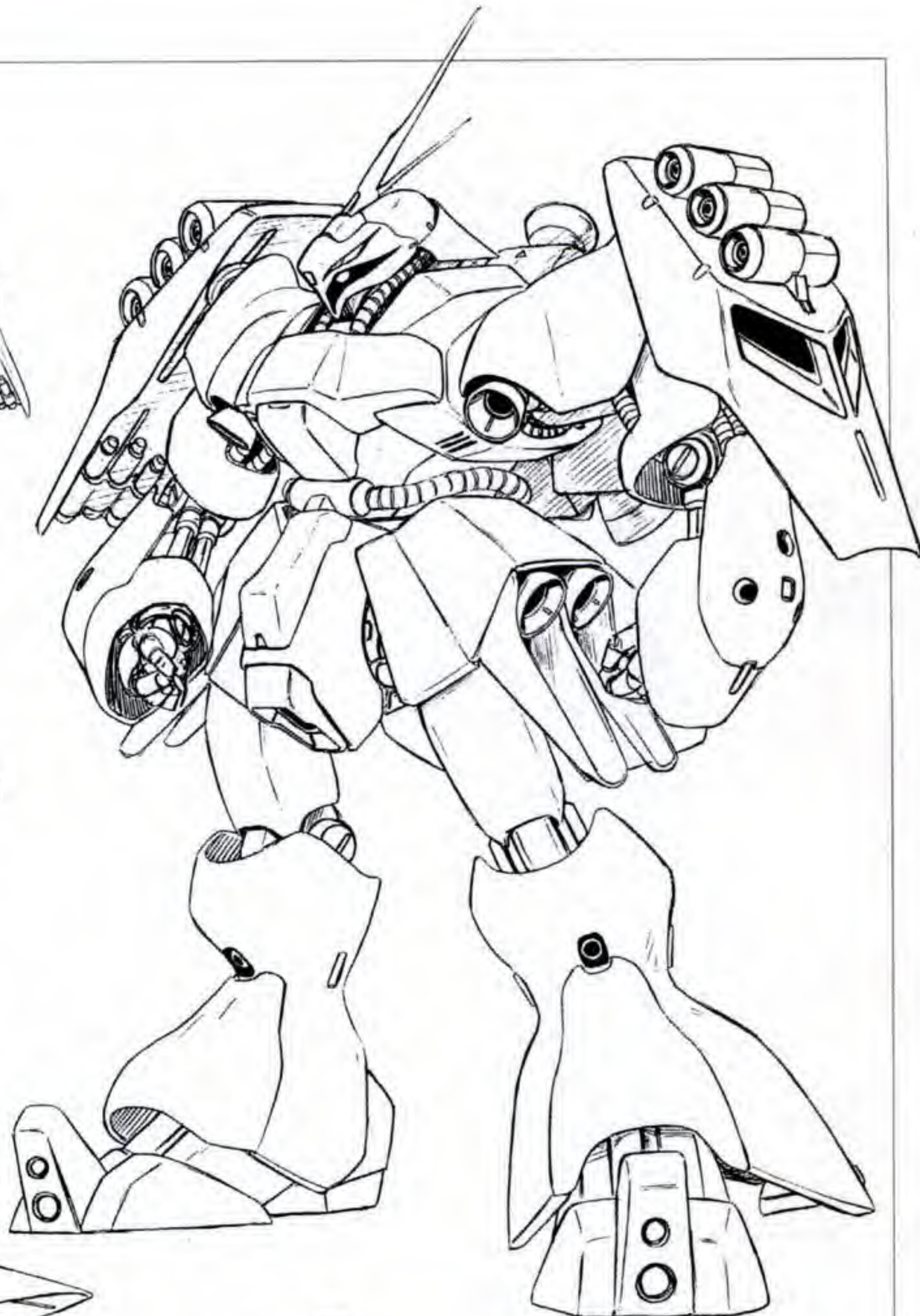
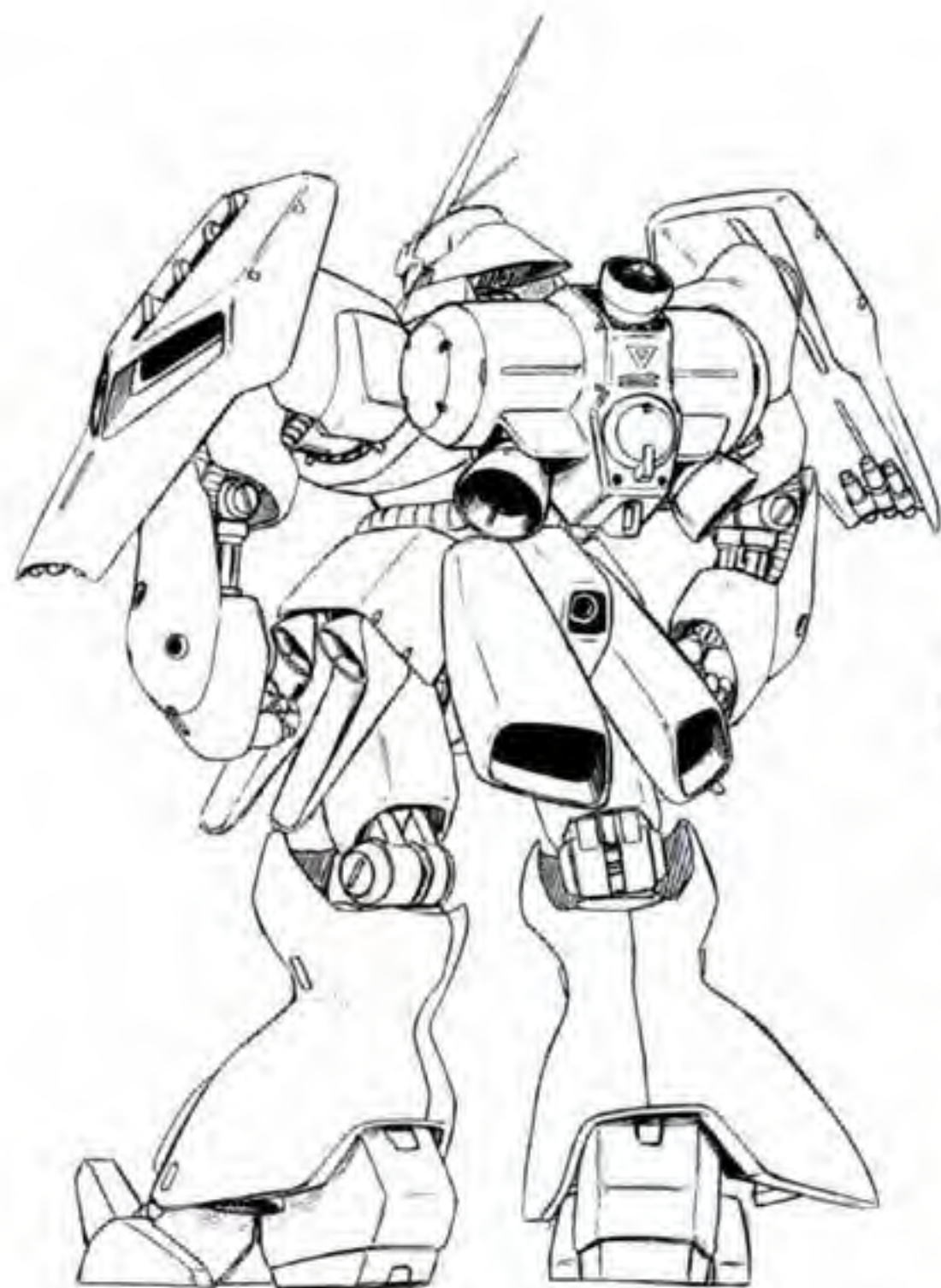


シールド



ビーム・トマホーク





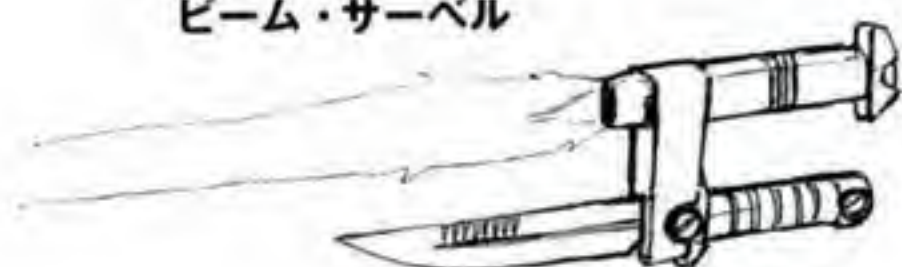
頭部

ビーム・アサルト・ライフル

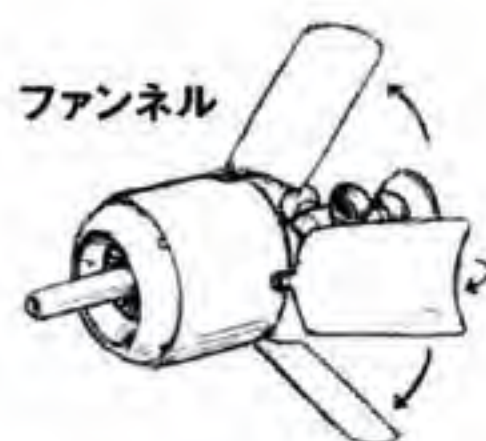


↑↓ビーム・アサルト・ライフル上部にはグレネードランチャーが付いている。ビーム・サーベル下部にはヒート系のナイフも連装。

ビーム・サーベル



ファンネル

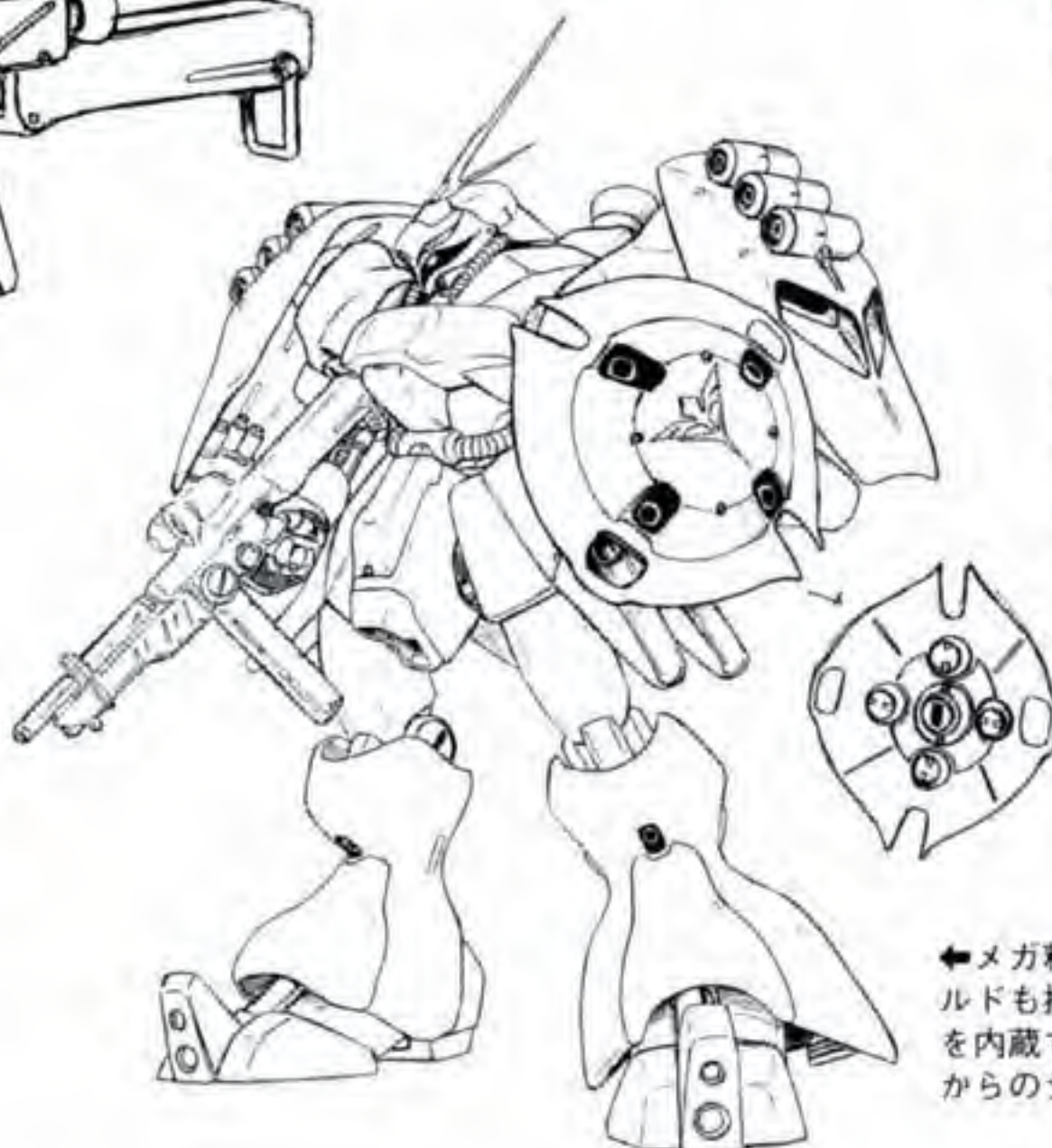


MSN-03

ヤクト・ドーガ

新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用MS。グリプス戦役期や第一次ネオ・ジオン戦争期のニュータイプ専用機よりも、遠隔操作兵器であるファンネルの搭載数が減っているのが特徴。

強化人間であるギュネイ・ガスとアデナウアー・バラヤの娘であるクェスが搭乗。頭部にブレードアンテナがあるのがギュネイ機。それ以外、機体形状は同じ（機体色はギュネイ機がグリーン系、クェス機が赤系）。携行兵器はビーム・アサルト・ライフル。ギュネイ機はVガンダムに撃墜された。

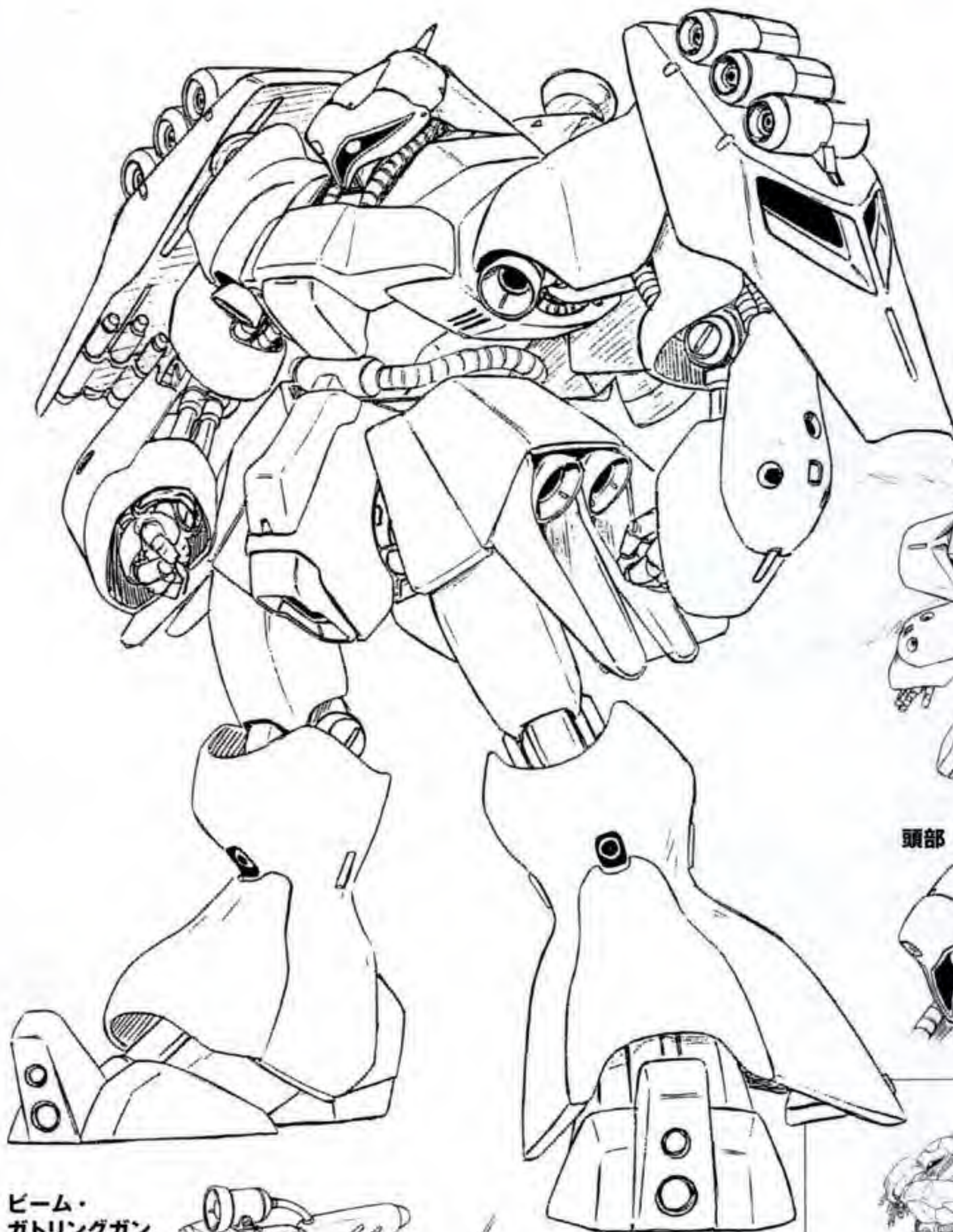


←メガ粒子砲を内蔵したシールドも携行する。盾に火器類を内蔵するのは、一年戦争時からのジオンの伝統だろうか。

MSN-03

ヤクト・ドーガ クェス・エア(バラヤ)機

クェスがネオ・ジオンに身を寄せた際に最初に搭乗した機体。エアは素性を隠すための偽名(元ネタは初期設定から)。ビーム・ガトリングガンを携行する。戦闘中に中破し、クェスはα・アジールへ乗り換えている。その後、機体は「袖付き」に渡り、改修作業が施され、実戦投入されている。



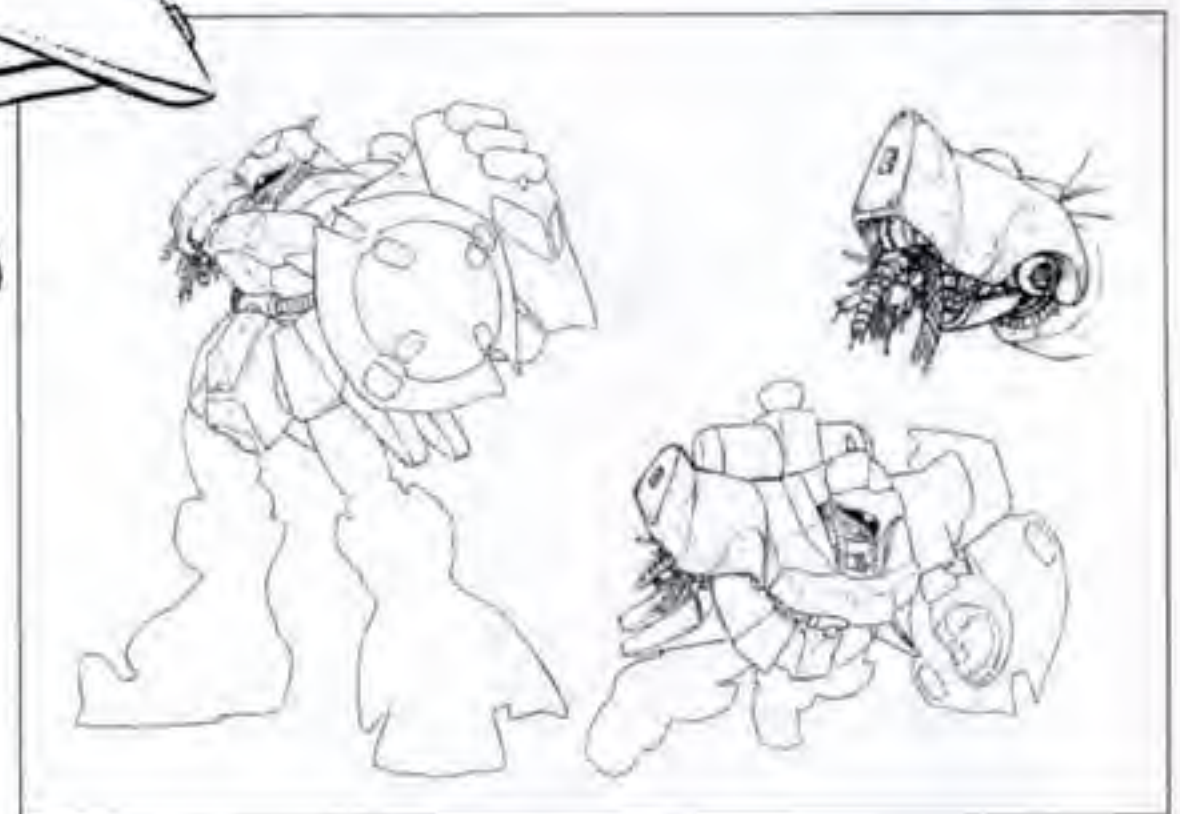
↑ファンネルは両肩のシールド部分にマウントされている。下図はルナツーを奇襲した際に負ったダメージ部分を表わす設定画。

頭部

ダメージ状態

ビーム・ガトリングガン

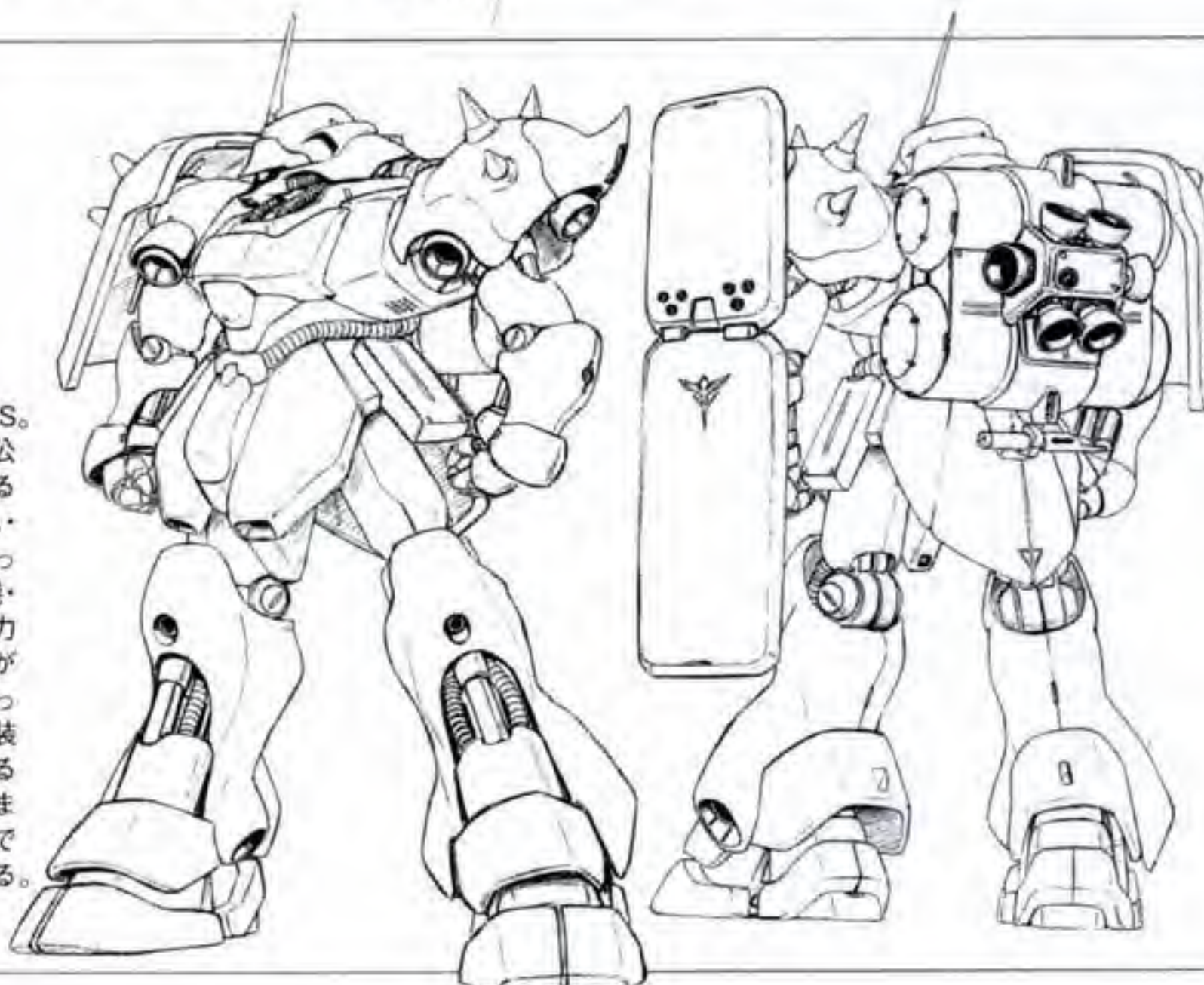
コックピットハッチ
(モデルはギュネイ機)



AMS-119

ギラ・ドーガ

ネオ・ジオンの主力MS。そのシルエットはジオン公国軍の血統を彷彿とさせるが、開発自体はアナハイム・エレクトロニクス社が行っている。連邦軍の同世代機・ジェガンと比べても攻撃力を重視した機体というのがうかがえる。搭乗者によってパーソナルカラーに塗装することが許容されているのも、ジオンの伝統か。また、指揮官用と一般併用では携行兵器の形状が異なる。



指揮官用
ビーム・マシンガン

一般併用
ビーム・マシンガン



NZ-333

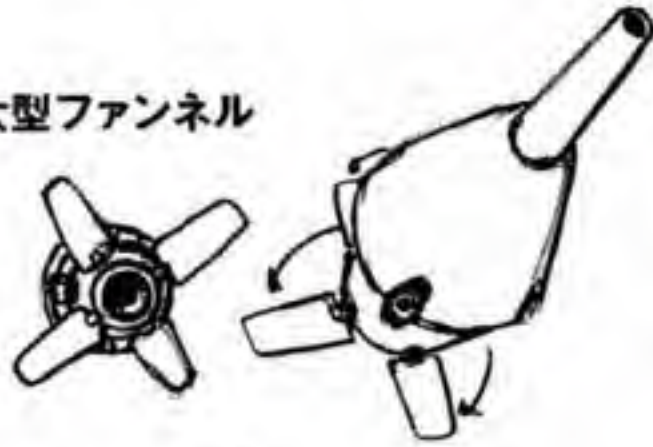
α・アジール

全長約108mというネオ・ジオンの巨大MA。大型のファンネルによるオールレンジ攻撃が可能なニュータイプ専用機だ。ただし、この巨体の半分は推進剤を搭載したプロペラントタンクの長さであり、タンクを除いた本体の頭頂高は58.4mだ（それでも十分巨大だが）。クェス・エア（パラヤ）がパイロットとなり戦闘に参加した。

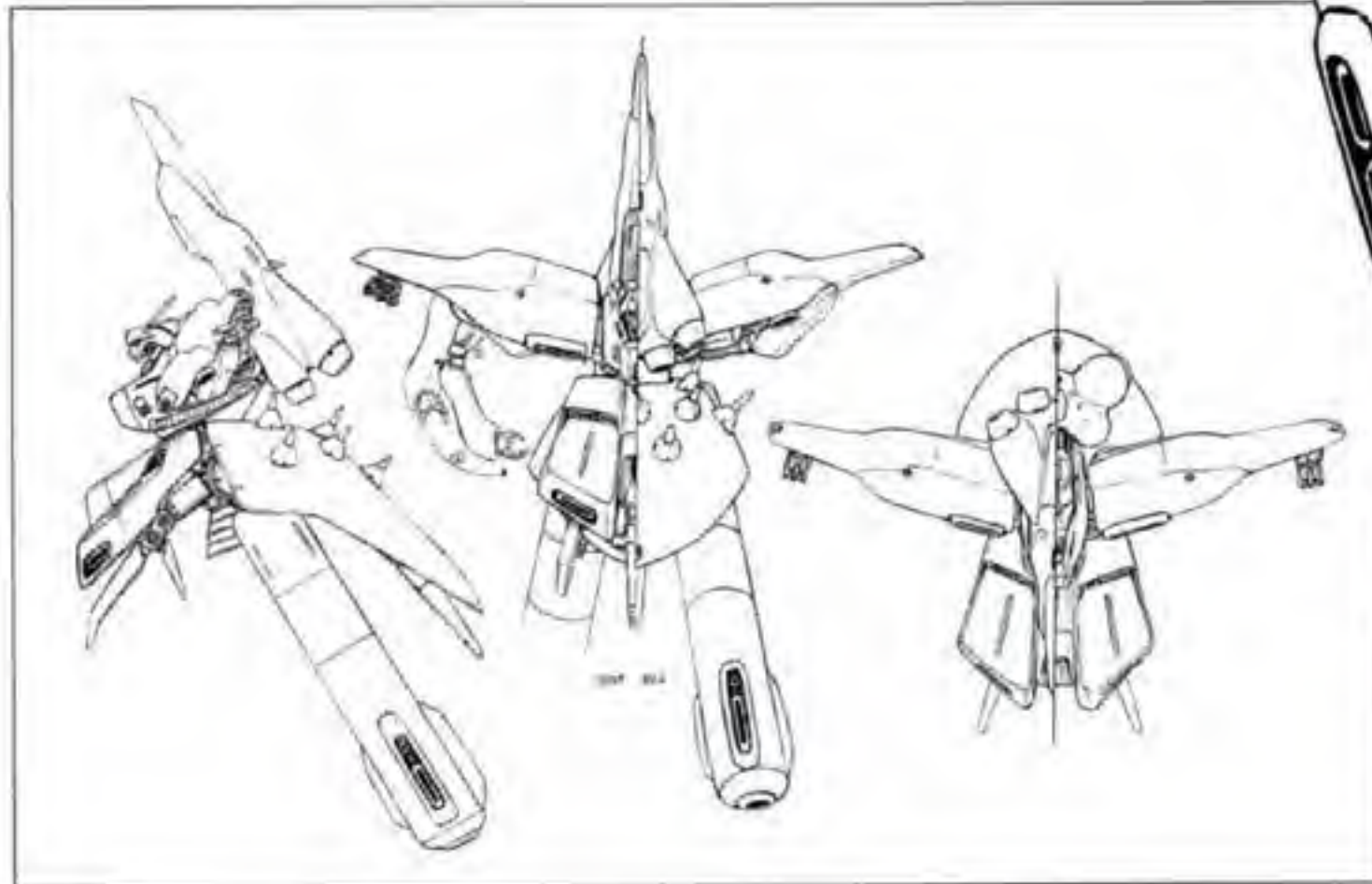
頭部



大型ファンネル



プロペラントタンク
接続部



三面図

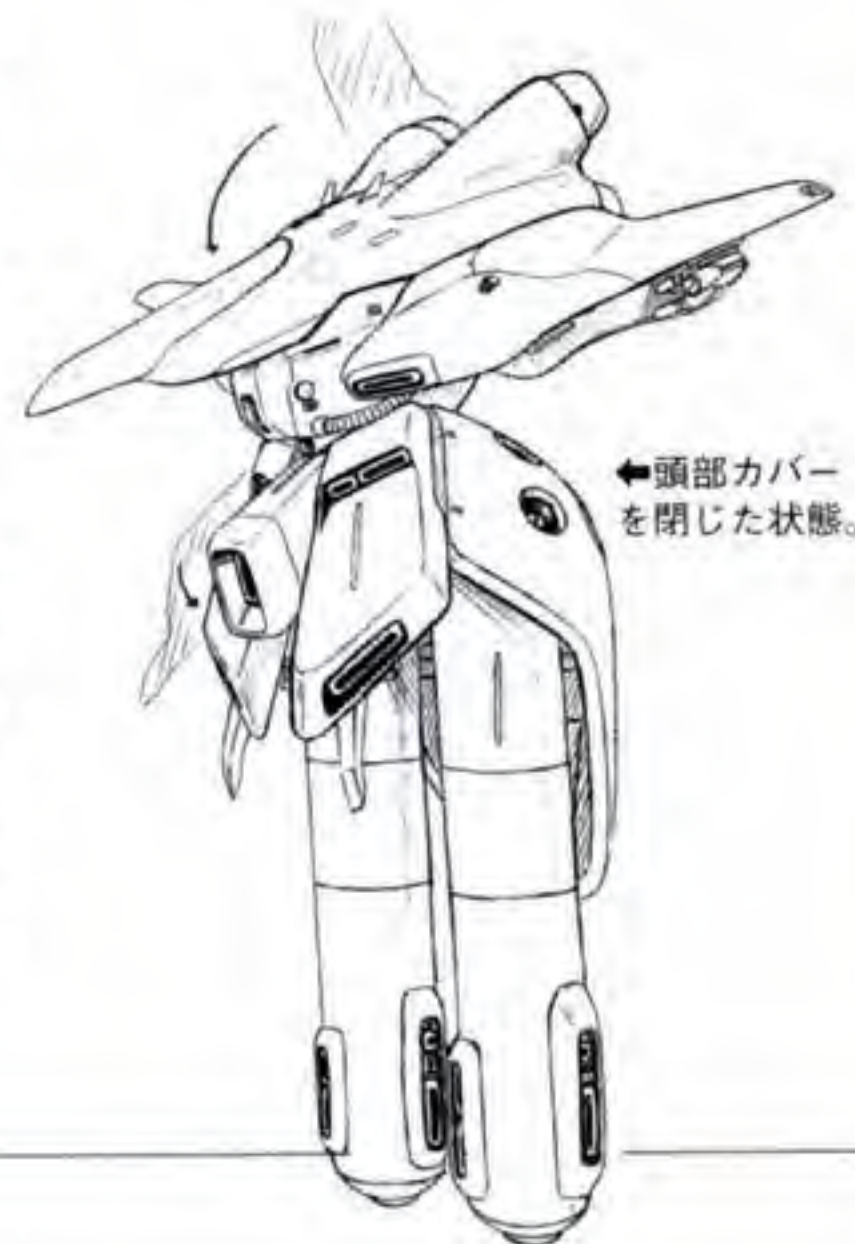
←正確にはα・アジールの4面図になるが、左から側面と正面&背面、そして頭部のカバーの開/閉状態の3点が描かれている。

コクピットシート

←ネオ・ジオンの運用するニュータイプ専用機のコクピットシートは、共通規格になっている。つまりサザビーやヤクト・ドーガといったサイコミュ搭載機も同じ形状ということである。



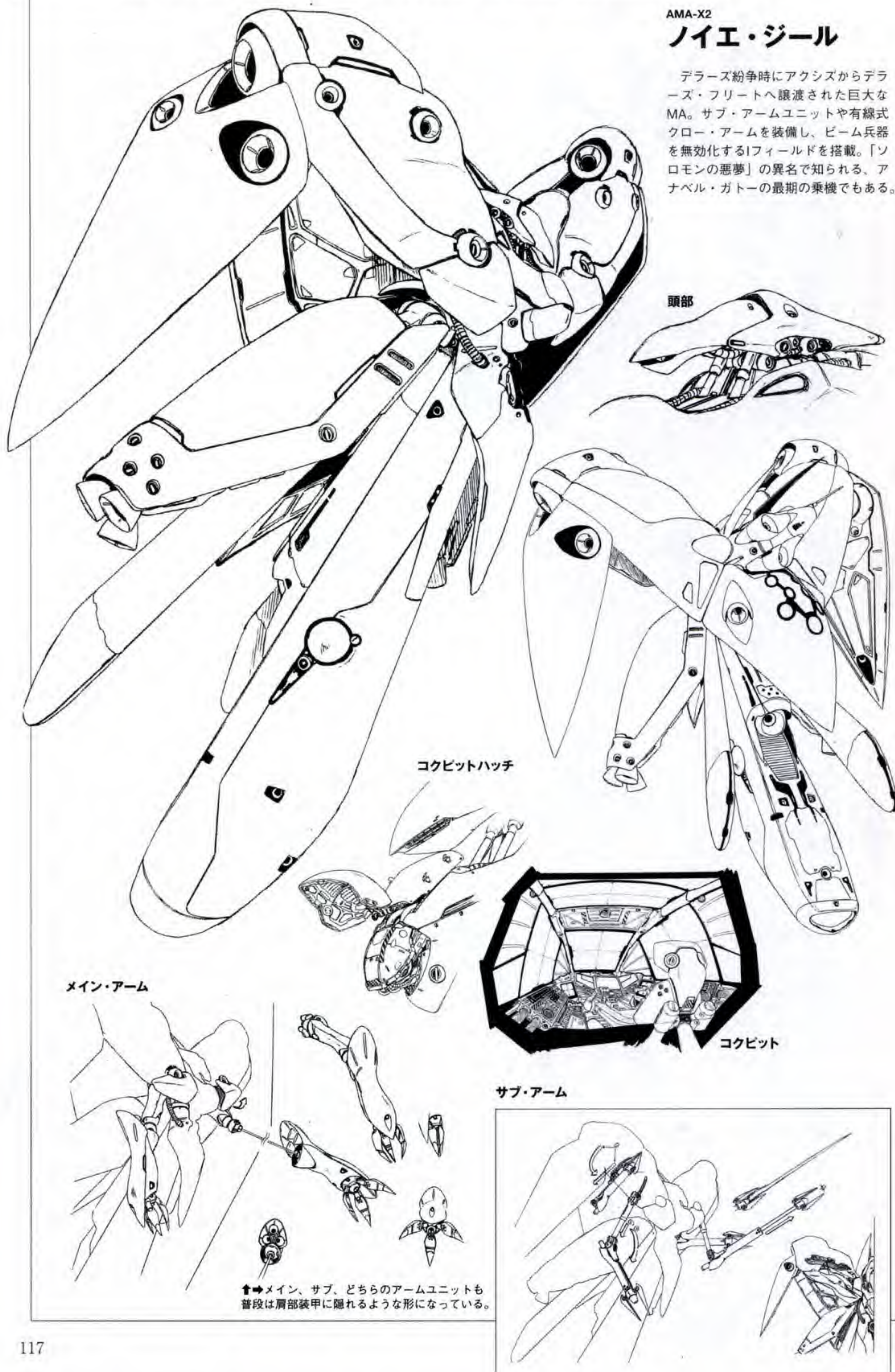
←頭部カバーを閉じた状態。

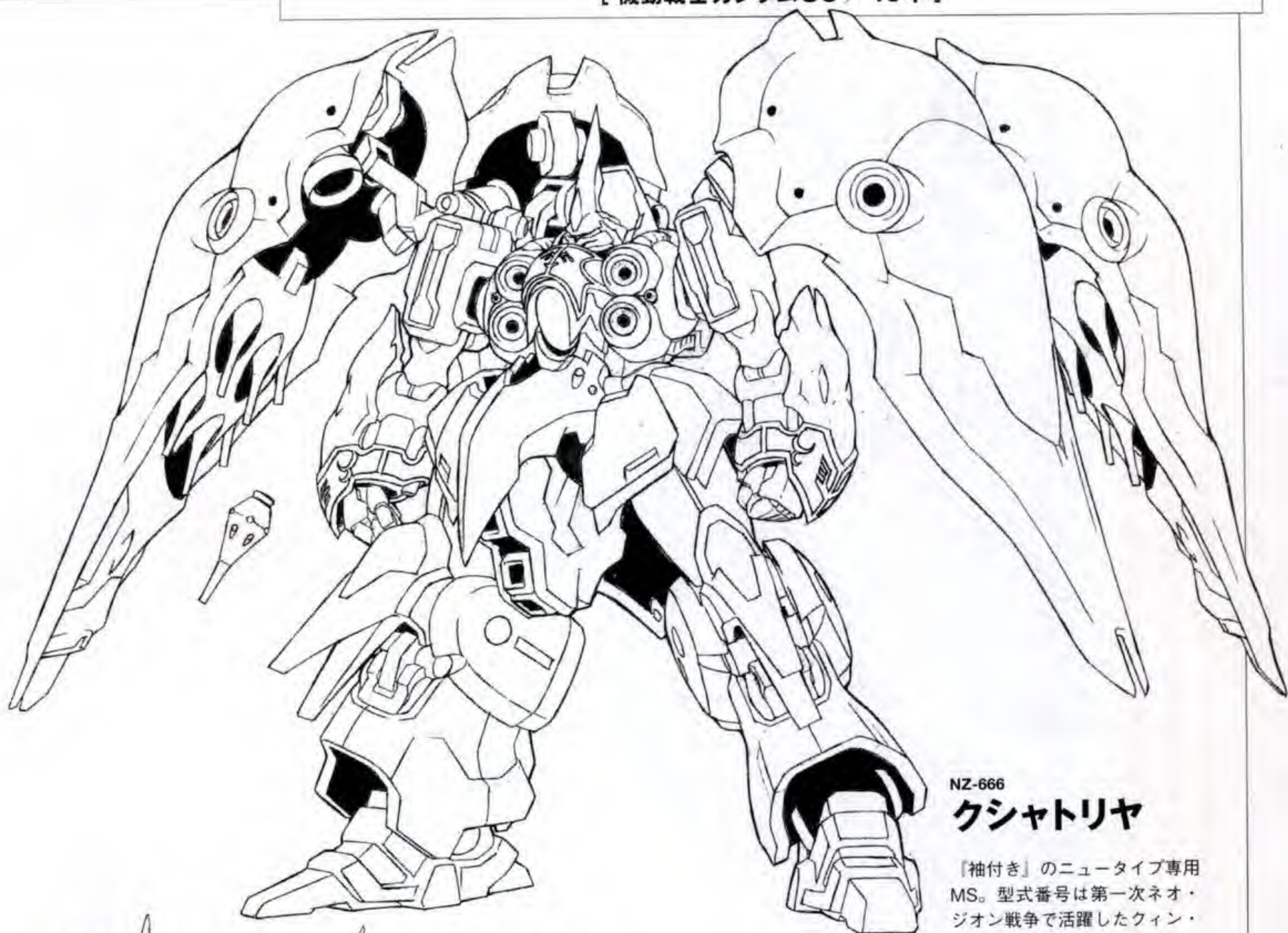


AMA-X2

ノイエ・ジール

デラース紛争時にアクシズからデラース・フリートへ譲渡された巨大なMA。サブ・アームユニットや有線式クロー・アームを装備し、ビーム兵器を無効化するIフィールドを搭載。「ソロモンの悪夢」の異名で知られる、アナベル・ガトーの最期の乗機でもある。



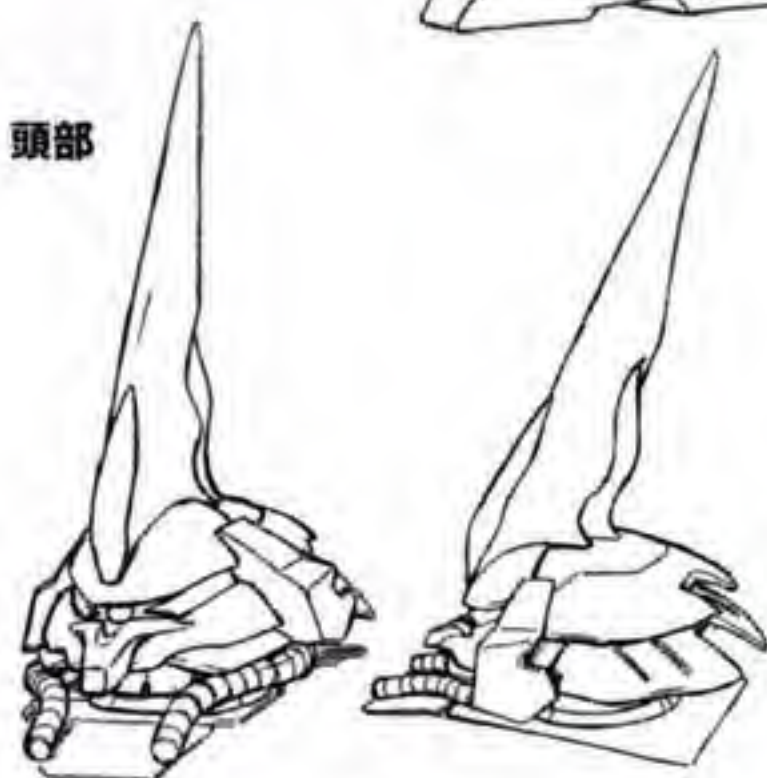


NZ-666

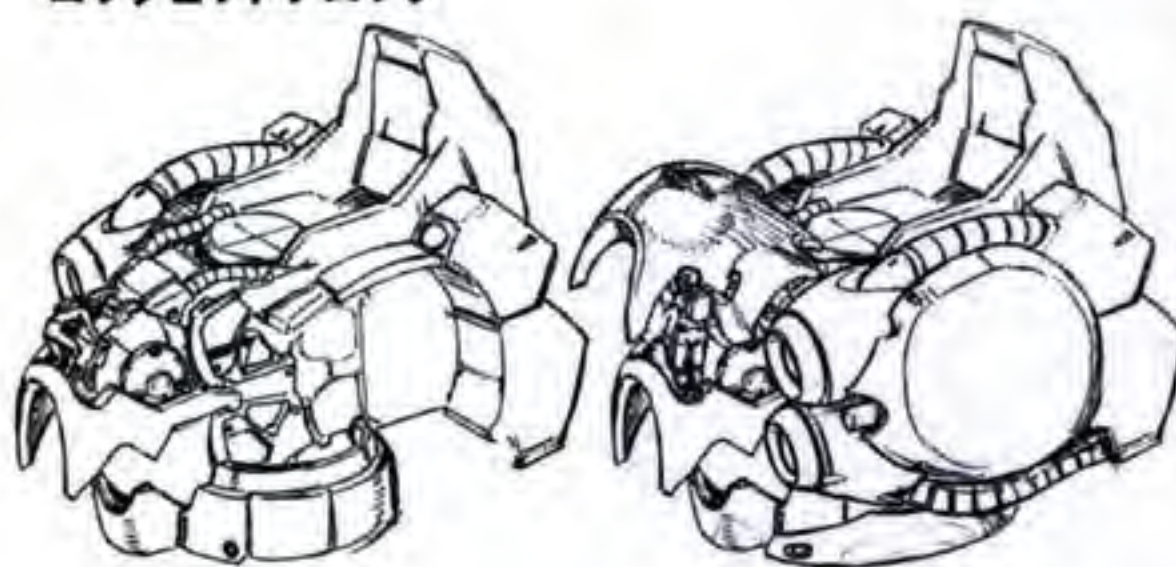
クシャトリヤ

『袖付き』のニュータイプ専用MS。型式番号は第一次ネオ・ジオン戦争で活躍したクイン・マンサの系譜。第二次ネオ・ジオン戦争期のニュータイプ専用機と比べてファンネルの搭載数が多い。『UC』のep 3ではユニコーンガンダムとの戦闘により中破。ネェル・アーガンに回収された。搭乗者はブルシリーズの生き残りでもあるマリダ・クルス。

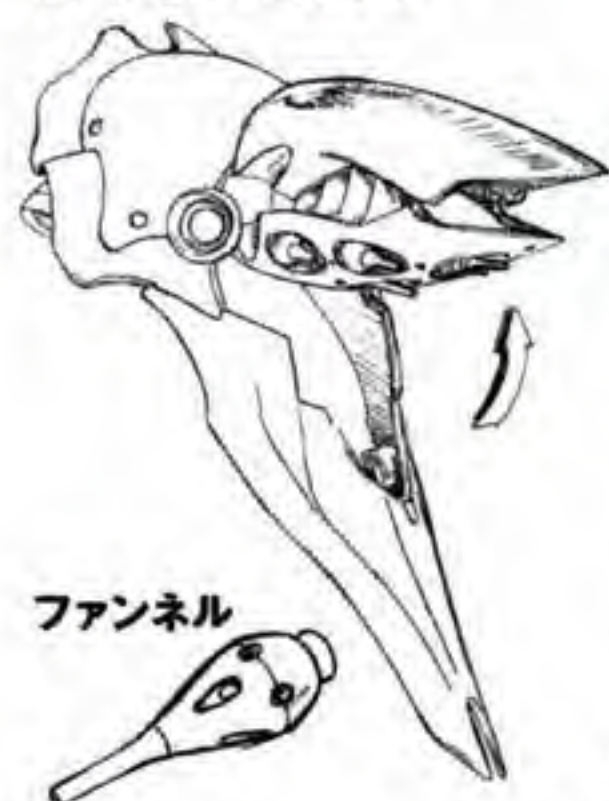
頭部



コックピットブロック



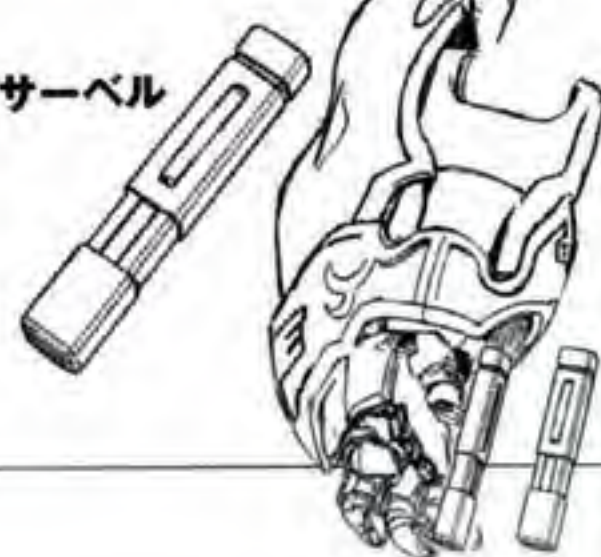
ファンネル・コンテナ



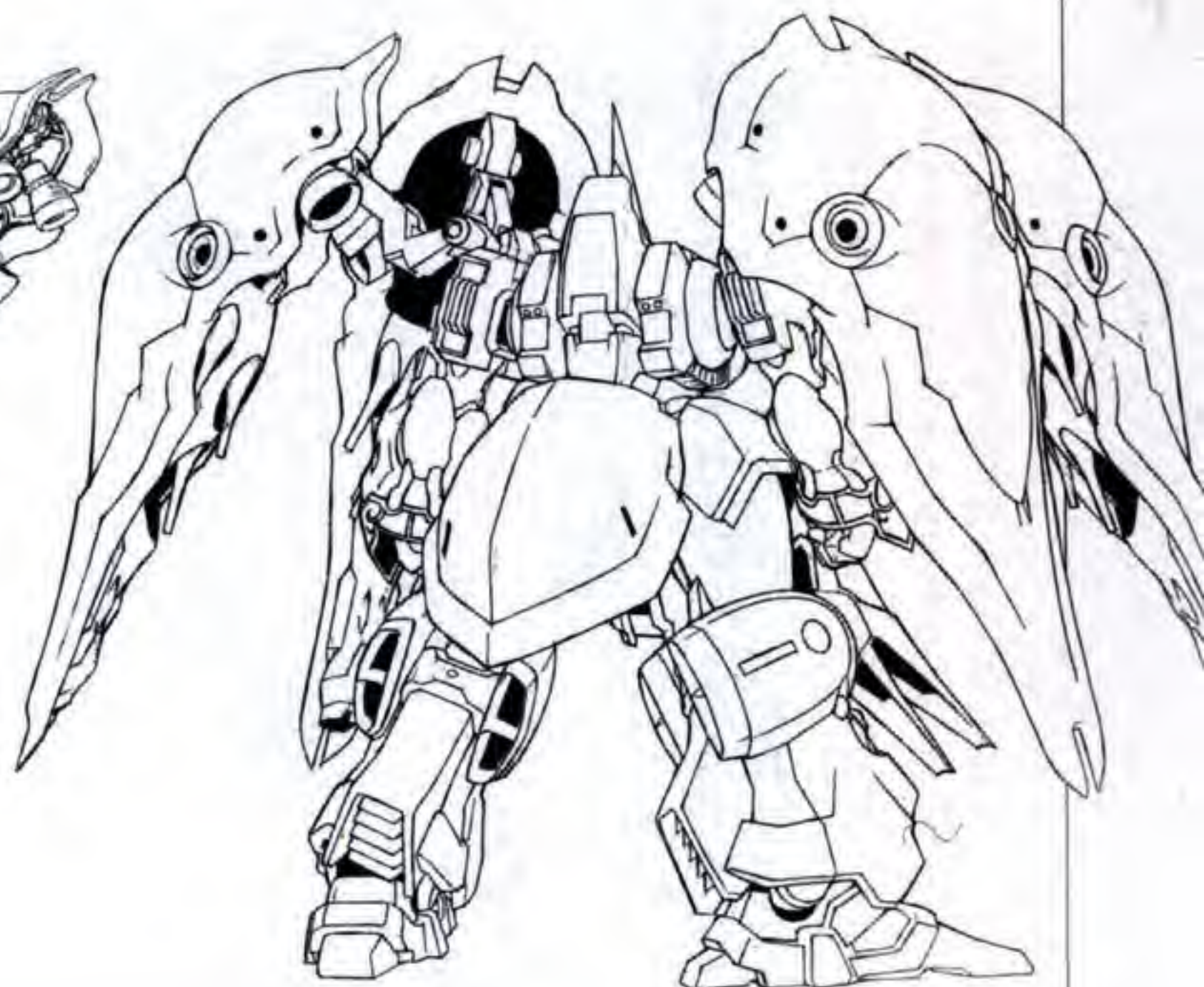
ファンネル

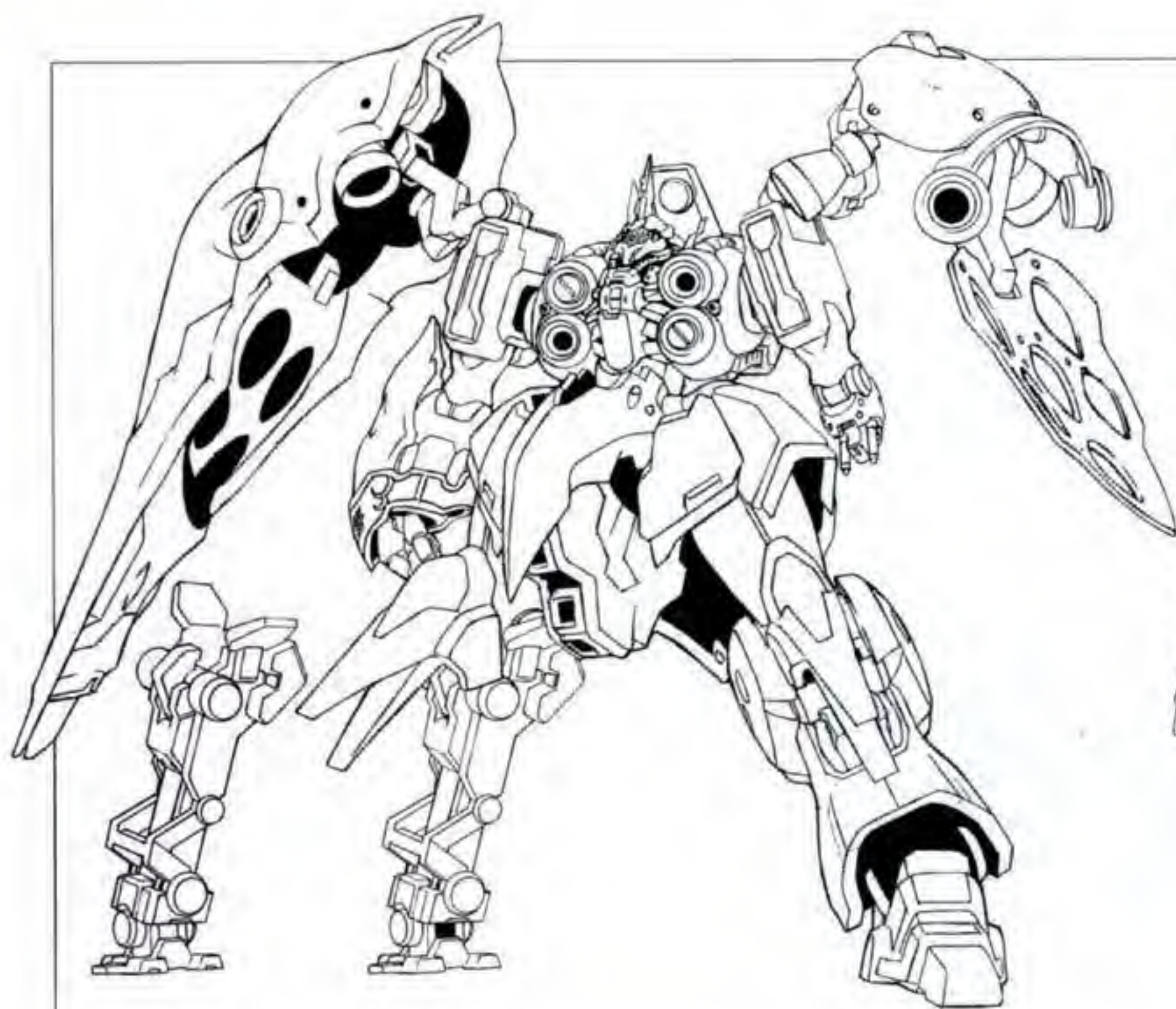


ビーム・サーベル



サブアームユニット

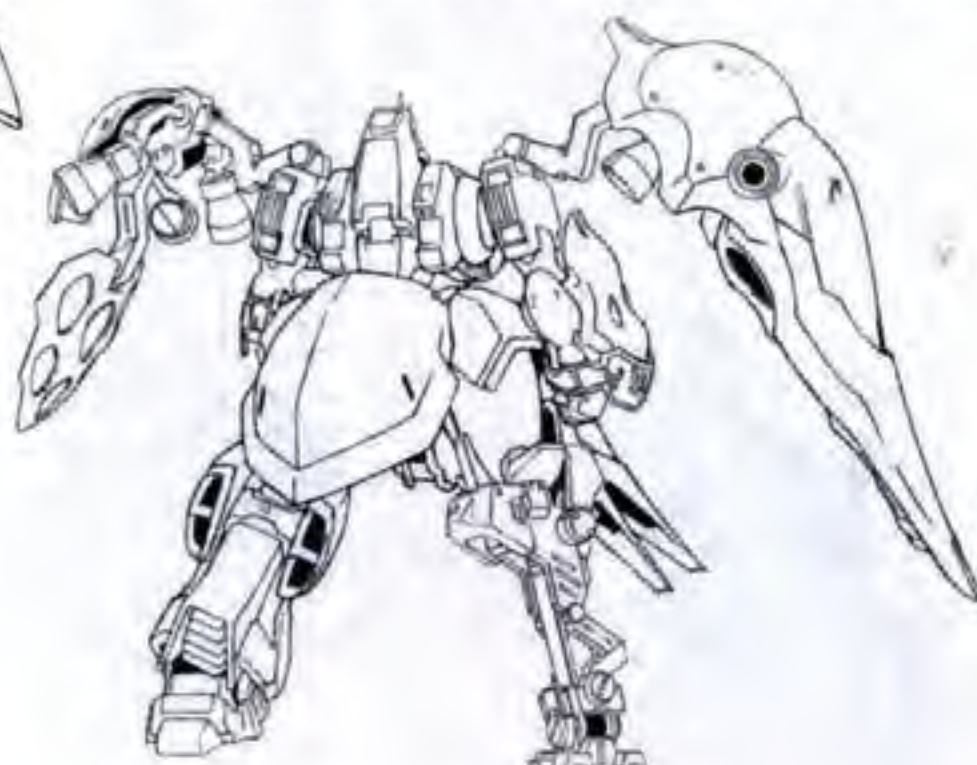




NZ-666

クシャトリヤ・ベッセルング

ユニコーンガンダムとの戦闘で中破したクシャトリヤをネエル・アーガマ艦内で修繕した機体。改修の際には連邦系MSの部品が用いられた。ただし、損失部分（バインダー2基、左前腕部、右脚部）は応急処置が施されたに過ぎない。頭部のカメラアイなどもジェガンの部品などで代用されている。脚部にはビーム・ガトリングガンを搭載。『UC』のep 6では、ネエル・アーガマのMSデッキ内でローゼン・ズールの右腕を破壊した。

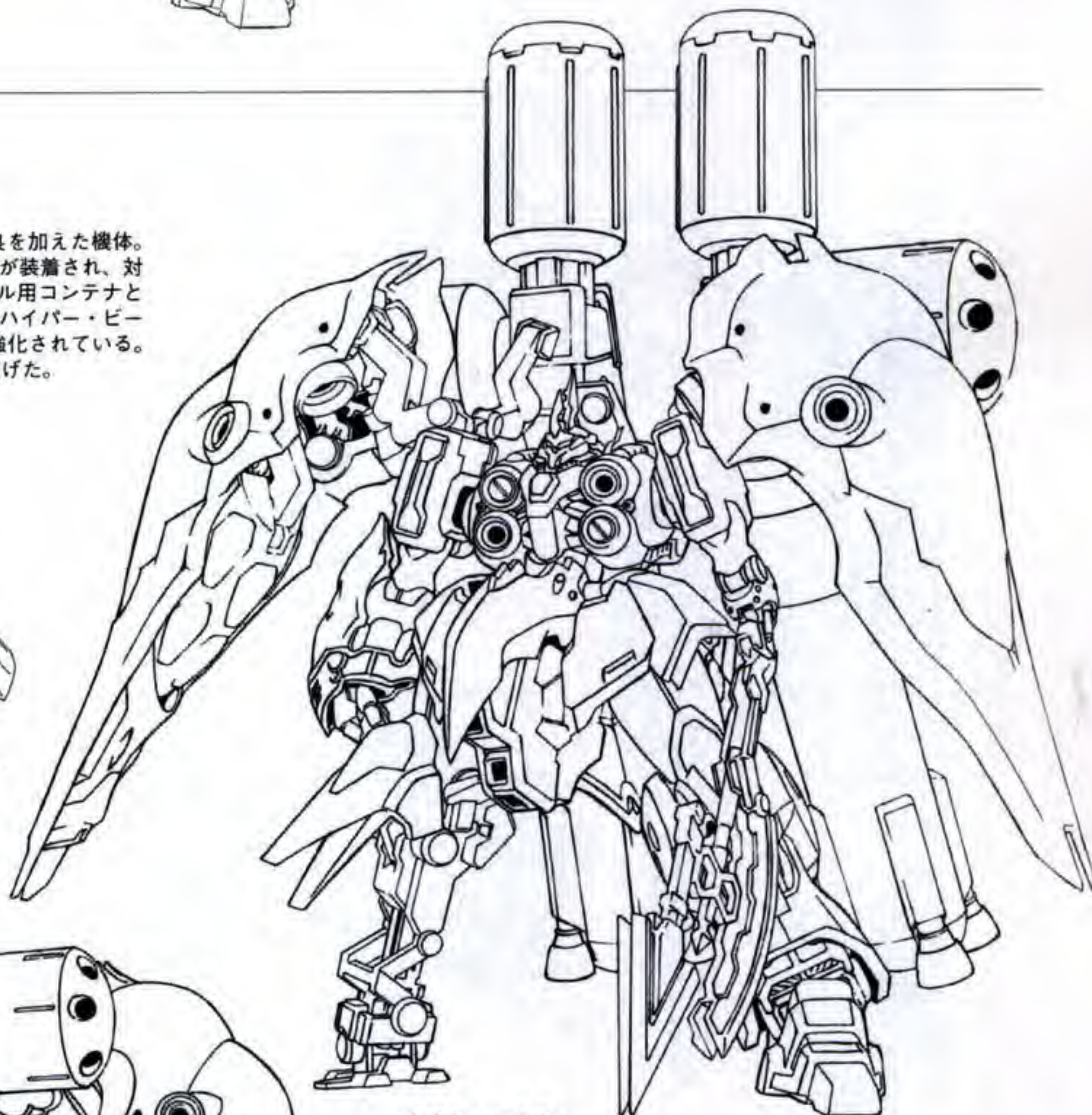
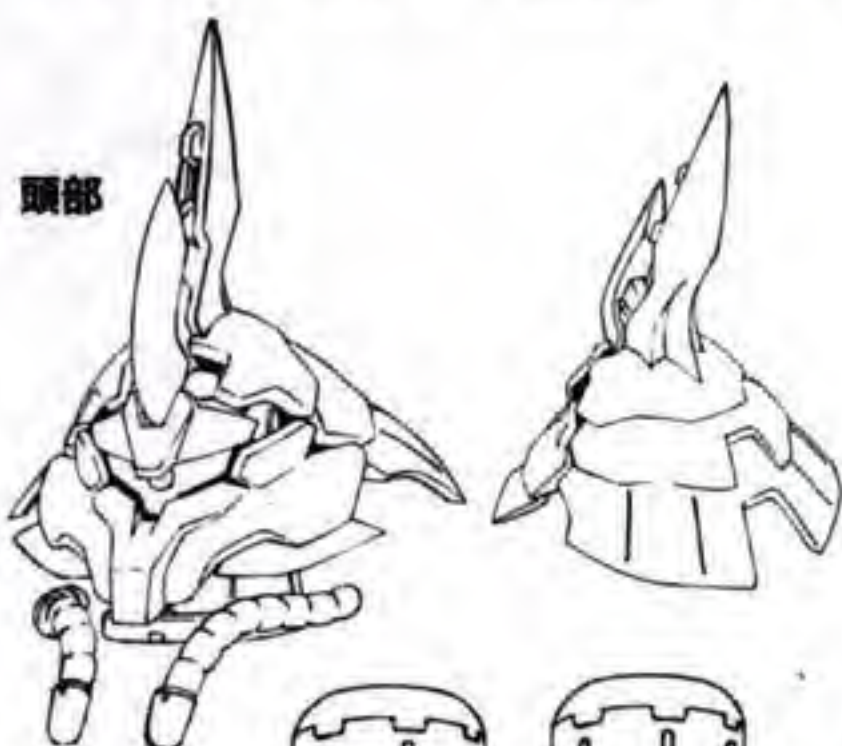


NZ-666

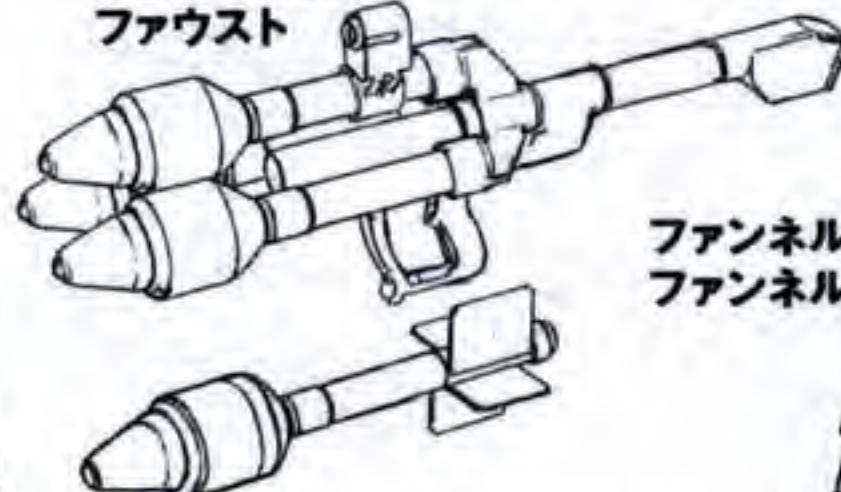
クシャトリヤ・リペアード

クシャトリヤ・ベッセルングにさらなる改良を加えた機体。フレーム状態だった左肩のバインダーにも装甲が装着され、対NT-D用の切り札でもある、ファンネルミサイル用コンテナとして使った。左腕にはユニコーンガンダム用のハイパー・ビーム・ジャベリンを取り付けるなど、武装面も強化されている。『UC』ep 7でバンシィ・ノルンと死闘を繰り広げた。

頭部



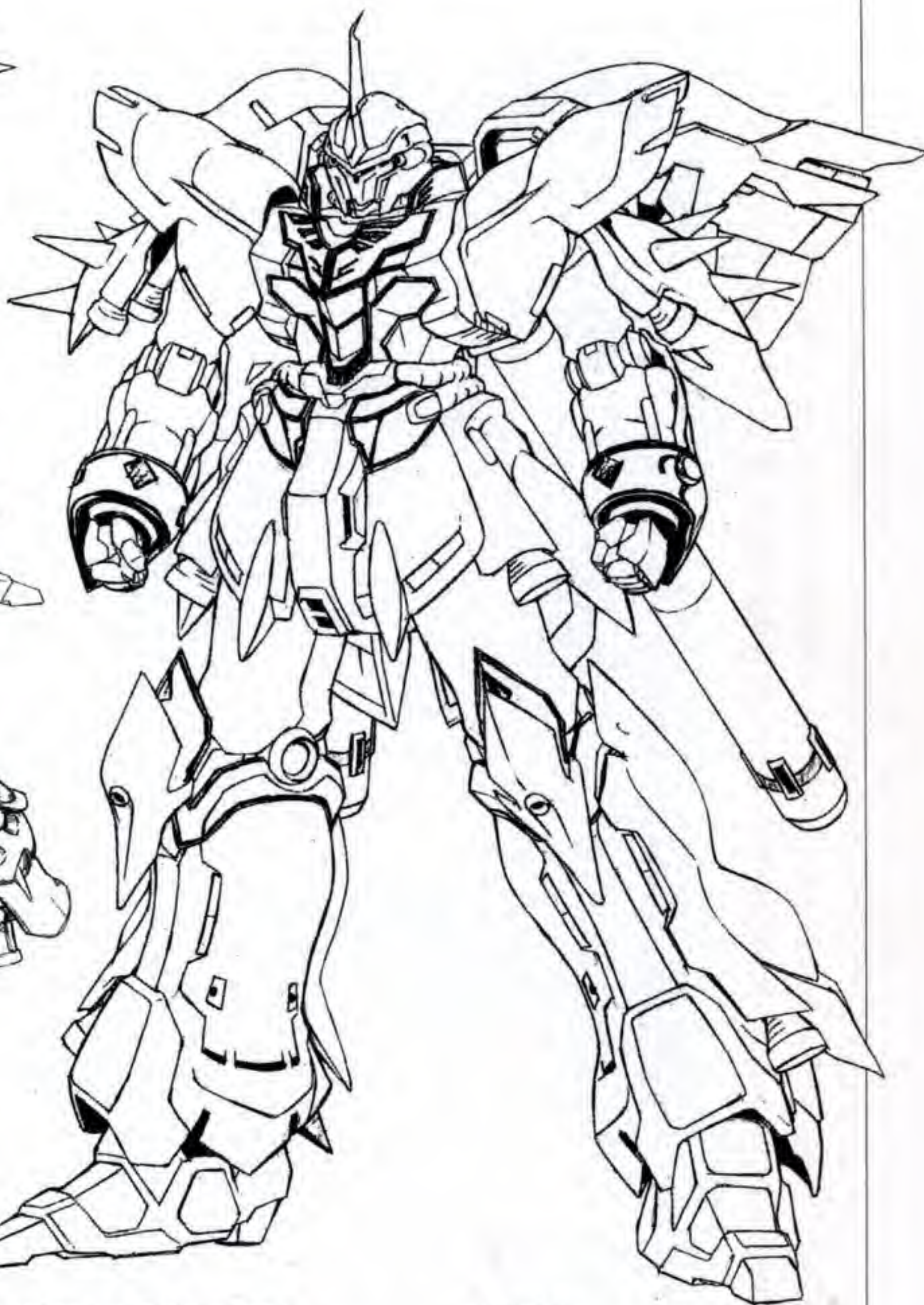
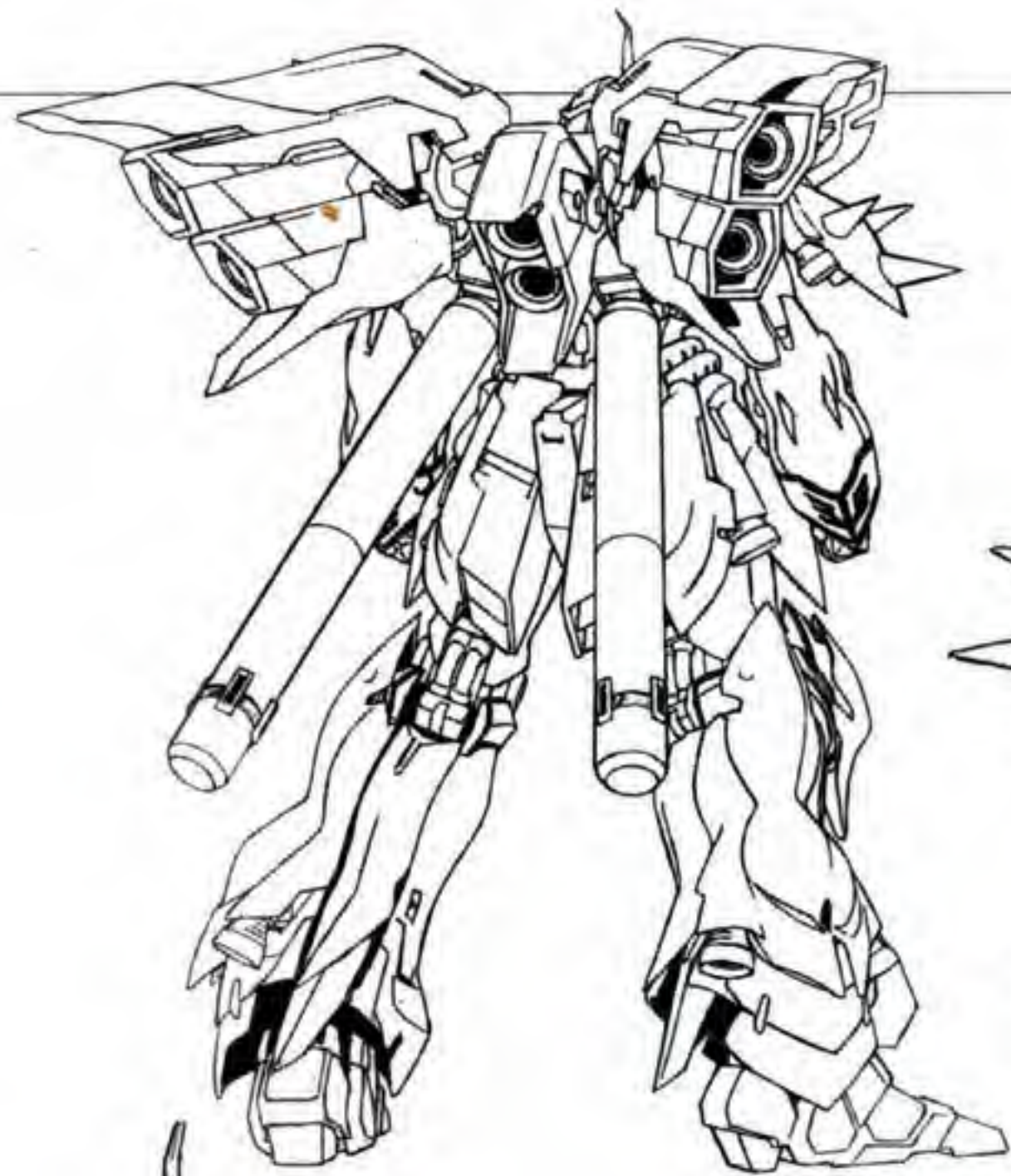
3連シュツルム・ファウスト



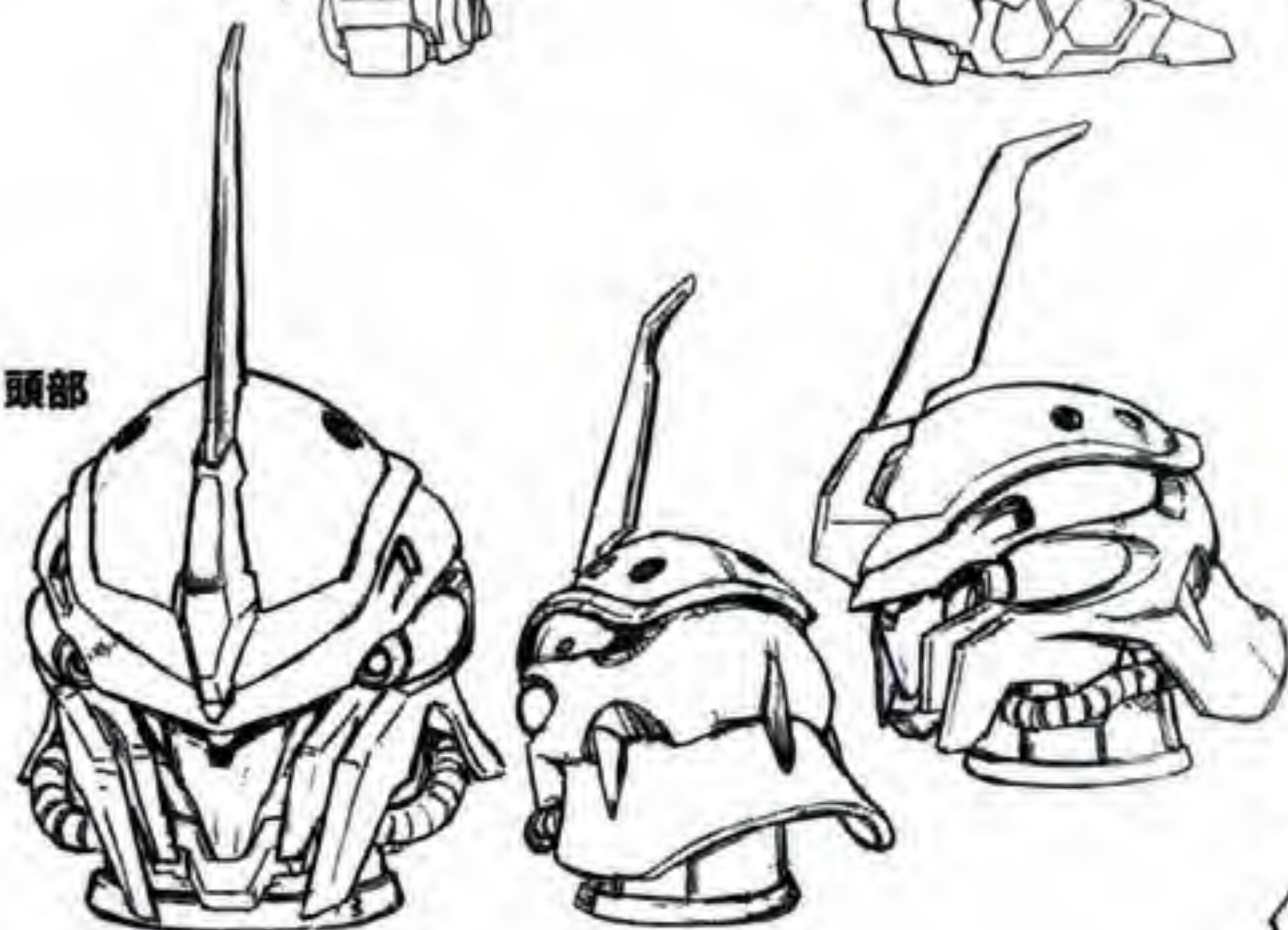
ファンネルミサイル
ファンネルコンテナ



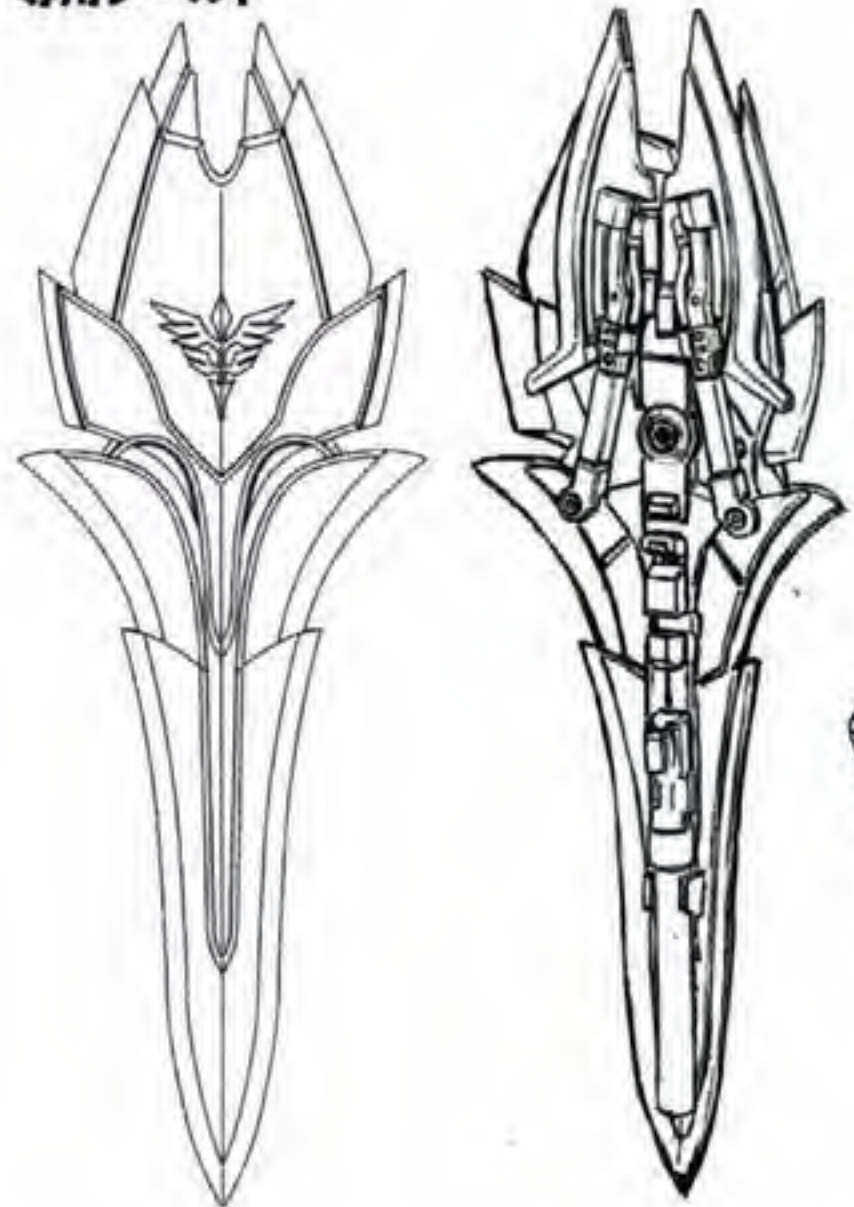
↑⇒3連シュツルム・ファウストは、これまで火器類を携行しなかった本機初となる携行火器。通常のファンネル搭載部にはカバーが施され、ファンネルミサイルはグレネードランチャーの弾頭などを流用。



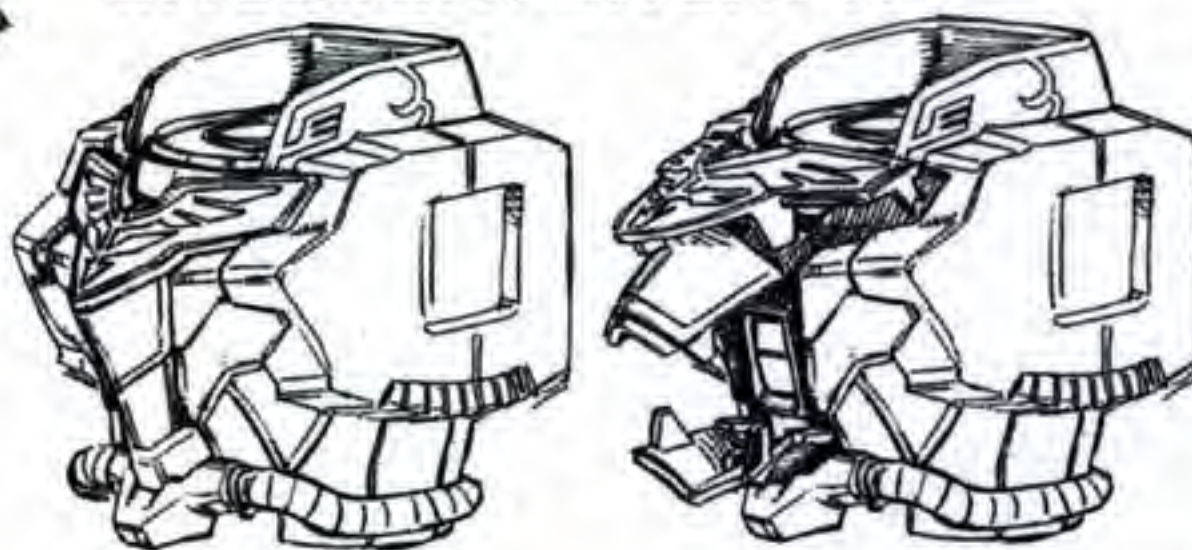
頭部



専用シールド



コックピットブロック / コックピットハッチ

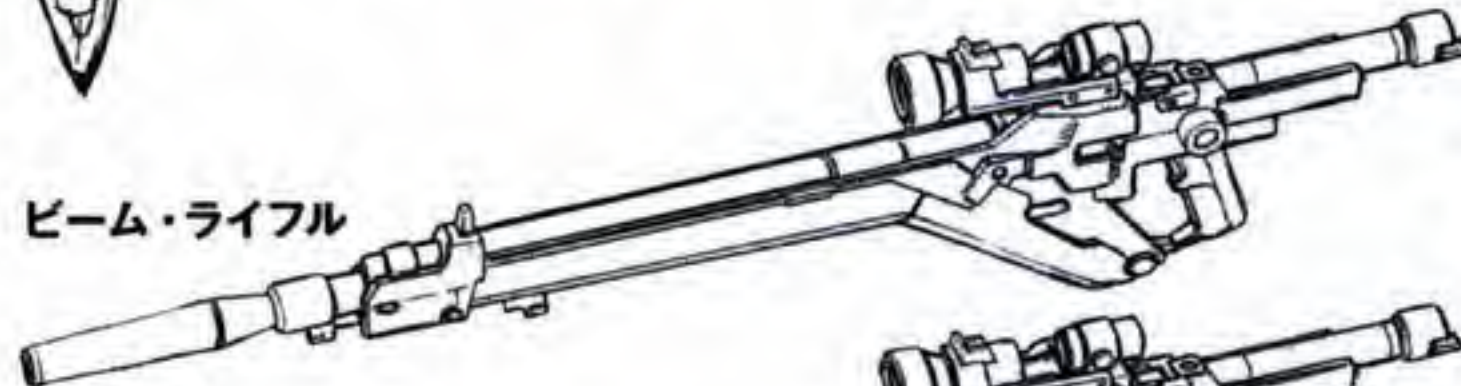


MSN-06S

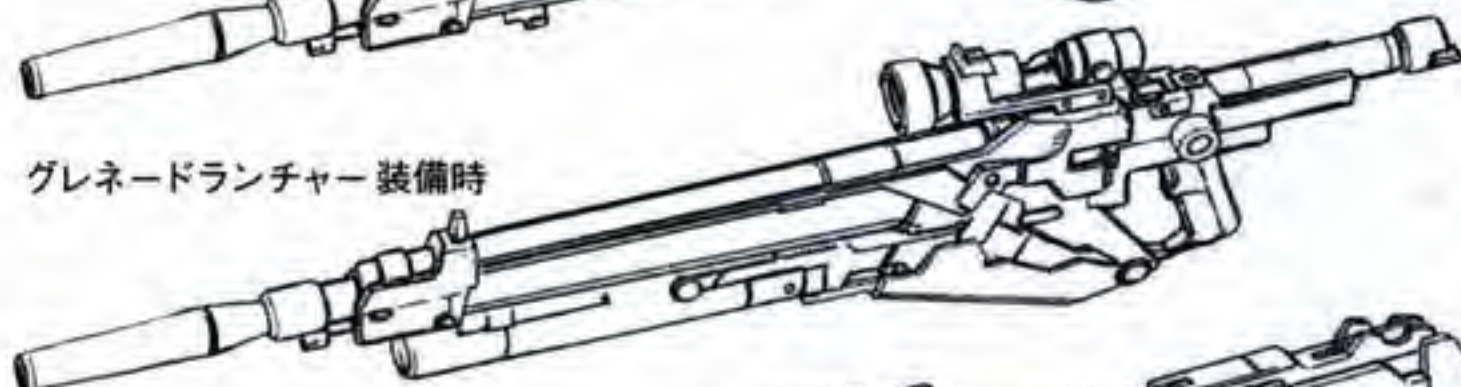
シナンジュ

シャア・アズナブルの再来といわれる、『袖付き』のフル・フロンタル専用機。もともとは地球連邦軍の「UC計画」で開発された試作機で、サイコフレームの実装実験用の機体だった。まさにユニコーンガンダムの兄弟機。後に『袖付き』により強奪され、同組織により改修が施された。パイロットの優れた操縦技術と相まって高い機動性を誇る。

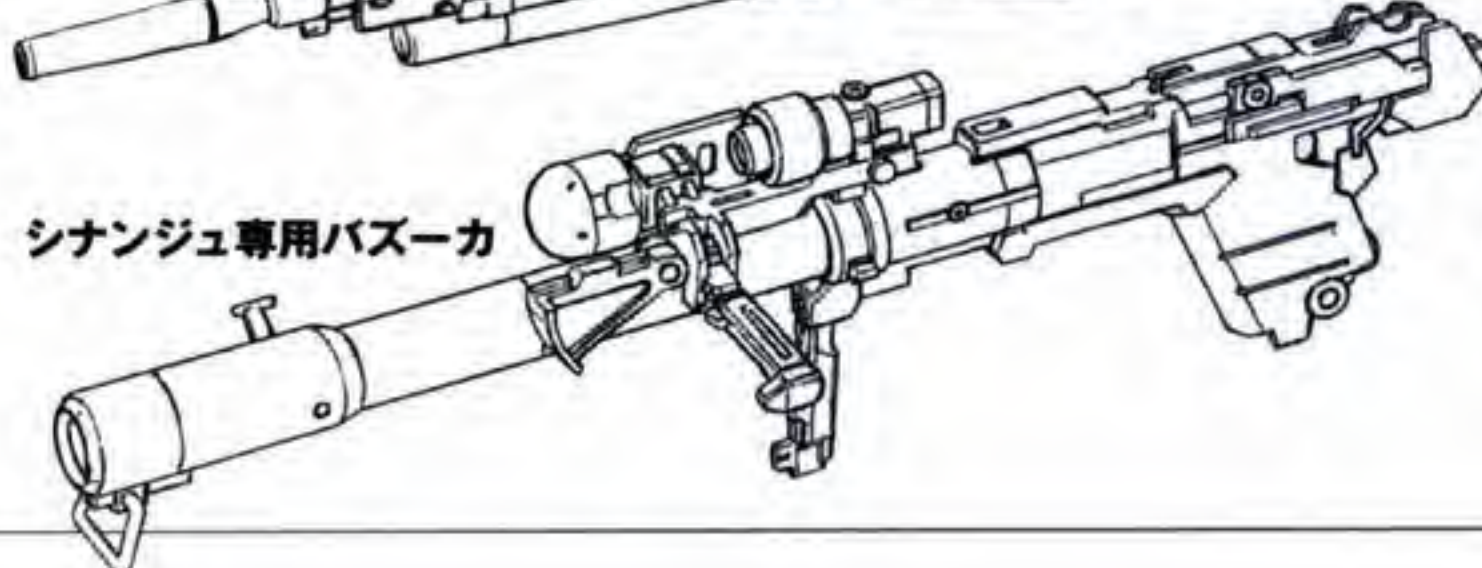
ビーム・ライフル



グレネードランチャー 装備時



シナンジュ専用バズーカ



足裏



ビーム・サーベル



NZ-999

ネオ・ジオング

シナンジュをコアユニットにする全高116mにもなる巨大MA。機体にはフィールドジェネレーターや大口径メガ粒子砲を装備。最大の特徴は、コアユニットであるシナンジュのサイコ・フレームと共鳴して疑似サイコフィールドを発生させるサイコシャード。また、アーム・ユニット先端にあるファンネル・ビットで、敵のMSをハッキングして操作することも可能。

ファンネル・ビット

ファンネル・ビット先端

←→巨体の半分はプロペラントタンクという機体構成は、かつてのネオ・ジオンのα・アジールに通じる。またタンクを外した姿は、ジオン公国軍のジオングを想起させる。右図は左側部分をオミットした状態。

YAMS-132

ローゼン・ズール

ギラ・ズールの派生機だが、コンセプトはアクシズ（ネオ・ジオン）で開発されたハンマ・ハンマのものを継承、昇華させた試作MS。準サイコミュ兵装を装備し、対ニュータイプ用のサイコ・ジャマーといった新兵器を搭載。ただ、覚醒したユニコーンガンダムの前では通用しなかった。搭乗者は「袖付き」の親衛隊長である、アンジェロ・ザウバー。

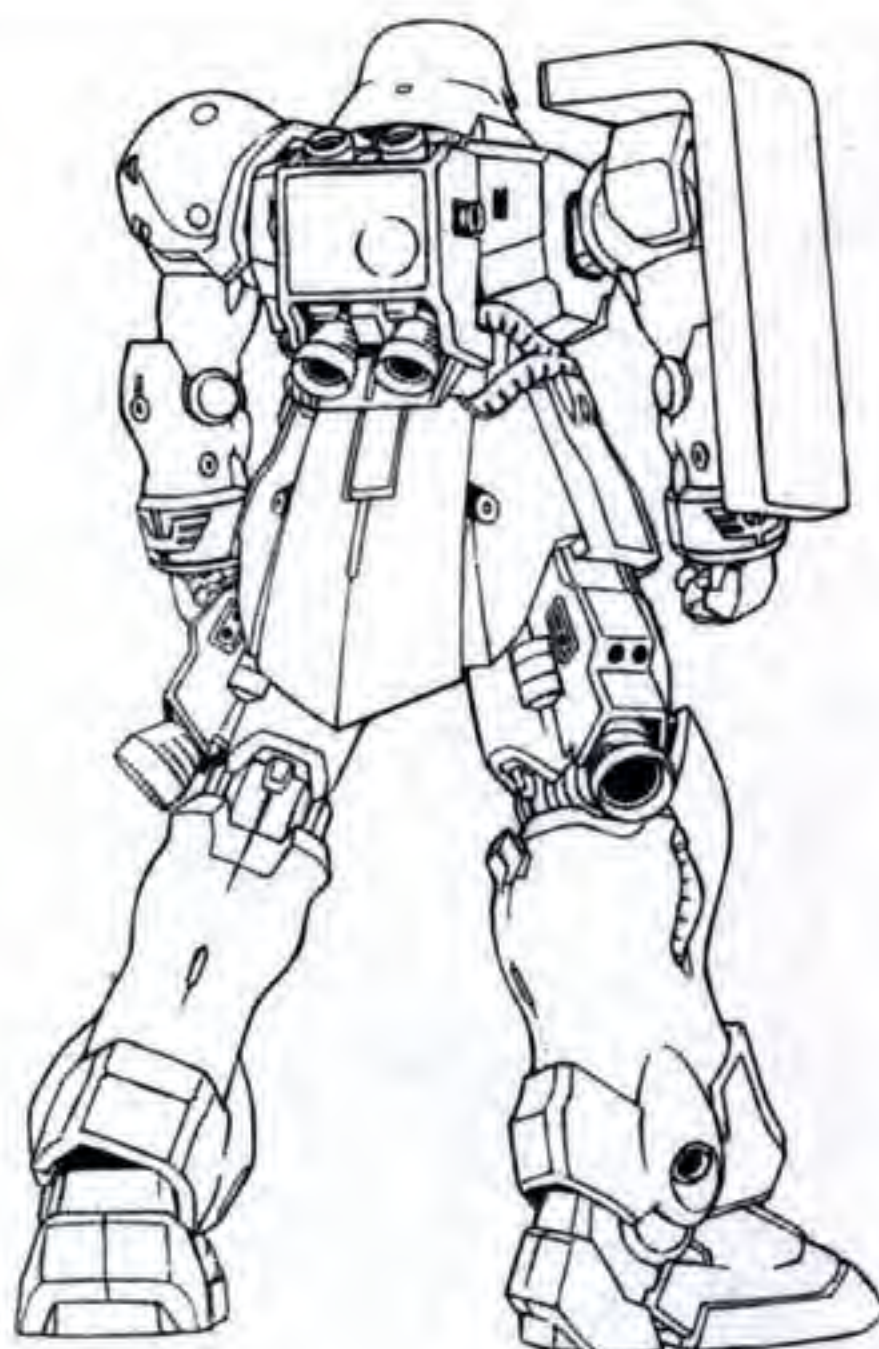
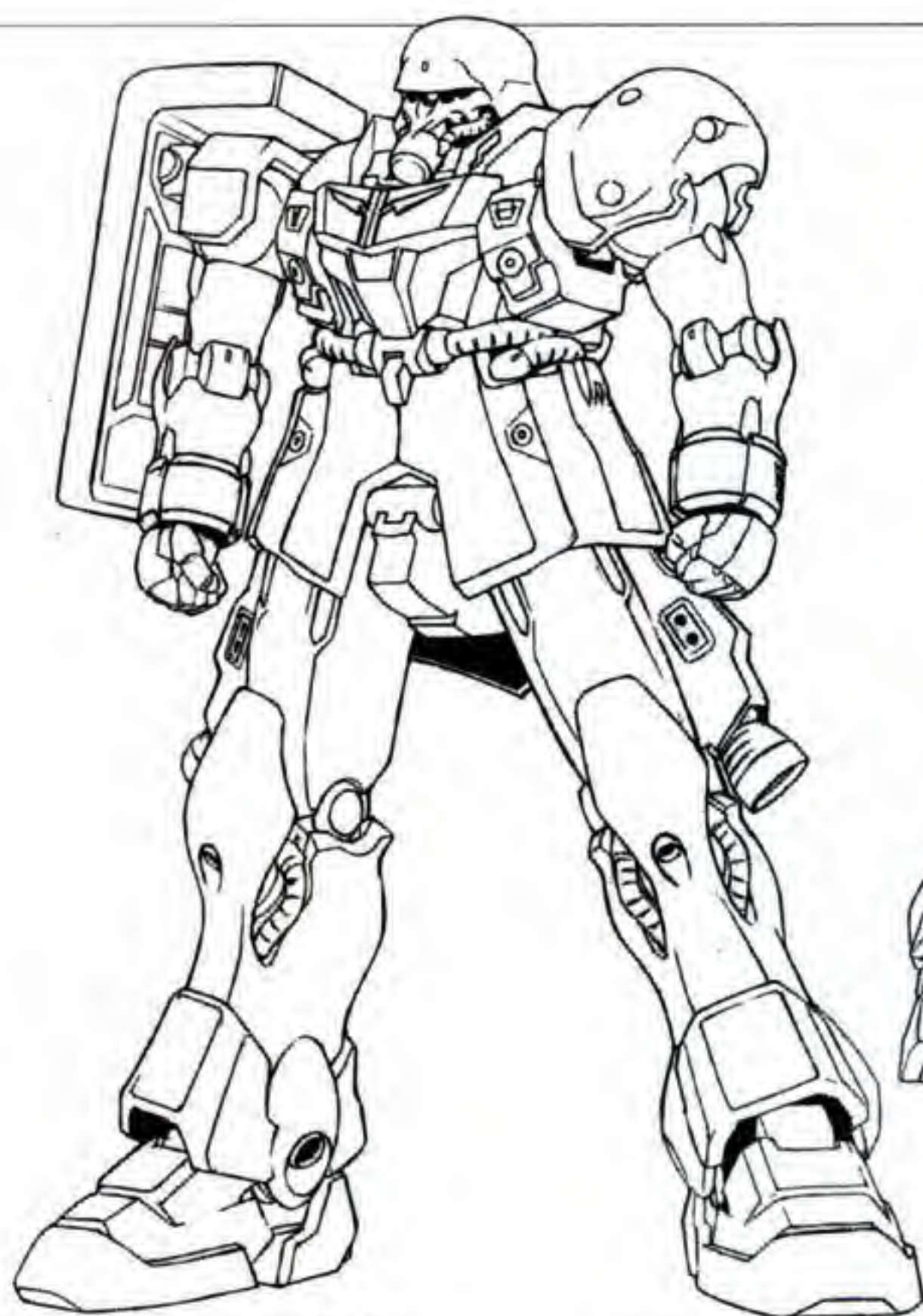
↓「UC」ep 6終盤で右腕を破壊されたローゼン・ズールは、ep 7では、3連装メガ粒子砲を内蔵した、専用シールドを右腕に装着して登場する。いかにも急場の措置といった感じである。

有線式クロー・アーム

専用シールド

サイコ・ジャマー

←背中のファンネルコンテナからローズビットを射出して、サイコ・ジャマーのフィールドを形成する。



ランゲ・ブルーノ砲装備時

AMS-129

ギラ・ズール

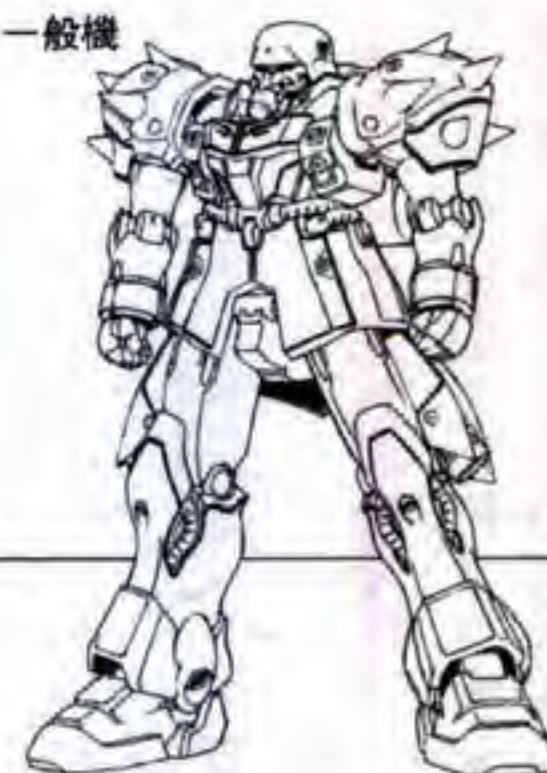
『袖付き』が運用するギラ・ドーガの後継機。開発はアナハイム・エレクトロニクス社が行ったとされ、親衛隊機などの派生機もある。ただし、最新鋭の機体だが配備数は多くはない。

ギラ・ズール親衛隊機

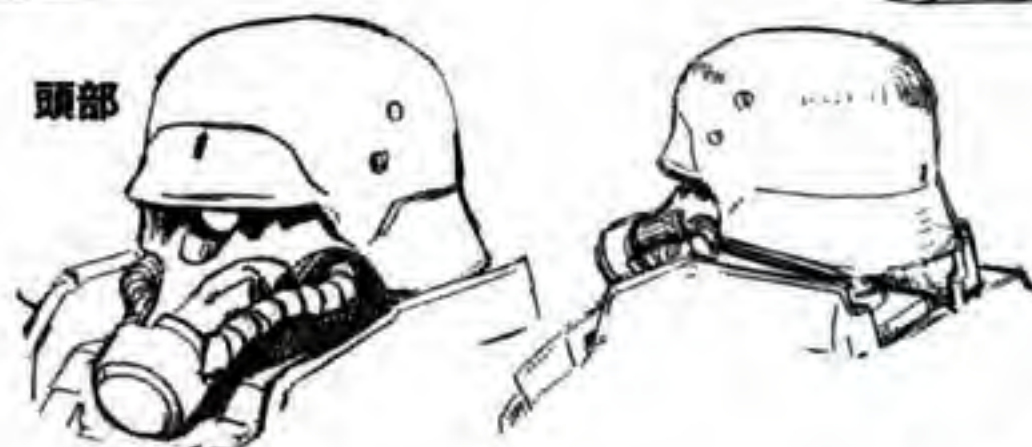
アンジェロ・ザウパー専用機



一般機



頭部

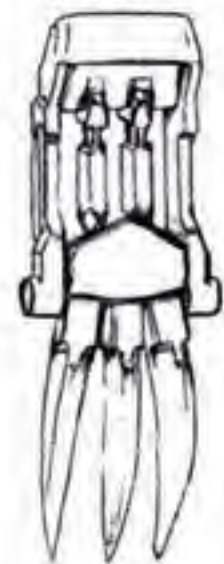


AMS-129M

ゼー・ズール

ギラ・ズールの局地戦用派生機。『袖付き』より地球圏で活動する旧ジオン軍残党に供与された。水陸両用MSとして hidro ジェット推進器やバラスト・タンク、水中用フィンなどを装備する。これらの装備を除装することで陸戦時の機動力が向上する。

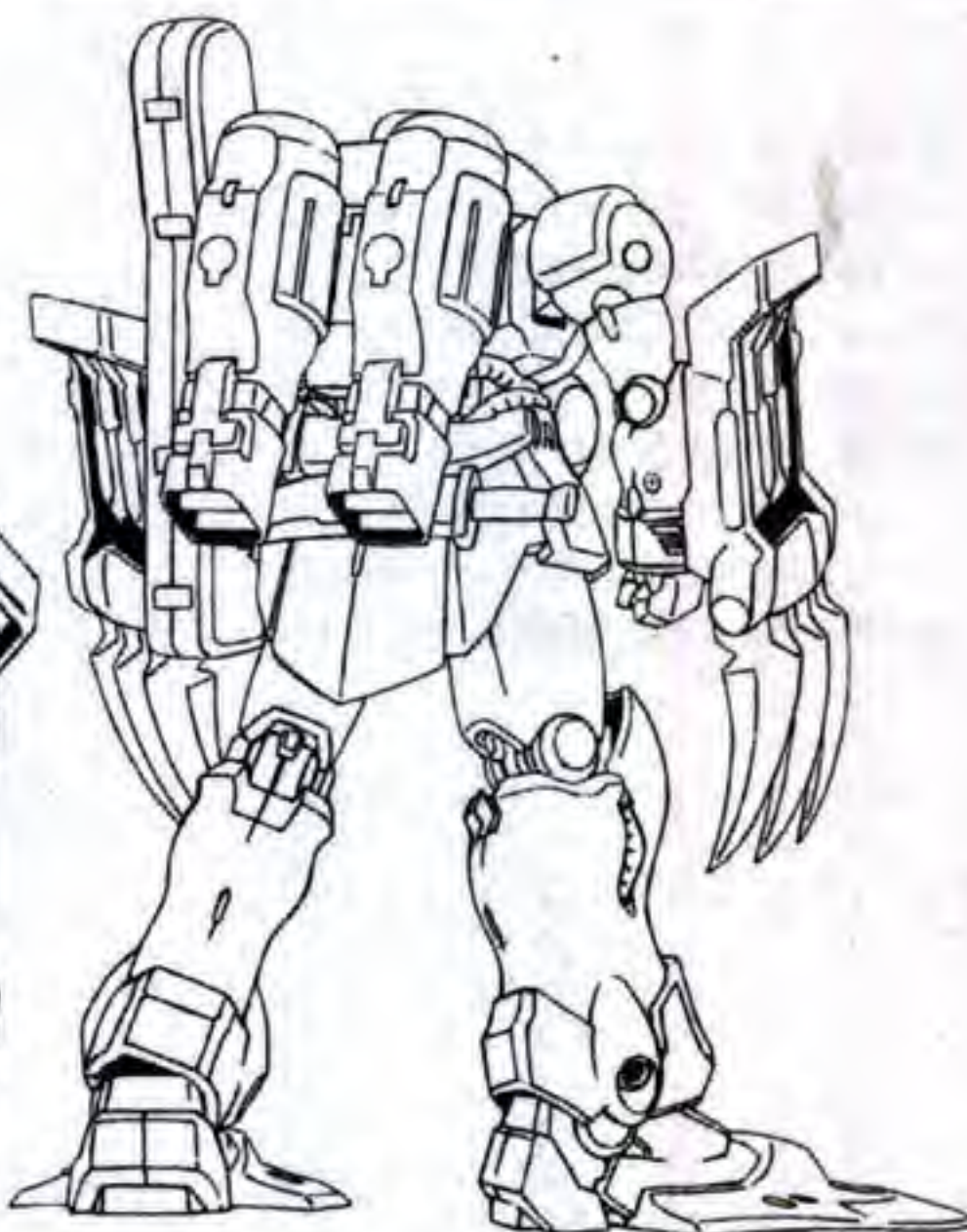
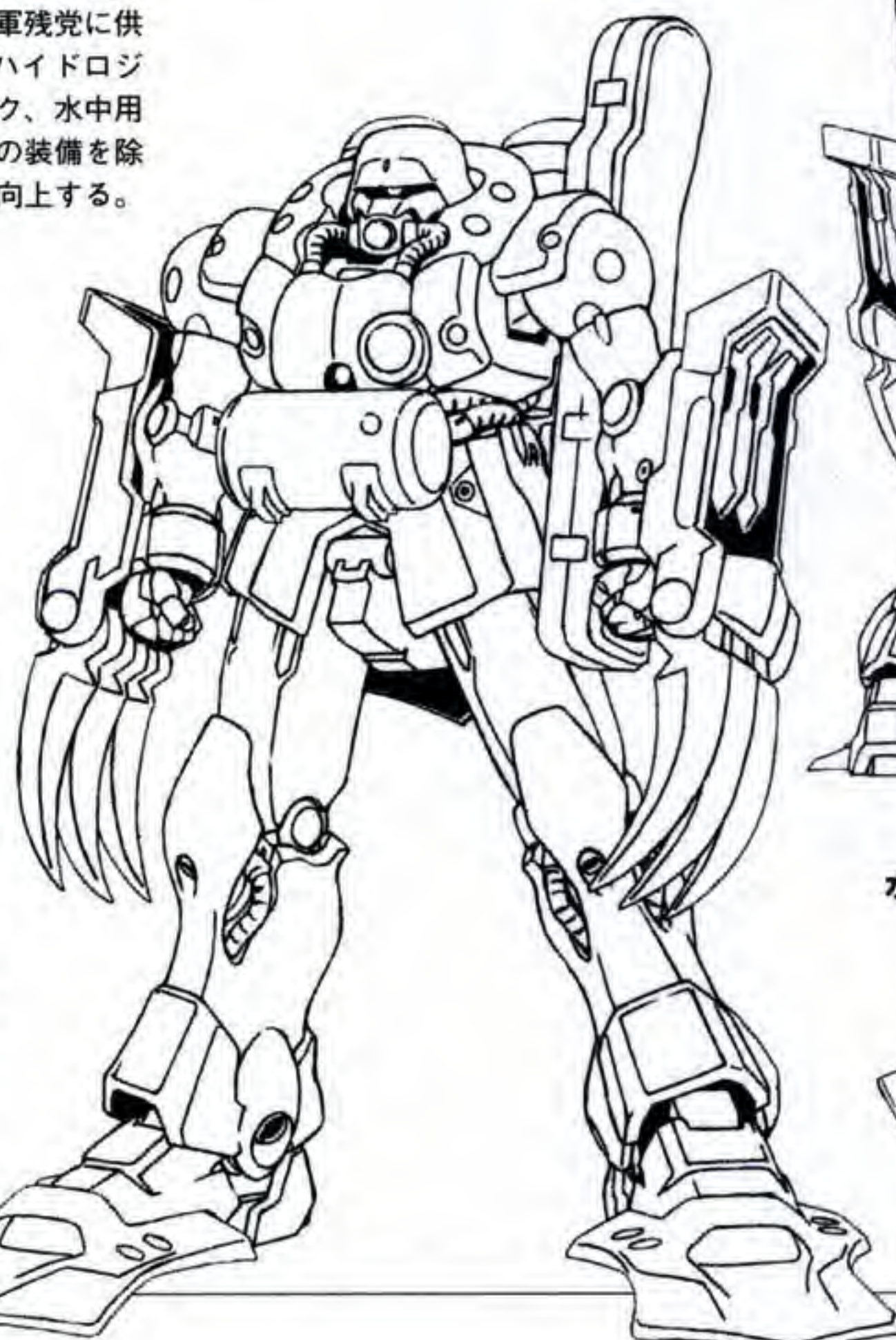
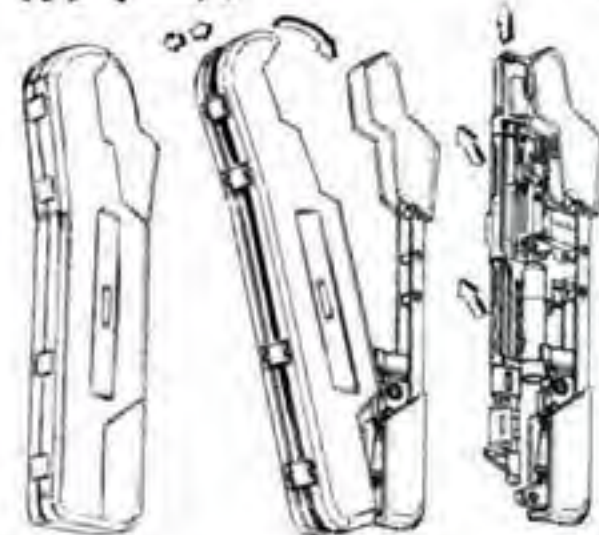
アイアン・ネイル



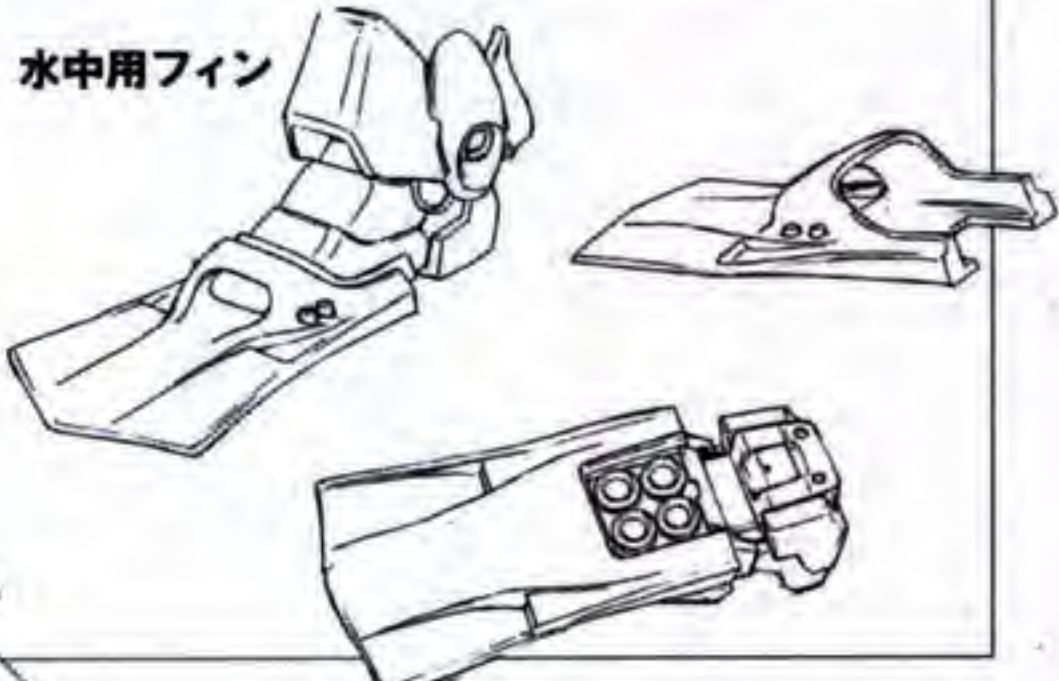
ヒート・ナイフ

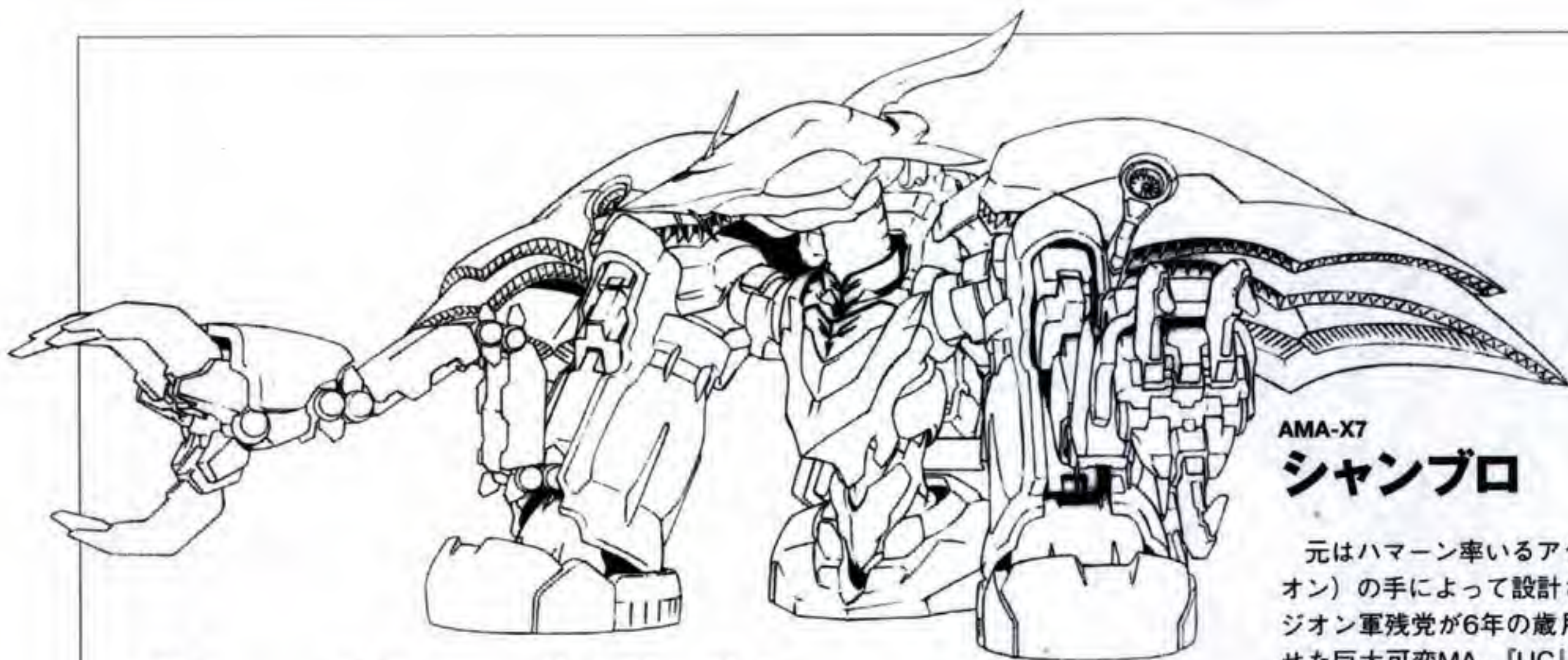


ビーム・マシンガン用ガンケース



水中用フィン



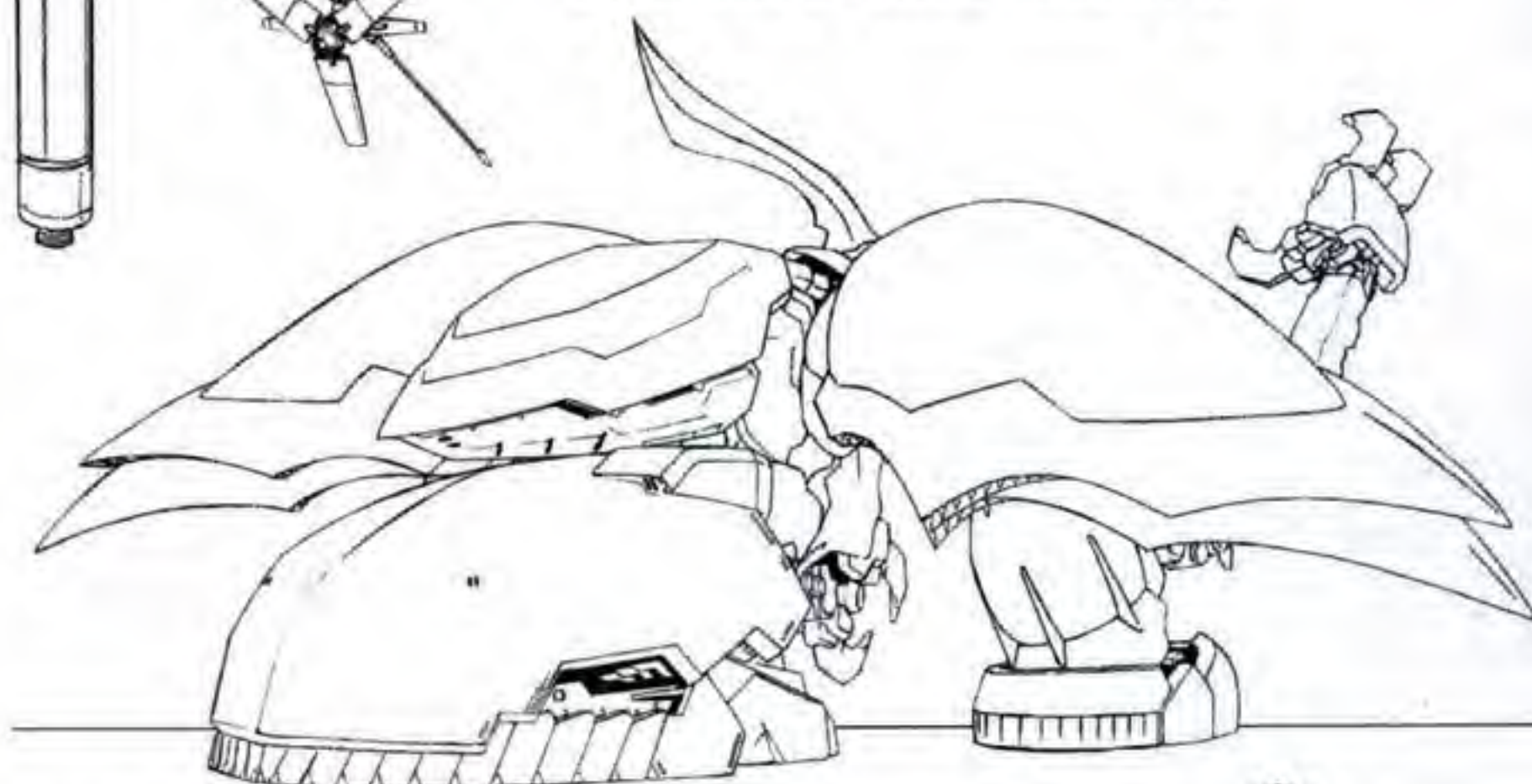
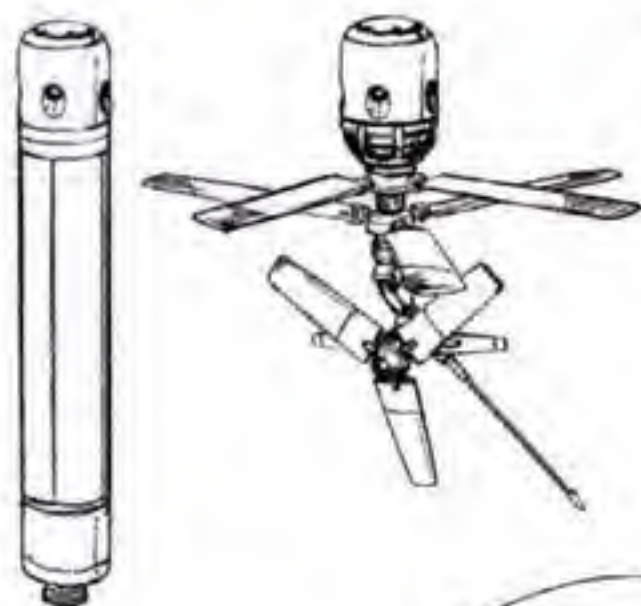


AMA-X7 シャンプロ

元はハマーン率いるアクシズ（ネオ・ジオン）の手によって設計された機体で、旧ジオン軍残党が6年の歳月をかけて完成させた巨大可変MA。「UC」ep 4にて、ダカールの街を灰燼にし、トリントン基地周辺で大暴れをした。最後はリディのデルタプラス（+ユニコーンガンダムから奪ったビーム・マグナム）に撃たれた。ちなみに映像先品ではロニ・ガーベイのみが搭乗するが、小説では彼の父（マハディ）や兄たちも同乗。

リフレクター・ビット

◀サイコ・ガンダムMk-IIが使用する兵器に似ているが、シャンプロに搭載されているタイプはプロペラによる浮遊方式。機体後部のサイロから射出され、本体から撃たれたビームを反射する。



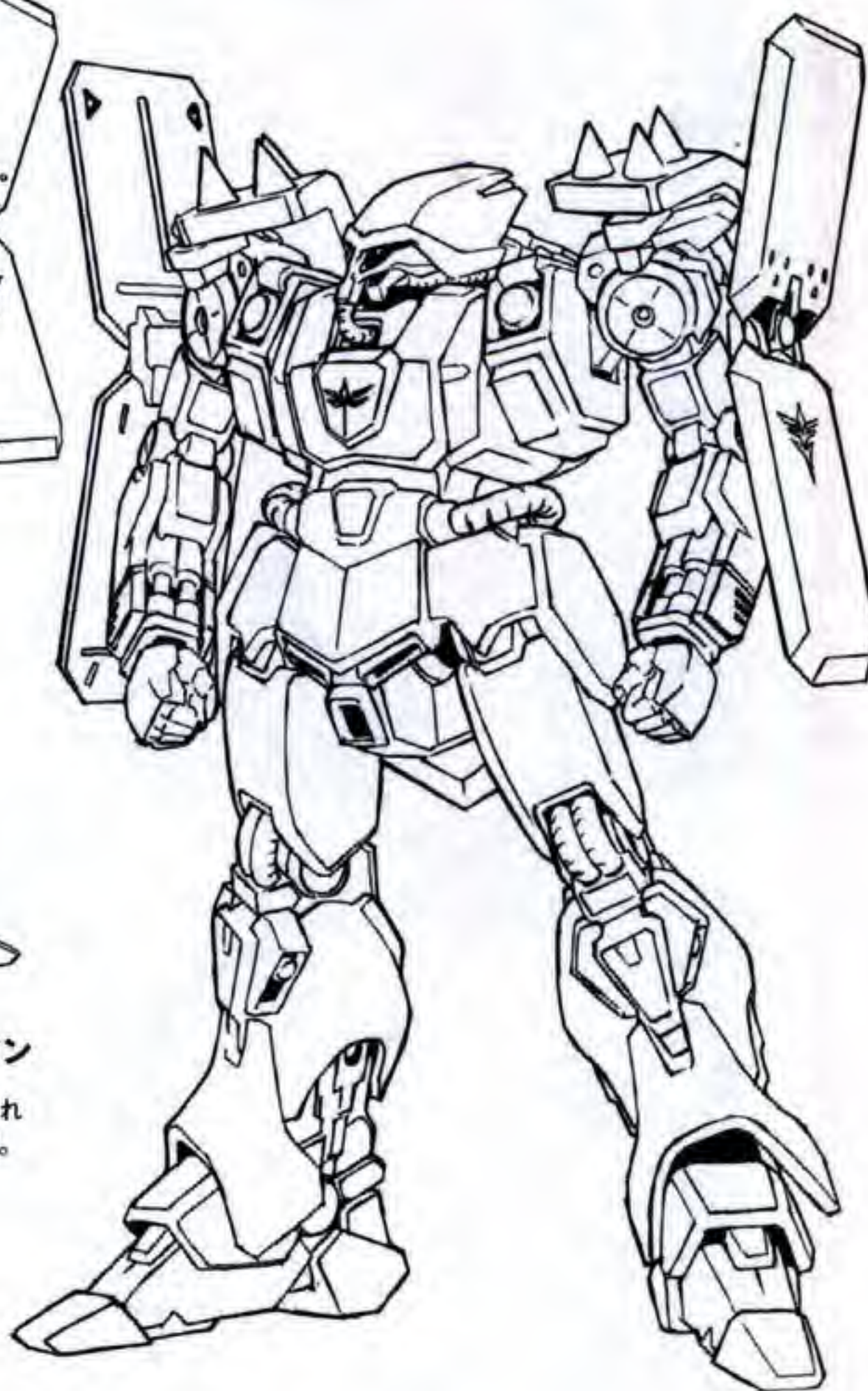
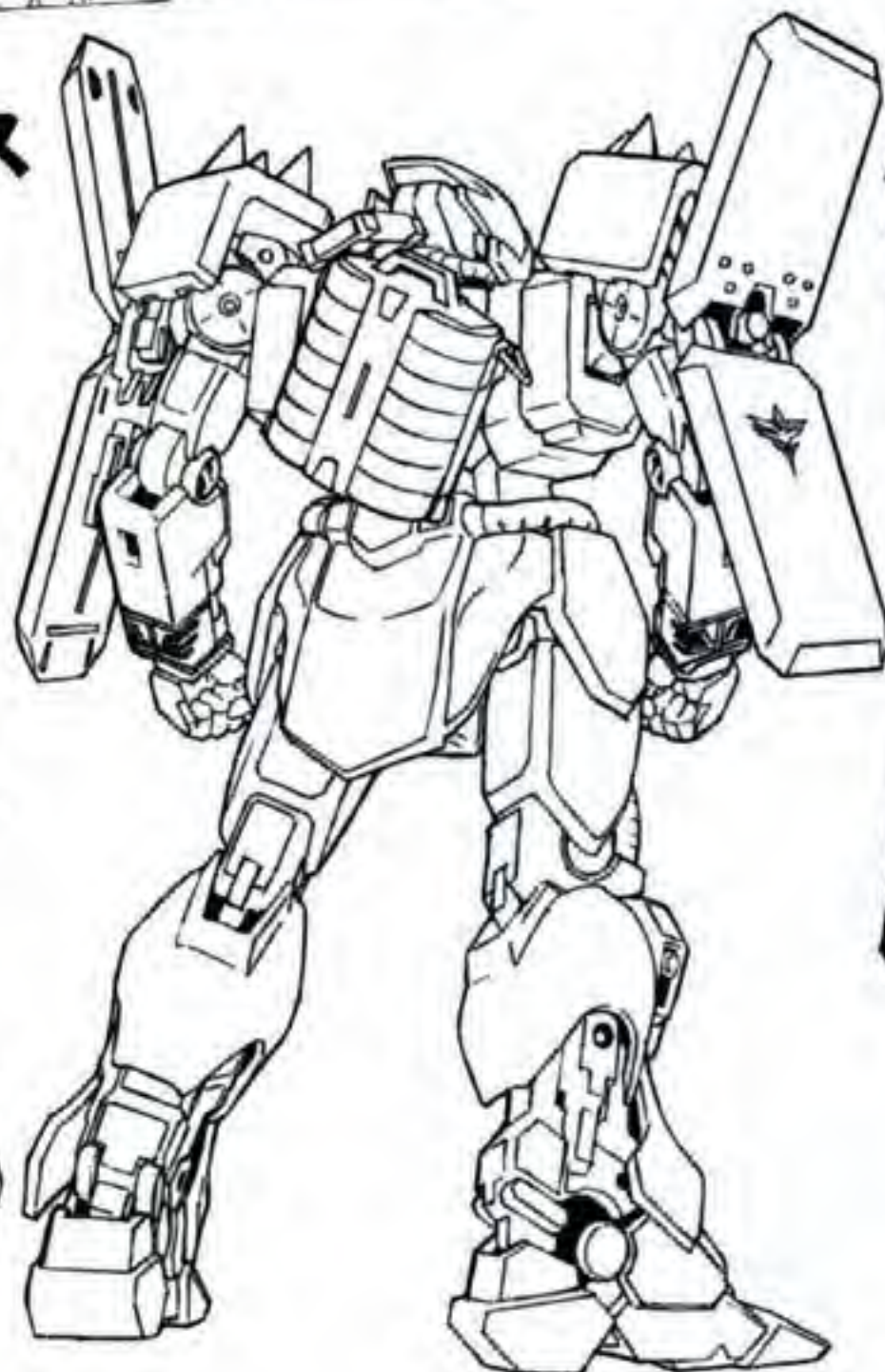
大口径メガ粒子砲口部



AMX-101E

シュツルム・ガルス 「袖付き」仕様

ガルスJの派生機で、拠点突破に重点を置いた強襲用MS。極限まで装甲を排除して軽量化を図り、推進ユニットさえも外部に頼る徹底ぶり、MSとしては極端な仕様といえる。主兵装はスパイクシールドだけだが戦闘力が高い。「US」ep 7で、ネエル・アーガマをズサと共に強襲し窮地に陥れた。

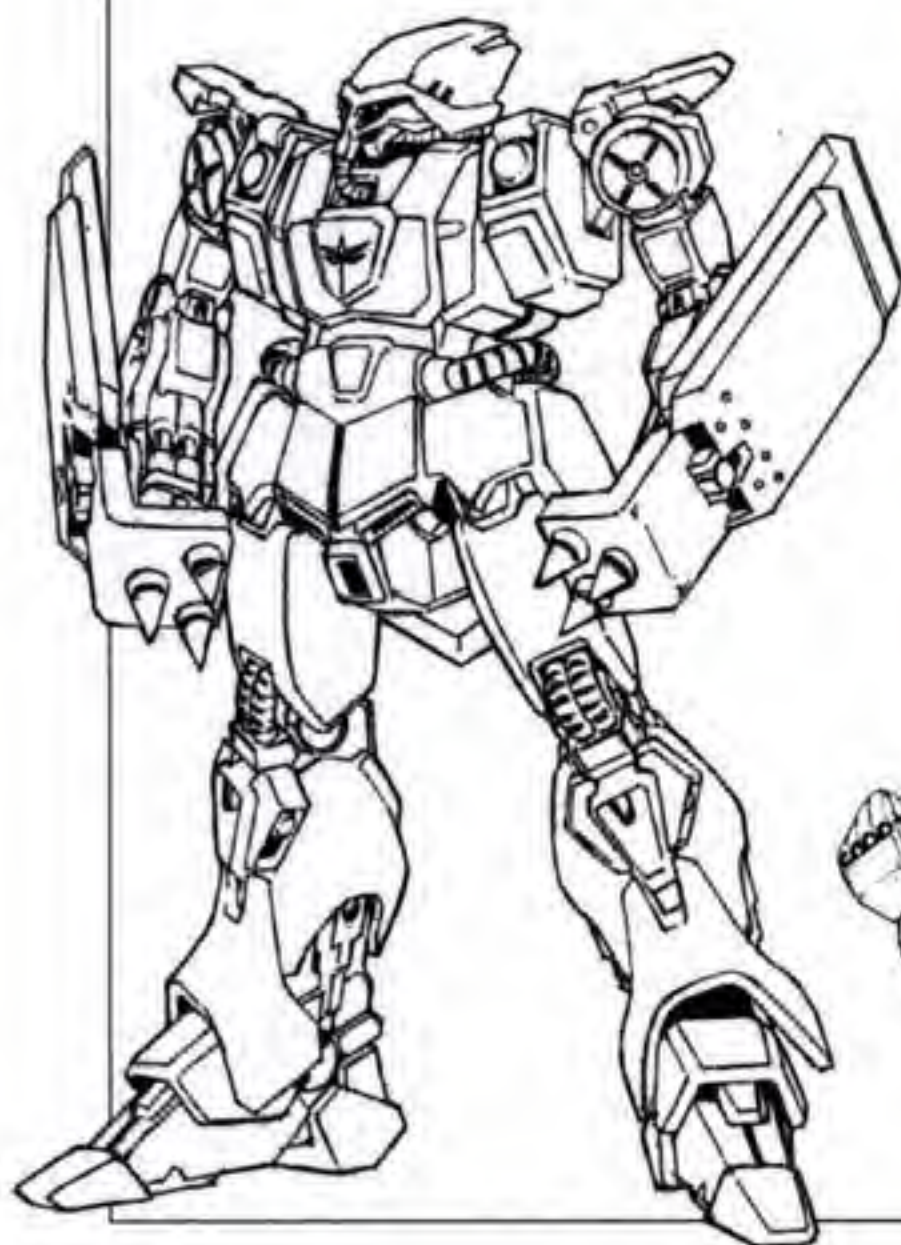


チェーン・マイン

◀背部に搭載されている吸着地雷。

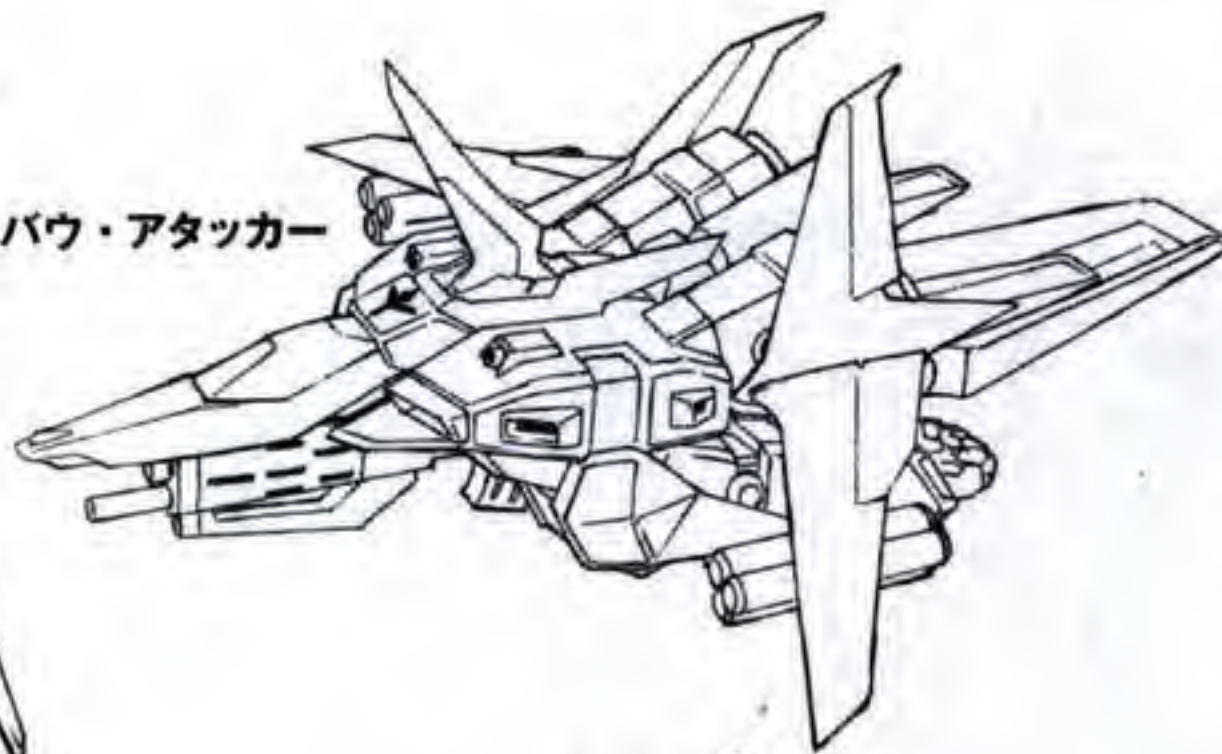


スパイクシールド





パウ・アタッカー



パウ・ナッター



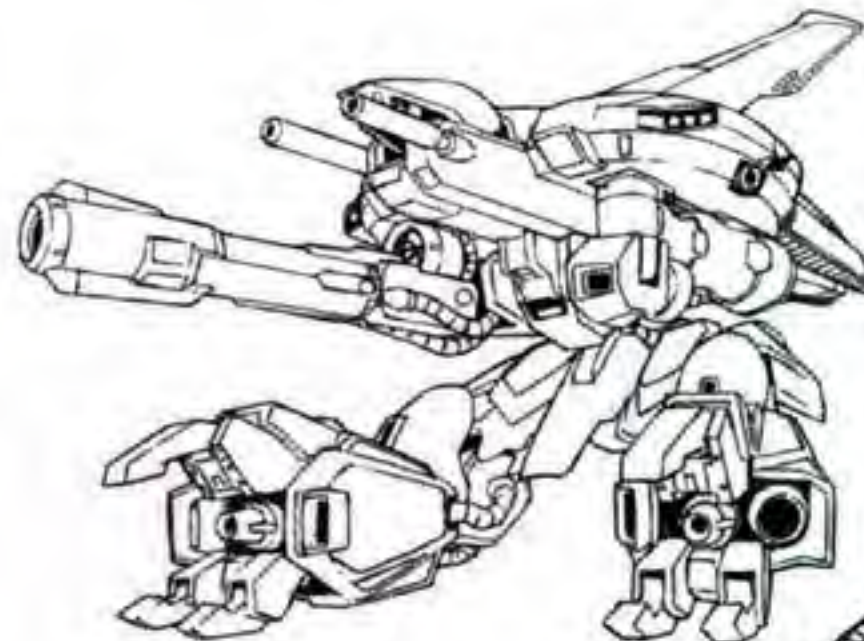
AMX-107
パウ
「袖付き」仕様

元はアクシズ（ネオ・ジオン）の合体可変MS。上半身、下半身に分離してそれぞれ戦闘機形態に変形。ただし、オリジナルと異なりパウ・ナッターは有人仕様である。「UC」ep 7のゲストMSの1機。



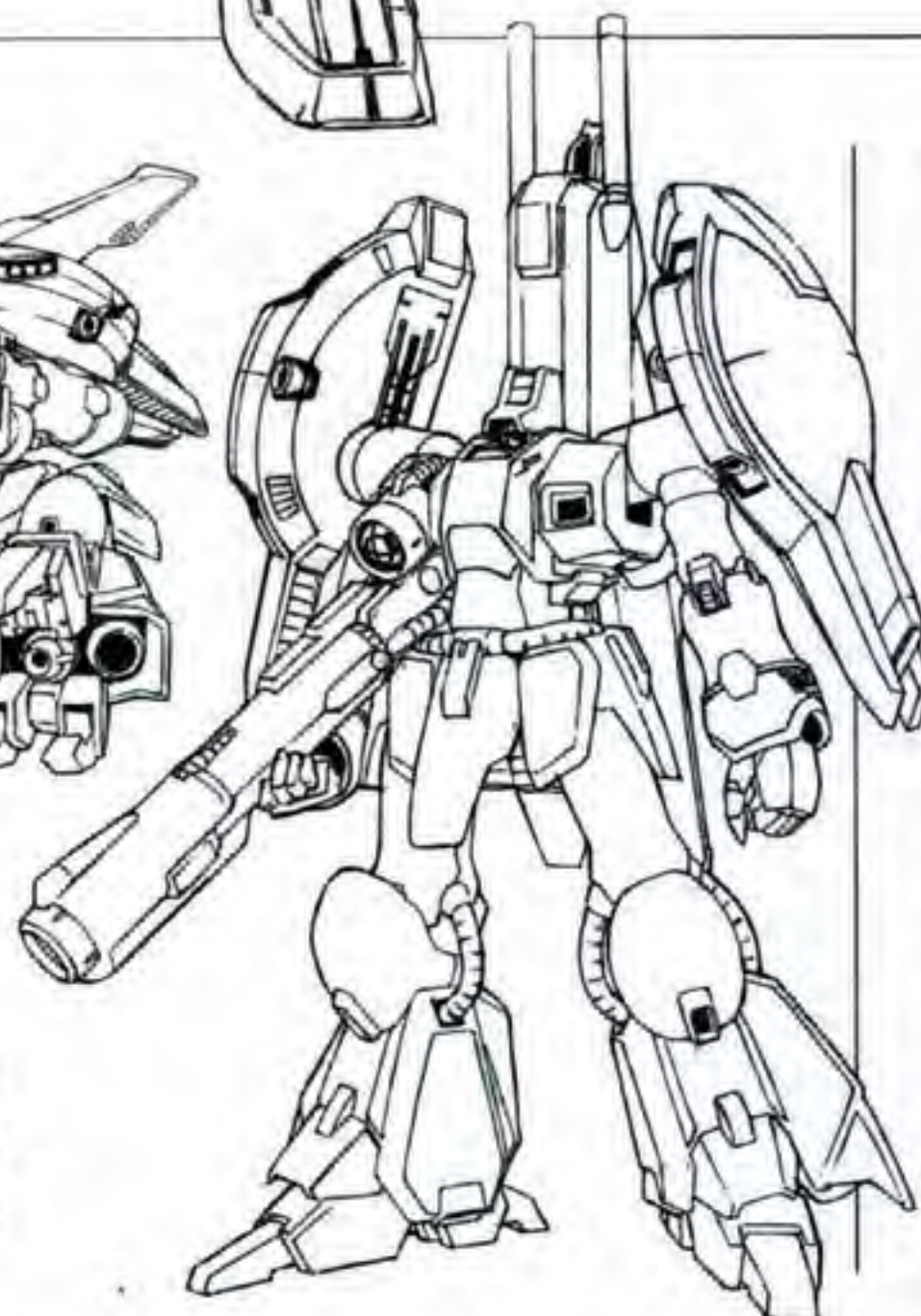
ビーム・マシンガン

≪携行火器はオリジナルではなく、ギラ・ドーガタイプのビーム・マシンガン。≫



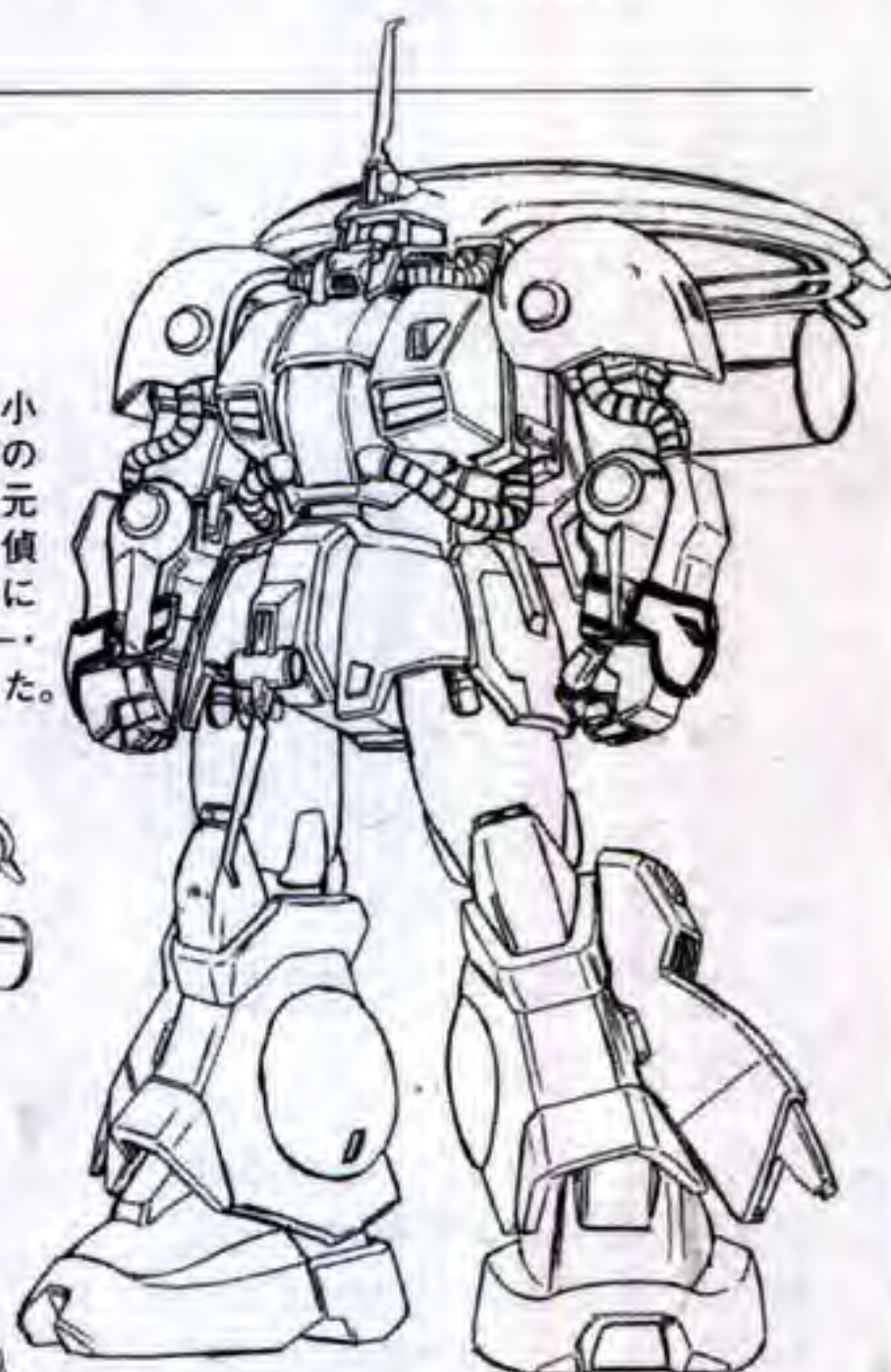
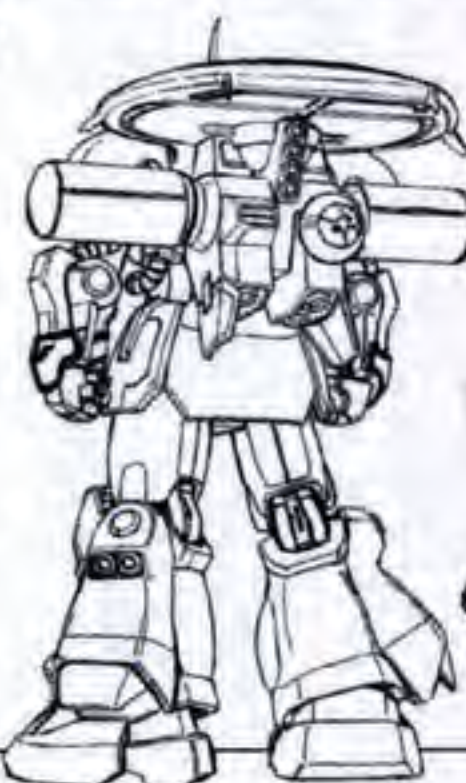
AMX-006
ガザD
「袖付き」仕様

アクシズ（ネオ・ジオン）の可変MS。アイザック同様にep 3に登場するがエコーズ部隊の前に宇宙へと散っている。



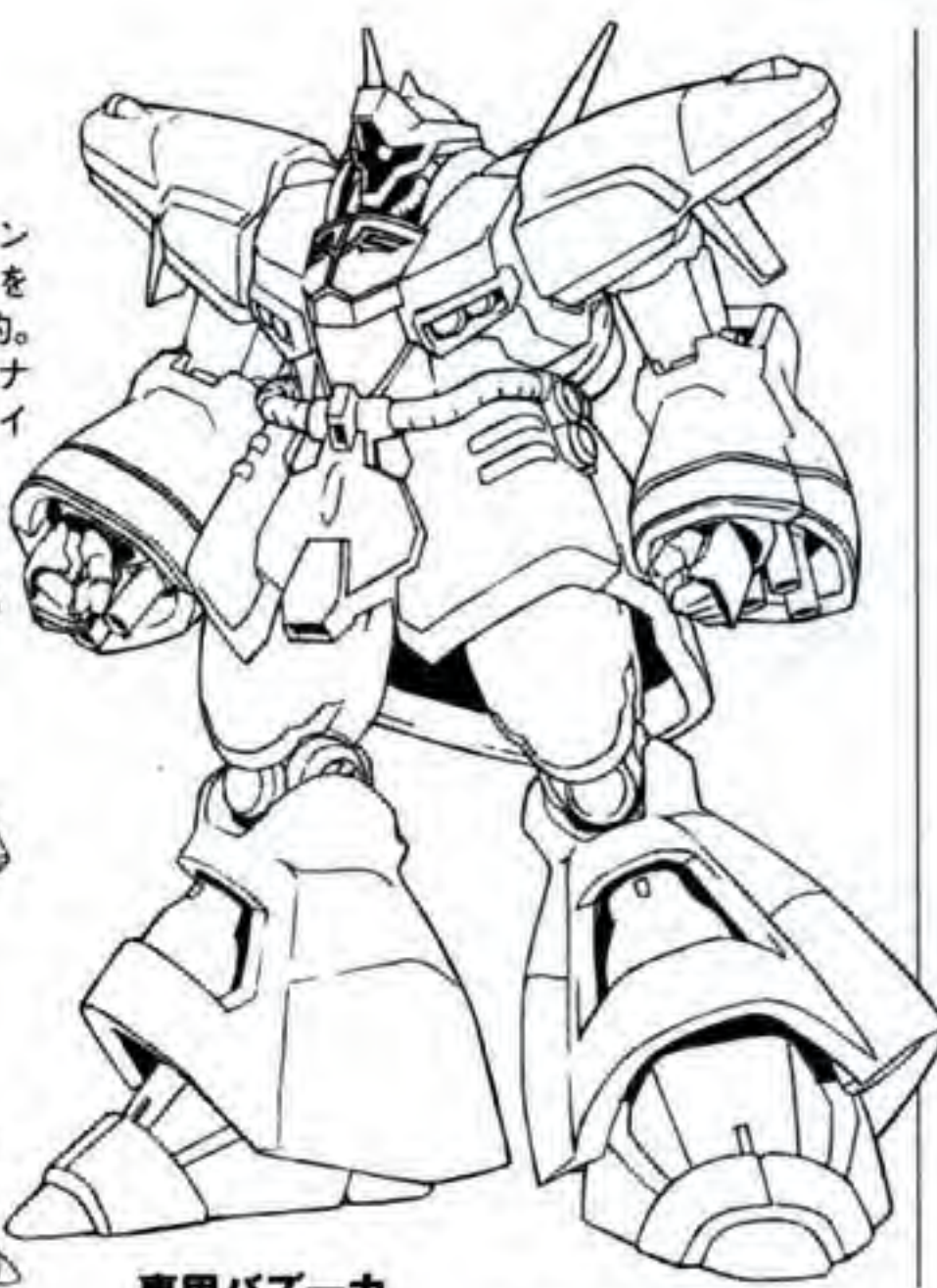
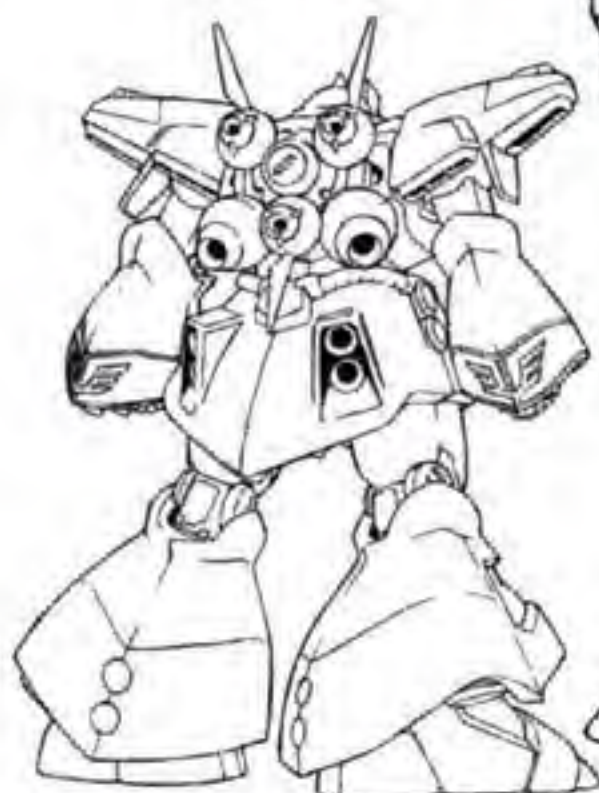
RMS-119
アイザック
「袖付き」仕様

「袖付き」の拠点である小惑星パラオで、基地防衛の哨戒任務に就いていた。元は連邦軍のハイザックの偵察タイプ。「UC」ep 3に登場しているが、ハイパー・メガ粒子砲の餌食になった。



AMX-009
ドライセン
「袖付き」仕様

「UC」ep 3でユニコーンガンダムに仕掛けてきた姿が印象的。専用バズーカの形状はシナンジュが使用しているタイプに似ている。

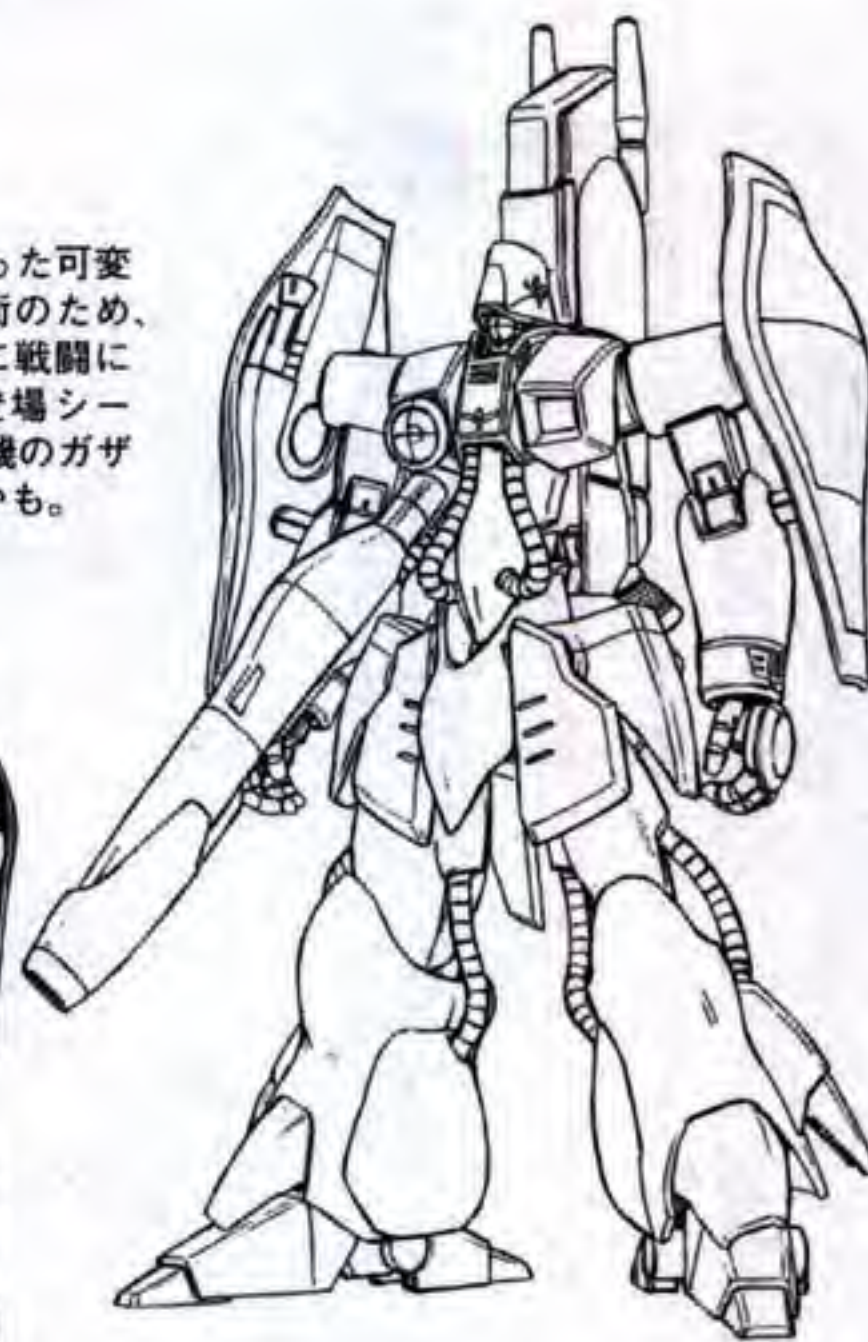
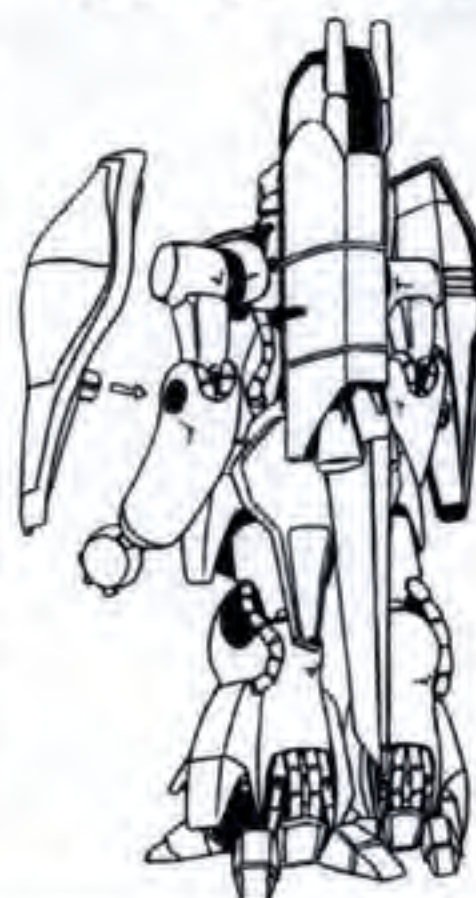


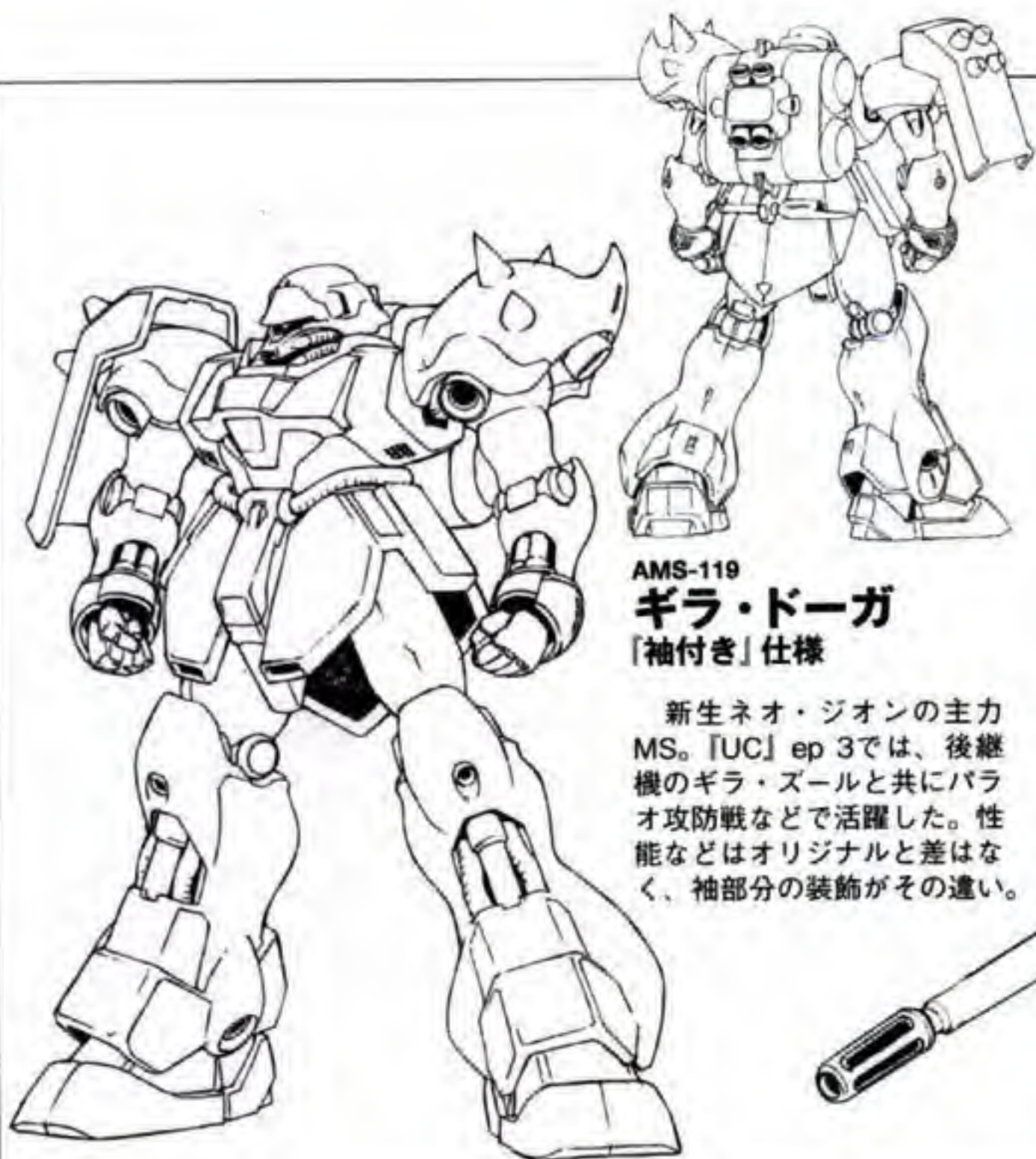
専用バズーカ



AMX-003
ガザC
「袖付き」仕様

ガザDのベースになった可変MS。やはりパラオ防衛のため、その他大勢のMSと共に戦闘に参加した。ep 3での登場シーンは一瞬のため。後継機のガザDと見間違えてしまうかも。



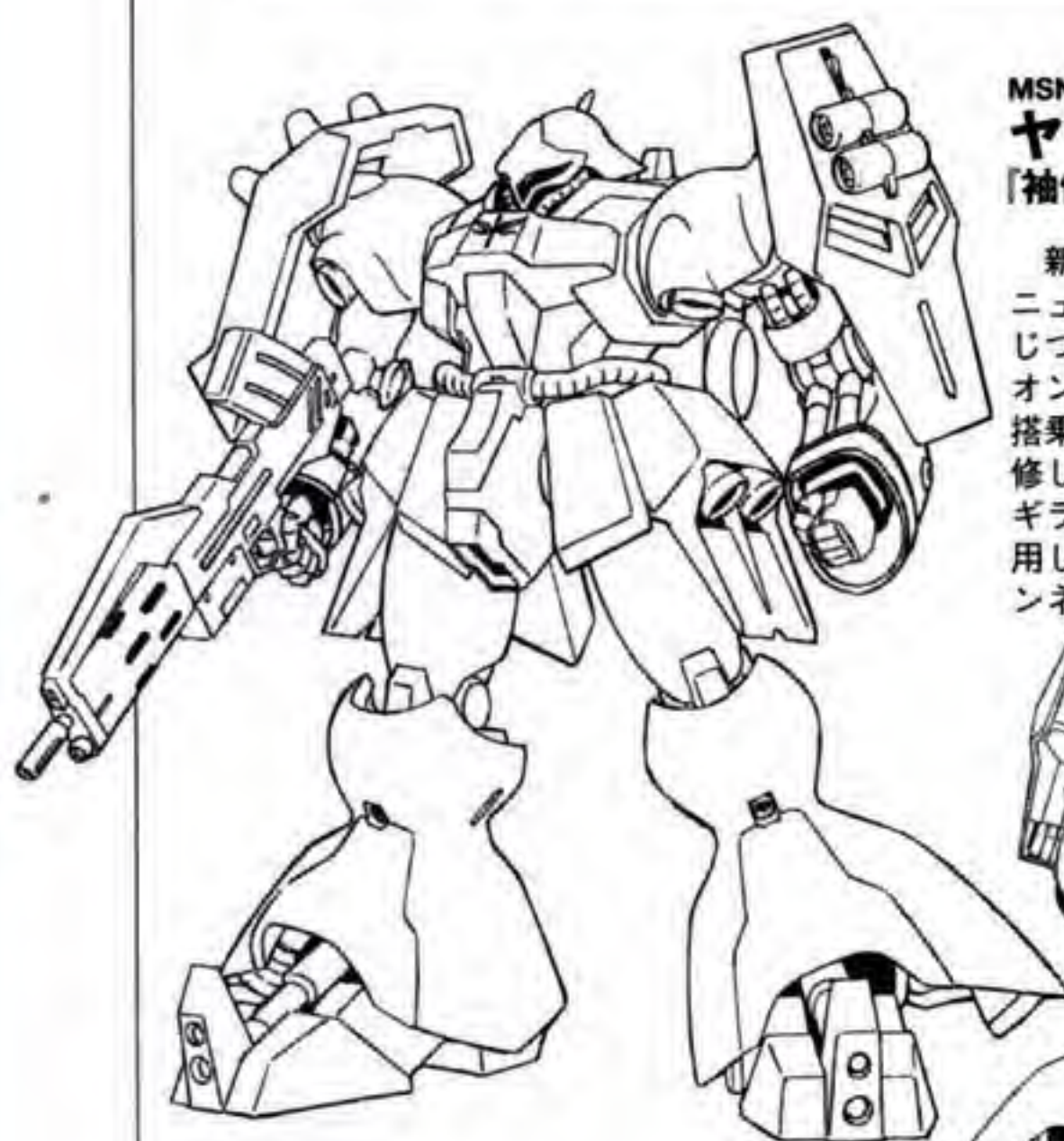
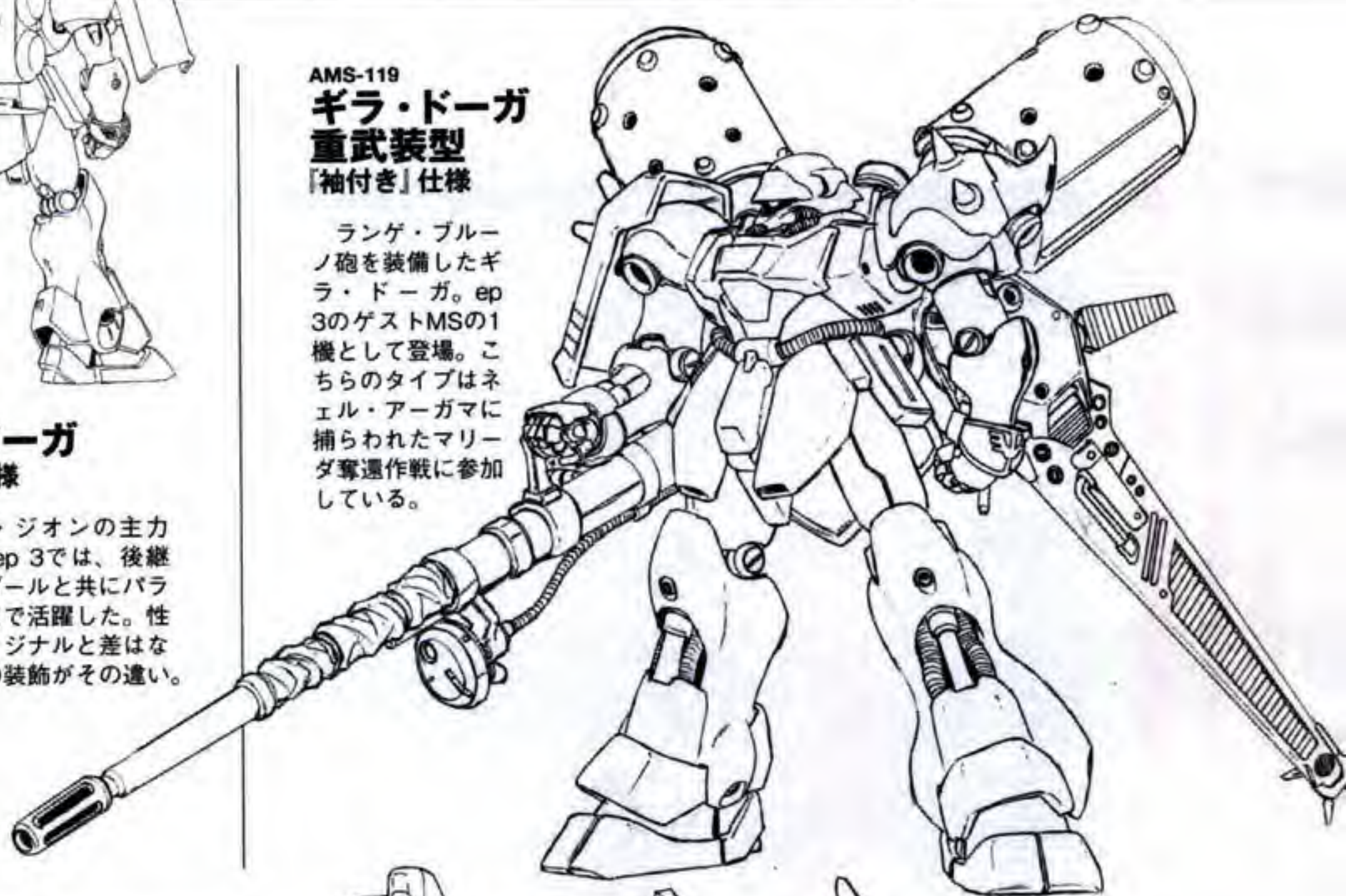


AMS-119
ギラ・ドーガ
「袖付き」仕様

新生ネオ・ジオンの主力MS。『UC』ep 3では、後継機のギラ・ズールと共にパラオ攻防戦などで活躍した。性能などはオリジナルと差はなく、袖部分の装飾がその違い。

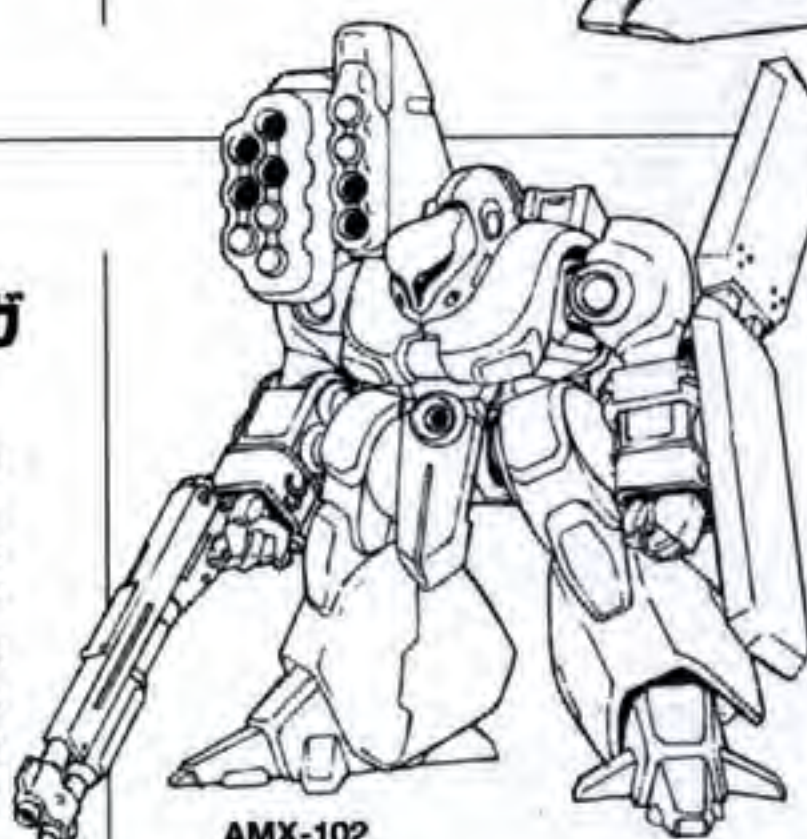
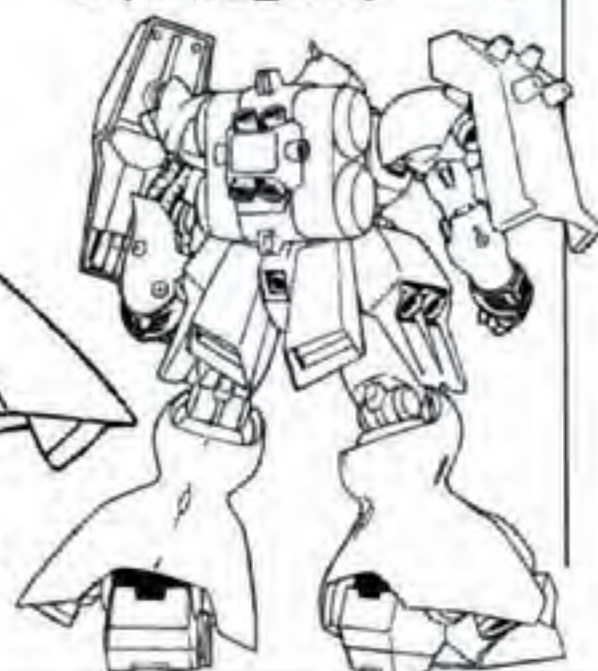
AMS-119
ギラ・ドーガ
重武装型
「袖付き」仕様

ランゲ・ブルーノ砲を装備したギラ・ドーガ。ep 3のゲストMSの1機として登場。こちらのタイプはネエル・アーガマに捕らわれたマリーダ奪還作戦に参加している。



MSN-03
ヤクト・ドーガ
「袖付き」仕様

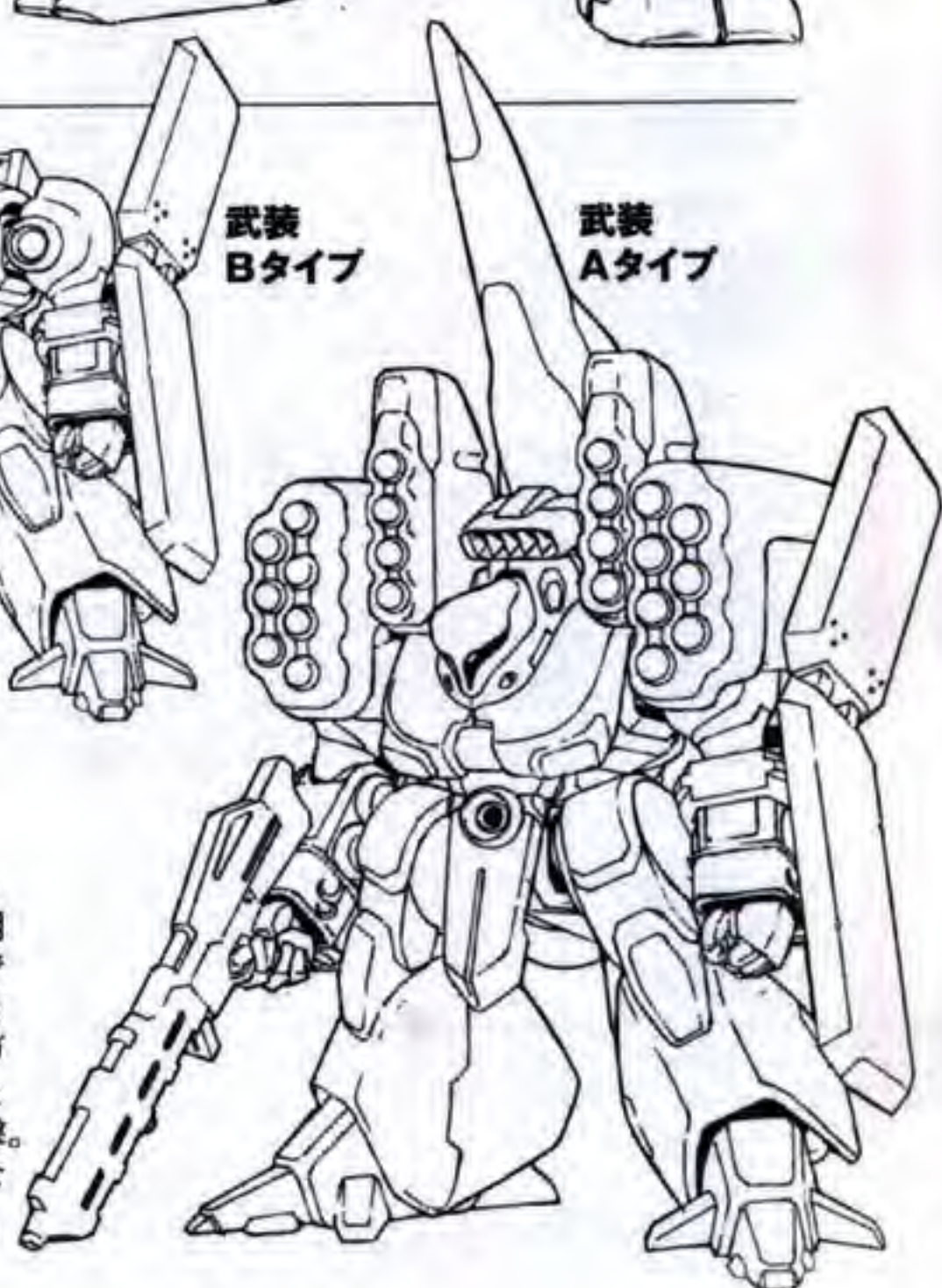
新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用機。じつは第二次ネオ・ジオン戦争時にクェスが搭乗していた機体を改修したもの。左腕部はギラ・ドーガの腕を流用している。搭載ファンネルは2基のみ。



武装
Bタイプ

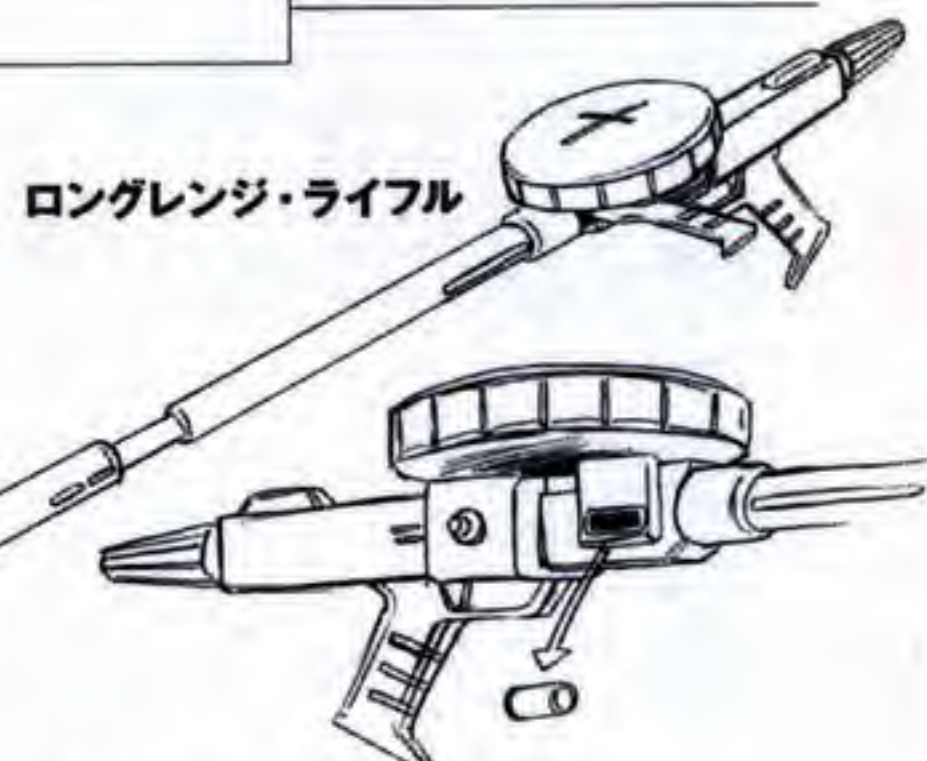
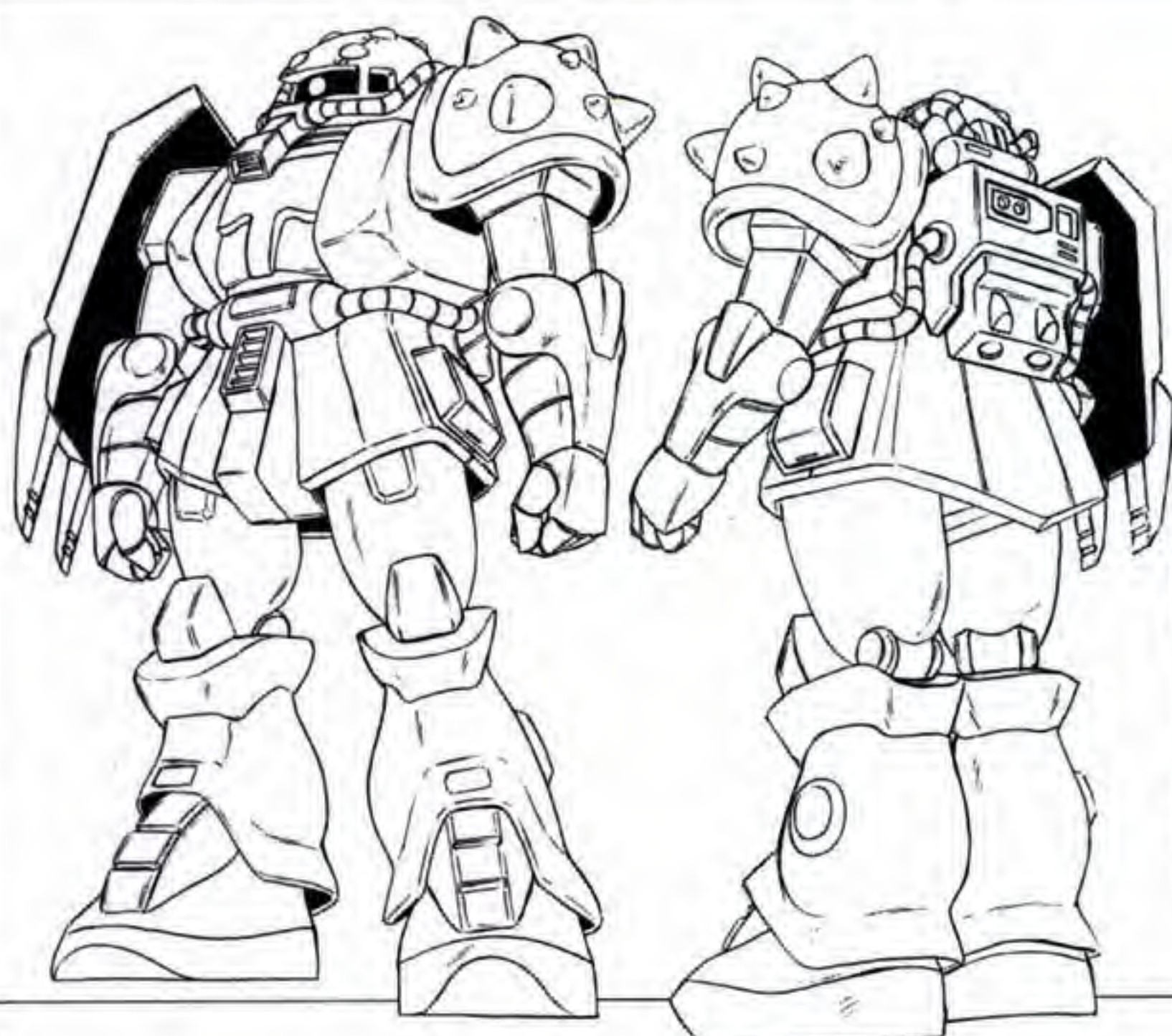
AMX-102
ズサ
「袖付き」仕様

アクシズ（ネオ・ジオン）の支援用MS。『UC』ep 7で複数登場し、うち1機はシュツルム・ガルスとコンビでネエル・アーガマを襲撃。それぞれ携行火器などの武装が異なる。



武装
Aタイプ

【ZZ-MSV / 87年】



シールド

MS-06DRC
ディザート・ザク
ロンメルカスタム

第一次ネオ・ジオン戦争時に活動を続けていたジオン公国軍残党の、ディザート・ロンメルの乗機。ザク・ディザートタイプのカスタムタイプで、彼自身の乗機として知られるドワッジ改に乗る以前に搭乗していた。ベースとなるザク・ディザートタイプとは形状も異なっている。

このページでは、本誌に掲載された代表的な機体のスペックを一覧にまとめた。MSの並び順は映像作品を先にMSVなどの関連企画になっている。

	機体重量 (kg)	装甲材料	武装	全長 (mm)	全高 (mm)	備考
	10,600	ガンダリウム合金	ナックル・バスター、ビームガン×2、ビーム・サーベル×2	42.15	0.92	() 内の数字はMA形態時。『ZZ』にも登場。
	10,900	ガンダリウム合金	ビーム・サーベル×2 (ビームガンとしても使用可能)、ファンネル多数	31.43	0.93	-
	10,800	ガンダリウム合金	ミサイル・ランチャー×4、ビーム・サーベル×2、ナックル・バスター、ビーム砲×2	31.96	0.70	後に『UC』にも登場。
	11,200	ガンダリウム合金	ハイパー・ナックル・バスター、9連装ミサイル・ランチャー×2、ビーム・サーベル (ビームガンとしても使用可能) ×2	31.63	0.63	後に『UC』にも登場。
	12,200	ガンダリウム合金	ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、メガ粒子砲付シールド、ミサイル×6	28.01	0.90	後に『UC』にも登場。
	10,900	ガンダリウム合金	ビーム・サーベル×2 (ビームガンとしても使用可能)、ファンネル多数	31.43	0.93	-
	10,900	-	ハンドランチャー兼用ビーム・サーベル×2、アクティブ・カノン×2、ファンネル×30	34.12	1.01	後に『UC』にも登場。
	11,700	ガンダリウム合金	2連装ビーム・ランチャー×2、ハイパー・メガ粒子砲、2連装メガ粒子砲×2、メガ粒子砲×2、3連装メガ粒子砲×2、ビーム・ライフル、3連装グレネード・ランチャー、ビーム・サーベル、メガ・ビーム・カノン×2、チルドファンネル×28	9.46	0.85	-
	14,800	ガンダリウム合金	メガ粒子砲×9、巨大ファンネル×30、ビーム・サーベル、メガ粒子偏向器	12.39	0.92	-
	11,200	ガンダリウム合金	ミサイル・ポッド、フィンガー・ランチャー、エネルギー・ガン、ビーム・サーベル、アーム・パンチ	27.57	0.64	後に『UC』にも登場。
	10,800	ガンダリウム合金	ビーム・サーベル、ミサイル・ポッド	40.93	0.62	後に『UC』にも登場。
	14,200	ガンダリウム合金	3連装ビーム砲×2、ビーム・サーベル×2、メガ粒子砲付シールド	20.79	0.31	-
	13,700	ガンダリウム合金	銃剣付ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、3連装ミサイル・ポッド×2	29.09	0.93	-
	12,300 (大気中) 7600 (水中)	ガンダリウム合金 (二重装甲)	レーザー・ビーム、ソニックブラスト、ミサイル×8	15.62	8.46	-
	13,100	ガンダリウム合金	ビーム・キャノン×6、ビーム・ランサー、トライ・ブレード×3、ビーム・トマホーク	28.07	0.62	後に『UC』にも登場。
	9,700	ガンダリウム・コンボジット	ビーム砲 (口吻部)、ビーム砲×2 (両腰前部)	31.77	0.40	後に『UC』にも登場。
	9,700	ガンダリウム・コンボジット	ビーム砲×2、ビーム・サーベル×2、30mmバルカン×2、ハイド・ポンプ投下機	24.97	0.34	-
	12,000	ガンダリウム・コンボジット	ビーム・カノン、ミサイル・ランチャー、対艦用大型ミサイル×2、インコム、30mmバルカン砲×2、メガ粒子砲、グレネード弾隠しランチャー×2、ハンド・ビーム、隠し腕 (ラカン専用機のみ)、ビーム・サーベル、メガ・ランチャー兼ビーム・ライフル	14.19	0.85	-
	13,400	ガンダリウム合金	ハイ・メガ・キャノン、2連装小型ミサイルランチャー×2、ビーム砲×2	12.32	0.71	-
	10,300	チタニウム・コンボジット	ビームキャノン兼大型ビームサーベル×2、ビームサーベル×2、ヒート・ランス	33.24	0.93	-
	8,700	チタニウム・コンボジット	ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、腕部グレネードランチャー×2、バックパック部ミサイルポッド、円盤型宇宙機雷6×2	43.70	0.55	後に『UC』にも登場。
	16,400	ガンダリウム合金	ビーム・アサルト・ライフル、ビーム・サーベル、ミサイル×6、4連装メガ粒子砲 (シールド)、メガ・ガトリングガン (ウェス機)	19.34	0.79	後に『UC』にも登場。
	22,600	ガンダリウム合金	ビーム・ショット・ライフル、ビーム・トマホーク、ミサイル×3、ファンネル×6、拡散メガ粒子砲、他	17.98	0.54	-
	16,400	チタン合金セラミック複合材	ビーム・マシンガン、ビーム・ソード・アックス、グレネード・ランチャー、シュツルム・ファウスト	23.52	0.94	後に『UC』にも登場。
	23,800	ガンダリウム合金	2連装バルカン砲、メガ粒子砲、有線サイコミュ式メガ・アーム砲×2、大型ファンネル×9	13.48	0.12	-
	-	-	偏向メガ粒子砲×9、有線クロウ・アーム×2、メガ粒子砲×6、大型ミサイルランチャー×4、小型ミサイルランチャー×24、メガ・カノン砲、他	5.32	0.21	-
	18,500	ガンダリウム合金	胸部メガ粒子砲×4、バインダー部メガ粒子砲2×4、ビーム・サーベル×2、ファンネル6×4	4.48	0.37	-
	23,600	ガンダリウム合金	ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、グレネード・ランチャー、ビーム・アックス×2、専用バズーカ、他	17.56	0.44	-
	18,200	チタン合金セラミック複合材 (一部ガンダリウム合金使用)	3連メガ粒子砲×1、シールド×1、サイコジャマー、有線式シールド・ユニット (右腕部改修後)	14.67	0.28	-
	11,200	ガンダリウム合金	スパイク・シールド×2、チェーン・メイン×1、マグネット・アンカー×2	13.87	-	-
	18,200	チタン合金セラミック複合材	ビーム・マシンガン、ビーム・ホーク	22.35(20.47)	0.89(0.91)	() 内の数字は観戦隊仕様。
	18,200	チタン合金セラミック複合材	ビーム・マシンガン、ヒート・ナイフ×2、ヒート・クロウ×2	-	-	-
	-	ガンダリウム合金	有線式大型ファンネル・ビット、肩部大型メガ粒子砲、大口径ハイ・メガ粒子砲、バズーカ、60mmバルカン砲、ビーム・サーベル、他	9.09	0.01	() 内は最大稼働時。
	12,800	ガンダリウム合金	大口径メガ粒子砲、拡散メガ粒子砲、リフレクター・ビット×10、大型アイアン・ネイル×2	13.23	1.25	-
	23,420	-	メガ・ビーム・ライフル、ビーム・トマホーク、メガ粒子砲、接近戦用マニユビレーター、ビーム・サーベル、シールド、ファンネル×10、ミサイル	15.6	-	-
	18,200	チタン合金セラミック複合材	有線式メガ・ビーム砲、ビーム・マシンガン、ビーム・ホーク	18.10	-	-
	11,690	-	ビーム・サーベル×2、バインダー武装ポッド×2、ビーム・カノン×2	29.91	1.15	() 内の数字はMA形態時。『Z』にも登場。
	16,400	ガンダリウム合金	銃剣型ビーム・ライフル、モビル・ビット×2、ブウン・ビット×8	-	-	-

ネオ・ジオンMSスペック一覧

	名称	型式番号	頭頂高/全高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレーター出力 (kW)	スラスター推力 (kg)	
Z	ガザC	AMX-003(MMT-1)	18.3(22.5)	40.8	72.5	1,720	79,200	
	キュベレイ	AMX-004(MMS-3)	18.4	35.2	57.2	1,820	61,600	
ZZ	ガザD	AMX-006	17.0	28.7	68.4	2,140	98,200	
	ガ・ゾウム	AMX-008	18.0	31.6	58.2	1,840	92,280	
	バウ	AMX-107	18.5	34.7	67.5	2,410	75,040	
	キュベレイ Mk-II	AMX-004-2(AMX-004-3)	18.4	35.2	57.2	1,820	61,600	
	量産型キュベレイ	AMX-004G	18.4	35.2	62.1	1,820	61,600	
	ゲーマルク	AMX-015	22.0	46.3	78.7	8,320	92,400	
	クイン・マンサ	NZ-000	39.2	143.2	264.7	21,370	287,100	
	ガルスJ	AMX-101	19.5	52.7	78.3	2,840	121,900	
	ズサ	AMX-102	15.0	23.7	74.5	1,820	120,400	
	ハンマ・ハンマ	AMX-103	21.5	40.3	79.4	3,820	258,200	
	R・ジャジャ	AMX-104	20.0	36.4	67.5	2,320	72,200	
	カブール	AMX-109	16.5	38.7	57.5	3,680	6,800	
	ドライセン	AMX-009	22.0	36.7	66.8	2,380	107,800	
	ザクⅢ	AMX-011	21.0	44.2	68.3	2,150	172,600	
	ザクⅢ改	AMX-011S	21.0	44.3	71.4	2,860	211,500	
	ドーベン・ウルフ	AMX-014	22.0	36.8	74.5	5,250	87,300	
	ジャムル・フィン	AMA-01X	15.0	24.7	58.5	4,750	82,600	
	ガスアル、ガスエル	AMX-117R (ガスアル) AMX-117L (ガスエル)	19.0	40.5	70.8	2,130	76,400	
	リゲルグ	MS-14J	21.0	43.7	82.6	1,890	150,800	
CCA	ヤクト・ドーガ	MSN-03	21.0	28.0	64.6	3,340	82,000	
	サザビー	MSN-04	23.0	30.5	71.2	3,960	133,000	
	キラ・ドーガ	AMS-119	20.0	23.0	50.8	2,160	54,000	
	α・アジール	NZ-333	58.4	128.6	267.4	19,830	2,217,500	
0083	ノイエ・ジール	AMX-002	76.6	198.2	403.5	75,800	1,938,000	
UC	クシャトリヤ	NZ-666	22.3	29.7	74.02	16,540	197,800	
	シナンジュ	MSN-06S	22.6	25.2	56.9	3,240	128,600	
	ローゼン・ズール	YAMS-132	22.5	25.8	72.6	4,950	257,200	
	シュツルム・ガルス	AMX-101E	19.5	24.9	39.4	2,840	-	
	キラ・ズール	AMS-129	20.0	21.8(22.3)	55.2(56.5)	2,470(2,760)	62,100(74,520)	
	ゼー・ズール	AMS-129M	20.3	28.9	-	2,460	92,400	
	ネオ・ジオング	NZ-999	116.0	153.8	324.3	35,660 (測定不能)	28,827,500 (測定不能)	
	シャンプロ	AMA-X7	31.8	196.8	283.9	21,460	226,480	
CCA-MSV	ナイチンゲール	MSN-04II	27.8	22.5	105.7	6,760	-	
UC-MSV	クラーク・ズール	YAMS-130	21.1	33.6	64.8	3,580	-	
S	ガザE	AMX-007 (MMT-3)	16.3(7.20)	34.8	68.2	2,280	59,300	
DF	バギ・ドーガ	MSN-X4	18.5	21.7	48.3	3,110	-	

※あくまで目安でしかないが、それぞれ全備重量/出力は、数値が低ければ実質的なパワーがあり、全備重量/推力の場合、低い値ならば速い。どちらもkg換算で計算。
 ※Zは『機動戦士Zガンダム』、ZZは『機動戦士ガンダムZZ』、CCAは『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』、0083は『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』、
 UCは『機動戦士ガンダムUC』、Sは『ガンダムセンチネル』、DFは『ダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダム』

Mobile Suit
**Gundam UC
Mechanic&World**
ep 1-3 / ep 4-6 / ep 7

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムUC
メカニック&ワールド
ep 1-3 / ep 4-6 / ep 7

A4判カバー付／定価各1,600円+税

宇宙世紀の
最新モード
「機動戦士ガンダムUC」を
完全解説



**GUNDAM BUILD
FIGHTERS**
Gunpla Mechanics & Animation Art Work

グレートメカニクススペシャル
ガンダムビルドファイターズ
ガンプラメカニクス&
アニメーション・アートワーク

A4判カバー付／定価各2,000円+税

激闘のガンプラバトルの
猛者たちが
再び集結!?



Mobile Suit
**Gundam AGE
Mechanic&World**

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムAGE
メカニック&ワールド

A4判カバー付／定価1,900円+税

A.G.という世界、
百年の物語の
モビルスーツたち



Mobile Suit
**Gundam SEED
C.E. Mechanic&
The World**

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムSEED
コスミック・イラ
メカニック&ワールド

A4判カバー付／定価2,500円+税

第一次連合・
プラント大戦
メカニックと世界完全ガイド!



グレートメカニクス・スペシャル モビルスーツ全集



モビルスーツ全集①
RGM-79
ジムBOOK
B5判カバー付
定価1,200円+税



モビルスーツ全集②
水陸両用
モビルスーツBOOK
B5判カバー付
定価1,400円+税



モビルスーツ全集③
MS-06
ザクBOOK
B5判カバー付
定価1,400円+税



モビルスーツ全集④
MS-07/09
グフ&ドムBOOK
B5判カバー付
定価1,400円+税



モビルスーツ全集⑤
RX-78 ガンダム&
V作戦BOOK
B5判カバー付
定価1,400円+税



モビルスーツ全集⑥
MS-14 ゲルググ&
ジオン特殊機BOOK
B5判カバー付
定価1,400円+税



モビルスーツ全集⑦
Z計画&アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツBOOK
B5判カバー付
定価1,400円+税

グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

2014 AUTUMN

GREAT MECHANICS.DX30

グレートメカニック.DX30

B5サイズ／定価980円＋税



ガンダム Gのレコンギスタ

ようこそ！ リギルド・センチュリーへ！

- ガンダム ビルドファイターズ
- 科学冒険隊テクノボイジャー
- ガールズ&パンツァー
- バディ・コンプレックス
- アルドノア・ゼロ
- INTERVIEWS
- キャプテン・アース
- ブレイクブレイド
- 宇宙戦艦ヤマト2199
- 福田己津央、森田繁、吉永裕ノ介 他

2014 SUMMER

GREAT MECHANICS.DX29

グレートメカニック.DX29

B5サイズ／定価940円＋税



機動戦士ガンダムUC

完結記念Special

- ガンダム ビルドファイターズ
- ゴジラ対人類 激闘の60年史
- ガールズ&パンツァー
- キャプテン・アース
- バディ・コンプレックス
- ブレイクブレイド
- 白銀の意思 アルジェヴォルン
- アルドノア・ゼロ
- INTERVIEWS
- 河森正治、四辻たかお 他

2014 SPRING

GREAT MECHANICS.DX28

グレートメカニック.DX28

B5サイズ／定価940円＋税



ガンダム大地に立つ!!

- 劇場版 モーレツ宇宙海賊
- ABYSS OF HYPERSPACE — 亜空の深淵 —
- 機動戦士ガンダムUC
- ガンダム ビルドファイターズ
- バディ・コンプレックス
- ノブナガ・ザ・フール
- ブレイクブレイド
- INTERVIEWS
- アミノテツロ、福井晴敏、海老川兼武、ロマン・トマ 他

2013 WINTER

GREAT MECHANICS.DX27

グレートメカニック.DX27

B5サイズ／定価933円＋税



ガンダムビルドファイターズ

- 宇宙戦艦ヤマト2199
- コードギアス 亡国のアキト
- 機動戦士ガンダムUC
- ノブナガ・ザ・フール
- バディ・コンプレックス
- INTERVIEWS
- 河森正治 他

バックナンバーをご希望の方は、お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162-8540

東京都新宿区東五軒町3-28

☎ 03-5261-4818 (営業)

http://www.futabasha.co.jp/

(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

※書店・HP以外に、電話・FAX・はがきでもご購入いただけます。
ブックサービス (営業時間：9～18時)

● 電話：0120-29-9625 (携帯電話も可)

● FAX：0120-29-9635

● はがき：〒101-8796 神田支店郵便私書箱82号 ブックサービス(株)

いずれの場合も「社名(双葉社)、タイトル、購入冊数、定価および住所、氏名、電話番号」をお知らせください。



編集

オフィスJ.B
飯田幸夫
豊村保行
宮崎左也佳

旭和則（双葉社）

執筆

河合宏之
星★馨介
市ヶ谷ハジメ
矢吹明紀
南波健一郎
やすゆきゆたか
ニック木村

表紙イラスト

森下直親

本文イラスト

森下直親
船越裕

デジラマ

Robographer

デザイナー

岡本浩樹（water_planet）

スーパーバイザー

山崎努

協力

㈱サンライズ

双葉社MOOK

グレートメカニック・スペシャル

モビルスーツ全集⑧

U.C.0083-U.C.0096

ネオ・ジオン製 モビルスーツBOOK

2014年11月19日発行

編集人 二之宮隆

発行人 赤坂了生

発行所 株式会社双葉社

〒162-8540

東京都新宿区東五軒町3-28

営業 ☎03-5261-4818

編集 ☎03-5261-4869

<http://www.futabasha.co.jp/>

（双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます）

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

※落丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。「製作部」あてにお送りください。ただし、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。☎03-5261-4822（製作部）

※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

※定価はカバーに表示してあります。

©創通・サンライズ

©FUTABASHA 2014 Printed in Japan

ISBN978-4-575-46486-3 C9476